

岩手県埋文センター文化財調査報告書第66集

湯沢遺跡発掘調査報告書

(遺物編)

昭和58年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

湯沢遺跡発掘調査報告書

(遺物編)

序

当埋蔵文化財センターが昭和52年発足以来、県教育委員会の指導と調整のもとに埋蔵文化財保護の立場に立って発掘調査事業にとりくんでまいりました。

本報告書は昭和52年度に岩手県住宅供給公社が住宅団地を造成することに関連し緊急発掘調査を実施した都南村湯沢遺跡の調査結果をまとめたものであります。

湯沢遺跡は、縄文時代中、後期を中心とした大集落跡であり検出した遺構数は、堅穴住居址160棟、ピット類353基余の多くを数え、それに伴い出土した遺物量も膨大なものであります。

調査結果の整理作業を報告書作成に当り、まず遺構編を先行させることとし、昭和53年度に埋文センター調査報告書第2集として刊行しました。

その後、出土遺物の整理及び報告書作成業務をすすめてまいりましたが、このたび遺物編を刊行するはこびとなりました。諸般の事情で遅れた湯沢遺跡にかかる埋蔵文化財の記録保存措置がこれで完了することができました。

この報告書が先に刊行されている遺構編とともに、研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する一助となるようお願いをいたします。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に関係した職員をはじめ、関係各機関に感謝申し上げるとともに、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年 3月

財団法人岩手県埋蔵文化財センター
理事長 新里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役 員	理事長	新里 盈	(県教育長)
	副理事長	柴内 眞	(県教育次長)
	常務理事	熊谷 正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
	常務理事	熊田 良和	(県農政部長)
	理事	田代 藤太	(県林業水産部次長)
	◆	後藤 光雄	(県土木部次長)
	◆	板橋 俊一	(県立博物館長)
	◆	草間 俊信	(県立盛岡短期大学長)
	◆	小白 石原	(前常務理事)
	◆	小白 吉雄	(県教委総務課長)

職 員	所長	熊谷 正男	専門調査員		
	副所長	小野寺 登			
	[総務課] 主任	課長	小笠原 一夫	専門調査員	橋平 郎
		係長	阿部 昭四郎	◆	津井 進
		◆	藤内 幸多	◆	瀧 壮一
		◆	戸草 多加	◆	市村 謙
		◆	立花 春男	◆	田浦 久行
		◆	佐藤 春男	◆	三浦 文長
		◆		◆	岩井 利幸
	[調査課] 主任	課長	鳴近 秋光	◆	石川 重工
		◆	藤宗 博夫	◆	藤川 幸紀
		◆	藤建 彦二	◆	高橋 与右衛門
		◆	山上 孝和	◆	中村 清宗
		◆	野池 利一	◆	高木 文孝
		◆	朝野 恵一	◆	酒々 井
		◆	鈴木 洋壽	◆	
		◆	大渡 治則	◆	
	専門調査員	◆	佐々木 直	[資料課] 資料課長	吉田 努
		◆		主任専門調査員	園生 忠高
		◆		専門調査員	小鈴 謙義
		◆		◆	平木 高夫
		◆		◆	橋本 忠義
		◆		◆	高橋 義介

緒 言

1. 本報告書は、岩手県紫波郡都南村第1地割字湯沢7の12に所在した湯沢遺跡の発掘調査で出土した遺物についての記録である。
2. 遺構については昭和53年3月に報告している（高橋ら、1978）。
3. 本報告書作成の作業は昭和56年8月1日から昭和57年7月31日までと昭和57年11月1日から昭和58年3月31日までおこなわれた。
4. 石質と堅果類の鑑定は次の方々に依頼した（敬称略）
石質鑑定……佐藤二郎（岩手県立大船渡農業高等学校教諭）・堅果類鑑定……渡辺 誠（名古屋大学助教授）。なお、石質鑑定の一部は種市 進（本センター）がおこなっている。
5. 本報告書の作成と執筆は三浦謙一が担当したが、共同調査者である高橋文夫の全面的協力を得ている。
6. 遺物の整理作業には当センター内業の非常に多くの作業員の方々に御協力をいただいた。ここでは上述の整理期間中に関係した方々のお名前を記した（敬称略）。
瀬川幸子・今川良子・岩館のぶ子・熊谷弘之・小森洋子・佐々木和江・佐藤瑞子・菅原久美子・藤村 範・村上行子（以上56年8月～57年7月）・浅沼啓子・熊谷富士子・鈴木静江（以上57年11月～58年3月）・岩淵希士・大久保隆・佐藤和也（以上写真）。

序

緒 言

本文目次

I. 整理経過と報告書	1
1. 報告書刊行までの経過	1
2. 整理方法と報告書	1
II. 遺構外の出土遺物	3
1. はじめに	3
2. 土器	3
3. 土製品	7
4. 円盤状土製品	8
5. 剥片石器	9
6. 磨製石斧・打製石斧	14
7. 礫石器	15
8. 石製品	18
9. 円盤状石製品	19
10. 石弾	19
11. 旧石器時代の遺物	20
III. 遺構内出土遺物	22
1. 住居址	22
2. フラスコ形ピット・ピーカー形ピット	87
3. 陥し穴状遺構	95
4. 不整形ピット	97
IV. 遺物についての若干のまとめ	98
1. 土器	98
2. 「剥片貯蔵」	101
3. 堅果類	104

IV. おわりに	105
----------	-----

挿 図 目 次

第1図 遺構外出土遺物(土器)	111
第2図 遺構外出土遺物(土器・拓影)	112
第3図—第14図 遺構外出土遺物(拓影)	113
第15図・第16図 遺構外出土遺物(土製品)	115
第17図 遺構外出土遺物(土製品・円盤状土製品)	127
第18図・第19図 遺構外出土遺物(円盤状土製品)	128
第20図—第36図 遺構外出土遺物(剥片石器)	130
第37図 遺構外出土遺物(剥片石器・礫石器)	147
第38図 遺構外出土遺物(磨製石斧)	148
第39図 遺構外出土遺物(磨製石斧・剥片石器)	149
第40図 遺構外出土遺物(礫石器・石核)	150
第41図—第47図 遺構外出土遺物(礫石器)	151
第48図 遺構外出土遺物(礫石器・石製品)	158
第49図 遺構外出土遺物(石製品・円盤状土製品)	159
第50図—第52図 遺構外出土遺物(円盤状土製品)	160
第53図—第55図 遺構外出土遺物(石弾)	163
第56図 BN-1住居址	166
第57図 CⅢ-1・2住居址	167
第58図 CⅢ-2・3住居址	168
第59図 CⅢ-3・4・5住居址	169
第60図 CⅢ-5・6・7住居址	170

第61图·第62图	C III-7 住居址	171
第63图	C III-7·8·9 住居址	173
第64图	C III-9 住居址	174
第65图	C III-9·10 住居址	175
第66图	C III-10·11 住居址	176
第67图	C III-11 住居址	177
第68图	C III-11·12·C IV-1 住居址	178
第69图	C IV-1 住居址	179
第70图	C IV-2·D II-1 住居址	180
第71图	D II-1·2 住居址	181
第72图	D II-2·3·5 住居址	182
第73图	D II-4·5·6 住居址	183
第74图	D II-6·7 住居址	184
第75图	D II-8 住居址	185
第76图	D II-8 住居址	186
第77图	D II-8·9 住居址	187
第78图	D II-9·10 住居址	188
第79图	D II-10·12·D III-1 住居址	189
第80图	D III-1 住居址	190
第81图	D III-1·2·3 住居址	191
第82图	D III-3 住居址	192
第83图	D III-4·5 住居址	193
第84图	D III-5·6·7 住居址	194
第85图—第87图	D III-7 住居址	195
第88图	D III-8·10 住居址	198
第89图	D III-10 住居址	199
第90图	D III-9·10·11 住居址	200
第91图	D III-11·D IV-1 住居址	201
第92图	D IV-1·E II-1·2 住居址	202
第93图·第94图	E II-2 住居址	203
第95图	E II-3·4 住居址	205
第96图	E II-4 住居址	206

第97图	E II-4·5·6 住居址	207
第98图	E II-7 住居址	208
第99图	E II-7·8 住居址	209
第100图	E II-8 住居址	210
第101图	E II-8·9 住居址	211
第102图	E II-9 住居址	212
第103图	E II-10·11 住居址	213
第104图	E II-11·12 住居址	214
第105图	E II-12·13·14 住居址	215
第106图·第107图	E II-14 住居址	216
第108图	E II-14·15 住居址	218
第109图	E II-15·16 住居址	219
第110图	E II-16·17 住居址	220
第111图	E II-17·18 住居址	221
第112图	E II-18 住居址	222
第113图	E II-18·19·20 住居址	223
第114图—第117图	E II-20 住居址	224
第118图	E II-21·24 住居址	228
第119图	E II-24 住居址	229
第120图	E II-24·25·26 住居址	230
第121图	E II-27·28 住居址	231
第122图·第123图	E II-28 住居址	232
第124图	E II-28·H II-10 住居址	234
第125图	E II-28 住居址	235
第126图	E II-30·E III-1·2 住居址	236
第127图·第128图	E III-2 住居址	237
第129图	E III-3 住居址	239
第130图	E III-4·5 住居址	240
第131图	E III-6 住居址	241
第132图	E III-7·8 住居址	242
第133图	E III-8·9 住居址	243
第134图	E III-9 住居址	244

第135图	E III-10 · E IV-1 住居址·····	245	第176图	G II-7 · 9 住居址·····	286
第136图 · 第137图	E IV-1 住居址·····	246	第177图 · 第178图	G II-9 住居址·····	287
第138图	E IV-2 住居址·····	248	第179图-第181图	G II-10住居址·····	289
第139图	E IV-2 · 4 · F II-2 住居址··	249	第182图	G II-10 · 11 · 12住居址·····	292
第140图	F II-2 · 3 · 4 住居址·····	250	第183图	G II-12 · 13住居址·····	293
第141图-第143图	F II-4 住居址·····	251	第184图	G II-13 · 14 · 15住居址·····	294
第144图	F II-4 · 6 住居址·····	254	第185图 · 第186图	G II-15住居址·····	295
第145图	F II-6 · 7 住居址·····	255	第187图	G II-16 · 17住居址·····	297
第146图	F II-1 · 6 · 8 住居址·····	256	第188图	G II-17住居址·····	298
第147图-第151图	F II-8 住居址·····	257	第189图	G II-17 · 18 · 19住居址·····	299
第152图	F II-8 · 9 · 10住居址·····	262	第190图-第193图	G II-19住居址·····	300
第153图	F II-10住居址·····	263	第194图	G II-19 · 20住居址·····	304
第154图	F II-11住居址·····	264	第195图	G II-20 · H II-1 住居址·····	305
第155图	F II-12 · 13住居址·····	265	第196图	H II-1 · 2 · 3 住居址·····	306
第156图	F II-13 · 14住居址·····	266	第197图	H II-3 住居址·····	307
第157图	F II-14住居址·····	267	第198图	H II-3 · 4 住居址·····	308
第158图	F II-14 · 15 · 16住居址·····	268	第199图	H II-4 · 5 住居址·····	309
第159图	F II-16 · 17住居址·····	269	第200图-第202图	H II-5 住居址·····	310
第160图	F II-17 · 18住居址·····	270	第203图	H II-5 · 6 住居址·····	313
第161图	F III-1 · 2 · 3 · 5 住居址·····	271	第204图	H II-7 住居址·····	314
第162图	F III-5 · 6 · 8 住居址·····	272	第205图	H II-7 · 8 住居址·····	315
第163图	F III-7 · 9 · 10 · F IV-2 住居址·····	273	第206图 · 第207图	H-8 住居址·····	316
第164图	F IV-1 · 4 住居址·····	274	第208图	H II-8 · 9 住居址·····	318
第165图	F IV-4 · 5 · 6 · 7 住居址·····	275	第209图	H II-9 · 10住居址·····	319
第166图	F IV-7 住居址·····	276	第210图	H II-10住居址·····	320
第167图	F IV-8 · G II-1 · 2 住居址··	277	第211图	H II-10 · 11住居址·····	321
第168图	G II-2 住居址·····	278	第212图	H II-11住居址·····	322
第169图	G II-2 · 3 住居址·····	279	第213图	H II-11 · 12住居址·····	323
第170图-第172图	G II-3 住居址·····	280	第214图	H II-12 · 13 · I II-1 · 2 住 居址·····	324
第173图	G II-3 · 4 · 5 · 6 住居址·····	283	第215图	I II-3 住居址·····	325
第174图 · 第175图	G II-7 住居址·····	284	第216图	I II-4 · 5 · 6 住居址·····	326

第217図	I II-6・7・8住居址……………	327
第218図	I II-7住居址・C III-54・57 ・58F. P. ……………	328
第219図	D II-52・53・55・58F. P. D II -61B. P. ……………	329
第220図	D II-60・62・D III-56・57・65 F. P. ……………	330
第221図	D III-66・79B. P.・D III-67・ E II-56・57・60・61・ 63F. P. ……………	331
第222図	E II-66・67・69F. P. ……………	332
第223図	E III-51・52・54・57・58・63・ 65・66F. P. ……………	333
第224図	E III-66・F II-51・52・53・54 ・55・E IV-52F. P. ……………	334
第225図	F II-55・58・E III-67F. P. ……	335
第226図	F II-59・60・61・62F. P. ……	336
第227図	F II-62・64・66F. P. ……………	337
第228図	F II-68・G II-51F. P. ……………	338
第229図	G II-51・52・53F. P. ……………	339
第230図	G II-53・54F. P. ……………	340
第231図	G II-55・56・64F. P. ……………	341
第232図	G II-57・64F. P. ……………	342
第233図	G II-58・59・60・61・63・65 F. P. ……………	343
第234図	G II-66・67F. P.・G II-68B. P. ……………	344
第235図	G II-69B. P.・H II-51・53 F. P. ……………	345
第236図	H II-53・54・58・59・60F. P. ・C III-108P. f. ……………	346
第237図	C III-116・123・125・D II-107	

	・108・110・DN-103・109・110 P. F.・E II-101P. f. ……………	347
第238図	E II-108・F II-101・108・110 ・F III-101・H II-101P. f. ……	348
第239図	D III-151・153・156不整形ピット ト・F II-151不整形ピット・I II-151・155不整形ピット……………	349
第240図	「剥片貯蔵」接合資料……………	351
第241図	「剥片貯蔵」接合資料……………	353
第242図	「剥片貯蔵」接合資料……………	355
第243図	「剥片貯蔵」接合資料……………	357
第244図	「剥片貯蔵」接合資料……………	359
第245図	「剥片貯蔵」接合資料……………	361
第246図	土器集成図……………	363

表 目 次

第1表	石弾重量・直径分布表……………	21
第2表	「剥片貯蔵」一覧表……………	103
第3表	堅果類一覧表……………	104

写真図版目次

- 図版1 遺構外出土遺物(土器)
- 図版2—6 遺構外出土遺物(土器片)
- 図版7 遺構外出土遺物(土製品)
- 図版8 遺構外出土遺物(円盤状土製品)
- 図版9—14 遺構外出土遺物(剥片石器)
- 図版15 遺構外出土遺物(剥片石器・磨製石斧・礫石器)
- 図版16 遺構外出土遺物(磨製石斧・剥片石器・石核)
- 図版17—21 遺構外出土遺物(礫石器)……□□
- 図版22 遺構外出土遺物(石製品・円盤状石製品)
- 図版23 遺構外出土遺物(円盤状石製品・石彈)
- 図版24 遺構外出土遺物(石彈)
- 図版25—49 遺構出土遺物(土器)
- 図版50—60 遺構出土遺物(土器片)
- 図版61 遺構出土遺物(土製品)
- 図版62 遺構出土遺物(土製品・円盤状土製品)
- 図版63 遺構出土遺物(円盤状土製品)
- 図版64—76 遺構出土遺物(剥片石器)
- 図版77—81 遺構出土遺物(礫石器)
- 図版82 遺構出土遺物(礫石器・石製品)
- 図版83・84 遺構出土遺物(石製品)
- 図版85 遺構出土遺物(石製品・円盤状石製品)
- 図版86—88 遺構出土遺物(「剥片貯藏」接合資料)
- 図版89 遺構出土遺物(剥片接合資料)
- 図版90 遺構出土遺物(堅果類)

I. 整理経過と報告書

1. 報告書刊行に至る経過

湯沢遺跡は昭和52年に発掘調査された。検出された遺構の種類と数は、竪穴住居址160棟、フラスコ形ピットとビーカー形ピット187基、陥し穴状遺構166基、配石遺構5基、不整形ピット28基である。

調査後、昭和52年10月6日から53年3月31日までの5ヶ月間の予定で整理作業と報告書作成にとりかかった。しかし膨大な数量の遺構・遺物を考えると当該年度内に報告書刊行の全てを終了することは困難であったことから、内部協議の結果、先に遺構分についてまとめることと担当調査員4人で執筆分担し、遺構編として昭和53年に刊行した。

その後、遺物の整理と報告書の作成について種々検討の結果、昭和56年度に期間と予算の見直しをたて、8月から本報告書の作成が具体化されていった。その時点では4人の調査担当者のうち2人は転出しており、他の業務の関係から三浦が本報告書を担当することになった。

(調査課長 嶋 千秋)

2. 整理方法と報告書

整理の順序について述べると次のとおりである。

まず、全出土遺物を点検し、実測や拓影の必要なものを選択したあと、遺構内と遺構外に分けて器種別に登録した。これが第1段階である。つづいて第2段階は実測やトレース・写真撮影など、図版を作るための一連の仕事である。第3段階は、第2段階でできたものの中から選択して割りつける図版作成、第4段階は原稿執筆である。

このうち、第2段階の仕事は昭和56年8月以前にも手がけていた。土器の接合復元・土器や石器の実測・トレースなどが主なものであるが、これは先の第1段階の手順をふまずに主な遺物を対象としていたため、新たに登録するとともに、実測や拓影作成の大幅なやり直しと修正をした。

この第1段階から第3段階までは、昭和56年8月から57年7月までの大部分の期間を、1日あたり調査員1人と作業員6.5人のチームで仕事をしている。調査員が仕事の計画と指示・点検、作業員が実際の仕事というように分担している。

報告書に掲載した遺物は登録したなかから選択をした。土器は完形品や接合復元して実測できたものの大部分に掲載した。土器片の拓影は口縁部や文様をもつものを優先した。遺構外からの出土では類似資料のなかから選択し、同一遺構では同じ文様をもつ破片は重複掲載をな

べくさけている。剥片石器は2次加工されたものや使用痕が識別形質になるものうちでも非折り面型の形器は大部分を掲載したが、使用痕をもつ剥片の類は省略した。「剥片貯蔵」の接合資料は代表例を載せた。磨製石斧は数が多くないことから出土品のほぼ全部を載せた。礫石器と円盤状土製品は1/2、円盤状石製品は3/5程度を全登録数のうちから選んでいる。礫石器のなかでも加工痕によって識別される製品、例えば石皿などはほとんど載せているため、器種による掲載数のバラつきがある。遺構内外から多数が出土した石弾は遺構外出土の一部に代表させ（登録数の約1/10）、遺構からの出土品の図化と記述は省略した。土偶や耳飾りなどの土製品、筒状石製品などの石製品は小破片を除いてほとんどを掲載した。

写真図版は挿図掲載遺物のなかから、代表的なものを選んで載せた。堅果類は一部を写真でだけ示した。なお、個々の遺物の右下にある（ ）内の番号は挿図掲載の通し番号に対応する。

遺物の縮尺は、挿図・写真図版とも各ページごとに指示してある。石器類や石製品類・土製品類には重量や素材の石質を図中に記載している。

Ⅱ. 遺構外の出土遺物

1. はじめに

本遺跡の基本層序については遺構編に記載しているので、ここでは遺物の主要包含層であるⅡ層について要約しておく。

Ⅱ層は、Ⅰ層：クロボク（一部は表土を構成）とⅢ層：Ⅳ層黄橙色～黄褐色火山灰（大部分の遺構の検出面）の風化帯に挟まれた層準を占める。Ⅱ層は周辺の他の地形面には認められず、狭義には本遺跡にだけ分布する。遺跡では遺構群の分布密度に密接な関係をもって広範囲に分布するが、東側斜面下方では同層に対比されるK-Ⅱ層が断片的に分布する。層厚は、遺構密集区での平均層厚が20cm±、もっとも厚く分布するところで30cm±である。

Ⅱ層の色調は暗褐色～黒褐色である。舌状に張り出した遺跡北側の部分は遺構密集度がやや低くなるが、Ⅳ層起源の火山灰が卓越するために、Ⅱ層の色調はそれに近いものになる。Ⅱ層中には、土器片をはじめとする遺物や炭化物・焼土が多量に含まれる。なお、Ⅱ層は遺構の層位的な検出の際の鑑層でもあり、大部分の遺構はⅡ層下に埋没しているが、少数はⅡ層を切っていることが確認できる。

Ⅱ層の層相や分布からは、遺構外における複合廃棄物（高橋、1979）の性格をもつものといえることができる。自然の侵蝕・運搬・堆積の作用とともに、居住した集団の日常的な廃棄行為の結果がⅡ層の形成と分布に密接な関係をもつものである。

次に記載する遺物は大部分がⅡ層からの出土である。Ⅰ層からも遺物は出土しているが、量が少なく、一括して扱った。Ⅰ層・Ⅱ層とも、層厚が厚い部分では下部からの出土遺物をⅠ層・Ⅱ層として取りあげている。また、東側斜面下方の堆積物の構成や層相は斜面上方とは若干異なることから、頭にK-を冠している。

2. 土器（第1図-第14図1-315・図版1-6）

遺構外から出土した土器はすべて縄文式土器である。時期別では大木10式に併行する1群がほとんどである。他に前期末葉・中期中葉・中期後葉～後期末葉の時期のものがあるが、量は非常に少ない。

掲載資料はほとんどが破片である。群は1群・2群……というように必要に応じて任意の区分を順次おこない、小群を必要とする場合はa群・b群……のように記載した。1群から11群までは主に文様を識別形質にしたが、12群は小型あるいはミニチュア土器を一括し、13群は粗製土器、14群は器形部位別資料をまとめた。

1群 (19-24) 頸部に幅の広い隆帯がめぐり、その上に、19では縄文原体の押圧、20-24では指頭の連続押捺がおこなわれる。地文は木目状捺糸文・網目状捺糸文・単節縄文などである。19は確実ではないが、20-24は前期末葉に属する。

2群 (1・25-27・29・33・35) 1はキャリパー形の土器である。頸部無文帯を挟んで、口縁部・体部とも隆沈線による渦巻文が文様を構成する。25・26はキャリパー形土器の口縁部である。27・29は体部に渦巻文をもつ。25・26は大木8a式、他は大木8b式に属する。

3群 (36・38-40) 口縁部に隆起線による円形文をもつ。大木8b式あるいは大木9式に属する1群であろう。

4群 (2・32・34・42-44・48・49-58) 2は楕円形と円形の区画帯が文様を構成する。地文は横位のLRLである。58も同様の文様意匠をもつ。42・43・48は隆沈線による渦巻文である。44は円形の区画帯の間に渦巻文をもつ。49-57は円形・楕円形の区画帯が文様を構成する。大木9式に属するが、渦巻文を伴う42-44・48は古い様相を示す。

5群 大木10式に併行する土器を一括した。

5a群 (59-62・65・66・68・72-83・85・88) 口縁部を含む部位に限定してみると、頸部に沈線がめぐり、口縁部と体部とが区画される。便宜的に沈線文口縁部と呼んでおく。72-77では頸部にめぐる沈線に沿った口縁部無文帯側に連続刺突文・竹管文を伴う。85は口縁部無文帯に2列の連続刺突文がみられる。61は内面には隆起線を伴う。

5b群 (63・64) 5a群とは異なり、口縁部と体部とが沈線によって区画されない。

5c群 (84・86・87・89-101・104・105) 体部文様に刺突文・竹管文を伴う。84・86・87などのように沈線の接触部に刺突が重ねられる。93・96は円形区画帯内に刺突文で充填される。

5d群 (102・103) 頸部に連続刺突がめぐる。いずれも頸部は内側に屈曲する。

5e群 (106-114) 鱗状隆帯などと呼ばれている短かい弧状隆起線を体部に伴う。

5f群 (115-125・127・128・162) 口縁部を含む部位に限定してみると、隆起線が頸部にめぐり、口縁部と体部とを区画している。便宜的に隆起線文口縁部と呼んでおく。口縁部は内傾するものが多い。115・118は波状・小波状口縁になる。116・119の地文は沈線文である。162は体部に刺突文を伴う。

5g群 (139-161・163-189・195-199・202) 139-161・163-171は隆起線文口縁部に連続刺突文・竹管文を伴う。波状あるいは山形の口縁を示す例が多い。隆起線が頸部から口唇部へはねあがる場合、その両側に刺突・竹管文を伴うのが普通である。169・171では波状口縁部に隆起線が三角形を作り、その両側に刺突文を伴う。170は口唇部が隆起線で縁どられ、それに沿う刺突が加えられる。161は鱗状隆帯、155は隆起線を内面に伴う。172-189・195-199・202は隆起線に刺突文・竹管文が重ねられる。173では内面に刺突文が重ねられた隆起線がめ

ぐり、174でははっきりしないが、内面に鱗状隆起帯を伴う。174は波状頂部に2個1対の刻みをもつ。175は1個、176は2個の小円孔をもつ。177・178・185・199では刺突が隆起線に直交するように重られるため、刻目状を呈する。177は波状頂部に2個1対の刻み、185は小波状口縁の頂部に1個の刺突が加えられる。185はボタン状突起を伴う6d群238に類似する。一応ここに含めたが、177・178・185・199は他とは時期が異なる1群かもしれない。202は頸部に2条の隆起線がめぐり、口縁部は長方形に区画され、その一部に不規則に刺突が重られる。7群204などに近い仲間かもしれない。

5h群 (129-138) 口縁部内面に鱗状隆起帯や隆起線を伴う。鱗状隆起帯を伴うのは129・130・132・134・136・138である。134では波状頂部の内外面に鱗状隆起帯をもつ。外面は129・130ほかのように沈線文口縁部のもと135・136のように隆起線文口縁部のもとがある。135では刺突文を伴う。137・138は粗製土器である。

5i群 (190-194) 口縁部に刺突文が多用される。190は隆起線で区画された口縁部無文帯に数列の連続刺突文を伴う。191は小突起部の下、192は波状部に刺突文が集中する。193・194は口縁部に沈線区画の半円形が描かれ、刺突文で充填される。191・193は隆起線、194は鱗状隆起帯を内面に伴う。190は5g群に含めることもできよう。

5j群 (250・251・257-259) 波状口縁部に小円孔をもつ。250・258は内外面に隆起線で加飾され、外面では刺突文を伴う。259は、刺突文を伴った隆起線が口唇部に沿う。257は内外に鱗状隆起帯を伴う。251は沈線が頸部にめぐる。

5k群 (254-256) 口縁部に中空突起をもつ。254・255は刺突文・竹管文が一部に重なった隆起線に加飾される。256は円孔を囲むように隆起線がめぐる。

6群 鎖状隆起線やボタン状突起によって識別される1群である。両者は対になって文様を構成する場合が多い。しかし、ボタン状突起と他の文様技法が組合せられることもある。鎖状隆起線やボタン状突起ということを指標にすれば、5群よりは時間的に新しいものであろう。

6a群 (201・213-223) 鎖状隆起線がみられる。214は頸部が外方へ張り出し、隆起線は体部を加飾する。215は口縁部と体部がともに鎖状隆起線で構成される。

6b群 (212・224-237・252・253) 鎖状隆起線とボタン状突起が対になって文様を構成する。226・231・232などでは波状部あるいは中空突起部にボタン状突起があり、それを起点にして鎖状隆起線が下がる。226は口唇部にも鎖状隆起線が沿い、さらに頸部にもボタン状突起を伴う。212・229は粗製土器で、229は口縁部が無文帯である。230は波状頂部に2個1対の刻みをもつ。234は鎖状隆起線が曲線を描く。253は波状部に円孔をもち、その傍を鎖状隆起線が下がる。

6c群 (239・244) ボタン状突起に隆起線を伴う。239では頸部にボタン状突起があり、

それを起点にして隆起線が頸部にめぐるとともに体部へも下がる。刺突文も伴っている。

6d群 (238・240) ボタン状突起を起点にして頸部にめぐる隆起線が直交する刺突によって切られ、刻目状になる。5h群に含めた一部がこの群に入る可能性がある。

6e群 (249) ボタン状突起と沈線を伴った隆起線がみられる。

6f群 (241・242・245・247) ボタン状突起と沈線が文様を構成する。

7群 (200・203-210) この群は口縁部あるいは体部を区画する隆起線の上に縄文原体の押圧痕を伴う。203・205-207はボタン状突起を頸部に伴い、体部は隆起線によって方形の区画がおこなわれる。203・204・206をみると頸部には2条の隆起線がめぐり、1条は口縁部文様を構成するものかもしれない。208では口唇部近くに2条の隆起線がめぐり、200・209は波状頂部に2個1対の刻みをもつ。210も波状口縁で2条の隆起線が口唇部に沿うとともに、体部に垂下する。203・205-207の体部を方形に区画する特徴は大木10式併行の土器にみられ、またボタン状突起は6群に分けたものの特徴である。200・209にみられる2個1対の刻みは6群230や5群174・177に類似する。

8群 (260-262・265) 頸部に隆起線がめぐり、そこに把手を伴う。260は正面と上方に円孔を伴う。262は把手が剥落しているが、体部は沈線区画の文様帯を伴う。261・262は詳細は不明であるが、体部へ隆起線が下がって文様を構成する。

9群 (28・30・31・37・263・264・266-278) 後期初頭に位置づけられる1群である。28・30・31は同一個体の破片で、摺糸文の地文に渦巻文が描かれる。37は波状頂部に沈線による渦巻文を伴う。267・268・270-272は同一個体の破片で、縄文の地文の上に平行沈線が曲線的な文様を描く。273は文様は直線的である。274・275は無文の上に沈線による文様が描かれる。266は波状口縁部に小円孔をもち、刺突が重ねられた隆帯がそれを囲むように内外面に貼付され、外面には渦巻文を伴う。276は無文の上に隆起線が1条垂下し、その上に縄文原体の押圧痕を伴う。277は入組文の初現形態がみられる。278は平行沈線間の狭い磨消帯に半截竹管文が連続する。280は平行沈線が弧状を描く。

10群 (281-284・286) 後期中葉に位置づけられる1群である。286は縷形状文である。284は平行沈線が斜行する。281・282・283は平行沈線間に狭い磨消帯が作られる。

11群 (287-291) 後期末葉に位置づけられる。287・291・292は連続した刻目文が特徴である。285・288は突起下に三又文をもち、290では突起の下が沈線によって区画される。285・288-290はいずれも入組文をもつ土器である。

12群 (4-6・9-17) 小型あるいはミニチュアの土器を一括した。4-6は小型の土器である。4は小型の鉢形土器である。口縁部が方形や長方形に分割され、一部が縄文で充填される。5・6は無文土器である。5は壺形土器で、体部は球形を示し、底部は上げ底である。15-17は小

型土器の破片である。16・17は沈線文口縁部である。15は大木9式に属し、16・17は大木10式に併行するものであろう。9-14はミニチュア土器である。9・11に単節縄文がみられる以外は無文である。

13群 (3・293-310) 粗製土器をランダムに掲載した。

14群 (7・8・311-315) 器形部位別の資料を一括した。7は台部を含む部分で、無文である。8は長方形の脚部であるが、器形全体については不明である。315は器台か脚部かが不明である。円孔をもち、その側を刺突文を伴った隆起線が下がっている。315は大木10式に併行する時期のものである。

3. 土製品

(1) 土偶 (第15図・第16図316-326、図版7)

土偶は11点が出土した。出土層位と点数は、I層とI₁層が各1点、II層が7点である。他にトレンチから1点が出土し、出土地点と出土層位が不明な1点がある。

316は頭部と腕部・体部下端を欠く。乳房が表現され、腹部中央部には隆起線が垂下する。その下端には直径12mmの円形の剥落痕がある。文様は細沈線と竹管文で構成され、背面には細沈線による渦巻文が多用される。317は体部下端を欠く。両肩部に挿まれた中央部はやや高まり、直径4mm・深さ15mmの孔が垂直に穿たれている。両肩部にも同様の孔が斜めに穿たれる。左脇腹には下方へ伸る突起の残存部があり、反対側の同位置には剥落痕がみられることから、同じ様な突起が存在したのであろう。正面は左肩部から斜めに下がる低い隆起線とその両側に沿う竹管文、背面は竹管文で文様が構成される。作り方からみて、頭部と腕部は別個に存在して体部に接続、当初から体部だけが存在、の2通りが考えられよう。318は肩部から脇腹へ抜けるやや斜めの貫通孔をもつ。文様は、竹管文と半截竹管文・三角形刺突文・円形刺突文の4種類の刺突文で構成される。319は、正面には乳房がひとつと首下にV字形に残る隆起線がみられ、竹管文が施される。背面は研磨されて無文である。320は乳房の位置に剥落痕がある。両面の文様は細かな刺突文によって構成され、ほぼ左右対称の文様意匠をもつ。321は体部下半が残り、裾が広がっている。正面にはベソを表現したとみられる小突起が貼付され、竹管文によるやや不規則な文様が表現される。背面中央部には竹管文による1列の縦線がある。322は体部下端の破片である。裾部は側方へ突出し、正面と背面をつなぐ貫通孔、突出部に穿たれた垂直の貫通孔がある。底部近くには1条の沈線がめぐり、両面と側面には竹管文による文様が施される。323は裾部である。正面には斜位の隆起線の両側に重なる竹管文が施され、背面に抜ける貫通孔1個が下端にある。正面右のやや突き出た部分には垂直の貫通孔、正面左と底部には斜めの浅い孔が穿たれている。324は裾部が残り、竹管文による文様が著しい。325は体

部下半の破片で、刺突が加えられている。326は体部下半の破片で、裾が大きく広がり、底面はくぼむ。文様は刺突文により描かれる。正面には中央部を走る縦線のなかに楕円形が描かれ、下端が一方に折れる。背面中央部には1列、両側縁に寄った両面には2列の縦線がみられる。

本遺跡の遺構外出土土器の時的な傾向や形態・施文技法などからみて、いずれも中期末葉から後期初頭にかけての遺物であろう。

(2) 耳飾り (第16図327-333、図版7)

耳飾りはⅡ層から7点が出土した。327-329は環状形耳飾りである。327は両面に2個1対の鱗状隆帯が貼付され、三角形の刺突文が施される。328は破片で、片面を欠いている。327と同様に、隆起線と刺突文による文様をもつ。329は無文である。330-333は滑車形耳飾りである。330は、やや深い竹管文が両面中央部に1個ずつある。片面に2個1対の鱗状隆帯が貼付されるほか、両面に竹管文が施される。331は全体が研磨されて無文で、側面に斜位の刺突1個が存在する。332と333は小型である。2点は列点文が両面に施され、332では渦巻状、333ではやくずれているが、渦巻状あるいは同心円状を描く。

これらの所属時期は、土偶の場合と同様の理由で中期末葉～後期初頭にあるであろう。

(3) 三角柱状立体土製品ほか (第17図334-336、図版7)

334は表採資料である。三角柱状立体土製品の名称で呼ばれている。3辺の稜線がわずかに湾曲するため、両端がややすぼむ。断面形はほぼ正三角形で、1辺の稜線に寄った部分に長軸長向に直線的な貫通孔をもつ。各側面は竹管文と円形刺突文によって加飾される。335と336はⅡ層から出土した。335は有孔の円盤形をした土製品の破片である。直径は推定で70mm、厚さは中央部に厚く12mm、周辺部で5mm、孔の直径は6mmである。336は破損のために本来の形状は不明であるが、中央部に大きな円孔をもった中空の三角柱状の土製品と推定される。1面では、稜線から円孔中心部に向けて1本の低い隆起線を貼付している。

これらの所属時期は、土偶の場合と同様の理由で中期末葉～後期初頭にあるであろう。

4. 円盤状土製品 (第17図-第19図337-401、図版8)

出土層位と点数は、Ⅰ層3点・Ⅰ_L層1点・Ⅱ層121点・Ⅱ_L層15点・KNa層3点である。このほかに、トレンチと表採の資料が各1点ずつあり、合計は145点である。

円盤状土製品は、土器片を素材に打ち欠きや研磨による加工がおこなわれ、一定の形態を目的意識的に作り出したものであることが周縁に残る加工痕によって識別でき、2群に分けることができる。

1群は周縁を打ち欠いただけのもの(337-350)で、他の1群は周縁を打ち欠いたあと、一部または全部を研磨したもの(351-401)である。周縁の一部を研磨するもの(351-353)は

量的に少ない。ほぼ全周が研磨されるものでは、打ち欠く際に形成された稜線を残すものからていねいに磨かれてほぼ円形に近い形態を示すものまでさまざまである。周縁のほぼ全部を研磨する例が量としては多い。大部分は体部破片を素材として利用するが、口縁部(344・369)や底部(372)を利用する例もある。地文のほかに文様帯の部分が用いられる場合があるが、中期末葉～後期初頭のものである。形態は、打ち欠きや研磨の程度に応じてほぼ円形のものからいびつな多角形を示すものまで、バラツキがある。完形品の計測では、直径は、最小2.4cm～最大6.8cmで、3cm～5cmの間に分布が密である。重量は、最小4g～最大40gである。

なお、遺構内からの出土例をここに記載すると、出土点数は277点である。識別できる加工痕や形態はⅠ・Ⅱ層ほか出土の場合と同様である。また、文様帯をもつ部分を利用する場合、その素材になる土器片の所属はすべて中期末葉～後期初頭である。完形品の計測では、直径は、最小2.5cm～最大8.1cmで、3cm～5cmの間に大多数が含まれる。重量は最小4g～最大70gであるが、40gを越すものは3点だけである。

5. 切片石器

(1) 石鏃 (第20図408-419、図版9)

石鏃はⅡ層から12点が出土した。有茎の408を除いてはいずれも無茎である。409-414は扁平で小型の1群である。409-412は基部形態が凹基で、412は左右非対称である。413は側縁がわずかに内湾気味になり、石鏃の破損品の可能性もある。414は三角形の形をした素材の両面の周縁に2次加工される。415-419は先の1群に比べて大型である。基部形態はわずかに凹基を示すものと凸基気味のものあがる415・417は両面加工、416・419は半両面加工、418は両面の周縁の2次加工である。418を除いては断面が厚い。

(2) 石匙 (第20図・第21図420-432、図版9)

出土層位と点数は、Ⅰ層1点・Ⅰ_L層1点・Ⅱ層12点である。

420-431は縦形石匙である。426・426は刃部先端を破損している。421・422は刃部先端が尖頭状に収斂する。420・432・424は刃部先端部が直角に近い鈍角になる。428は素材の基部と1側縁が折断され、反対側縁には細部加工によって刃部と袂入部が作られる。アスファルトの付着が表裏面にみられ、石匙に分けた。427は袂入部が1側縁にしかな作れないが、428との類似で石匙とした。袂入石器と削器状石器との複合かもしれない。429は基部を折断し、その面を打撃面として剣歯を加えてつまみ部を作る。430はつまみ部作出を目的にした2次加工が施されていることから、石匙に含めた。431は凸形の刃部をもつ。423は横形石匙の破損品である。

(3) 石鏟 (第21図433-446、図版9)

剥片の一端に細部加工によって作られた錐状の刃部をもつ。刃部形態には複数の型がある。棒状のものやつまみ部も2次加工によって作られる典型的な石錐はない。出土層位と点数は、I₁層2点・II層10点・II₁層2点である。

433・434・436・437・441は素材の1辺の中央部に刃部が作られる。435の刃部は傾斜する。438は横長剥片の突出部に刃部加工をして長い刃部を作り出す。442・445・446は素材がもつ角のひとつに刃部を作る。445は石錐の刃部に削器状の刃部が連続しているが、もともとが削器状石器の1形態なのかも知れない。446は削器状石器との複合である。444は2個の刃部をもつ。443は小型剥片の尖頭部を刃部にする。439は打面側を折断して作り出した鋭角の部分に刃部を形成する。440は断面が三角形をした傾斜する尖頭部先端に微細剥離痕が認められたため、一応ここに含めておいた。

(4) 挟入石器 (第22図447・448・450-454・456、図版9)

不定形な剥片を素材にし、側縁に1個以上の挟入部が作られる石器である。II層から6点、II₁層から2点が出土した。

447・448・450-452は細部加工によって刃部が作られ、いずれも刃部数は1個である。447・452では刃部に連続する細かな剥離痕を伴う。453・454・456は、刃部が加撃によって作られるため、挟入部の奥行きが深い。456は3個の刃部をもつ。裏面右側縁の1個は1回の加撃によって作られ、大型で挟りが深い。刃部には細かな剥離痕を伴う。それを挟んで並ぶ2個も刃部である。

(5) 鋸歯縁石器 (第22図・第23図455・457-459、図版9)

不定形な剥片を素材にし、挟入部が連続して並んだ鋸歯状の刃部をもつ。刃部は加撃によって作られる。I層から1点、II層から2点、II₁層から1点が出土した。

458は典型的である。断面が三角形の分厚い縦長剥片の1側縁から先端部にかけて、深い挟りをもつ刃部が形成されている。455は両側縁が刃部になる。457は三角形の形状をした流紋岩の自然礫を素材にする。その意味では礫石器に入るが、便宜的にここに含めた。厚さが8mmの急傾斜の先端部に刃部が作られる。刃部形態・加工形態からみて播器とは区別される。459は細かな挟入部が側縁に連続した鋸歯縁状の石器である。

(6) ビエス・エスキーユ (第23図460-469、図版9・10)

相対する2個1対の刃部を1〜2個もつ石器で、刃部は使用によって生じた両極剥離痕を伴う。そのために、刃部には微細な剥離痕があることや相対する刃部の剥離面が接する場合もある。また、折断によって形状が整えられる場合もある。II層から8点、II₁層から2点が出土した。

460-462は縦長剥片の剥片剥離軸方向に直交する側縁に2個1対の刃部が形成される。いず

れも裏面には1次剥離面を大きく残す。461・462は1側縁が折断されている。468は剥片剥離軸方向に平行する側縁に長い2個1対の刃部が形成される。463-465はやや横長の剥片の長軸方向に平行する側縁に2個1対の刃部をもつ。465は表面に自然面を残し、463とともに両極剥離の進行の度合いが大きい。466・467・469は4個2対の刃部をもつ。469は2側縁が折断され、長方形である。分厚い素材を利用し、両極剥離痕を含む2次的な剥離で両面ともほぼ覆われる。466の表面右側縁の刃部は2次加工によるものである。467では1側縁を除いては刃部が連続する。

(7) 折断石器 (第23図-第25図470-492・494-496、図版10)

この器種は、岡村(1979)・阿子島(1979)が「折断調整石器」と仮称した石器に相当する。素材の1-3辺を折断し、通常は折断面以外の縁辺を刃部にする。刃部は2次加工される場合と微細剥離痕によって識別される場合とがある。折断面の数と刃部数・刃部形態からいくつかの種類化できる。Ⅱ層から19点、Ⅲ層から7点が出土した。

1群 1辺が折断され、2次加工された刃部を1-2個もつ(470-474・478-480・485・486)。刃部を2個もつのは470・479で、他は1個である。479は彫器状の刃部と挟入する刃部が複合する。478は基部が折断され、刃部は第1次剥離で作られた尖頭部先端である。石錐的な機能をもつものかもしれない。473は削器としての刃部をもち、破損品の可能性もある。486は1側縁から先端部に削器状の刃部が作られる。形状は、472が三角形、474・485が長方形、480が不整な五角形などである。

2群 1辺が折断され、2個の刃部をもつが、刃部加工は施されない(475-477・481-484)。刃部は微細剥離痕によって識別される。刃部はいずれも相対する2辺にある。折断箇所は基部の場合と先端部との場合がある。

3群 2辺が折断され、2次加工された1-2個の刃部をもつ(487-489・492)。488の刃部は不規則である。489の刃部は細かい剥離であるが、1側縁から先端部にかけて連続する。

4群 2辺が折断されるが、刃部加工は施されない(490・491・496)。490は折断面以外の1辺に微細剥離痕がみられるとともに、折断面にも微細剥離痕を伴う。491は折断面に挟まれた1辺が調整され、折断面に微細剥離痕がみられる。496は非常に小型であるが、折断面に挟まれた1辺と折断面交差部に微細剥離痕がみられる。いずれも三角形に近い形をしている。

5群 3辺が折断されるが、刃部加工は施されない(494・495)。いずれも方形に近い形をし、折断面以外の1辺に微細剥離痕が認められる。

(8) 彫器 (第25図・第26図497-509、図版10)

縄文時代にも彫器が存在することを指摘したのは高橋(1982)である。器種の認定と分類はそれにしたがった。出土層位と点数は、Ⅰ層1点・Ⅱ層11点・Ⅲ層1点である。

504・506・508は折り面交差型である。504・506は2つの刃部をもち、504の刃部が幅広いのに対し、506のそれは鋭い。497・498・505・507は折り面—古剥離面交差型である。497は側縁の一部を折断し、鋭利な刃部には微細剥離痕を伴う。側縁にも細かい剥離痕が連続することから、削器の機能ももつものであろう。498は折断面を2つもち、そこに微細剥離痕が連続する。刃部には小さく細長い棒状の剥離痕がみられることから、石錐とは区別した。505・507は2つの刃部をもつ。505の刃部のひとつは折り面と主剥離面が交差する部分の稜線に、棒状の剥離痕が著しい。他のひとつは非折り面型のもので、剥落痕が著しい。507の刃部のひとつは尖頭状の先端に棒状の剥離痕とともに微細剥離痕を伴う。他のひとつは折断の際に残った小さな突出部に棒状の剥離痕が認められる。509は折り面—自然面交差型で、刃部には微細剥離痕が著しい。499—501・503は非折り面型尖頭形の彫器である。499・503は横長剥片の尖頭部を刃部にする。503は尖頭部先端に棒状の剥離痕がみられたためにここに含めたが、2次加工が施されている。500はやや丸味をおびた刃部をもつ。

(9) 尖頭石器 (第26図510—513、図版10・11)

尖頭石器には、尖頭形の刃部をもつが器種分類できないものを一括した。Ⅱ層から4点が出土した。

510 は三角形をした剥片の2辺に、両面から刃部加工が施される。加撃による刃部加工も加わるために、削器とは区別した。511・512は小型の尖頭形を示す。512は石錐に含まれるものかもしれない。513は剥片の尖頭部先端が小さく細長い棒状の剥離により覆われている。

(10) 削器 (第26図—第32図514—570・579・585・586、図版11—13)

削器は刃部が形成される位置や刃部形態から数種類に分けることができる。なお、削器に類似していても、刃部加工が不規則な場合、規則的であっても刃部が部分的な場合、刃部の奥行きが浅い場合には削器状石器として区別した場合もある。しかし、奥行きが深い浅いは厳密なものではない。出土層位と点数は、Ⅰ層2点・Ⅰ₁層2点・Ⅱ層52点・Ⅱ₁層11点で、他にトレンチからの出土が2点である。

a. 直刃削器 (514—527・530) 原則的には、縦長剥片を素材にし、剥片剥離軸に平行する1側縁に刃部が作られる。

516は先端部も細部加工されている。517は先端部の挟入部も刃部になる複合石器である。520は刃部の反対側縁に鋸歯状の刃部が作られる。521・530は刃部の奥行きが浅い。

b. 凸刃削器 (528・529・531—536) 直刃削器と同様の特徴をもつが、刃部が外湾する。刃部加工はすべて片面加工である。

532は素材の鈍角の角を含むため、突出度が大きい。534は刃部以外の部分に折断面4面をもつ。536は小型である。刃部の反対側縁に急傾斜の2次加工が施されている。531は刃部の奥行

きが浅いが、規則的で連続する。

c. 凹刃削器 (537-545) 凸刃削器とは逆に、刃部が内湾する。

538は内湾の度合いが小さい。刃部の反対側縁の一部には90°に近い角度の細部加工が施されている。刃潰しの効果をもつものであろう。544は先端部が折断されるが、自然面との交差部が突出し、小さく細長い桶状の剝離痕を伴う。彫器との複合である。542は表面が不規則な剝離面に覆われる。540・543の刃部の奥行きは浅い。

d. 横形削器 (546-558) 刃部が打面の反対側、先端部に作られる。一般には横長剥片が素材になる。素材に自然面を残す例が多く、この仲間で大型のものは分厚い素材が使われている。

546・547の刃部角度は急傾斜である。546・548・558は1側縁も削器として使用されている。549は裏面右側縁に粗い2次加工が施され、扶入部が連続する。550-552の刃部は外湾、557の刃部は傾斜している。558は削器の刃部から連続して石錐の刃部が作られる。553は刃部の奥行きが浅い。

e. 尖頭削器 (559-566・579・585・586) 側縁から先端部へ連続する2次加工を施し、尖頭形の刃部を作り出している。

563は基部と先端部が折断され、尖頭部は基部側の折断面と剝離面の交差部に作られる。先端部では折断面が交差し、切られている折断面と主剝離面が作る短い稜には著しい磨滅痕がみられる彫器との複合石器である。565は小型で、尖頭部先端は直角に近い角度をもつ。566は先端部を含む凸形の刃部が作られる。564は尖頭部に近い形状を示すが、裏面は一次剝離面を残して末加工である。579は尖頭部先端を欠損している。586は尖頭石器に近い刃部形態を示す。561は、尖頭部先端が燻香剝離のためか、刃部加工が施されておらず、ここに含めるものは不適当かもしれない。559は規則的な2次加工が連続するが、刃部の奥行きは浅い。

f. 複刃削器 (567-570) 剥片剝離軸に平行する両側縁に刃部が作られる。

568は直線形と凸形、569は直線形の刃部である。567・570は1側縁の刃部の奥行きが浅い。

g. 大型の削器 (614-621・623・624・628・629) 相対的に大型な1群の削器とそれに類したものをここに含めた。

614・615は凹刃削器である。614は反対側縁に角度の小さな2次加工が著しい。616・617は直刃削器であるが、刃部の奥行きは浅い。616は尖頭部先端にも部分的な2次加工が施される。618-621の2次加工は粗い。618は横形、619は複刃、620は凸刃、621は直刃の削器である。623は両側縁から先端部にかけて刃部が作られ、磨滅が著しい。624は1側縁から先端部にかけて刃部をもつ。628・629は刃部加工が粗く、a～fの削器には含まれないため、ここに含めた。628は凸形と凹形の2つの刃部をもつ。629は凸刃削器で、反対側縁にも細かな剝離が連続する。

(11) 篋状石器 (第37図625—627、図版15)

この器種についての定議は、例えば鈴木 (1981) をみても漠然としている。ここでは、通常篋状石器と呼ばれているものとその類似品を含めた。Ⅱ層から3点が出土した。

625は左右対称の小型のもので、周縁には調整刻線が加えられる。626は両面加工で、中央部付近に最大幅をもち、基部および刃部へ向い若干狭くなる。627は側縁から先端部にかけて櫛状の刻線が連続して刃部を作ることから、篋状石器の一種とした。

(12) その他の剥片石器 (第32—35図571—578・580—584・587—613、図版13)

ここには、明確な刃部加工がおこなわれているが、刃部位置や刃部形態からみて削器に含めなかった1群のほかに、削器状の石器や掻器状の石器を含めた。出土層位と点数は、Ⅰ層1点・Ⅱ層34点・Ⅲ層5点である。

571は尖頭状削器の破損品の可能性がある。572は先端部から両側縁の一部にかけて刃部が作られる。576・577は先端部から側縁にかけて連続する刃部をもつ。574は2個の浅い挟入部が相対し、石匙の1種かもしれない。583は、刃部位置からは傾斜する刃部をもつ横形石器の1種とすることもできる。584は尖頭部先端が石錐の刃部になる。592・593・595・596は刃部角度や刃部形態からみて、小型の削器になる。592は楕円形で周縁が刃部になる。594は刃部の一部に急傾斜の部分があるが、削器である。597は円形気味の刃部をもつ削器である。599は直刃、603は複刃の削器の破損品である。601は先端が折断され、1側縁に刃部加工が施される。600—612は、刃部が短かかったり、奥行きが浅いことなどから削器状石器である。609は刃部中央部に挟入部を伴う。612は内湾する横形の刃部をもつ。588・589・591・613は先端部や折断によって作られた狭い1辺に刃部加工が施される。590は2つの折断面に挟まれた狭い1辺に急傾斜の刃部加工が施される。598は小型剥片の両側縁から先端部にかけて2次加工されるが、狭い先端部は急傾斜の角度をもつ。590・598は掻器的な機能をもつものであろう。

6. 磨製石斧・打製石斧

(1) 打製石斧 (第38図・第39図632—649、図版15・16)

出土層位と点数は、Ⅱ層13点・Ⅲ層4点である。他に、破片をピエス・エスキューに転用した1点がある。

632—643・649は小型磨製石斧以外のもの、いわば通常の型のものである。632・633は幅広で扁平な基部をもち、側縁が刃部へ直線的に開いてゆく。刃部形態が分かる632は直刃である。634・635・637は基部側を欠く。いずれも刃部は凸刃で、634は磨耗している。637の正面左側面には敲打痕が著しい。636・649はほぼ刃部だけの破片で、636の刃部はわずかに丸味をおびる。638—640は基部寄りの部分が残存する。638と639は幅広で扁平な基部をもつ。片面の破損

部分に剝離痕をもつ。640は正方形に近い基部をもつ。641は刃部側を欠く。基部に敲打痕が著しく、破損面は剝離によって刃部のように鋭い。石斧としてよりもクサビの様な機能をもつものとして再利用されたことが考えられる。642はほぼ完形品である。基部と両側面・刃部に敲打痕が著しく、明瞭な接線は形成されていない。未製品であろう。完形品である643は長さが8.1cmであり、これまでのものより小型で、厚さも薄い。扁平で狭い基部からわずかに丸味をおびた刃部にかけて側縁が直線的に広がる。刃部に磨耗は認められない。

644-647は小型の1群である。全長の分かる644は5.5cmである。いずれも厚さも1cm以内と薄い。644は幅広で非常に扁平な基部をもつが、一部が敲打により潰れている。約1/2の刃部が破損している。645は、基部は扁平であるが丸味をおび、両側辺はわずかに外湾する。刃部は破損している。646は基部をわずかに欠く。刃部は斜めであるが、直刃である。647も基部を欠き、刃部は直刃である。646・647は刃部に磨耗は認められない。

648は磨製石斧の破片をピエス・エスキューに転用している。長方形の形態と4個2対の刃部をもつ。側縁には擦切りの痕跡を残す。

(2) 打製石斧 (第37図630・631、図版15)

I層から1点・II層から1点が出土した。

630は基部側を欠く。表面には自然面を残し、裏面は一次剝離面を大きく残している。631は扁平で細長い自然礫の一端に、両面からの刃部加工を施している。刃部形態と位置からみて、打製石斧に含まれるであろう。

7. 礫石器

(1) 台石 (第41図655、図版18)

本遺跡では、多くの住居址から長大な形状を示す巨礫が多く出土した。床面に密着し、しかも壁寄りの位置に多くが存在する出土状況から、住居址に固有で原位置を保つ遺物であると考え、台石の名称を与えた。

台石の名称は、一般的には旧石器時代の遺物のなかで石器製作の台として機能するものを指すが、本遺跡での場合、特定の用途・機能を類推する他の手がかりを欠く。表面に擦痕や敲打痕が認められれば、形態や大きさ・重量を考慮し、「磨る」あるいは「敲く」といった行為を受ける台として機能したことが言えよう。しかし明瞭な使用痕が認められない場合が多く、この器種の識別には出土状況が優先し、使用痕、形態の順になってゆく。したがって、ここでは形態から台石と推定できる1点を図示するにとどまる。

655は完形品ではないが、折れた2個が接合した。長方形の断面をもつ長大な礫である。裏面は剝落が著しいが、他の3面は平滑である。擦痕や敲打痕は認められない。

(2) 石皿 (第41図—第43図656—667、図版18・19)

出土層位と点数は、Ⅰ層3点・Ⅱ層16点・Ⅲ層4点である。他にトレンチから1点と攪乱を受けた場所から1点が出土し、合計は25点である。

石皿は成形加工の有無を識別形質にして2群に分けることができる。1群は素材に成形加工を施し、特定の形態を作り出すもの(656—659)である。658は、平行する2条の高まりを作り出した下に楕円形の脚部をもつ。皿部は中央部が摺り減る。657が皿部に縁が形成されるのに対し、656はほぼ平坦である。659は、緩やかな凹凸をもつ裏面に低い脚部が形成され、皿部は平坦である。これに対して2群は、素材に成形加工を施さないもの(660—667)である。661のように、1側縁に素材がもつ自然面を残すもの他の側縁が破損か意図的に打ち欠かれたのが判断できないものもここに含めた。661と662は片面が使用され、660・663—665は両面が使用される。使用面はほぼ平坦なものと大きくくぼむものがある。662はほぼ完形品に近小型の石皿である。666・667は半球状の礫を素材にし、平坦な面の側が全体にくぼんでいる。他の例とは大きさや重量が異なるとともに形態にも若干の違いがある。しかし、一面が使用の結果全体にくぼんでいることから石皿のなかに含めておいた。

(3) 磨石・凹石・敲石 (第43図—第47図665—699、図版19・20)

この3器種は主に使用痕によって識別される。しかし、同一物に異なる使用痕が複合する例が多いことや作業内容と対象を特定できないことから、使用痕と使用部位・形態を識別形質にして分類するものの、便宜的な分類であることはきけられない。

a. 磨石(668—676) 磨石としたのは、「磨る」という用途・機能によると考えられる使用痕を素材の全面あるいは一部にもつもので、平滑な磨面が形成されている。素材の形態から2群に分けると、1群は球形あるいは扁球形の形態をもつもの(668—673)、他の1群は先の群のように特定の形態をもたないもの(674—676)である。668—672は全面あるいは一部が使用され、表面が滑らかである。671は浅い凹みを伴う複合石器である。673は球形礫の一面が幅広い溝状に凹む。他とは使用形態や使用目的が異なるものかもしれない。674は全体に滑らかであるが、特に先端部は片刃状になり、その面には擦痕を伴う。675は形態的に特異で、幅の狭い側面部全体が滑らかで磨ったことによる光沢が著しい。これ自体が製品として作られた可能性も考えられないことはないが、側面を使用面として把え、ここに含めておく。676は小型の五角柱状の完形品である。一面が平滑で光沢をおびている。675と同様の可能性が考えられる。

b. 凹石(677—687) 凹石は使用痕の形態および占める位置から識別される。しかし、凹みの状態や度合いは一律ではない。素材の形状にいくつかのまとまりが認められることから3群に分けた。1群は球形～楕円球形状の礫を素材にしたもの(677・679)である。677は両面に大きくやや深い凹みを持ち、679は片面に浅い凹みをもった磨石との複合石器である。2群

は扁平で細長い礫を素材にしたもの(638-687)である。この群は素材にひとつのまとまりをもつと同時に、凹み以外に擦痕や敲打痕をもつ複合石器であることが特徴である。凹みの状態や程度にはバラツキがあり、1群・3群に似た形態の凹みのほかに、潰痕の浅いものがある。両者は用途・機能の違いを反映している可能性が考えられるが、ここでは一括して凹石に含めた。683・684・686は両面に凹みを持ち、磨石との複合石器である。685は片面の凹みのほかに両側縁に敲打痕をもつ複合石器である。687は両端と一側縁に敲打痕、一面に湾曲する磨面をもつ複合石器で、両面に凹みがみられる。3群は素材の形状が1・2群のようなまとまりをもたないもの(678・680-682)を一括した。いずれも凹みは大きく深い。両側縁と裏面が磨石として利用されたと考えられる680を除いては両面に凹みがある。682は大型である。

c. 敲石(688-699) この器種は敲打痕により識別できる。素材の形状と使用部位から3群に分けることができる。1群は、円棒状などの形態をもつ細長い礫を素材に、主に先端部に使用痕をもつもの(690-697)である。素材の形態は円棒状や扁円棒状・三角柱状である。一端を失っている例もあるために詳細は不明であるが、694のように両端が使用される例もある。693・696は凹石と複合し、先端部に敲打痕を残す。697は三角柱状の礫で、3面と稜の部分・先端部に敲打痕が著しい。特に先端部は細く尖っている。695は片刃様の刃部にわずかに剝落痕がある。加工痕で識別するならば、別器種に分類すべきものなのかもしれない。2群は、扁平な小型礫を素材にし、主に1側縁に敲打痕をもつもの(698・699)である。2点とも1側縁に顕著な敲打痕をもち、699では敲打の結果生じた剝落痕を伴う。また、いずれも反対側縁の一部にも敲打痕を伴う。3群は、1群・2群に含まれないものを一括した(688・689)。688は磨石との複合石器である。689は両端が敲打により著しく潰れ、1側縁には磨ることにより生じた使用痕を残す。

(4) 半円状扁平打製石器(第47図・第48図700-704、図版21)

半円状の扁平な礫を素材にして、刃部加工を施す。出土層位と点数は、Ⅱ層1点・KNa層2点で、他に表採が2点ある。

700は一端が未加工である以外の縁辺には両面加工による刃部が形成される。701は縁辺に両面加工が施され、刃部は直線部と上端から半円部1/2に形成される。それ以外では素材の厚さをほぼ残す。702は下端を除いた縁辺に両面加工が施されるものの、尖頭状に鋭い上端以外は分厚い。704は両面加工による刃部が両端に形成される。直線部は薄い剝離の片面加工が施されるだけで、素材の厚さがほぼ残る。未製品かもしれない。703は全体が研磨されて成形される。上端から直線部にかけての剝離は研磨以前のものである。製品として完成した磨製石器の可能性もある。

(5) 砥石(第48図705・706・708、図版21)

いずれもⅡ層からの出土である。この器種は形態と使用面の状態から鑑別されるが、磨石との区別に困難がある。ここでは顕著な擦痕を伴うものを含めておいた。

705は4面が使用面である。表面と両側縁には細かい、裏面には幅広いやや深い擦痕が認められる。760は小型であるが、3面は著しい擦痕を伴った平坦面である。708は、やや扁平な円礫の一面に不定方向の著しい擦痕を伴う。

(6) 有溝砥石 (第48図707・709、図版21)

Ⅱ層とⅡ₁層から1点ずつ出土した。一定方向の規則的な溝状の擦痕を伴う。

707は半球状の礫の平坦面に幅広い1条の擦痕を伴い、709は数条の細長い擦痕を伴う。

8. 石製品 (第48図・第49図710-723、図版22)

石棒をはじめとする石製品を一括して記載する。

710・711は大型の石棒である。2点とも破損し、体部断面形は710がいびつな台形、711がいびつな多角形である。頸部と体部の境はそれほど明瞭とはいえず、裏面は研磨されて頸部と体部が平坦面として連続する。711は側面も研磨される。712は双頭の小型石棒である。頸部は先端が鋭く尖る。断面形は円形で中央部に最大径をもち、頸部に向いいくぶん細くなってゆく。表面は滑らかであるが、擦痕が著しい。713は有孔石製品である。中央部には両面から回転穿孔された貫通孔がある。側面はわずかに丸味をおびている。表面は滑らかであるが、擦痕が著しい。714は分銅形の形態を示す。灰白色の軟かい流紋岩質凝灰岩を素材にしている。くびれた部分から上の部分には曲線的な細い貫通孔が1本存在する。その下の部分の表面にみえる小さな孔は素材がもつ自然孔であろう。717は小型の容器状の形態をもつ。半球状の素材の内側を縁を残してくぼめ、縁の中央部には向い合う2個1対の低みが形成される。715・716・718-720は擦痕が良く残るが、ていねいに磨かれている。715は破損のために形状が不明である。1側縁には細く浅い溝が刻まれている。716・718・719は小型の扁平な礫を素材にした完形品である。720は破損品であるが、縁の部分が薄い。721は一部が破損しているが、半割した扁平な円礫の全体がていねいに磨かれ、両面には擦痕が著しい。720などはそれ自体を目的としたものでなく、砥石のように使われた可能性も考えられよう。722は破損が著しく、表面から側縁にかけての一部が観察できるにすぎない。ていねいに磨かれ、擦痕も残る。石剣の破損品とみられる。723は小型で扁平な円礫の片面の中央部が浅くくぼんでいる。広義にはくぼみ石に分類できるであろうが、他に類例がないことからここに含めた。

これらの石製品の所属時期は、本遺跡での包含層出土土器の時的的な傾向からみて、中期末葉-後期初頭にあるであろう。

9. 円盤状石製品 (第49図—第52図724—784、図版22・23)

出土層位と点数は、I層6点・I₁層3点・II層78点・II₁層5点である。このほかに、トレンチ2点・表採1点の資料があり、合計95点である。

円盤状石製品は、小型の扁平な礫を素材に打ち欠きや研磨による加工がおこなわれ、一定の形状を目的意識的に作り出したものであることが周縁や表面に残る加工痕によって識別でき、3群に分けることができる。

1群は周縁を打ち欠いただけのもの(724—734)である。さらに、全周を打ち欠いているもの(724—729)と周縁の大部分を打ち欠くが、一部に自然面を残すもの(730—734)に分けられる。形状は、稜線を残すためにいびつな多角形を示すものが多い。734は細長い7角形である。一応ここを含めておいたが、他のものとは形状が著しく異なる。未製品なのか他と用途・機能が異なるのかは不明である。2群は周縁を打ち欠いた後に、一部または全部を研磨するもの(735—781)である。一部を研磨するもの(735—745)のうちには周縁に自然面を含むものがある(741—745)。形状は1群としたものに似るが、735・736は方形に近い形状を示す。全部を研磨するもの(746—781)は打ち欠きの際に生じた稜線を顕著に残す例(746—755)とていぬいに研磨されて稜線をほとんど残さないもの(756—781)とがある。前者では形状がいびつな多角形からほぼ円形を示すのに対し、後者ではほぼ円形である。この群には、両面も平滑で擦痕を残す例も多い。3群は周縁を打ち欠かず研磨だけを加えるもの(782—784)である。1・2群とは異なり、中央部の厚さに比べて周縁がやや薄い扁平で円形の自然礫を素材にし、全面に研磨を加えている。しかし擦痕は認められない。

以上の群の数的な優占順は2群→1群→3群である。形状は、打ち欠きや研磨の程度に応じて、方形やいびつな多角形からほぼ円形に近いものまでバラツキが認められる。751は周縁の1ヵ所に浅い抉りをもつ。完形品の計測では、直径が最小3.2cm・最大6.7cm、重量が最小8g・最大73gである。直径が6cm以上のもの、重量では60g以上のものは少ない。

なお、遺構からは56点が出土している。その形状や加工の特徴は、3群に含まれるものを欠くが、上述したものと同様である。完形品の計測では、直径が最小2.8cm・最大6cm、重量が最小6g・最大65gである。

以上の円盤状石製品の所属時期は、遺構内出土例に共伴する土器の時期や遺構外における出土土器の時間的な傾向からみて、中期末葉～後期初頭であろう。

10. 石弾 (第53図—第55図785—819、図版23・24)

石弾として分類した石器は次にあげるような特徴をもつ。なお、遺構からも多数が出土したが、遺構外出土のものとの類似性から図示を省略している。したがって、この項では遺構内出

土のものも一括して記載する。

1. 円礫や歪円礫が素材で、未加工である。2. 球形や卵形の形が多いが、いびつな球形や扁平気味の楕円球形のものもある。3. 数量が多い（遺構内159個・遺構外212個の合計371個）。
4. 遺跡の地形や基本層序からみて、人が存在しなければ本遺跡に自然に存在することはない。
5. 遺構内外から出土しているが、いずれの場合も調査区域内の広範囲に分布し、遺構やⅡ層の分布に密接な関係がある。そして、土器をはじめとする他の遺物と一緒に包含されている。
6. 5と関連するが、土器との共存関係からは大木10式に併行する時期のものが大部分を占める。
7. 素材の石質は、凝灰岩が卓越し、安山岩・玄武岩などは少数例である。

遺構外出土の石弾の層別点数は、Ⅰ層12点・Ⅰ₂層3点・Ⅱ層185点・Ⅱ₁層11点・K Va層1点と圧倒的にⅡ層が多い。遺構の種類別出土点数は、住居址153点・フラスコ形ピットとピーカー形ピット6点である。住居址での出土層位は大部分が埋土であるが、床面や床直上・炉埋設土器内のものもある。もっとも出土点数が多いFⅡ-8住居址では、埋土と床直上とあわせて21点を数える。

遺構内外からの出土点数のうち、完形品324個では、直径（完全な球形以外は最大値を採用）が最小2.3cm・最大7cm、重量（4拾5入して10g単位で測定）が最小約10g・最大約230gである。この数値では、直径が最小と最大では約3倍の開きがあるのに対し、重量のそれは約23倍である。重量は素材の石質によってもいくらか違いますが、重量の小さいものの中には石弾から除外する方がよいものも一部含まれている可能性がある。

第1表には、直径の分布を1cm、重量の分布を20g単位で示した。直径は4.1cm—5.1cmの間に78%が含まれ、前後1cmずつ広げた3.1cm—6.1cmには95%が分布する。重量は41g—60gに41%が含まれ、21g—80gに広げると67%が分布する。直径が一定幅に高密度に分布するのに対して、重量分布にはバラツキがみられる。

野外調査の段階では、この器種を、『最古の狩人たち』（芹沢、1974）に出てくるボラ・ストーン用語で呼んでいた。その後、石弾を詳しくとりあげた『石弾・土弾』（八幡、1979）や『弾談議』（八幡編著、1982）を参考にして、石弾とした。

しかし、この器種が石弾であることを出土状況からは証明できないし、飛ばす装置などでも発見されていない。したがって、石弾は仮称の域をでないものである。所属時期は、遺構内出土例に共存する土器の時期や包含層出土土器の時間的な傾向からみて、中期末葉～後期初頭である。

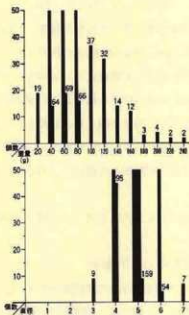
11. 旧石器時代の遺物（第39図・第40図650—653、図版16・17）

650は長さ9.1cm・幅2.1cmの石刃である。表面には側縁に平行する1条の稜をもつ。651は先端部に90°の角度で刃潰しが施され、両側縁には微細剝離痕がみられる。652は表面右側縁に90°に近い角度の刃潰しが施され、反対側縁に微細剝離痕がみられる。651・652はナイフ形石器である。653は長さ16.2cm・幅8.2cm・厚さ3.1cmの楕円形をした握弁である。両面に大きく自然面を残し、半両面加工である。刃部は磨滅が著しい。石質は硬質凝灰質泥岩である。

本遺跡では、このほかに遺構から、石刃（第208図2212）・ナイフ形石器（第214図2292）が出土している

旧石器時代の遺物とはいつても、縄文時代の遺物とともに出土した異地性のものであり、形態や加工技術の違いによって、縄文時代の石器とは識別されたにすぎない。本遺跡の基本層序の第Ⅳ層を構成する洗民火山灰層相当の黄橙色～黄褐色火山灰層あるいはその風化帯である第Ⅲ層がそれらの石器を含む層準と推定される。洗民火山灰は上部と下部に2分され（大上ら、1978）、上部の構成員のうち、一本木スコリア約33,000年前、生出黒色火山灰約34,000年前の年代が推定されている（井上、1982）。

上述の旧石器時代の遺物がⅡ層あるいは遺構埋土に包含されるのは、縄文時代に構築された住居址やピット類が第Ⅲ層・第Ⅳ層を掘り込んでおり、その際に旧石器時代の遺物が掘りあげられた結果とみられる。そのような仮定のものに、トレンチ方式による試掘を一部地域でおこなったが、遺物は出土しなかった。



第1表 石弾重量・直径分布図

Ⅲ. 遺構内の出土遺物

1. 住居址

BV-1 住居址 (第56図1-9、図版35・67・74・85)

土器 (1・2) 1は口縁部に3個の小突起をもち、突起の口唇には1個の竹管文が加えられる。突起頂部からは短かい直線の隆起線が垂下し、それを竹管文が囲む。頸部から体部は隆起線の長方形区画帯によって3分割され、口縁部無文帯には竹管文がめぐる。撫糸文が地文である。2は撫糸文の地文に数条の平行沈線によって曲線的な文様が描かれる。1は大木10式に併行、2は後期初頭に属する。

削片石器 (4-9) 4は表面が2次加工された寛状石器である。7は尖頭形の刃部をもつ削器、9は表面が自然面で1側縁に直線形の刃部が形成された削器である。5は粗い刃部加工が施された削器状石器である。8は挟入度の浅い刃部を3個もつ挟入石器である。6は折断された1辺をもち、2次加工によって削器状の刃部が作られる。

円盤状石製品 (3) 周縁が打ち欠かれただけのいびつな円形の形状をもつ。

この住居址からの出土遺物は少ない。埴は重複する遺構に破壊され、形態が不明である。確実な所属時期は不明である。

CⅢ-1 住居址 (第57図10-24、図版64-66・68・72・74)

土器 (10-14) 11は内面に隆起線を伴った波状口縁部、12は頸部に隆起線がめぐる。14は3条の沈線間が磨消されている。10-13は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (15) 土器の体部破片を素材にし、周縁を打ち欠いている。

削片石器 (16-24) 16は削片剝離の打面を利用して打撃を加え、1側縁に挟入部を作り出した縦形石匙に類似したものである。18は2個1対の刃部をもつピース・エスキュー、22と23は周縁に細かな剝離が連続する削器状石器、24は片面加工の粗製の削器である。17は石錐である。21は先端部に急傾斜の刃部加工が施された播器で、刃部の一部を欠く。19は折り面を交差させた影器である。

この住居址は所属時期を決定する出土遺物を欠く。住居や埴の形態からも所属時期は不明である。

CⅢ-2 住居址 (第57図・第58図25-34、図版63)

土器 (25-30・32-34) 26は口縁部内面に鱗状隆帯をもつ。27は無文の口縁部が外方へ屈曲する鉢形土器である。30は連続する横方向への刺突が頸部に加えられる。32は頸部に隆起線がめぐり、34は体部に鱗状隆帯を伴う。27を除いては大木10式に併行する。

円盤状土製品 (31) 沈線区画の磨消帯をもつ土器片を素材にし、周縁を打ち欠いている。

この住居址は埋設土器を伴う炉をもつが、埋設土器が行方不明である。出土土器は大木10式併行がほとんどであることや炉の形態からみて、大木10式併行期に所属することが考えられる。

CⅢ-3 住居址 (第58図・第59図35-52、図版31・66・67・69・72・89)

土器 (35-40) 35は炉埋設土器である。残存部分での文様は沈線と磨消帯によって主に構成される。楕円形に囲まれた部分では地文を残した上に刺突文が充填される。磨消帯には沈線に沿って連続刺突文が加えられ、5回の繰り返しである文様単位の接触部には鱗状隆帯が貼付される。36は炉縁下に埋置されていた土器である。磨滅しているために地文は不明である。37は内面に隆起線をもつ。38と39は沈線と磨消帯をもつ。40は口唇に指頭状の連続押捺が施されている。35・37-39は大木10式併行、40は前期末葉に属する。

円盤状土製品 (41-43) 周縁に対する加工は、41が打ち欠き、42が研磨、43が約1/2の研磨である。

切片石器 (44-51) 44は丸味をおびた先端部を含めた側縁に刃部をもつ。45は自然の挟入部を刃部にした挟入石器である。46は表面の側縁に2次加工が施された尖頭形の石器である。50は凸刃削器、51は尖頭削器、52な円形に近い形態をもつ小型の削器である。47は1側縁が両面から刃部加工され、削器としての機能をもつものであろう。49は尖頭部から1側縁にかけて刃部加工される。48aは折断石器48bと48cの接合例である。48bと48cの鋭い縁辺には微細剝離痕がみられる。

この住居址は、炉埋設土器と炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

CⅢ-4 住居址 (第59図53-61、図版81)

土器 (55-60) 55は炉埋設土器である。体部下半から底部にかけて残存し、単節斜縄文を地文にする。56は沈線文口縁部である。58は平行沈線間に鋸歯状の文様が描かれる。56と57は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (53・54) 周縁に対する加工は、53が一部研磨、54が全周研磨である。

切片石器 (62) 2辺が折断されており、他の鋭い縁辺には微細剝離痕を伴う。

礫石器 (61) 61は小型の礫の周縁約1/2を両面から打ち欠いて刃部を形成するが、刃部は分厚い。

この住居址からの出土土器は大木10式併行が主体を占める。炉埋設土器からは住居址の所属時期は明らかではないが、炉の形態からは大木10式併行期に属することが考えられる。

CⅢ-5 住居址 (第59図・第60図64-70、図版27・35)

土器 (64-69) 65は炉埋設土器である。口縁部は内傾し、頸部にめぐる隆起線に沿って刺突文が連続する。体部には沈線で区画されたJ字とは逆向きの磨消帯が5回繰り返され、先

端には鱗状隆帯が貼付される。逆J字形の磨消帯間は刺突文を伴う磨消帯によって連結される。地文は撚糸文である。66は鱗状隆帯を伴う。67は口縁部文様が連続刺突文を伴った隆起線、体部文様は詳細は不明だが、沈線区画の磨消帯と刺突文で構成される。65-68は大木10式に併行する。

剃片石器 (70) 70は先端を欠く。1側縁に削器状の刃部をもつ。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に属する。

CⅢ-6住居址 (第60図71-74)

土器 (71-72) 71は炉埋設土器である。頸部には沈線がめぐり、体部には沈線区画の磨消帯がJ字形の文様を描き、4回の繰り返しである。地文は糸文である。72は沈線区画の磨消帯を持つ破片である。71と72は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (74) 体部破片を利用し、周縁を打ち欠いている。

剃片石器 (73) 縦長剃片の表面に、奥行き深い直線形の刃部が形成された削器である。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に属する。

CⅢ-7住居址 (第60図-第63図75-112、図版37・42・44・58・60・62-67・69・70・79・84 85)

土器 (75-91) 75と76は1号炉(古期)、77は2号炉(新期)の埋設土器である。75は縦位のLRを地文にする。76は大型の粗製深鉢形土器で横位のLRLを地文にする。77も粗製の深鉢形土器で、撚糸文を地文にする。78は頸部に1条の沈線がめぐった浅鉢形土器で、複節斜縄文を地文にする。82は波状口縁部の内外面に鱗状隆帯を伴う。81は直立する口縁で、口縁部には無文帯が形成されない。84と87は口縁部の内面に隆起線を伴う。86は口唇部に斜めの刻みが連続し、沈線で区画された狭い口縁部無文帯に連続刺突文が加えられる。85は鱗状隆帯を伴う。88は器形からみて浅鉢形土器の破片であろう。79-88は大木10式に併行し、78も頸部に沈線がめぐって口縁部無文帯が形成される特徴から、同時期のものであろう。

円盤状土製品 (92-98) 周縁に対する加工は、93-95が打ち欠き、92が一部研磨、96-98は研磨である。95は鱗状隆起帯を伴う土器片、96は沈線区画の磨消帯をもつ土器片、98は口縁部無文帯の土器片を利用している。

剃片石器 (99-103・105-108) 99は一部を欠損するが、凹基の基部形態をもつ石鏃、100は2個1対の刃部をもつピエス・エスキュー、103は石鏃の1種である。102は石鏃としての刃部と削器状の刃部をもつ。101は鋭い先端に微細な剥離痕が認められ、彫器的な機能が考えられる。105は凸刃、107は凹刃の削器である。108は2側縁に削器状の刃部が形成される。106は尖頭形の刃部が作り出される。

礫石器 (109-111) 109と110は床面から出土した。明瞭な使用痕は認められないが、出土

層位や形態から台石と考えられる。111は溶岩製の有溝砥石で、片面にU字形の溝が形成される。

石製品 (104) 石製装飾品のなかでも、ペンダントに分類できる。淡緑色をした流紋岩質細粒凝灰岩が素材であるため、軟質である。柄鏡状の形態をもち、表面は狭い縁を残して内側をくぼめ、裏面は平滑である。側面には幅3mmの浅い溝がめぐり、柄の部分には直径5mmの貫通孔1個がある。長さ40mm・幅36mm・厚さ10mm~14mmである。

円盤状石製品 (112) 周縁を打ち欠き、両面を研磨している。

この住居址は3基の炉と3群の柱穴配置をもつ。そのうち、もっとも古期の住居址は炉の大部分が重複するフラスコ形ピットに切られている。柱穴配置は、その後の同方向への拡張がおこなわれた2棟とは若干系列を異にする。出土遺物はいずれももっとも新しい時期の住居址に伴うものである。炉埋設土器はいずれも粗製土器のために確かな時期は不明であるが、炉形態は新旧2基とも大木10式併行期に特徴的なものである。

CⅢ-8住居址 (第63図113-118、図版39)

土器 (113・114・116-118) 118は炉埋設土器である。底部を欠いた深鉢形土器である。外傾して立ち上った体部は半ばで直立し、口縁部で緩やかに外傾する。頸部には1条の沈線がめぐり、地文は単節斜縄文である。113は円孔を有する液状口縁部で、2列の刺突文と隆起線が口縁部文様を構成する。114は沈線区画の磨消帯をもつ破片である。116と117は口縁部に幅の狭い無文帯をもつ粗製深鉢形土器の破片である。113・114は大木10式に併行、118もその特徴からみて同時期のものである。

円盤状土製品 (115) 一部が破損するが、円弧を描く部分の側縁は研磨されている。また、その部分には連続刺突文を伴う。円盤状土製品としてきた通常のものとは形態や大きさに著しい差があるが、円形の形態を目的にした加工を施すことから円盤状土製品に含めた。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

CⅢ-9住居址 (第63図一第65図119-148、図版43・54・58・62・63・66・68・72・73・76・81・84)

土器 (119-126) 125は炉埋設土器である。器形は長胴形を示し、頸部に1条の沈線がめぐり、幅の狭い口縁部無文帯が形成される。地文は横位のLR Lである。119・120・122は沈線文口縁部である。122は口縁部に小突起があり、外面は突起の下に刺突文が集中する。内面には縞状隆帯をもつ。120は口縁部の内外面調整からみて土偶とは考えられない。一応、土器の破片に考えておく。119-122は大木10式に併行、125もその特徴からみて同時期のであろう。

円盤状土製品 (127-131) 周縁に対する加工は、127と130が研磨、他が打ち欠きである。127は磨消帯、129と130は沈線区画の磨消帯をもつ土器片を利用する。

剥片石器 (132—140・142—144) 132は挟りの大きな刃部を先端部にもつ抉入石器で、側縁には削器状の刃部も形成される。133・134は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。138は周縁に粗い2次加工が施された尖頭石器である。135は1辺が折断されている。137は4辺いづれもが折断され、折断面が交差する2ヵ所に刃部をもつ彫器である。136は非折り面型尖頭形の彫器である。142—144は削器状の刃部をもつ。142の表面左側縁には挟りのやや大きな剥離が連続し、鋸歯縁状の刃部が形成される。140は横長剥片の両端突出部にほぼ直角に近い角度をもった細かな刃部加工が施された掻器である。139は削器である。

磨製石斧 (141) 基部側を破損している。刃部はわずかに凸刃形を示す。

礫石器 (147・148) 147は円棒状の礫の一端に円錐形を示す鋭利な刃部が作られる。148は破損しているが、扁平な楕円球礫の両面にくぼみを伴う凹石である。

石製品 (145・146) 145は約1/2を破損した有孔の円盤である。146は長方形気味の小型の有孔礫である。全体が研磨され、両面から穿孔される。

この住居址は、炉形態から大木10式併行期に所属することが考えられる。

CⅢ—10住居址 (第65・66図149—156、図版38・39・49・57・58・64・84・)

土器 (149—153・155—162) 149はソロバン玉形をした小型の壺形土器である。1個は剥落しているが、対になる有孔突起をもつ。体部上半に沈線区画の磨消帯による文様をもつ。150と151は一部が重なりあって出土した。ともに入組文が文様を構成し、150はボタン状の突起、151は貼り瘤をもつ。2点は器形が類似するが、文様意匠は大きく異なる。156は注口部の先端を欠くが、ほぼ完成形に近い小型の注口土器である。外面は無文である。3点は注口部の付け根に突起を伴う。152は無文の高台付皿形土器である。153はミニチュア土器で、無文である。

155は体部下半から底部にかけての部分である。底部は上げ底になり、体部は弧状に立ち上がる。158は口唇に小突起をもち、口唇部に沿って半截竹管文が連続する。無文である。161と162は小さな貼り瘤をもち、狭い沈線間に刻みが連続する。159は口唇部に貼りつけた隆帯にも刻みが連続する。157は口縁部内面に鱗状隆帯をもつ。155・151・156・158・159・161・162は後期末葉宮戸Ⅲa・Ⅲb式に相当する。152も器種や器形からみて、それらに伴うものであろう。149・157・160は大木10式に併行する。

剥片石器 (163—166) 163は縦形石匙である。164は形態が縦形石匙に似るが、明瞭な抉入部は形成されない。165は小型の複刃削器、166は削器の破損品である。

その他 (154) 長楕円形で扁平な形状をした非常に軟質な流紋岩質細粒凝灰岩であるが、明確な加工痕は認められない。

この住居址から出土した後期末葉の土器は他の住居址にはみられないものである。また、炉は円形の石囲いの形態を示す。後期末葉の土器とともに大木10式に併行する土器が床直上から

出土しているが、他の後期末葉の土器の存在も考慮すると、この住居地の所属時期は後期末葉であると考えられる。

CⅢ-11住居址 (第66図-第68図167-189、図版30・59・63・67・75・76・81)

土器 (167-178) 174は床面から出土した。長胴形の深鉢形土器である。体部文様は沈線区画の磨消帯で構成され、体部中部には刺突文で充填された円形区画帯がある。文様単位は4回繰り返される。地文は複節斜縄文である。170はが埋設土器の一部で、沈線区画の磨消帯による文様構成である。168・169は頸部に連続刺突文、171は刺突文充填円形区画帯、172・176は縞状陰帯を伴う。167-176は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (179・180) 周縁は研磨加工されている。180は撫糸文の土器破片を利用。

削片石器 (181・182・184・187-189) 182は一部が破損した尖頭形の石器で、周縁に両面からの2次加工が施される。188は打面を除いた周縁に奥行き深い刃部加工が施された尖頭削器である。187は筧状石器、189は削器の破損品、184は凸刃の削器状石器である。181は1辺が折断されていて、折断面と自然面の交差部に微細剝離痕がみられる。

磨製石斧 (185・186) 185は長さが44mmの小型磨製石斧で、刃部の一部を欠く。186は刃部が破損した後に再生加工を施しているが、鈍い刃部である。

礫石器 (183) 小型の亜円礫の両端に敲打痕が認められ、表面下端に特に著しい。

この住居地のが埋設土器は復元が不能な状態であったが、大木10式に併行するものである。また床面から出土した174やがの形態を考慮に入れると、所属時期は大木10式併行期である。

CⅢ-12住居址 (第68図190-195、図版44・67・74)

土器 (190-193・195) 191はが埋設土器である。単節斜縄文を地文にし、綾絡文がみられる。192は頸部に刺突文が加えられる。いずれも大木10式に属する。

削片石器 (194・196) 194は1辺が折断され、折断面と自然面が鋭角に交差する部分に微細な剝離痕を伴う。彫形的な機能が考えられる。196は3つの折り面をもつ折断石器である。

この住居地は、が埋設土器やが形態からみて、大木10式併行期に属する。

CⅣ-1住居址 (第68図・第69図197-214、図版27・59・62)

土器 (197-208) 197はが埋設土器である。口縁部を欠くが、体部文様は沈線区画の磨消帯によって構成され、1文様単位は4回繰り返される。地文は単節斜縄文である。198は体部上半の一部から口縁部を欠く。体部は体部半ばに最大径をもち、球形に膨らむ。上半の一部に沈線がみられるが、文様の詳細は不明である。199は複節斜縄文を地文にし、上半に沈線区画の磨消帯による文様が展開するが、詳細は不明である。200・201・204は沈線文口縁部である。204は沈線に沿う刺突が加えられる。201の口縁部無文帯は幅が狭く、粗製土器である。202は2条の撫糸文による地文をもつ。204は口縁部が直立し、口唇部は内側に直角に折れ曲がる。

口縁部には縞状隆帯を伴う。器種は浅鉢形土器であろう。177-201・203-205・207は大木10式に併行、202は前期末葉に併行する。

剃片石器 (209-214) 212は大型の凹刃削器である。剃片剥離軸方向の両端は折断されている。刃部の反対側縁は磨滅して著しく鈍く、光沢をおびている。表面右側縁に近い剥離面には側面に沿う擦痕があることから、磨るという機能をもっていたと考えることができる。209・213は直刃削器である。213では刃部の反対側縁の一部が著しい磨滅を示し、212と同様の運動を考慮することができる。214は複刃削器である。210は尖頭部から側縁にかけて細かな2次加工が施される。211は打面から両側縁半ばにかけての両面に2次加工が施されている。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

CM-2 住居址 (第70図215-218、図版44)

土器 (215-217) 215は炉埋設土器である。粗製の深鉢形土器で、体部上半は口縁部に向けてすぼむ。地文は単節斜縄文である。217は磨消帯の部分の土器片、216は木目状懸糸文を地文にする。217は大木10式併行、216は前期末葉である。215は器形からみて大木10式に併行あるいは後期初頭の時期のものであろう。

剃片石器 (218) 表面に刃部加工が施された尖頭削器である。

この住居址の炉は複式炉の系列に含まれる形態をもつ。そのことや炉埋設土器から考えると、この住居址は大木10式併行期～後期初頭の時期に属する。

D II-1 住居址 (第70図・第71図219-246、図版50-52・54・58・56・65・74)

土器 (219-237) 219・220は沈線区画の円形文をもつ。223は口縁部外面に隆起線、内面に縞状隆帯をもつ。226・228・229は口縁部内面に縞状隆帯が貼付され、その部分では小液状を呈する。233は2本の隆起線と環状突起をもつ。234は波状口縁で、口縁部文様は隆起線とそれに沿う刺突文で構成され、体部文様帯では沈線に刺突文が重ねられる。224・230-232は沈線区画の磨消帯をもち、231は刺突文も伴う。219・210は大木9式、222-232・234は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (239・240) 2点は側縁を研磨されている。240は1/2を破損するが、口縁部破片を利用している。

剃片石器 (238・241-246) 238は深い抉りが入った刃部とそれに続く側縁に削器状刃部をもつ複合石器である。241は折り面を交差させた形器、242は3辺に刃部をもつ削器である。244は表面のほぼ全周に刃部加工した削器である。245はタール状の異物が両面の一部に付着する。尖頭部先端が使用されている。246は尖頭部先端が破損している。石錐あるいは尖頭石器に含まれるものであろう。

この住居址の炉は浅皿状の形態をもち、直立埋設土器を伴うものであるが、土器が行方不明

である。しかし、炉の形態や他の出土土器からは大木10式併行期に属することが推定できる。

DⅡ-2 住居址 (第71図・第72図247-261、図版64・65・72・73)

土器 (247-251) 247-250は沈線区画の磨消帯をもつ体部破片、251は綾絡文をもつ破片である。いずれも大木10式に併行する。

円盤状土製品 (252) 磨消帯をもつ土器破片を利用し、周縁を研磨している。

剃片石器 (253-261) 253は柳葉形石鏃、254・255はつまみをもった石錐である。257は非折り面型尖頭形の影器である。258は小型の削器、261は凸刃削器である。259は先端に急傾斜の刃部加工がおこなわれた掻器である。260は2側縁に削器状の刃部をもつ。256は使用痕をもつ剃片である。

この住居址の炉は浅皿状の形態をもち、斜位埋設土器を伴うものであるが、土器が行方不明である。しかし、炉の形態や出土土器からみて、大木10式併行期に属することが考えられる。重複するDⅡ-1住居址を切っていることが確認されている。

DⅡ-3 住居址 (第72図263-272、図版31)

土器 (262-271) 262は伊埋設土器で、体部下半から底部にかけての残存である。263は燃糸文を地文にして沈線区画の磨消帯による文様が展開する。燃糸文が充填された椀形区画帯には沈線に沿う刺突文が連続する。体部には鱗状隆帯を伴う。268は頸部に1条の沈線がめぐる浅鉢形土器である。264-266は沈線文口縁部である。264は体部に隆起線文による区画がおこなわれるようであるが、詳細は分からない。265・266は内面に鱗状隆帯を伴う。267は隆起線文口縁部、269は体部に鱗状隆帯を伴う。263-270は大木10式に併行する。

剃片石器 (271) 小型の削器状石器である。

この住居址は、炉の形態や出土土器からみて大木10式併行期に属する。

DⅡ-4 住居址 (第73図277・278、図版29・72)

土器 (277) 伊埋設土器である。RLを地文にし、沈線区画による磨消帯が文様を構成する。体部下半とを区画する波状沈線には短かいJ字状磨消帯が下方に付着する。文様単位は3回の繰り返りである。大木10式に併行する。

剃片石器 (278) 刃部の奥行きから削器状石器に含める。

この住居址からの出土遺物は僅少である。所属時期は、伊埋設土器と同じであるとする、大木10式併行期である。

DⅡ-5 住居址 (第72図・第73図273-276・279-283、図版50)

土器 (273-276・279・280) 273は沈線文口縁部で、内面に鱗状隆帯を伴う。279は口形文の文様をもつ。274・275は幅の狭い磨消帯をもつ。279は大木9式、273・276は大木10式に併行する。275は後期初頭の土器であろう。

円盤状土製品 (282) 周縁を研磨して成形しているが、ややいびつな円形になる。

剥片石器 (281) 両側縁に刃部加工された削器状石器の破損品である。

礫石器 (283) 分厚い礫の1側縁に、両面からの刃部加工が施される。刃部には細かな剥落を伴う。

この住居址の炉は石圍いに直立埋設土器を伴う形態のものであるが、土器が行方不明である。他に所属時期を決定する遺物を欠く。炉形態や埋土・占地からは大木10式に併行することが考えられるが、確実なことはいえない。

D II - 6 住居址 (第73図・第74図284-293、図版67・69・72)

土器 (286-288) 286は頸部に沈線がめぐり、288は沈線区画の磨消帯をもつ。287は狭い沈線間が磨消される。287は大木9式、286・288は大木10式に併行する。

剥片石器 (284・285・289・290・292・293) 285は横形削器である。280は断面が分厚い三角形の素材の1辺に、奥行きが深く短かい刃部が形成される。284・289・292は削器状石器である。284は刃部に尖頭部も含み、290は部分的に刃部加工が施される。292は縦長剥片を素材にし、打面を除いた周縁が刃部加工される。298はやや大型の削器である。

礫石器 (291) 細長い礫の一端に使用痕を伴う敲石である。

この住居址の所属時期を決定できる遺物は出土していない。また、多くの遺構と重複するために、炉は検出されなかった。所属時期は不明である。

D II - 7 住居址 (第74図295-298、図版62・63)

土器 (295・297) 295は炉埋設土器である。残存部分からは文様についての詳細は不明であるが、単節斜縄文を地文に沈線文区画のJ字形磨消帯が文様を構成するものであろう。大木10式に併行する。297は単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。

円盤状土製品 (294・296・298) いずれも周縁はていねいに研磨されている。298はやや方形気味の形態をもつ。294・296は大木10式併行土器の片を素材にしている。

この住居址はIV層上面が検出面のために固有の埋土は確認できなかった。したがって、ほとんど遺物を伴わない。所属時期は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期である。

D II - 8 住居址 (第75図-第77図299-323、図版25・45・62-67・71・73・89)

土器 (299-306) 299は炉埋設土器である。頸部に沈線がめぐり、体部には沈線区画のJ字形磨消帯が3回繰り返される。300は燃糸文を地文にした粗製深鉢形土器である。301は浅鉢形土器の破片で、頸部には沈線がめぐり、口縁部には2列の連続刺突文がめぐり、305は沈線ではなく連続刺突文によって円形区画帯が描かれ、内部は刺突文で充填される。304・306は鱗状隆帯と刺突文を伴う。303は頸部に低い隆起線がめぐり、いずれも大木10式に併行する。

円盤状土製品 (307・308・311・312) 周縁への加工は、311が部分研磨である以外は全周

を研磨する。

剃片石器 (309・310・313-319・321-323) 309は左右非対称形の石鏃で、基部形態は平基である。310・313は縦形石匙、315は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。314は抉入石器の刃部と削器状の刃部をもつ。316は基部が折断され、側縁には微細剥離痕がみられる。317bと317cは大型の削器で、接合する(317a)。318は横形削器、323は削器状石器である。319は素材の先鋭な部分を刃部加工した石鏃で、刃部は傾斜する。322は、急傾斜の細部加工が先端部に施された挿器である。321は両端が折断され、折断面と両側縁が作る角2つに微細剥離痕を伴う。

礫石器 (320) 溶岩製の石皿で、破損している。表面中央部がややくぼみ、表面は部分的に凹凸を示す。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

DII-9住居址(第77図・第78図324-338、図版28・62・67・81)

土器 (324-333) 324は炉埋設土器である。体部上半から口縁部にかけてを欠くために詳細は不明であるが、体部中部に波状沈線がめぐり、上半に磨消帯が文様を展開する。地文は摺糸文である。325は小型深鉢形土器で、地文は無節縄文である。326は刺突文を伴った沈線文口縁部である。327-329は沈線区画の磨消帯が体部文様を構成する。324・326-329・333は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (337) 周縁が部分的に研磨され、いびつな円形を示す。大木10式に併行する土器片の利用である。

剃片石器 (335・336・338) 335は縦長剃片の尖頭部に細かな櫛状の剥離痕を伴う彫器である。336・338は先端部が折断され、両側縁に微細剥離痕を伴う。

礫石器 (334) 磨ったことによる著しい光沢が両側縁に認められる。同時に、表面下端と側縁の一部に敲打痕を伴う。磨石と敲石の複合石器である。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

DII-10住居址(第78図・第79図339-359、図版37・52・64・67・70-72)

土器 (339-351) 348は復元不能であった炉埋設土器の破片である。沈線区画の磨消帯が体部文様を構成する。339は体部上半を欠くために詳細は不明であるが、浅鉢形土器であろう。340・342・343・345・350は沈線文口縁部である。340は半截竹管文を伴う。345は内面に鱗状隆帯をもつ。344は波状口縁で、口縁部には2列の三角形刺突文がめぐり、346は頸部に刺突文が連続する。浅鉢形土器である。351は体部に鱗状隆帯を伴う。341は大木9式、339・340・342-348・350・351は大木10式に併行する。

剃片石器 (352-359) 352は縦形石匙であるが、刃部の奥行きは浅い。353は小型の削器、

355・356は削器である。356は両面に2次加工された横形削器である。354・357は削器状石器である。358は1辺が折断されている。359は側縁に微細剝離痕が観察できる。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。

DⅡ-11住居址 欠番である。

DⅡ-12住居址 (第79図360・361)

土器 (360・361) 360は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にする。361は体部下端から底部にかけての残存である。

この住居址は炉跡と柱穴群から確認されたもののため、壁や固有の埋土を欠く。したがって出土遺物は上記の2点だけである。炉は直立埋設土器だけで構成される形態のものである。炉形態からは大木10式併行期に属することが推定できるが、確実なことは言えない。

DⅢ-1住居址 (第79図-第81図362-384、図版52・57・62・6975)

土器 (362-370) 368-370は接合が不可能であった炉埋設土器である。複節斜縄文を地文にし、体部文様は沈線区画の磨消帯で構成される。366は単節斜縄文を地文にする。362は波状口縁で、口縁部無文帯に2-3列の刺突文がめぐり、363は刺突文を伴った沈線口縁部である。364は体部側に刺突文を伴った隆起線口縁部である。文様帯をもつ土器はいずれも大木10式に併行し、366も器形や共伴する土器からみて同時期のものであろう。

円盤状土製品 (371・372) いずれも側縁を研磨加工している。371は長方形気味になる。

剝片石器 (373-383) 373は2つの折断面をもつ折断石器、376は隣合う2個の刃部をもつ抉入石器である。374は複刃、377は凸刃の削器である。383は大型の縦長剝片を素材にした複刃削器である。375・378・379は刃部形態から削器状石器に含めた。380は正面右側縁に直角に近い角度をもつ細かな2次加工が施され、裏面右側の稜線に浅い角度の剝離がみられる。381は先端部にほぼ直角の角度の2次加工が施される。角度からみて擗器の刃部としては不適当であり、刃潰しとしての効果をもつものであろう。側縁には微細剝離痕がみられる。

磨製石斧 (384) 刃部側だけが残り、刃部は1側縁に寄っている。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

DⅢ-2住居址 (第81図385-389、図版46・74)

土器 (385-389) 385は炉埋設土器である。無節斜縄文を地文にした深鉢形土器の体部である。386・387は沈線区画の磨消帯、388は鱗状隆帯、389は刺突文充填の円形区画帯をもつ。386-389は大木10式に併行する。

この住居址は、炉形態や埋土出土の遺物からみて、大木10式併行期に所属するものであろう。

DⅢ-3住居址 (第81図・第82図391-413、図版28・29・42・64-66・68・72・74)

土器 (390-400) 390と394は共伴する炉埋設土器である。390は文様帯が一部残るだけの

ために詳細は不明であるが、体部中部に波状沈線がめぐり、その上方に磨消縄文による文様が展開する。地文は糸文である。394は複節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。

391は体部中部にめぐる波状沈線に複節斜縄文で充填された円形区画帯を伴う。文様単位は5回の繰り返してである。396は、沈線で区画された幅の狭い口縁部に単節斜縄文が施文される。398は波状口縁の内外面、399と400では内面に鱗状隆帯が貼付される。390-395・397-400は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (404) 複節縄文を地文にする土器片を素材にし、周縁を研磨している。

切片石器 (401-403・405-413) 401は断面形が菱形をした石錐、402は凹基の基部形態をもつ石錐、408は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。409・412は削器、413は削器状石器である。411は主に裏面に2次加工が施された鹿状石器である。406は2辺を折断し、1側縁に削器としての刃部を形成する。405は1側縁に浅い抉りの刃部をもつ。410は先端に急傾斜の刃部加工が施された播器である。407は折断石器である。403は尖頭部先端に刃部が形成されるとともに1側縁に抉入する刃部をもつ複合石器である。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に属する。

DⅡ-4 住居址 (第83図414-420、図版41・60・64)

土器 (414-419) 414は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。958は口縁部無文帯に2列の半截竹筭文がめぐり、418と419は同一個体の破片で、口縁部に横位の燃糸文が狭い幅で回転される。415-417は大木10式に併行する。414も器形や地文・作りからみて、大木10式に併行するものであろう。

切片石器 (420) 縦形石匙である。刃部は片面加工によって作り出される。

この住居址はⅢ層上面に床面をもつために固有の壁や埋土を欠き、出土遺物は非常に少ない。炉の形態や埋設土器を手がかりにすると、大木10式併行期に属することが考えられる。

DⅡ-5 住居址 (第83図・第84図421-432、図版68)

土器 (421-428) 421は炉埋設土器である。単節斜縄文と燃糸文が混じる。体部中部にめぐる波状沈線には刺突文で充填された円形区画帯を伴う。文様単位は4回の繰り返してである。また、口縁部内面に鱗状隆帯を伴う。422は沈線文口縁部、423・424は隆起線文口縁部で、423は刺突文を伴う。425・426は沈線区画の磨消帯が体部にみられる。427は418・419と同一個体の破片である。421-426は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (429) 形はいびつな楕円形であるが、周縁は研磨されている。

切片石器 (430-432) 430は横形削器である。431は傾斜する先端部に急傾斜の刃部加工がおこなわれ、1側縁には抉りの浅い刃部が形成される。432は折り面の交差部を刃部にする彫器で、刃部は磨滅が著しい。表面から1側縁にかけてタール状の付着物が残る(432b)。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

DⅢ-6住居址 (第83図433-438、図版50・56)

土器 (433-436) 433は沈線区画の磨消帯が文様を構成する。434は円孔をもつ突起が口縁部につき、体部文様は沈線区画の磨消帯で構成される。435は2列の刺突文が口縁部にめぐる。433-435は大木10式に併行する。

制片石器 (437・438) 438は基部が折断され、鋭い縁辺に微細剝離が連続する。437は残核であるが、1側縁に敲打による剝落と潰痕が著しい。

この住居址はⅢ層上面に床面をもち、壁や固有の埋土は確認できなかった。また、炉は地床炉であって埋設土器を伴わない。確実な所属時期は不明である。

DⅢ-7住居址 (第84図-第87図439-482、図版26・50・51・53・57・58・62・63・66・67・69・74・81・83・88)

土器 (439-457) 445はJ字状磨消帯が接続して横方向に展開する。文様単位は4回の繰り返りで、地文は単節斜縄文である。447は単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。439は波状口縁で外面に縷状隆帯をもち、450は内面に縷状隆帯をもつ。440は2列の刺突文、442は竹筭文を口縁部無文帯にもつ。444・448は隆起線文口縁部で、444は刺突文を伴う。449は口縁部が無文帯の浅鉢形土器である。451は縷状隆帯、455は刺突文充填円形区画帯を体部文様にもつ。441・446・452-454は沈線区画の磨消帯をもつ。441では文様接触部に刺突文が加えられる。456は小型土器の破片である。文様の特徴から時期の分かるものはすべて大木10式に併行する。

円盤状土製品 (458-465) この住居址では17個の円盤状土製品が出土している。周縁に対する加工は、458が全周を研磨する以外は周縁の一部を研磨している。465はいびつな円形を示し、径8cm±と大きい。459・460は大木10式併行の土器片を利用している。

制片石器 (466-476・479) 466は2個1対の刃部をもつピエス・エスキュー、467・469は小型の削器である。468は先端の扶入部に微細剝離痕を伴う。470は粗い刃部加工が施された尖頭石器、471は先端部が折断された折断石器、474は直刃の削器である。472は尖頭部先端を刃部にした非折り面型の彫器である。475は両面加工の寛状石器で、2分した破損品が接合した。473・476は刃部形態から削器状石器に含める。479は自然面を残した先端部から表面左側縁に磨ることによって生じた磨減痕が著しい。

磨製石斧 (480) はぼ刃部だけの残存である。刃部形態は凸刃である。

礫石器 (477・478・482) 477は断面形が三角形を示す細長い礫の先端部に敲打痕、1側縁に凹みを伴う複合石器、478はやや扁平であるが、卵形をした磨石である。482は断面形が長方形をした長大な礫を素材にした台石とみられるが、使用痕は確認できない。

石製品 (481) 481は床面から出土した。軟質な細粒凝灰岩を素材にし、色調は主に灰白色である。長さ10.6cm・幅5.5cm・最大厚2cmのかまぼこ形の形態をした扁平な礫である。両端の断面を除いてはいいに研磨されている。両端の断面が研磨されていないのが折損によるものなのか、あるいは本来の形状なのかは明確でない。曲面の中央部には幅7mm・深さ1mmの溝が縦走し、その片側に浮き彫り様の手法と刻線手法による絵画が描かれる。上方から順を追って記述すると、まず溝に接して菱形が浮き彫りにされ、内部には刻線文様を伴う。その下方には4本の細い線が浮き彫りにされる。上方の3本はほぼ半ばから下方に屈曲するのに対し、1本はほぼ直線である。線の太さは2mm±である。最上方の1本は菱形をした区画の部分と浮き彫りの細い線でつながれている。最下方を占める1本に接するように、刻線による3本の線が放射状に配置される。いずれも直線的である。裏面は平坦で、研磨以外の加工痕はみられない。

この住居址は拡張住居址であり、上述の遺物はすべて新期の住居址に属するものである。新期の住居址は直立する2個の埋設土器を伴う浅皿状の形態の炉をもつが、2個とも行方不明である。445をはじめとする出土土器や炉の形態からは大木10式併行期に所属することが考えられる。

DⅤ—8 住居址 (第88図483—492、図版30・32・57・62・)

土器 (483—489) 489は炉埋設土器である。体部上半の一部から口縁部を欠くために推定であるが、S字形磨消帯がくずれた文様が横方向に4回繰り返され、その文様の接触部には刺突文を伴った鱗状隆帯、また各単位の末端部には鱗状隆帯が貼付される。地文は単節斜縄文である。483は燃糸文を地文にしている。S字形磨消帯が横方向に4回繰り返され、一部は文様単位が接する。485は口縁部に刺突文充填の円形区画帯をもつ。487は頸部に環状突起をもつ。486・488は沈線区画の磨消帯を体部文様にする。483—489は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (490・491) 周縁に対する加工は、490が打ち欠き、491が研磨である。490は磨消帯の部分を利用している。

制片石器 (492) 周縁に刃部加工されるが、刃部形態から削器状石器に含める。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に属する。住居址の平面形は長方形で、本遺跡のなかでの他の大木10式併行期のものとは形状を異にする。

DⅤ—9 住居址 (第90図522—524、図版42)

土器 (522・523) 523は単節斜縄文を地文にした大型の粗製深鉢形土器である。体部は底部から急傾斜の外傾を示して立ち上がり、体部半ばからやや傾斜が緩くなって口縁部に達する。522は口縁部の破片で、外面が沈線、内面が隆起線の文様をもつ。大木10式に併行する。

制片石器 (524) 裏面に刃部加工された小型の削器である。

この住居址からの出土遺物は少ない。また、炉はわずかに浅くくぼんだだけのもので、埋設

土器は伴わない。所属時期は不明であるが、重複する大木10式併行期のDⅢ-10住居址には切られている。

DⅢ-10住居址 (第88図—第90図493—521、図版25・50・62・67・70—72・75・84・85)

土器 (493—501・503—506) 497は口縁部を欠いただけのが埋設土器である。S字状磨消帯が横方向に5回繰り返され、一部が接触する。地文は単節斜縄文である。499は横位のLRL、498は単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。495・501は刺突文を伴った隆起線文口縁部である。494・496は口縁部内面に鱗状隆帯を伴う。503は鱗状隆帯、505・506は刺突文を体部文様に伴う。504は櫛歯状文が地文である。493—497・500・501・503—506は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (502・507) 周縁に対する加工は、502が部分研磨、507が全周研磨である。いずれも磨消帯部分の土器片を利用している。

切片石器 (508—514・517—519) 508・509は1辺が折断された折断石器、510は小型の尖頭石器である。511—514は削器で、512は凸形、513は尖頭形、514は横形の刃部である。517は1側縁に急傾斜の刃部加工がおこなわれ、掻器の一種であろう。518は拇指状の掻器、519は小型切片の1側縁に1個の刃部が形成された抉入石器である。

磨製石斧 (515・516) いずれも小型磨製石斧である。515は刃部が小さく破損しているだけのほぼ完形品で、長さは4.5cmである。516は基部側を欠いている。

石製品 (520・521) 520は表面がていねいに研磨された円柱状の礫で、一端を欠いている。小型の石棒であろう。521は長さ7.2cm・最大幅1.7cm・最大厚1.1cmである。全面がていねいに研磨され、一端には両面から穿孔された貫通孔がある。他端では両面からの穿孔が途中で中止された痕跡がある。装飾品の一種であろう。

この住居址は、が埋設土器やが形態からみて、大木10式併行期に属する。

DⅢ-11住居址 (第90・91図525—528図、図版79)

土器 (525—527) 525はが埋設土器である。体部下半から底部にかけての残存のために確実ではないが、やや小型の粗製土器であろう。単節斜縄文を地文にする。526は頸部にめぐる沈線に接して刺突様の文様が連続する。これは棒状工具を引きずることによって刺突と同様の効果を生んでいる。527は波状口縁で、2列の刺突文を伴う。526と527は大木10式に併行、525も器形や作りからみて同時期のものでであろう。

礫石器 (528) 長楕円形の形をしている。破損品が接合した。片面には剥落が著しいが、他の部分は全体に滑らかである。擦痕や敲打痕などの使用痕は確実ではないが、形態からみて台石に含まれるものでであろう。

この住居址の出土遺物は少ない。がの形態と埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する

ものであろう。

DⅡ-12住居址

この住居址は第Ⅱ層中に石囲い炉だけが検出されただけで、壁や柱穴は不明である。固有の遺物は認められなかった。本遺跡の住居址群のなかでは層位的に新しいものであるが、所属時期は不明である。

DⅣ-1住居址 (第91図・第92図529-546、図版33・36・40・46・67・68・70・71)

土器 (529-536・540・541) 532は炉埋設土器である。体部上半から口縁部にかけて残存した粗製深鉢形土器で、LRを地文にする。529は4個の中空突起をもち、体部には沈線区画の磨消帯による文様が展開され、一部では刺突文が沈線に沿い、あるいは重ねられて用いられる。531は沈線区画の磨消帯による文様が横方向に5回繰り返され、文様単位の接触部には鱗状隆帯を伴う。単節斜縄文を地文にする。534は捺糸文を地文にした粗製深鉢形土器で、頸部には1条の沈線がめぐって狭い口縁部無文帯が形成される。530は体部下半から底部にかけての残存である。533は口縁部内面に鱗状隆帯を伴う。535は波状口縁で、口縁部無文帯は複合口縁の様に肥厚し、刺突文を伴う。540は口縁部が外反している。529・531・533-535・541は大木10式に併行し、532も器形や作りからみて同時期のものであろう。

土製品 (539) 環状形耳飾りの破片で、無文である。

円盤状土製品 (537・538) いずれも約1/2を欠いている。周縁への加工は、537が磨研、538が打ち欠きである。538では沈線区画の磨消帯を文様にした土器片が利用される。

制片石器 (542-546) 542は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。刃部の奥行きは浅い。543・546は横形削器、544は直刃削器、545は複刃削器である。

この住居址は、炉の形態や炉埋設土器・出土土器からみて、大木10式併行期に所属する。

EⅡ-1住居址 (第92図547-549)

土器 (547) 沈線と磨消帯・刺突文による文様をもつ体部破片で、大木10式に併行する。

制片石器 (548・549) 548は1辺が折断され、削器状の刃部と抉りの部分に形成された刃部を相対する辺にもつ。548は削器状石器である。

この住居址からの出土遺物は少ない。炉は斜位埋設土器を伴う摺鉢状の形態のものである。しかし、土器が行方不明になっている。炉形態の類似性ということからは、大木10式併行期に属するであろう。

EⅡ-2住居址 (第92図-第94図550-582、図版28・33・36・54・58・60・70-72・75・76・84)

土器 (550-560・563-565) 558は炉埋設土器である。沈線区画の磨消帯が文様を構成し、文様単位は2回の繰り返しである。地文はLRLである。550は炉埋設土器の掘り方内から出土

した。頸部に沈線がめぐりだけの粗製土器である。551・552・555は沈線文口縁部で、552は刺突文、555は内面に鱗状隆帯をもつ。553・556は隆起線文口縁部である。553は内面にも隆起線がめぐり、556は口縁部に竹管文が多用される。557では低い鱗状隆帯、563・565では刺突文を体部文様帯に伴う。いずれも大木10式に併行する。

円盤状土製品 (561・562) いずれも周縁を研磨するが、いびつな円形である。

切片石器 (566—579・581) 566は2辺を折断し、折断面と1側縁が作る角に刃部を形成した石錐である。567は鋸歯縁状の刃部をもつ。568—576は削器である。569・570は急傾斜の刃部加工が施される。576は1辺が折断され、長方形気味に形態が整えられる。577・579は削器状石器である。578は片面加工の拇指状の搔器である。581は一端を欠いた匏状石器で、両面加工である。

磨製石斧 (582) 刃部を欠いている。タール状の付着物が両面および側面に断続的に付着する。また刃部の破損面の一部にも付着が認められる。

石製品 (580) 全体がていねいに研磨された有孔石製品である。ほぼ円形である。中央部には両側から穿孔された貫通孔があり、側面には狭く浅い溝がめぐり。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

Ⅱ-3 住居址 (第95図583—588、図版48)

土器 (583—587) 583は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にする粗製深鉢形土器で、底部から外傾して立ち上がる体部は上半上部で直立気味になる。585は体部に鱗状隆帯をもつ。584—586は大木10式に併行する。

石製品 (588) 珪化木を素材にし、全体に研磨が加えられる。一面が曲面、他の一面が平滑である扁平な石製品であるが、性格は不明である。

この住居址の炉は直立埋設土器だけで構成される。埋設土器が粗製であるために、それから確かな所屬時期を明らかにすることはできないが、炉形態や他の出土土器からみて、大木10式併行期に属することが考えられる。

Ⅱ-4 住居址 (第95図—第97図589—617、図版41・42・63・67・68・70—72・75・76)

土器 (589—596・600) 589は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器で、口縁部を欠いている。590は口縁部内面に鱗状隆帯を伴う。591は刺突文充填の円形区画帯、595は鱗状突起を体部文様帯に伴う。600は山形突起をもつ粗製土器で、口縁部が平扱である。590—595は大木10式に併行する。589も器形や作りからみて、同時期のものであろう。

円盤状土製品 (597・601) いずれも周縁が研磨され、596は沈線と磨消帯をもつ。

切片石器 (598・599・602—614) 598は側縁の自然の抉入部が刃部になるとともに尖頭部先端は石錐様の刃部になる。599は基部と先端部が折断され、いびつな長方形を示す。602—606

・609は削器である。611も小型の削器であろう。610・612は非折り面型尖頭形の彫器、614は折り面と剝離面の交差部が刃部になる彫器である。608は打面を除いた周縁に微細剝離痕が認められ、表面の一部にタール状の付着物が残る。613は表面の一部に自然面を残し、周縁には加撃による粗い2次加工が施される。616は石核の敲打器への転用であろう。周縁に敲打による細かな剝落と磨滅痕を伴う。

磨製石斧 (615) 刃部側半分近くを失っている。

円盤状石製品 (617) 周辺への加工は打ち欠きである。形状はいびつな多角形である。

この住居址は、炉形態や埋設土器からみて、大木10式併行期に所属するものであろう。

EⅡ-5住居址 (第97図618-621、図版56・61)

土器 (619・621) 619は中空の突起をもち、頸部から体部文様帯は隆起線によって区画される。本遺跡では、このような類例は非常に少ない。大木10式に併行する。621は単節斜縄文の上に3条の平行沈線によって文様が描かれた後期初頭のものである。

土製品 (618) 約1/2が残る滑車形の耳飾りで、両面に刺突文で同心円状あるいは渦巻文状に施文される。

円盤状土製品 (620) 周縁が研磨加工され、ややいびつな円形の形態である。

この住居址は約1/2が精査できただけであるうえに保存状態が良くないため、出土遺物が少なかった。炉は浅皿状の形態を示し、斜位埋設土器を伴う。埋設土器はほぼ底部だけの利用である。炉形態からは大木10式併行期に所属することが考えられる。また、重複するEⅡ-4住居址には切られていた可能性がある。

EⅡ-6住居址 (第97図622-632、図版56・58・65・73)

土器 (622-628) 622は炉埋設土器である。口縁部には1条の沈線がめぐり、幅の狭い口縁部無文帯が形成される。地文は単節斜縄文である。623・624は刺突文を伴う沈線文口縁部、626は刺突文を伴った隆起線文口縁部である。627は口縁部内面に鱗状隆帯をもつ。628は中空の突起をもち、刺突文を伴った隆起線が口縁部と体部を区画する。622-628は大木10式に併行する。

削片石器 (629-632) 629は刃部形態から削器状の石器に含める。630は大型削片を素材に、周縁に粗い刃部加工がおこなわれる。631は刃部の位置と形態から石鎌の1種であろう。632は非折り面型尖頭形の彫器である。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に属する。

EⅡ-7住居址 (第98図・99図633-650、図版27・30・32・45・47・53・56・72・85・)

土器 (633-647) この住居址は新旧2基の炉をもつ。古期の炉に伴う埋設土器が638、新期の炉に伴う埋設土器が637である。いずれも体部下半から底部にかけての残存で、638が摺糸文、637が単節斜縄文を地文にする。633は4個の小突起をもち、口縁部内面には鱗状突起が貼

付される。634は推定を含むが、沈線区画のS字状磨消帯が横方向に4回繰り返され、接触部には刺突文を伴う鱗状隆帯が貼付される。地文は単節斜縄文である。935は4個の小突起をもつと推定され、頸部内面にめぐる隆起線が突起部分ではね上がる。外面は沈線区画である。636は小型の無文土器であろう。629-641・643は沈線文口縁部で、641・643は内面に鱗状隆帯を伴う。642は頸部にめぐる隆起線に重なるように刺突が加えられる。645・646は中空の突起をもち、645は隆起線、646は沈線が頸部にめぐる。文様帯から時期の分かるものすべて大木10式に併行し、637・638も器形や作りからみて同時期のものであろう。

製片石器 (649) 尖頭形の刃部をもつ小型の削器である。

礫石器 (648) 溶岩が素材である。扁平で、平面形が楕円形の小型の研磨器である。表面は中央部がくぼみ、そこから両端に向い幅広い浅い溝状の擦痕数条が走り、両端に近いほど幅広く明瞭になる。裏面には素材がもつ自然の凹凸が著しい。

石製品 (650) 大型の石棒の破損品である。一面が磨られて平坦面である以外は曲面に囲まれる。

この住居址は新旧2基の炉を伴う。旧炉は床面直下に検出された。古期の炉の埋設土器以外の遺物はすべて新期の炉を伴った時期の住居址に固有のものである。新期の炉は石囲いに直立埋設土器を伴う。炉埋設土器をはじめとする出土土器から大木10式併行期に属することが推定される。古期の炉は浅皿状に直立埋設土器を伴う形態をもつもので、大木10式併行期に属するものであろう。

E II - 8 住居址 (第99図-第101図651-684、図版43-45・50・51・53・60・61・64・66・67)

土器 (651-671) 656は炉埋設土器、652は床直上からの出土土器で、656は単節斜縄文を地文にする粗製の深鉢形土器である。653・654・658は沈線区画の円形文を文様にする。657は、隆沈線の渦巻文が山形突起にある円孔を取り巻く。659は波状口縁で、地文の上に沈線区画の円形文が描かれるが、磨消はおこなわれない。660・661・668は沈線文口縁部で、668は波状部内面に鱗状隆帯を伴う。662・664-666は隆起線文口縁部で、いずれも竹筭文や刺突文を伴う。666の地文は綾杉文である。665は円孔をもつ。653・654・657-659は大木9式、655・660-699・671は大木10式に併行する。652・656は器形や作りからみて、大木10式に併行する。

土製品 (672) 環状形耳飾りである。一部を破損するために推定を含むが、両面に2個1対の鱗状隆帯を伴い、2列の竹筭文がめぐる。文様の特徴から、大木10式併行期のものである。

製片石器 (673-684) 673は大型の縦形石匙、674は2個1対の刃部をもつビエス・エスキュー、675は基部が折断された長方形気味の折断石器である。676・677・679・680は削器である。676は複数、679は尖頭形の刃部をもつ。678・681-684は削器状石器である。678は内外面にタール状の付着物が著しく残る。684は挾入部も刃部になる。

この住居址では、埋土からの出土遺物に大木9式土器片が含まれている。炉形態や炉埋設土器からは、大木10式併行期に所属する。

EⅡ-9住居址(第101図・第102図685-695)

土器(685-687・688) 685は炉埋設土器である。無節縄文を地文にした粗製の深鉢形土器である。686は刺突文を伴った隆起線を口縁部にもち、687は沈線区画の円形文をもつ。688は磨消帯と刺突文を伴う。687は大木9式、686・688は大木10式に併行する。685も器形や炉埋設土器であることから考え、大木10式に併行する。

剥片石器(689-691) 689は尖頭部を主にした部分の両面に刃部加工された尖頭石器である。690は鋭角である角に刃部をもつ石錐の1種である。691は尖頭部先端の使用痕からみて、彫器的な機能をもったものであろう。

礫石器(692-695) いずれも床面から出土した。692は凹石である。表面は平坦で、やや深い2個の凹みがあり、裏面は凹凸が著しい。693は約1/2を欠いた石皿である。2個の脚部をもち、皿面では周縁がわずかに高く作り出されている。694・695は台石である。694は原位置で割れていた。断面は三角形に近い。全体に煤が付着し、一面では剥落が著しいことから加熱を受けたことが考えられる。695は不整な五角形の断面をもつ。幅広の平坦面には長軸方向での擦痕が認められる。

この住居址は、黄褐色細礫が敷設された浅皿状の炉に斜位埋設土器を伴うもので、大木10式に併行する時期に所属する。重複するEⅡ-8住居址・EⅡ-10住居址には切られ、EⅡ-14住居址を切っている。

EⅡ-10住居址(第103図696-701、図版66・74・79)

土器(696-700) 696-698は沈線文口縁部である。698は内面に低い緒状隆帯を伴う。699は波状部に円孔を有し、円孔を囲むように半截竹管文が連続する。696-700は大木10式に併行する。

剥片石器(701) 長方形気味の剥片の長辺の部分に2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。刃部は階段状剥離を示し、奥行きも深い。

この住居址は大木10式併行期に属するとみられるEⅡ-9住居址の上に載り、その埋土を床面とするが、形状も含めて詳細は不明である。炉は浅いくぼみに現地性焼土を伴う。確実な所属時期は不明であるが、出土土器はいずれも大木10式に併行する時期のものだけである。

EⅡ-11住居址(第103図・第104図702-721、図版47・54・59・61・66・84)

土器(702-716) 706は炉埋設土器である。体部上半部を欠いた粗製深鉢形土器で、単節斜縄文を地文にする。702は口縁部が内側に屈曲する浅鉢形土器で、口縁部文様は刺突文を伴った隆起線で構成される。703は沈線区画の磨消帯に刺突文を伴っている。704・707は沈線文口縁

部で、707は沈線に直交する刺突文を伴う。705・708-710・712・714は隆起線文口縁部で、いずれも刺突文を伴う。713は波状口縁部に刺突文が重ねられた隆起線が斜行し、内面にも隆起線を伴う。716は口縁部に幅の狭い斜位の燃糸文帯が形成される。711は体部に鱗状隆帯と刺突文をもつ。702-705・707-715は大木10式に併行する。

土製品 (720・721) 720は環状形耳飾りである。片面には2個1対の鱗状隆帯が貼付され、両面に2重の刺突文がめぐる。721は滑車形耳飾りである。無文で、両面の中央部には1個の竹管文を伴う。

剥片石器 (717・718) 717は1側縁に削器状刃部をもつ。尖頭部先端にも細かな刃部加工が施される。718は1側縁に鋸歯縁状の刃部をもつ。

石製品 (719) 小型の石棒の完形品である。粘板岩を素材にする。全体が良く研磨され、擦痕が著しい。一端に頭部が形成されるが、体部との境は緩やかな移行である。

この住居址は、炉形態や出土土器からみて、大木10式併行期に属するものであろう。重複するEⅡ-12住居址やEⅡ-13住居址を切っている。

EⅡ-12住居址 (第104・105図722-734、図版31)

土器 (722-732) 732は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にし、体部は沈線区画の磨消帯によって文様が構成される。文様は5回の繰り返しで、接触部分には刺突が加えられる。722・723・727は沈線文口縁部である。726は波状口縁で、体部側に刺突文を伴う隆起線が波状部から頸部を区画する。724・725は沈線区画の楕円形文あるいは円形文をもつ大木9式、722・723・726-732は大木10式に併行する。

剥片石器 (733・734) 733は剥片の角の部分に2次加工された石錐である。734は尖頭部先端の剥離からみて、彫器的な使用が考えられる。

この住居址は、炉埋設土器や炉形態からみて、大木10式併行期に属する。

EⅡ-13住居址 (第105図735-737、図片43・52)

土器 (735-737) 735は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にした体部下半の一部から底部にかけての残存である。736は沈線文口縁部である。737は小型土器の破片で、細かな2列の連続刺突文が頸部にめぐる。736・737は大木10式に併行する。

この住居址はEⅡ-11住居址・EⅡ-12住居址・EⅡ-14住居址に切られ、炉を中心にした一部が痕跡的に確認できたにすぎない。重複する住居址はいずれも大木10式併行期に属している。炉の形態からは、この住居址の所属時期も大木10式併行期にあることが考えられる。

EⅡ-14住居址 (第105図-第108図738-768、図版26・40・49・52・55・60・65・76・78・81)

土器 (738-754・763-765) 763は炉埋設土器である。口縁部を含めた体部上半の一部を欠くために、文様の詳細は不明であるが、沈線区画の磨消帯が横方向へ3単位の繰り返しをみ

せる(763a)。地文は単節斜縄文である。765は埋甕である。無節縄文を地文にしたややいびつな粗製深鉢形土器の完形品である。764は小型の浅鉢形土器で、口縁部に2個1対の緒状突起をもつ。738は隆沈線による渦巻文を口縁部にもつ。739・741-745・749は沈線文口縁部である。741は綾杉文を地文にする。742では、連続刺突文を伴った隆起線が内面の頸部にめぐり、

744は円孔の下端に緒状隆帯があり、内面の頸部には隆起線がめぐり、746-748は隆起線文口縁部である。764は小円孔、748は中空の突起をもつ。747は刺突文を伴う。750・752・754は同一個体の破片で、口縁部内面に隆起線を伴う粗製土器である。738は大木9式、739-750・752・754・763・764は大木10式に併行する。765は埋甕であり、763と共伴関係にあるものであろう。

制片石器(755-759) 755・756は石錐で、755は刃部先端を一部欠く。759は削器の破損品である。757は削器状の刃部をもつ。758は小型制片の周縁に微細剥離痕が連続する。

磨製石斧(760・761) 760は基部と刃部を含むものの、破損が著しい。側縁の稜線は不明確で、断面は楕円形を示す。基部側半分にタール状の付着物がみられる。761は刃部側約1/2を欠く。片面のほぼ全体にタール状の付着物が著しい。

礫石器(762・766-768) 762は凹石である。両面は平滑で、片面に浅い大きな凹みをもつ。766は未加工の石皿である。ほぼ完形品に近い。皿面は使用面がくぼみ、縁がやや高く残る。裏面は凸形を示す。767も片面が大きくくぼみ、石皿として機能したものであろう。768は円棒状の形態をもつ素材の一端に片面から剥離を加えたとともに、反対面に残る素材の形状をうまく生かして鋭い刃部を作る。刃部には小剥離痕が著しい。

この住居址は、伊埋設土器をはじめとする出土土器や炉形態、重複関係からみて、大木10式併行期に所属する。5棟の住居址と重複するが、EⅡ-13住居址を切る以外、EⅡ-9-11住居址・EⅡ-15住居址には切られている。

EⅡ-15住居址(第108図・第109図769-798・801、図版34・52・58・61・68・69・85)

土器(769-784・788・791-794) 773は埋甕である。頸部には連続刺突文を伴う隆起線がめぐり、体部は沈線区画の磨消帯による文様に刺突文・緒状隆帯を伴う。刺突文が多用されるのが特徴で、緒状隆帯にも刺突文を伴う。文様の繰り返しは不明で、地文は単節斜縄文である。769は波状部に刺突文充填の半円形区画帯をもつ。772・776は沈線文口縁部、770・771・774は刺突文を伴う隆起線口縁部である。778は頸部に環状突起をもつ。792は無節縄文を地文に、平行沈線間を磨消した台部あるいは器台の部分である。777は4条の平行沈線が頸部にめぐり、縄文帯と磨消帯が交互する。後期末葉に属する777、不明の792以外、文様によって識別できるものはすべて大木10式に併行する。

土製品(801) 土偶頭部である。隆起線によってハート形の顔面が描かれ、眼・鼻孔・口が細かな刺突によって表現される。

剃片石器 (795-798) 795・797・798は削器である。796は先端部を折断して形態を整え、1側縁に両面から2次加工を施す。

円盤状石製品 (785-787・789・790) この住居址からは7点が出土した。周縁への加工は、785が部分的研磨である以外はいずれも全周を研磨する。形態はほぼ円形である。785・786・790は表面に擦痕を伴う。

この住居址の炉は、構成礫の抜き取り痕による確認であるが、石囲いに埋設土器を伴う形態のものである。埋設土器はほぼ底部だけの利用で、復元も不能であった。所属時期は、埋甕と同時期であるとすれば、大木10式併行期である。EⅡ-14・17・22の各住居址と重複し、そのいずれよりも新しいものである。

EⅡ-16住居址 (第109・110図799・800・802・803)

土器 (799・800・802・803) 802は単節斜縄文、803は摺糸文を地文にしたほぼ底部だけの残存である。799は鱗状隆帯、800は刺突文充填の円形区画帯を体部文様にもつ。799・800は大木10式に併行する。

この住居址は、炉と床面の一部が痕跡として残っていたにすぎないために固有の埋土を欠き、出土遺物はほとんどない。炉は、斜位埋設土器を伴う浅皿状の形態をもち、黄褐色細礫も一部に用いられる。埋設土器および埋甕も行方不明であるが、炉形態やEⅡ-17住居址に切られていることからみて、大木10式併行期に属する住居址である。

EⅡ-17住居址 (第110図・第111図804-819、図版41・64・66・71・82)

土器 (804-808) 804は新期の炉に伴う埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製の深鉢形土器である。805・807は沈線文口縁部で、805は内面に隆起線を伴う。806は沈線区画の楕円形文・円形文が文様を構成する。808は摺糸文を地文にして沈線区画の磨消帯をもつ。806は大木9式、805・807・808は大木10式に併行する。804は器形や作りなどからみて、大木10式に併行するものである。

剃片石器 (809-815) 809は縦形石匙である。つまみ部を除いては片面加工である。811は2辺、815は3辺に刃部をもつ削器である。810・812-814は刃部形態からみて削器状石器であるが、812の刃部は複数の凹凸がある。

礫石器 (816・819) 816は、断面が長方形の棒状の礫の一端に著しい敲打痕が認められる。819は、断面形がU字状の幅広い溝が片面に形成された研磨器である。

円盤状石製品 (817・818) いずれも周縁が研磨されてほぼ円形になる。818は表面に擦痕が著しい。

この住居址は拡張住居址である。拡張前の住居址は炉と柱穴によって確認できる。旧炉は直立埋設土器を伴う浅皿状の形態をもち、埋設土器はほぼ底部だけの利用である。大木10式併行

期に属する。出土遺物はすべて拡張後の住居址に固有のものである。新期の炉の形態や埋設土器からみて、拡張後の住居址も大木10式併行期に属する。重複するEⅡ-15・29住居址には切われ、EⅡ-16住居址を切っている。

EⅡ-18住居址 (第111図-第113図820-840、図版53・70・77・81・85)

土器 (820-825・828・829) 820は波状口縁の部分に隆沈線による渦巻文をもつ。824と825は同一個体の破片で、波状部に刺突充填の半円形区画帯がある。828は波状部から下がる斜位の平行沈線に接して竹管文充填の半円形区画帯がある。829は緒状隆帯と刺突文を体部文様帯にもつ。820は大木9式、他は大木10式に併行する。

制片石器 (826・827・830・831・833・835・836・838) 826・827・830・831・833は削器である。826は打面を除いた3辺が刃部になる。831は刃部の奥行きが浅い。835は削器状の刃部をもつ。836は両側縁に削器状刃部をもつ。838は両側縁が2次加工されるが、裏面左側縁の角度はほぼ直角である。

礫石器 (832・834) 832は脚部1個を含めた一部を欠くが、接合できた石皿である。皿部は縁が高く作り出され、裏面には長方形気味の脚部4個がある。834は磨石である。一端から側面にかけたの斜面が使用面である。

石製品 (837) 一端を欠くが、残存部分では円柱状の形態を示す石棒である。全体がていねいに研磨され、擦痕もみられる。

この住居址は保存状態が悪い。炉は石厩いに埋設土器を伴う形態のものである。土器はほぼ底部近くだけの利用で、しかもかなりの焼成を受けていて復元不能である。住居址の確実な所属時期は不明であるが、クロボクが主体を占める埋土からは層的に新しい時期のものであることが分かる。

EⅡ-19住居址 (第113図839-845、図版54)

土器 (839-842) 839は山形突起の口縁部で、両側に連続刺突文を伴った隆起線が文様を構成している。841は体部に刺突文を伴う。839・841・842は大木10式に併行する。

制片石器 (843-845) 843は基部が折断され、折断面の一部に直角に近い2次加工が施される。相対する2辺が刃部になる。844は基部が折断され、周縁に2次加工が施される。845は突出した刃部に特徴をもつ。

この住居址は他の遺構との重複が著しく、保存状態が悪いために出土遺物は少ない。炉は粗製深鉢形土器の体部を直立埋設土器に伴った摺鉢状の形態のものである。しかし、土器は行方不明である。炉の形態や重複する住居址との新旧関係からみて、大木10式併行期に属する住居址である。EⅡ-17・18・20・29の各住居址と重複し、新旧関係が不明なEⅡ-17住居址を除いては、いずれも切られている。

EⅡ-20住居址 (第113図-第117図846-916、図版38・52・54・60-62・64-67・70-72・

土器 (846—880) 846は埋設土器である。口縁部を欠くが、体部にはJ字状磨消帯が4回繰り返され、その末端には緒状隆帯を伴う。847は内湾する液状突起を4個もつ粗製深鉢形土器で、ともに単節斜縄文を地文にする。852はやや小型の深鉢形土器で、沈線区画の磨消帯による文様が展開する。849・850は沈線文口縁部である。848・854は口唇部を基点にして文様が展開される。861・868をはじめとした沈線区画の磨消帯が体部文様を構成する破片が多数あり、一部は刺突文や緒状隆帯を伴う。857—859・862は刺突文を伴った隆起線文口縁部で、857は内面に緒状隆帯を伴う。853は対になる小孔をもつ円形の突起が頸部にある。860は中空突起をもつ。外面には沈線、内面には隆起線がめぐる。877は粗製深鉢形土器で、沈線で区画された狭い口縁部には横位の捺糸文が施される。大木9式とみられる863と後期初頭の851を除いては、文様によって時期が識別できる土器はいずれも大木10式に併行する。

土製品 (882) 小型の滑車形耳飾りで、無文である。両面がわずかにくぼむ。

円盤状土製品 (881・883—885) 周縁の加工はいずれも打ち欠きである。881は沈線をもつ頸部、883は刺突が加えられた磨消帯の土器破片を利用している。

切片石器 (886—910) 886・887・889は基部形態が凹基の石鏃である。888・890・891は刃部の位置と形態からみて石鏃に含まれる。894—896・899—901・905は削器である。902は表面の一部に自然面を残した大型切片の1側縁に、粗雑な刃部が作られている。906・908・909は削器状石器である。906は基部も2次加工される。903・904は尖頭形の刃部をもつ。841は旧石器時代の彫器を素材にし、側縁の一部に、奥行きは深いが角度の非常に小さな2次加工を施していることが風化の程度の違いから識別できる。

礫石器 (911—913・915) 911は敲石と凹石との複合石器である。敲打痕は1側縁に著しく、凹みは両面にある。912は断面が長方形の細長い垂角礫が素材になり、縁の部分2ヵ所に敲打痕がみられる。913は凹石である。断面が三角形である素材の面は平滑で、1面に凹みがある。915は石皿の破片である。縁に比べ、中央部寄りの部分が極端に薄くなっている。

石製品 (914・916) 914は断面が円形で、表面は研磨されて滑らかである。石棒の破損品であろう。916は灰白色をした流紋岩質細粒凝灰岩が素材である。コップの把手に似た形をしている。両端がねじれるように作りだされ、末端は肥厚している。外湾する側縁に寄った中央部に、両面穿孔による貫通孔1個がある。

この住居址は、炉形態や埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。重複するEⅡ—19住居址を切っている。

EⅡ—21住居址 (第118図917—930、図版57・58・63・64・71)

土器 (917—923) 917は埋設土器である。体部下半から底部にかけての部分で、単節斜

縄文を地文にする。小型の土器である 918は、口縁部内面に、一部重なるように竹筭文が施された隆起線がある。918は環状把手をもつ。921—923は沈線区画の磨消帯をもつ。918—923は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (924・927・928) 周縁への加工は、924・927が一部研磨、928は全周研磨である。928は磨消帯をもつ土器破片を利用している。

剥片石器 (925・926・929・930) 925は、両側縁の扶入部とそれに連続する刃部から縦形石匙に識別できる。926・930は横刃削器、929は凹形の刃部をもつ削器状石器である。

この住居址は、炉の形態からみて、大木10式併行期に所属する。

EⅡ—22住居址

この住居址は全体にかなりの削剝を受け、埋土は数cmの厚さしかない最下部が確認できただけである。出土遺物は非常に少量である。炉は黄褐色細礫が敷設された浅皿状の形態をもち、ほぼ底部を利用した直立埋設土器を伴う。炉形態や重複するEⅡ—15住居址に切られていることからみて、大木10式併行期に所属する。

EⅡ—23住居址 欠番である。

EⅡ—24住居址 (第118図—第120図931—951、図版33・51・58・69・71・81)

土器 (931—944) 932は体部を利用した炉埋設土器である。くずれたS状の沈線区画の磨消帯が一部に鱗状隆帯と刺突文を伴って文様を展開する。931は体部中部に波状沈線がめぐり、その上半に文様が展開するが、詳細は不明である。933は埋甕で体部下半から底部にかけての部分を利用する。単節斜縄文を地文にする。934は高台付土器の一部である。940は頸部にめぐる2条の隆起線に環状把手がつく。938は口縁部内面に鱗状隆帯がある。943は鱗状隆帯に刺突文が伴う。935は大木9式、931・932・936—943は大木10式に併行する。

剥片石器 (945—949) 945・947は削器である。946・948・949は横長剥片の先端部に細かな剥離痕がみられる。946の刃部形態は削器ほど規則的ではない。

礫石器 (950・951) 950は両面に凹みを伴う凹石である。951は小型の礫の両端に敲打痕が認められる。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。

EⅡ—25住居址 (第120図952・953)

土器 (952) 952はほぼ底部だけの部分の炉埋設土器である。

剥片石器 (953) 長方形をした素材の3辺が2次加工された削器である。

この住居址は全体に保存状態が悪く、大部分の埋土を欠くために出土遺物はほとんどない。炉も破壊を受けていて、埋設土器は底部だけが残っていた。炉形態からは大木10式併行期に所属することが考えられる。

EⅡ-26住居址 (第120図954-965、図版72)

土器 (954-963) 954・957・958は破損が著しいために複元できなかったは炉埋設土器の同一個体破片である。撫糸文を地文に沈線区画の磨消帯による文様が展開し、957では鱗状隆帯を伴う。956は幅の狭い口縁部無文帯に連続刺突文が施された小型の土器である。954-963はいずれも大木10式に併行する。

削片石器 (964) 片面に刃部加工され、尖頭形の刃部をもった削器である。

磨製石斧 (965) 刃部側が若干残っただけの破片で、刃部形態はやや凸形を示す。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。重複するEⅡ-28・FⅡ-6の各住居址には切られている。

EⅡ-27住居址 (第121図966-971、図版67)

土器 (967・968) いずれも体部小破片で、大木10式に併行する。

削片石器 (969) 小型の尖頭形の石器で、刃部形態からは石錐に含まれるかもしれない。

礫石器 (966・970・971) 966は1個の脚部を含む石皿の破片である。970はやや扁平な円礫の縁寄りの部分に敲打による痕跡がある。971は扁平で細長い礫である。片面は破損が著しい。北壁際の床面からの出土ということで、台石に含めておく。

この住居址は全体に削剝を受け、固有の埋土をほとんど欠く。そのために出土遺物は非常に少量である。炉は斜位埋設土器を伴う浅皿状の形態をもち、わずかに黄褐色細磨が使用されている。形態的には大木10式併行期に属するものである。なお、埋設土器は行方不明である。

EⅡ-28住居址 (第121図-第125図772-1021、図版29・51・53・54・56・57・60・-63・65・66・68-70)

土器 (972-1004・1008) この住居址の炉形態は土器片固いである。976・977はその一部を構成する同一個体の破片である。沈線区画の磨消帯が文様を構成する。978は体部上半に沈線区画の磨消帯による文様が展開される。文様単位は5回の繰り返りで、接触部には刺突が加えられる。972-975などは沈線区画の磨消帯が文様を構成し、一部は刺突文も加えられる。973・974・979・988・990は沈線文口縁部である。988・990は同一個体の破片で、内面には竹管文を伴った隆起線がめぐる。982-987は隆起線文口縁部で、984-987は竹管文や刺突文を伴う。989・993・995は中空の突起をもつ。989・993は刺突文を伴った隆起線、995は体部側に刺突文を伴った沈線が頸部をめぐる。992は有孔の環状突起をもつ。994は頸部の2条の隆起線に環状把手を伴う。998・1001・1002は体部文様に鱗状隆帯をもつ。1008は縦方向の沈線による地文をもつ。文様により時期が分かるものはすべて大木10式に併行する。

土製品 (1009) 石皿を模倣したミニチュアで、1/2を欠いている。皿部の縁はやや高く、裏面には椅円形の脚部がつけられている。

円盤状土製品 (1005—1007・1009・1021) 周縁への加工は、1005・1006が全周研磨、1007は約1/2が研磨される。1021は土器片を素材にしたものとは異なり、当初から円盤状土製品を目的にして成形・焼成したものである。一面の縁には向い合う2個の浅い挟りがある。

剥片石器 (1010—1012・1014—1019) 1010—1012・1016は削器である。1012・1016は破損している。1014は刃部の奥行きが浅く、削器状石器である。1015は単刃、1017は双刃の石錐である。1019は鋸歯縁石器である。断面が三角形の分厚い剥片を素材に、打面を除いた周縁に加撃によって不連続の刃部を形成する。1018は突出部が刃部加工されている。

礫石器 (1020) 1020はやや扁平であるが、球形の磨石である。(1013は割り付けの誤まりで、HⅡ—10住居址から出土したものである)

この住居址は、土器片固い炉の構築土器片からみて、大木10式併行期に所属する。EⅡ—26住居址と重複してそれを切るが、EⅡ—27住居址との新旧関係は不明である。

EⅡ—29住居址 (第125図1022—1024)

土器 (1022・1023) いずれも小破片である。大木10式に併行する。

円盤状石製品 (1024) 周縁の大部分が研磨され、ほぼ円形になる。

この住居址は、重複があることなどのために全体に保存状態が悪い。また、固有の埋土の大部分を欠き、出土遺物は非常に少ない。炉の形態は直立と斜位の2個の埋設土器を伴うもので、大木10式併行期に所属する。なお、埋設土器は行方不明である。

EⅡ—30住居址 (第125図・第126図1025—1040、図版60・61・75・76・84・)

土器 (1025—1031) 1030は斜位、1031は直立の埋設土器であるが、いずれも体部下半から底部にかけての部分である。1028は頸部に沈線がめぐり、1029は体部に鱗状隆帯を伴う。1025—1029は大木10式に併行する。

土製品 (1040) 乾し栗を模倣した土製品である。わずかに扁平な球形の形態をもつ。直径18mm×15mm・厚さ15mm・重量3.9gである。表面には、髷は浅い沈線、亀裂は深い沈線と、沈線を使い分けて忠実に表現している。(図版90には遺構から出土した炭化栗を掲載した)

円盤状土製品 (1032) 周縁への加工は研磨である。

剥片石器 (1034—1036) いずれも小型の剥片に2次加工している。1034・1036では基部を折断している。

磨製石斧 (1037・1038) 1037は基部側の一部を欠いた小型のもの。1038は刃部側を欠く。

石製品 (1039) 石質凝灰岩を素材にした頭部を含む小型の石棒の破片である。頭部と体部の境には1本の浅い沈線が引かれる。男性性器をかなり具体的に模倣した製品である。

円盤状石製品 (1033) 周縁はていねいに研磨され、ほぼ円形になる。

この住居址は全体にかなりの破壊を受け、出土遺物は少ない。所属時期は、炉形態からみて、

大木10式併行期である。

EⅢ-1 住居址 (第126図1041-1050、図版46・47・59・62・64・85)

土器 (1041-1045) 1041・1042は体部上半を欠いている。1041が複節斜縄文、1042が単節斜縄文を地文にする。1045は複節斜縄文を地文にし、口縁部に幅の狭い無文帯をもつ。1043・1044は大木10式に併行する。1041・1042も器形や作りからみて、同時期のものであろう。

円盤状土製品 (1049) 土器の口縁部破片を利用し、刺突文を伴った隆起線がみられる。周縁は約半分が研磨され、他は打ち欠かれている。

剃片石器 (1046-1048) 1046は、2次加工によって作り出された抉入部の両面にタール状の付着物が残ることから、縦形石匙とすることができる。刃部は素材がもつ鋭い縁辺を利用する。1047は基部が折断され、幅の狭い1辺に削器状の刃部が形成される。1048は削器状石器である。

石製品 (1050) 軟質な流紋岩質細粒凝灰岩を研磨・成形した岩球である。

この住居址の炉は摺鉢形の形態をもち、直立埋設土器を伴うものである。他の類別からみて、大木10式併行期のものである。伴う埋設土器は行方不明である。炉断面の写真をみると、深鉢形土器の体部下半から底部にかけての部分を利用している。

EⅢ-2 住居址 (第126図-第128図1051-1076、図版53・65・67・69・70・73・82・84)

土器 (1051-1060) 1055はやや小型の土器である。破損しているために詳細は不明であるが、沈線区画の磨消帯による文様が展開し、沈線の一部は体部下端にも及ぶ。1051-1053は沈線文口縁部である。1052は内面に鱗状隆帯を伴い、1053は頸部に刺突文を伴う。1054は波状口縁部の内外面に鱗状隆帯を伴う。1060の円形区画帯では単節縄文の上に刺突文が加えられている。1051-1060は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1064) 周縁を研磨しているが、いびつな多角形である。

剃片石器 (1061-1074) 1061・1062は石錐である。1062の刃部は傾斜している。1063は基部を折断して菱形に似た形状にし、先鋭な一端に2次加工を施す。1065は先端部が折断され、側縁には微細剝離痕を伴う。1068も1辺が折断されている。1067は深度の浅い抉入部が刃部である。1070・1071・1073・1074は削器である。1071は大型の複刃削器である。1069・1072は刃部形態から、削器状石器に含める。

石製品 (1075・1076) 1075は凝灰質粘板岩を素材にする。わずかに破損しているが、形態は半円形であり、全体が研磨されて擦痕がみられる。中央から一端に寄った部分には両面から穿孔された貫通孔が1個あり、その下には刻線による文様が描かれる。弧を描く側面には浅い抉りが入れられる。器種は裝飾品であろう。1076は笛状石製品である。硬質泥岩が素材である。破損しているためにピストルに似た形状をしているが、本来はEⅢ-67フラスコ形ピットから出土した完形品(第225図2436)を同様の形をもつものである。吹き口は両方とも一部が破損し

ている。押えの孔（長さ35mm・幅12mm）は指がかりのくぼみがある面に穿たれているが、破損が著しい。その部分の反対面にある小孔は、素材の夾在物が脱落したものである。指がかりのくぼみは楕円形で、2個1対が斜交いの位置にある。主な計測値は、本体が、全長10.5cm・幅4.6cm・厚さ2cm、管の直径が10mmである。なお、管の穿孔技術を知るうえで参考になる資料がGⅡ-13住居址から出土している。（第184図1852）

この住居址の炉は黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態を示し、直立埋設土器を伴う。埋設土器が行方不明のために、炉断面の写真を参考にして記述すると、体部中部に波状沈線がめぐり、沈線区画の磨消帯による文様が展開し、刺突文と鱗状陰帯を伴った大木10式に併行する土器である。それらのことから、大木10式に併行する時期に所属する住居址である。

EⅢ-3住居址（第129図1077-1089、図版61・62・64・66・68・77）

土器（1077-1079） 1077は炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器で、体部上半の一部から口縁部にかけての部分と底部を欠く。1078・1079は大木10式に併行する。1077は器形や作りからみて、大木10式に併行する土器であろう。

土製品（1084） 小型である。正面形は三角形に近いが、1側縁は突起状にわずかに張り出し、裾は上げ底である。裾の部分には両面を結ぶ2個の貫通孔がある。表面は斜位の沈線と列点文によって加飾される。

円盤状土製品（1080・1081） いずれも、周縁を打ち欠いたあと、一部を研磨している。

剃片石器（1082・1083・1085-1088） 1082・1083は縦形石匙である。1085は3辺を折断して方形に形を整え、鋭い1辺を刃部としている。1086は2個1対の刃部をもつピエス・エスキュー、1087は削器である。1088は折断石器で、2次加工によって作りだされた刃部は磨滅して鈍くなっている。

礫石器（1089） 一部を欠いた石皿である。平面の形状は隅丸長方形に近い。皿部の縁は高く縁どりされるが、脚部は作られない。皿面はほぼ平坦である。

この住居址は全体に削落が著しく、出土遺物は少ない。炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。

EⅢ-4住居址（第130図1090-1095、図版58・84）

土器（1090・1092） 1090は炉埋設土器である。体部中部に波状沈線がめぐり、上半に沈線区画による磨消帯が文様を展開する。地文は単節斜縄文である。1090・1092は大木10式に併行する。

剃片石器（1091・1093-1095） 1091・1094は削器である。1094では表面下端に突出した刃部が作られる。1093はつまみ部を欠いた縦形石匙である。1095は1辺に奥行きが浅く短かい刃部をもつ削器状石器で、反対の側縁にも微細刻線痕が連続する。

この住居址の炉は石囲いに斜位埋設土器を伴う形態のものである。埋設土器からは大木10式併行期に所属することが分かる。

EⅢ-5 住居址 (第130図1096-1102、図版58・84)

土器 (1096-1099・1102) 1096は沈線文口縁部である。1102は頸部にめぐる2条の隆起線に有孔の環状把手がつく。体部には沈線区画の磨消帯とともに蜂状隆帯がみられる。1099は把手が脱落しているが、1102と同様の文様意匠をもつとみられる別個体の破片である。1098は体部文様に蜂状隆帯を伴う。1096-1099・1102は大木10式に併行する。

剥片石器 (1101) 非折り面型尖頭形の影器で、細かい棒状の剥離痕を伴う。

石製品 (1100) 完形品である。外湾する側面は曲面になるが、その部分を除いた3面には研磨による平坦面が形成されている。しかし、石製品を目的にした研磨加工なのか、あるいは3面が磨石のように機能して生じた使用面なのかについては確実なことはいえない。他に加工痕を伴わないことを考慮すると後者の可能性が強い。

この住居址の炉はほぼ全面に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態に斜位埋設土器伴うもので、大木10式併行期に特徴的なものである。埋設土器は行方不明である。

EⅢ-6 住居址 (第131図1103-1112、図版25・46・72)

土器 (1103-1110・1112) 1104は新期の炉に伴う埋設土器である。沈線区画のJ字状磨消帯が4回繰り返され、末端が接触する。1103は横位のLRを地文にした粗製深鉢形土器である。体部中央部が膨らみ、上半に向ってすぼまってゆき、口縁部ではぼ直立する。1105・1106は単節斜縄文を地文にする。1107-1110・1112は沈線文口縁部である。1110は口縁部内面に隆起線を伴う。1112は小突起の下が半円形に区画され、刺突文で充填される。口縁部無文帯には2列の連続刺突文がめぐる。1104・1107-1110・1112は大木10式に併行する。1103・1105も器形や作りからみて同時期のものである。

剥片石器 (1111) 1側縁の表面に刃部加工を施した直刃削器である。

この住居址は新旧2基の炉をもち、古い炉は閉塞されていた。炉の作り替えとともに増改築の可能性も考えられるが、古い住居址の平面形や柱穴配置は不明である。出土遺物は新期住居址に固有のものである。新期住居址の炉は、埋設土器や形態からみて、大木10式併行期に所属する。古期の炉は抜き取りがおこなわれた石囲い炉で、直立埋設土器を伴う。埋設土器は底部だけを利用している。

EⅢ-7 住居址 (第132図1113-1116)

土器 (1113-1116) 1113は埋設土器である。口縁部を含めた体部上半を欠くために、文様についての詳細は不明である。然糸文を地文に、沈線区画の磨消帯・刺突文がみられる。1614は隆起線、1616は沈線が頸部にめぐる。1113-1116はいずれも大木10式に併行する。

この住居址は全体的に残存状態が悪く、埋土は最大層厚部で5cm±と薄い。そのため出土遺物は非常に少ない。炉形態や埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。重複するE

Ⅲ-6住居址を切っている。

Ⅲ-8住居址 (第132図・第133図1117-1142、図版32・62-65・67・68・70)

土器 (1117-1125・1128) 1120は埴埴土器である。口縁部を含めた体部上半を欠くために、文様についての詳細は不明である。残存部では隣合う沈線区画の磨消帯は接触せず、末端に刺突文充填の円形区画帯を伴う。単節斜縄文を地文にする。1121・1122は体部に鱗状隆帯、1124は刺突文をもつ。1123は低い隆起線が文様を構成する。1117-1122・1124は大木10式に併行する。1123は本遺跡では他に類例がないが、同伴関係からみて、大木10式に併行するものかもしれない。

円盤状土製品 (1126・1127) 1126は沈線区画の磨消帯をもつ土器片を素材にし、周縁を研磨している。1127は刺突文充填の円形区画帯をもつ土器片の周縁の約1/2を研磨している。

切片石器 (1129-1142) 1129・1130は縦形石匙である。1130は挾入部にタール状付着物が残る。1132は2辺を折断して長方形に形状を整え、折断面以外の相対する2辺を刃部にする。1131・1133は石錐である。いずれも、刃部は傾斜している。1134-1136は彫器である。1134は折断面を1面もつが、刃部は剝離面交差部にある。1135は非折り面型尖頭形である。1136は4面が折り面で、交差部2ヶ所が刃部である。1137は尖頭形の刃部をもつ。1138は刃部位置と剝離形態からピエス・エスキューになる。1139は直刃削器、1140は凸刃削器、1141・1142は削器状石器である。

この住居址の埴は斜位と直立の2個の埴埴土器を伴い、1120は斜位埴埴土器である。同伴する直立のものは行方不明である。埴形態や埴埴土器からみて、この住居址は大木10式併行期に所属する。

Ⅲ-9住居址 (第133図・第134図1143-1160、図版28・58・63)

土器 (1143-1153・1156・1159・1160) 1149は埴埴土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器の体部部分だけである。1147は沈線区画の磨消帯によって文様が構成され、文様単位は6回繰り返される。地文は複節斜縄文である。1148は無文の深鉢形土器である。1151は環状把手を頸部にもち、体部へ隆起線が垂下する。1143-1145は沈線文口縁部である。1156は沈線の接触部分に連続刺突文が加えられる。以上の土器のうち、文様帯を有する土器はすべて大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1154・1175・1158) 周縁への加工はいずれも研磨である。形状はいびつな円形から多角形を示す。1157は、燃糸文の地文に沈線区画の磨消帯がみられる。

この住居址は、埴形態や埴埴土器からみて、大木10式併行期に所属する。

Ⅲ-10住居址 (第135図1161-1173、図版53・58)

土器 (1161-1165・1167・1169・1170) 1161は単節斜縄文を地文にする。1162-1164は沈線文口縁部である。1163は波状突起の両面に刺突文充填の半円形区画帯がある。体部文様は沈線区画の磨消帯と鱗状隆帯による。1164は内面に隆起帯をもつ。1165・1169は刺突文充填の円

形区画帯が体部にみられ、1165では鱗状隆帯も伴う。1162—1165・1167・1169はいずれも大木10式に併行する。

剃片石器 (1166・1168・1171) 1166はやや凸形、1168はやや凹形、1171は凸形の刃部をもつ削器である。

磨製石斧 (1172) 基部側約1/2を失なう。表面には成形時の擦痕を伴う。刃部形態は凸刃。

石製品 (1173) 一部を破損するが、小判形の形態をもつ。全体がていねいに磨られ、1側縁の中央部には浅い抉りが入られる。

この住居址の炉は石囲いの形態をもつ。1164や1167などの出土土器や住居形態・住居址の遺跡に占める位置・埋土からは、大木10式併行期に所属すると推定できる。

EⅣ-1住居址 (第135図-第137図) 1174—1199、図版50・51・66・67・69・72

土器 (1174—1184) 1174は鉢形土器のミニチュアである。波状沈線に囲まれた磨消帯をもつ。1175・1176は隆沈線による楕円形文あるいは円形文をもつ。1170・1180は沈線文口縁部で、1180は狭い口縁部無文帯と体部に連続刺突文が加えられている。1175—1177は大木9式、1174・1178—1182は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1185—1189) いずれも周縁が研磨加工されている。形態は、いびつな円形から不整多角形までさまざまである。

剃片石器 (1190—1196) 1190は抉入石器である。抉りは浅い。1191・1192は2辺が折断され、1191は長方形で1辺、1192は三角形で2辺が刃部になり、微細刺突文を伴う。1193—1196は削器である。1195・1196は縦長剃片の先端部に、鈍い角度をもった角を挿んだ刃部が形成される。

礫石器 (1197—1199) 1198は細長い礫の長軸線上の両面に、複数の浅い凹みをもつ。1197は溶岩製の石皿である。形態は不整な楕円形で、両面はやや大きく凹凸を示す。1199は完形品である。片側半分が傾斜して下がるため、端が極端に薄くなる部分がある。形態が不定形なために確実なことは言えないが、床面から出土していることから、台石に含める。

この住居址の炉は石囲いに直立埋設土器を伴う形態のものである。埋設土器には土器体部を利用するが、土器が行方不明である。埋土からの出土土器は大木10式併行が主体を占めるが、大木9式も混じる。炉の形態は、他の大木10式併行期の住居址にも類例がある。“湯沢パターン”を伴う埋土や住居址の遺跡に占める位置、さらには隣合うEⅣ-2住居址の存在なども考慮すると、大木10式併行期に属するものと推定される。

EⅣ-2住居址 (第138図-第139図) 1200—1216、図版34・44・54・57・63・64・74

土器 (1200—1210) 1201は埋設土器である。単節斜縄文が地文で、綾絡文をもつ粗製深鉢形土器である。1200は口縁部を欠く。体部には沈線区画のJ字状磨消帯が3回の繰り返しで

展開し、末端には緒状隆帯を伴う。1205は口縁部に環状把手がつく。1207は中空突起の破損部分である。頸部には隆起線がめぐり、口縁部無文体には2列の連続刺突文が加えられる。1203は刺突文を伴った沈線が頸部にめぐる。1200・1202-1208は大木10式に併行する。1201は器形や施文からみて同時期のものである。

円盤状土製品 (1211・1215) 周縁への加工は研磨である。

制片石器 (1212-1214) 1212は二等辺三角形の形状をもった石鏃である。1213は尖頭形の刃部をもつ。1214は半両面加工の寛状石器である。1216は周縁に微細剝離痕を伴う。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。炉は石囲いに斜位埋設土器を伴う形態のものであるが、形状は他に類例のない独自のものである。

EM-3 住居址

炉の一部が第IV層火山灰上面に痕跡として検出されたにすぎず、出土遺物を伴わない。

EM-4 住居址 (第139図1217-1226、図版58・59・72・76・78・80)

土器 (1217-1222) 1217は沈線文口縁部で、内面に隆起線をもつ。1218は連続刺突文を伴う隆起線が頸部にめぐる。1222は縦の綾絡文をもつ。1217-1220は大木10式に併行、木目状縹糸文を地文にした1221は前期末葉に属するであろう。

制片石器 (1223・1224) 1223は凸形の刃部をもつ削器、1224は刃部先端を欠いた縦形石匙である。1224は刃部加工された側縁の反対側縁にも微細剝離痕が認められる。

礫石器 (1225・1226) 2点は、やや扁平ではあるが、球形の磨石である。

この住居址の埋土からの出土土器は少ないが、大木10式併行が主体を占める。所属時期等についてはFⅣ-8住居址のところで記載する。

EM-5 住居址

この住居址からの出土遺物は非常に少なく、図示できるものではない。所属時期等についてはFⅣ-8住居址のところで記載する。

FⅡ-1 住居址 (第146図1289・1290)

土器 (1289) 縦方向に走る狭い平行沈線間が磨消されている。

礫石器 (1290) 大型の礫である。素材は未加工で、一部を破損している。両面は平滑である。形態からは石皿あるいは台石としての機能が考えられる。

この住居址は長方形の平面形をもち、ベッド状遺構を伴う。炉は地床炉である。重複あるいは周辺に分布する大木10式併行期住居址群とは形態や埋土構成に著しい違いがある。「遺構編」には中期中葉の土器片が床面上から少数出土したと記載したが、確認できたのは1289 1点だけである。したがって確実な所属時期については不明にする。

FⅡ-2 住居址 (第139図・第140図1227-1230、図版33・50)

土器 (1227・1228・1230) 1230は頸部に沈線がめぐり、体部には沈線区画のJ字状磨消帯が4回繰り返される。地文は単節斜縄文である。口縁部内面には鱗状隆帯が貼付される。1227は複節斜縄文を地文にし、沈線区画の楕円形文あるいは円形文をもつ大木9式土器である。1228・1230は大木10式に併行する。

刺片石器 (1229) 尖頭部先端に使用痕をもつ。他の類例と比較すると彫形的な機能をもつことが考えられる。

この住居址は、斜位埋設土器を伴う摺鉢状の形態の炉をもつが、埋設土器は行方不明である。しかし、炉形態や出土土器などからみて、大木10式に属する住居址である。

FⅡ-3 住居址 (第140図1231-1240、図版55・58)

土器 (1231-1240) 1231は埴埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。1235・1236は隆起線文口縁部で、1235は刺突文を伴う。1233は体部に刺突文をもつ。1238は頸部に円形の突起を伴い、1240は口縁部に有孔の環状把手をもつ。小型土器である。1239は中空突起をもち、頸部に隆起線がめぐり、1232-1240は大木10式に併行する。

この住居址は、炉形態からみて、大木10式併行期に属する。

FⅡ-4 住居址 (第140図-第144図1241-1263、図版58・59・72・76・78・80)

土器 (1241-1246) 1243は埴埋設土器である。体部上半を欠くが、単節斜縄文を地文にする粗製深鉢形土器である。1241・1244・1245は沈線文口縁部、1242は隆起線文口縁部で、1244を除いては小型の土器である。1241・1242・1244-1246は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1247・1249・1250) いずれも周縁が打ち欠かれただけのものである。

刺片石器 (1248・1251-1254) 1253は幅広い先端部に急傾斜の2次加工が施された搔器である。1248・1251は削器状の石器である。1252・1254は2次加工が施されている。

磨製石斧 (1255) 刃部側約1/2を欠いている。

礫石器 (1256-1263) 1256-1262は南東壁際一括して存在していたものである。1256-1258・1260の4点は石皿である。1256は1個の脚を含む破片で、皿部の縁は高く残る。1257はほぼ完形品である。皿部は、あまり高くないが縁取りされ、裏面には楕円形の4個の脚をもつ。1258は約1/2を欠く。皿部の縁は高く残るが、中央部が極端に薄い。これは使用による磨滅であろう。裏面は凹凸があるが、使用痕としての凹部も含まれている。1260は側縁を含む破片であるが、凹石に転用され、両面に大きく深い凹みがある。また、裏面には幅が広くやや深い溝も伴い、研磨器としても機能している。1259は大きく、また1262は一部を破損している。扁平な大型の礫で、両面は平滑である。1259では一部、1262では、全面が加熱を受けた痕が認められる。1261は長軸方向で欠損している。出土状況と形態からみて、1259・1262は石皿あるいは台石、1261は台石として機能したことが考えられる。1263は、大きく深い凹みが表面および1個

面に、長軸方向に沿うように不規則に並ぶ凹石である。

この住居址は、炉形態からみて、大木10式併行期に所属する。

FⅡ-5住居址 欠番である。

FⅡ-6住居址 (第144図-第146図1264-1283・1286、図版32・53・54・61・66・81)

土器 (1264-1280) この住居址の炉は2個の埋設土器を伴う。1265はそのうちの1個である。文様帯の大部分を欠くが、残りの部分では沈線区画の磨消帯が文様を構成し、刺突文を伴う。1364・1266は復元できなかったもう1個の破片で、沈線文口縁部をもつ。1268・1270は沈線文口縁部、1271・1273は隆起線文口縁部である。1273は刺突文が隆起線に重ねられ、内面にも隆起線を伴う。1269は刺突文が重ねられた隆起線が渦巻文を描く。1272は小型の土器で、幅の狭い口縁部無文帯に刺突文が連続する。1267・1274・1275などは体部破片で、1275では刺突文を伴う。1264-1277は大木10式に併行する。

土製品 (1281) 約1/2が残る滑車形耳飾りである。両面に刺突が加えられ、1面では隆起線を伴う。

剥片石器 (1282-1283) 1282は1辺を折断して形状を整えたピエス・エスキューで、2個1対の刃部をもつ。1283は2面の折断面に挟まれた1辺に微細刻線彫りが認められる。

礫石器 (1286) 三角形に近い形状をした礫が素材で、幅広い1辺に寄った部分の両面に潰痕がみられる。

この住居址は、炉形態や埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。重複するEⅡ-26住居址を切っている。

FⅡ-7住居址 (第145図1284・1285)

土器 (1284・1285) 沈線区画の磨消帯をもつ小破片で、大木10式に併行する。

この住居址はかなりの削剝を受け、柱穴状ピット群の存在と「剥片貯蔵」の形態をもつことから住居址として認定された。したがって固有の埋土はほとんど確認できず、出土遺物は非常に少ない。「剥片貯蔵」の形態をもつことやFⅡ-4住居址に切られていることから、大木10式併行期に属することが考えられる。

FⅡ-8住居址 (第146図-第152図1287・1288・1291-1376、図版30・36・37・49-51・53-56・62・63・67-69・72・75)

土器 (1287・1288・1291-1338) この住居址は新旧2基の炉をもつ。1292・1293は古期の炉の埋設土器である。1293残存部では沈線区画の磨消帯とそれに伴う刺突文がみられる。地文は燃糸文である。1292は単節斜縄文を地文にする。1295は新期の炉の埋設土器で、底部を欠いた粗製の深鉢形土器である。複節斜縄文を地文にする。1291は4個の中空突起に2個1対の小円孔を伴う。口縁部から頸部は連続刺突文を伴った隆起線、体部は沈線区画の磨消帯が文様を

構成する。体部は逆S字状の文様が4回繰り返され、接触部と末端には緒状隆帯を伴う。単節斜縄文を地文にする。1297は器高が低く、体部が膨らむ器形になる。残存部には沈線区画の磨消帯があるが、文様の詳細は不明である。複節斜縄文を地文にする。1298は体部上半、1294・1296・1301は体部下半から底部にかけての部分である。1287・1288は小型の土器である。1287は口縁部が内側に屈折し、体部文様はJ字状磨消帯によって構成される。1288は相対する2個1対の貫通孔を口縁部にもつ。1299・1302-1306・1318は沈線文口縁部である。1305は内面に緒状隆帯を伴う。1306は山形突起部に小円孔をもち、内面には緒状隆帯を伴う。1307・1309-1316・1319-1321は隆起線文口縁部で、多くは刺突文・竹管文を伴う。1329・1334・1336は刺突文充填の円形区画帯、1330・1331は刺突文を体部に伴う。133は櫛歯状文を地文にする粗製土器、1337は口縁部に幅の狭い斜位の燃糸文帯が形成される。文様の特徴から時期が分かる土器は、大木9式の1300を除いては大木10式に併行する。1294・1295・1298の粗製土器も、器形や作りからみて、大木10式に併行するものであろう。

土製品 (1342) 無文の環状形耳飾りの破片である。

円盤状土製品 (1339-1341・1343-1355) 埋土からは多くの円盤状土製品が出土した。周縁に対する加工は、打ち欠いただけのもの(1339・1340・1345・1346・1353・1354)・一部〜1/2ほど研磨したもの(1341・1352・1355)・1/2〜全周を研磨したもの(1343・1344・1347-1351)がある。1339・1340は沈線区画の磨消帯、1341は底部近くの無文帯、1343は磨消帯、1344は口唇部を含む口縁部無文帯の土器破片を利用する。他は土器の地文だけがみられる。

制片石器 (1356-1374・1376) 1356-1358・1360は1〜2辺が折断され、刃部には微細制離痕を伴う。1359は2辺を折断して、2次加工を施す。1361は挟入する2個の刃部と削器状刃部をもつ複合石器である。1362・1364は1辺に階段状制離痕をもつ。ピエス・エスキューの定義からははずれるが、形態や刃部からみて、類似の機能を果たした石器であろう。1363は尖頭部先端が刃部として作り出される。1365は尖頭形の刃部をもつ。1366-1369は削器である。1368は珪化木が素材である。1367・1369は尖頭部を含む刃部をもつ。1370-1374・1376は刃部形態からみて削器状石器に含まれる。

礫石器 (1375) 断面が楕円形の棒状の礫で、1/2弱を欠損するものであろう。表面は非常に滑らかで、不規則な擦痕を伴うことから、小型の磨石になるであろう。

この住居址は拡張住居址である。出土遺物は新期の住居址に伴うものである。新期の住居址は、が形態や埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。古期の住居址も、同様の理由から、大木10式併行期に属する。

FII-9 住居址 (第152図1377-1379、図版59・61・65)

土器 (1377) 粗製土器の破片である。口縁部には横方向に燃糸文を回転させるが、幅は狭い。

土製品 (1378) 滑車形耳飾りである。両面の中央部に浅い竹管文を1個ずつ伴う以外は無文である。

剥片石器 (1379) 剥片の自然の挟入部に細かな剥離痕を伴う。

この住居址は擾乱や削剝をかなり受けており、出土遺物は非常に少ない。また、炉も重複するフラスコ形ピットに切られている。確実なことは言えないが、占地や埋土からみて大木10式併行期の住居址と推定できる。

FⅡ-10住居址 (第152図・第153図1380-1395、図版56・63・68)

土器 (1380-1387) 1380は頸部に刺突文を伴う隆起線がめぐり、それは数ヶ所で口唇部へ立ち上がる。体部文様の詳細は破損しているために不明であるが、沈線区画の磨消帯による文様が展開し、刺突文・鱗状隆帯を一部に伴う。1384は頂部に小円孔がある中空突起をもつが、破損している。頸部には刺突文を伴う隆起線がめぐり、体部は沈線区画の磨消帯が文様を構成するが、詳細は不明である。1381は沈線文口縁部、1382は竹管文、1383は刺突文を伴った隆起線文口縁部である。1386は鱗状隆帯と刺突文を体部に伴う。1380-1387は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1388-1390) 1388は周縁の約1/2、1389・1390は全周を磨いて成形している。1389にみえる沈線は土器頸部にめぐり、それである。

剥片石器 (1391-1394) 1391は先端部が折断され1側縁には微細剥離痕を伴う。1392は表面左側縁の上部に浅い挟入部が作られ、そこから反対側縁にかけてタール状の付着物が残る。縦形石匙に含めることができるであろう。1392は断面が三角形の分厚い素材に、粗い2次加工によって尖頭形の刃部が作られる。裏面にはタール状の付着物が広く残る。1394は折り面交差部が刃部になる影器である。幅広い刃部は磨耗が著しく、鈍くなっている。

礫石器 (1395) 形状はほぼ円形で、断面は扁平である。表面には深く大きい凹みが数多くある。裏面は中央部に1個の大きな凹みがあり、周辺の広範囲の部分に煤が付着している。

この住居址の炉は、斜位埋設土器を伴った浅皿状の形態を示すものである。埋設土器は調査段階で持ち去られてしまっていて行方不明であるが、炉形態や出土土器・埋土・占地などからみて、大木10式併行期に属する住居址であろう。

FⅡ-11住居址 (第154図1396-1412、図版51・53・67)

土器 (1396-1409) 1396は頸部に1条の沈線がめぐり粗製深鉢形土器で、単節斜縄文を地文にする。1397・1398は沈線文口縁部、1399・1400・1406は隆起線文口縁部である。1400は竹管文を伴い、内面にも隆起線がめぐり、1407は中空の突起である。正面には小円孔があり、それを囲む刺突文と鱗状隆帯で加飾される。背面は刺突文だけである。この1407は破損部分から考えると、異形の土製品に含められるものかもしれない。1396-1409は大木10式に併行する。

剥片石器 (1410-1412) 1410は1辺が折断された小型の剥片で、鋭い1辺に微細剥離痕を

伴う。1411は削器である。1412は尖頭部を含んだ刃部が形成される削器である。

この住居址の炉は埋設土器を伴う浅皿状形態のものである。埋設土器は体部下半から底部にかけての利用であるが、もろくて復元できない。しかし、炉形態からみて、この住居址は大木10式併行期に所属するものである。重複するFⅡ-12住居址を切っている。

FⅡ-12住居址 (第155図1413-1412、図版66・67)

土器 (1413-1416・1419) 1419は炉埋設土器の破片の一部である。磨滅が著しいが、刺突文を伴った鱗状隆帯と磨消帯を体部文様にする。1414は刺突文を伴う鱗状隆帯、1416は刺突文を体部文様帯に伴う。1413-1416・1419は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1417) 周縁を打ち欠いて形成している。

剃片石器 (1418・1420・1421) 1418は奥行き浅い挟入部を刃部にする挟入石器、1421は非折り面型の彫器である。尖頭部先端に細かな挿状の剝離痕を伴う。1420は尖頭部先端および周縁に微細剝離痕がみられる。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。重複するFⅡ-11住居址には切られている。

FⅡ-13住居址 (第155図・第156図1422-1435、図版64)

土器 (1422-1434) 1422は炉埋設土器である。体部下半から底部にかけての残存で、単節斜縄文を地文にする。1424は底部を欠いた粗製土器、1423は単節斜縄文を地文にする。1425・1426は沈線文口縁部、1427は刺突文を伴った隆起線口縁部の隆起線が剥落している。1428は波状口縁に円孔があり、波状頂部に竹管文を伴う。1432は高台部あるいは器台の破片である。無文で、連続刺突文を伴う沈線が垂下する。1433は無文で、刺突文を伴った沈線をもつ。1434は小型土器の体部破片である。1425-1433は大木10式に併行する。

剃片石器 (1435) 横形石匙である。刃部加工は、自然面を残した表面に主におこなわれる。

この住居址は、炉の形態からみて、大木10式併行期に属する。

FⅡ-14住居址 (第156図-第158図1436-1467、図版50・51・54・55・62-64・66・67・72・82)

土器 (1436-1450) 1436・1439は楕円形文あるいは円形文をもつ大木9式土器である。1437・1438は沈線文口縁部、1440-1443は隆起線文口縁部である。1440・1442・1443は同一個体の破片で、竹管文を伴う。1445は波状口縁部に小円孔があり、竹管文を伴った沈線が円孔下縁から頭部へめぐる。1444は口縁部に刺突文が集中する。1446は円形刺突文が連続するが、円孔の周囲を囲む隆帯が剥落したものである。1437・1438・1440-1449は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1451-1455) 周縁への加工は、1455は打ち欠き、1452・1454は一部研磨、1451・1453は全周研磨である。1452は磨消帯、1453は沈線に磨消帯をもつ土器片を利用する。

剥片石器 (1456—1464・1466) 1456は左右非対称であるが、形態や2次加工からみて、石鏡に含まれるものであろう。1457は2辺が折断された小型の三角形の剥片で、両面に刃部加工が施される。1458も2辺が折断されて三角形の形態を示す。表面の基部に緩傾斜の2次加工が施される。1460は縦長剥片の先端部に急傾斜の刃部が形成された搔器である。1461は複刃削器であるが、裏面左側縁の刃部は不規則である。1462は凹刃削器、1463は小型の削器状石器である。1464は裏面左側縁に細かい2次加工によって突出した刃部が形成される。1459は小型の剥片に2次加工が施される。1466は縦長剥片の両側縁に微細剥離痕が連続する。

礫石器 (1465・1467) 1465は脚部を含む石皿の破片である。脚部は2段になり、長軸方向に細長い台状の部分の下に楕円形の脚を作る。皿部の縁は一部が高く残る。1467は小型礫の両面に主に長軸方向に走る擦痕が著しい。礫石あるいは研磨器になるであろう。

この住居地の炉は、斜位埋設土器を伴う浅皿状の形態を示し、一部に黄褐色細礫を伴う。埋設土器は粗製の深鉢形土器を用いているが、もろくて復元が不可能である。炉形態からは、大木10式併行期に属する住居地である。

FⅡ-15住居地 (第158図1468—1470)

土器 (1468・1469) 1468は体部下半から底部にかけての部分を利用した炉埋設土器である。地文は横位のRLである。1469は内湾する口縁部無文帯の破片で、大木10式に併行する。1468も器形や作りからみて、大木10式に併行するものであろう。

円盤状土製品 (1470) 1/4ほど欠いている。周縁は打ち欠かれている。単節斜縄文のほかに沈線がみられる。

この住居地はFⅡ-14住居地によって切られていることや擾乱を受けているために、出土遺物は非常に少ない。炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に属する住居地である。

FⅡ-16住居地 (第158図・第159図1471—1486、図版29・64・67)

土器 (1471—1480) 1475は炉埋設土器である。体部下半から底部にかけての土器で、撫糸文を地文にする。1471は沈線区画の逆S字形磨消帯が文様を展開するものであろう。1478は体部下端から底部にかけての土器であるが、器面は磨滅している。1472・1477は沈線文口縁部、1476は半截竹管文を伴った隆起線口縁部である。1471—1474・1476・1477・1479は大木10式に併行し、1475も器形や作りからみて、同時期のものであろう。

円盤状土製品 (1481) 磨消帯部分の土器片を素材にし、周縁を研磨している。

剥片石器 (1482—1484・1486) 1486は一部が欠けた縦形石匙である。1482は基部、1483は先端部が折断され、刃部には微細剥離痕がみられる。1484は非折り面型尖頭形の形器である。尖頭部先端に槌状の剥離痕を伴う。他に1個器状刃部をもつ。

礫石器 (1485) 棒状の礫が素材であるが、欠損している。丸味をおびた先端部寄りの部分

に敲打による剥落を伴うほか、一部に平滑な面が形成されている。敲石と磨石の複合である。

この住居址は、石囲いに斜位埋設土器を伴う炉の形態や埋設土器・他の出土遺物からみて、大木10式併行期に所属する。重複するFⅡ-19住居址を切り、大半がその上に載っていた。

FⅡ-17住居址 (第159図・第160図1487-1502、図版62・69)

土器 (1487-1492) 1487・1488は沈線文口縁部で、1487は小型の土器である。1489・1490は隆起線文口縁部で、1489は竹管文を伴う。1491は沈線区面の円形内に単節縄文が押圧され、刺突文が加えられる。1492は渦巻文からみて大木9式土器、他は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1493-1497) 周縁への加工は、1495-1497が打ち欠き、1493が大部分を研磨、1494が全周を研磨している。1493は土器片の磨消費部分を利用している。

切片石器 (1498-1502) 1499は2辺を折断して、2次加工を施した削器である。1501は削器状の刃部の反対側縁に粗い2次加工が施されている。1500は突出した部分に刃部が作られ、それに続く部分には急傾斜の角度をもった2次加工が施される。1502は削器状石器である。1498は鋭い縁辺に微細剝離痕が連続する。

この住居址は、黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態の炉をもち、斜位埋設土器を伴う。埋設土器は行方不明であるが、炉形態やGⅡ-1住居址を切り、FⅡ-18住居址に切られている重複関係からみて、大木10式併行期に属する住居址である。

FⅡ-18住居址 (第160図1503-1518、図版66・67・74)

土器 (1503-1512) 1504・1505・1508は沈線文口縁部で、1504は隆起線、1505は緒状隆帯を内面に伴う。1506・1507は波状口縁で、1506は竹管文、1507は刺突文を伴った沈線文口縁部である。1510は大木9式、1503-1509・1511は大木10式に併行する。

切片石器 (1513-1518) 1513は加撃により、鋸歯縁状の粗雑な刃部が作られる。1514は小型切片の周縁を2次加工して、尖頭形の刃部を作る。1515は2辺を折断した折断石器である。1516は裏面の基部を2次加工しているために、尖頭状になる。石鏃などの未製品かもしれない。1517は粗雑な刃部の大型削器である。1518は裏面の周縁に粗い2次加工がおこなわれる。

この住居址の炉は埋設土器を伴わない浅皿状の形態のものであるが、炉縁に黄褐色細礫を敷設する作りは大木10式併行期に所属する一部の炉に共通する。重複するEⅡ-17住居址を切っている。

FⅡ-19住居址

FⅡ-16住居址の貼り床下に大半が位置するため、埋土や規模・形状は不明で、出土遺物はほとんどない。この住居址の炉は、土器片囲いに斜位埋設土器を伴う形態のものである。また、埋嚢を伴っていたが、それらの土器の全部が行方不明である。FⅡ-19住居址に切られていることや炉形態からみて、大木10式併行期に属する住居址である。

FⅢ-1 住居址 (第161図1519・1520)

土器 (1519・1520) 1519は頸部に隆起線がめぐり、1520は沈線区画の磨消帯を体部文様にする。いずれも大木10式に併行する。

この住居址は、全体に削割や破壊を受け、埋土も保存状態が悪く薄層であったために出土遺物は非常に少ない。住居址の形状は長方形、炉は地床炉の形態である。確実な所属時期は不明であるが、重複する大木10式併行期に所属するFⅢ-2住居址には切られていた。

FⅢ-2 住居址 (第161図1521・1522)

土器 (1521・1522) 1521は直立の炉埋設土器である。上半を欠くために文様の詳細は不明であるが、体部中部が液状の沈線で区画され、磨消されている。地文は磨滅して不明である。1522は体部上半の残存で、体部文様は沈線区画の磨消帯で構成され、地文は単節斜縄文である。いずれも大木10式に併行する。

この住居址の炉は直立と斜位の2個の埋設土器を伴う形態のものであるが、斜位埋設土器が行方不明である。残る1個や炉形態からは、この住居址が大木10式併行期に属することが明らかである。

FⅢ-3 住居址 (第161図1523・1524)

土器 (1523・1524) 2点は外反する口縁をもつ。体部には楕円形文あるいは円形文で文様が構成されるが、その間の磨消帯には縦位の渦巻文が施文される。2点は別個体の大木9式土器である。

この住居址は出土遺物が非常に少ないが、出土土器は大木9式が主である。住居址の形状は楕円形で、2.5m±×1.9m±と非常に小型である。炉の形態は浅皿状を示す地床炉の一種である。確実な所属時期は不明である。ただ、隣接するFⅢ-4住居址とともに、住居形態や規模が通常の大木10式併行期の住居址とは異なっている。

FⅢ-4 住居址

この住居址からは土器片が少量出土しただけであり、それらは縄文を地文にもつ破片だけである。FⅢ-3住居址と住居形態や規模に類似性があり、また隣接する位置にあることを考慮すると、両者が密接な関係をもつことが推測できる。

FⅢ-5 住居址 (第161図・第162図1525-1531、図版32)

土器 (1525-1530) 1530は炉埋設土器である。体部文様は沈線区画の磨消帯が逆S字形を描き、末端には鱗状隆帯を伴う。磨消帯に囲まれて地文を残した楕円形の内は刺突文で充填される。地文は単節斜縄文である。1528は鱗状隆帯、1527・1529は体部に刺突文を伴う。1525は補修孔をもつ口縁部破片である。以上の土器は大木10式に併行する。

切片石器 (1531) 両側縁に削器状の刃部をもつ破損品である。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。

FⅢ-6住居址 (第162図1532-1534、図版59)

土器 (1532-1534) 1532は高台である。4条の細い平行線が下端部付近にめぐり、その上位には単節斜縄文が施文され、1個の円形刺突文を伴う。1533は櫛目状文を地文にし、1534は網目状燃糸文が地文である。

この住居址はほぼ円形を示し、地床炉を伴う。所属時期を知る遺物は出土していない。埋土は、下部が暗褐色土、上部がクロボクで構成される。本遺跡ではⅡ層が幾層になって、層位的に新しい型の住居址は埋土にクロボクを構成員にする特徴をもつ。また湧泉を中心にして占地する前期末葉住居址群が埋土にクロボクを伴う。この住居址は、住居形態と占地位置から考えると後者の例に適合する可能性があるが、確実な所属時期は不明である。

FⅢ-7住居址 (第163図1538・1539、図版75)

土器 (1538) 炉埋設土器である。上半を欠くために、沈線区画の磨消帯の一部のみみられるだけで、文様は不明である。大木10式に併行する。

磨製石斧 (1539) 基部および側縁から刃部の一部を欠いている。刃部形態は平刃である。

この住居址の炉は直立埋設土器だけのもので、凹み等を伴わない。しかし、埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。

FⅢ-8住居址 (第162図1535-1537、図版、69)

土器 (1535) 口縁部の内外面に、垂下する隆起線を伴う。大木10式に併行する。

剥片石器 (1537) わずかに凸形を示す刃部をもつ削器である。

この住居址は、形態や床面の状態からみて、構築半ばで廃絶処分を受けている。

FⅢ-9住居址 (第163図1540-1544、図版69)

土器 (1540・1541) 1540の地文は平行燃糸文である。1541は口縁寄りの部分に、結束の横方向への回転がみられる。1540は前期末葉に属する。

剥片石器 (1542-1544) 1542は直刃削器、1543は凸刃削器である。1544は表面に自然面を残す分厚い素材の両側縁に2次加工を施した削器である。

この住居址は残存状態が悪く、規模や形状は不明である。また出土遺物は非常に少ない。炉は地床炉、埋土はクロボクの単層である。所属時期については、FⅢ-6住居址と同様の理由で不明である。

FⅢ-10住居址 (第163図1545・1546、図版64)

土器 (1545) 燃糸文を地文にし、沈線区画の磨消帯を伴う小破片で、大木10式に併行する。

剥片石器 (1546) 縦形石匙である。刃部は尖頭形を示す。

この住居址からの出土遺物は非常に少ない。炉は石囲いの形態をもつ。確実な所属時期は不

明であるが、伊形態や埋土からみて、大木10式併行期に属することが推定できる。

FM-1 住居址 (第164図1551-1553、図版64・74)

土器 (1551) 不整な摺糸文が地文である。

剥片石器 (1552・1553) 1552は石鏃である。基部の抉りは深く、先端部は突き出る。1553は内湾する側縁と反対側縁の一部に刃部が形成された削器である。

この住居址の所属時期などについては、FⅣ-8住居址の後に記載する。FⅣ-2～4住居址・FⅣ-5住居址状遺構・FⅣ-6～8住居址についても同様である。

FM-2 住居址 (第163図1547-1550、図版72)

土器 (1547) 頸部に隆帯がめぐり、その上に指頭状の連続押捺がおこなわれる。

剥片石器 (1548-1550) 1548は縦形石匙のつまみ部、1549は同一個体の刃部破片である。1550は先端部に両面からの刃部加工をし、奥行きが深い刃部を作っている。

FM-3 住居址

この住居址からの出土遺物は非常に少なく、図示できるものはない。

FM-4 住居址 (第164図・第165図1554-1567、図版60・65)

土器 (1554・1555) 2点は網目状摺糸文を地文にする。

剥片石器 (1556-1567) 1556は縦形石匙である。1557は折断によって形状を整え、尖頭部を2次加工して石鏃状の刃部を作っている。1558は折断面と自然面を残した打面が交差する尖頭状の部分に極状の剝離痕がみられ、側縁が磨減した形器である。1559は1辺を折断して尖頭部を作り、その先端が刃部になる形器状の石器である。1560は尖頭形をした剥片の両側縁に粗い2次加工が施されている。1561は凸刃削器、1562-1265は削器状石器で、1265は破損している。1566は両側縁に細かい剝離痕が連続し、1辺の刃部は著しく内湾する。1567は先端部に不規則で粗い2次加工でおこなわれる。

FM-5 住居址状遺構 (第165図1571、図版79)

土器 (1571) 木目状摺糸文を地文にし、口唇部には指痕状の連続押捺がおこなわれる。前期末葉の土器である。

FM-6 住居址 (第165図1568・1569、図版65・82)

剥片石器 (1568) 縦形石匙である。刃部加工は表面におこなわれる。

礫石器 (1568) 半円状扁平打製石器である。直線部では片面、他の周縁部は両面からの2次加工が施される。直線部での刃部は分厚く鈍いが、弧状部分では鋭い刃部になる。

FM-7 住居址 (第165図・第166図1570・1572-1580、図版46・50・55・59・60・64・66・82)

土器 (1570・1572-1580) 1577は網目状摺糸文を地文にしたやや小型の深鉢形石器で、口縁部はわずかに外反する。1570は指頭状の連続押捺痕を伴った隆帯が頸部にめぐり、1580は椀

糸文を地文にし、指頭状の連続押圧痕を口唇に伴う。1573は2条の燃糸文、1574—1576・1578・1579は網目状燃糸文を地文にする。1570・1580は前期末葉に属し、網目状燃糸文を地文にする土器群はそれらに伴うものであろう。中空突起をもつ1572は大木10式に伴行する。

円盤状土製品 (1588) 沈線区画の磨消帯を含む土器破片を素材に、周縁を打ち欠いている。

剥片石器 (1581—1585) 1581は削器、1582は縦形石匙である。1585は二等辺三角形の形をした剥片の周縁を刃部加工した尖頭形の石器で、石錐の1種かもしれない。1583は削器状石器である。1584は縦形石匙のつまみ部を含む破損品である。

礫石器 (1586・1587) 1586は半円状扁平打製石器に含まれる。両端から1側縁に刃部が作られ、刃部は直線部分では磨滅し、潰れている。1面には浅い2個凹みがあり、凹石との複合石器である。1587は直方体の礫の1面に、主に長軸方向に走る擦痕を伴う砥石である。

FV—8住居址 (第167図1589—1596、図版50)

土器 (1589—1595) 1589・1590は指痕状の連続押圧痕を伴う隆帯が頸部にめぐる。1593・1594は燃糸文、1595は平行燃糸文を地文にし、1593は波状口縁になる。1592は頸部に低い隆起線がめぐって、体部に沈線区画の磨消帯による文様をもつ大木10式併行の土器である。1589・1590は前期末葉、1593—1595はそれに伴う土器であらう。

剥片石器 (1596) 相対する2辺に細かな剝離痕を伴った刃部がある。奥行きは浅いが、わずかに挟入する。

EV—4・5住居址・FV—1～4住居址・FV—5住居址状遺構・FV—6～8住居址の合計10棟 (FV—4住居址は拡張住居址であり、2棟に数えている) の住居址と1棟の住居址状遺構は東斜面下方の湧泉を取り巻く形で弧状に分布する。これらの遺構群の特徴を次にあげる。

1. 住居址の形状は方形・多角形・円形であり、住居址状遺構は小型の長方形である。
2. ひょうたん形を示すような2棟あるいは3棟の重複があり、長軸方向は湧泉を向く。重複はEV—4住居址とEV—5住居址、FV—1住居址とFV—2住居址、FV—6住居址とFV—7住居址・FV—8住居址の間にみられる。FV—4住居址とFV—5住居址状遺構も一部が重複するが、前述の住居址間の重複とは型が異なる。
3. 埋土の主体を占めるのはクロボクである。
4. 炉をもたない、あるいは炉の有無の不明なFV—3・8住居址とFV—5住居址状遺構を除いては、いずれも地床炉を伴う。
5. 埋土からの出土土器は前期末葉のものが主体を占め、半円状扁平打製石器のように同時期に共伴する特徴的な石器が出土している。
6. 斜面下方にだけ分布する基本層序の構成員にK—Ⅲ層からK—Ⅵa層がある。K—Ⅲ層上位のK—Ⅱ層は斜面上方のⅡ層、K—Ⅵb層はⅢ層に対比される。K—Ⅲ層からK—Ⅴ層は無遺物層

である。量は少ないが、前期末葉～中期中葉の遺物を包含するK-VIa層はFN-4住居址土最下部に連続するものである。

以上のことから、先にあげた遺構群は前期末葉に所属するものである。

GII-1住居址 (第167図1597-1604、図版68・69)

土器 (1597-1601) 1598は埴壇土器である。上半を欠くが、単節斜縄文を地文にした粗製深鉢土器である。1597は、やや小型の土器の底部付近が残存する。1599は沈線文口縁部である。1601は刺突文充慎の円形区画帯を体部文様にもつ。1599-1601は大木10式に併行、1598も器形や作りからみて、同時期のものであろう。

剥片石器 (1602-1604) 1602は縦形石匙のつまみ部である。1603は尖頭部先端に細かな桶状の剝離痕を伴う非折片面型の彫器、1604はやや凸形の刃部をもつ削器である。

この住居址は削剝や重複による破壊を受け、出土遺物は少ない。埴壇や埴壇土器からみて、大木10式併行期に属する住居址である。重複するFII-17住居址・GII-2住居址には切られている。

GII-2住居址 (第167図-第169図1605-1637、図版54・56・58・72・83・85)

土器 (1605-1624) 1605・1606は沈線文口縁部で、1605は内面に鱗状隆帯を伴う。1610-1618は隆起線文口縁部で、1613は竹管文、1611・1612・1614などは刺突文を伴う。1614は鱗状隆帯、1618は隆起線を内面にもつ。1616は中空突起である。1609は沈線区画帯に綾杉文がみられる。1607は粗製土器で、波状口縁部の内面には鱗状隆帯を伴う。1622は無文の高台部である。1605-1621・1623はいずれも大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1625-1627) 1625・1626は周縁を研磨しているが、形状はいびつである。1627は土器底部を利用し、周縁を打ち欠いている。

剥片石器 (1628-1633) 1628は折片面交差型の彫器、1629は横形削器である。1630・1631は破損しているが、2次加工によって削器状の刃部が作りだされている。1632・1733は細かな剝離の刃部をもつ削器状石器である。

石製品 (1637) 灰白色をした軟質な流紋岩質細粒凝灰岩を素材にした岩板であるが、破損している。下端に1条の刻線がめぐり、中央部にはそれと重なるように1個の貫通孔がある。文様は浅い刻線で描かれ、最下部の山形の刻線には列点文が沿う。底部にも浅い刻線を伴う。裏面には磨きによる擦痕が著しい。

円盤状石製品 (1634-1636) 1634は周縁が研磨されて円形である。1635は周縁を打ち欠いただけのものである。1636は泥質凝灰岩が素材である。周縁は研磨されてほぼ円形である。片面には細かな擦痕が一定方向に走るとともに、擦痕とは異なる絵画的な意匠が非常に細い線で

描かれている。

この住居地の炉は、黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、直立埋設土器を伴う。埋設土器は粗製の深鉢形土器の体部を利用しているが、復元は不可能であった。炉形態からは、大木10式併行期に属する住居地であることが分かる。重複するGⅡ-1住居地を切っている。

GⅡ-3 住居地 (第169図-第173図|1639-1691、図版33・43・49・53-55・63・64・67・68・70・73・82・85)

土器 (1639-1672) 1639は体部中部を利用した炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にし、5回繰り返されるJ字状磨消帯の末端には鱗状隆帯を伴う。1640は口縁部を欠いた粗製深鉢形土器を利用した埋甕である。地文は単節斜縄文である。1641はやや小型の土器である。沈線区画の磨消帯による文様が展開するが、破損のために詳細は不明である。1642は複節縄文を地文にし、上半は無文で沈線がめぐるが、破損しているために詳細は不明である。1643・1644は沈線文口縁部で、1643は内面に鱗状隆帯を伴う。1645-1659・1662・1665は隆起線文口縁部で、竹管文や刺突文を伴う。小波状-波状口縁で、口縁部は内湾する例が多い。1652・1654は内面に鱗状隆帯を伴う。1656は波状口縁部に三角形が描かれる。1658・1659は同一個体の破片である。波状口縁部に小円孔があり、竹管文を伴う隆起線が頸部にめぐる。体部文様は刺突が重ねられた沈線区画の楕円形文とそれに接する磨消帯・鱗状隆帯などで構成される。1660は波状口縁部に円孔があり、刺突文を伴った隆起線がそれを囲むように貼付される。1661は口縁部の内面に隆起線がめぐり、竹管文を伴う粗製土器である。1666は刺突文充填の円形区画帯、1664・1667は鱗状隆帯を体部文様にもつ。1639・1641-1659・1661-1670は大木10式に併行する。1660も文様構成からみて、同時期のものかもしれない。埋甕1640も同時期に共存する土器であろう。

円盤状土製品 (1673-1675) 周縁への加工は、1673・1674が研磨、1675が一部の研磨である。1674は沈線区画の磨消帯による文様がある。

剥片石器 (1676-1688) 1676は有茎の石鎌で、茎部にタール状の付着物がみられる。1677は小型剥片を素材にし、尖頭形の刃部をもつ。1678は折り面交差部を刃部とする彫器、1679・1680は非折り面型尖頭形の彫器である。1681・1684はほぼ直線形、1683は凸形、1687は凹形の刃部をもつ削器である。1687は反対側縁にも短かい刃部が作られる。また裏面にはタール状の付着物が残る。1682は長さが13cmある大型の削器である。凹形の刃部はていねいな2次加工が施されているが、反対側縁は粗い2次加工である。1685・1686・1688は削器状石器である。1688は挟入する刃部があり、挟入石器であるかもしれない。

礫石器 (1691) 溶岩が素材の小型の研磨器で、片面に幅の広い直線的な溝が形成される。

円盤状石製品 (1689・1690) 1689は周縁を打ち欠いただけであり、明瞭な稜線が残る。1690は全体がていねいに研磨され、ほぼ円形である。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器・埋甕からみて、大木10式併行期に属する。

GⅡ-4住居址(第173図1692・1693、図版85)

土器 (1692) 沈線文口縁部である。大木10式に併行する。

石製品 (1693) 軟質な流紋岩質細粒凝灰岩が素材の岩球である。成形以外の加工はおこなわれていない。

この住居址はⅡ層上面にコ字形の石囲い炉が検出されたことによって確認できたもので、クロボクが遺構を直接覆っていた。固有の埴土は確認できず、炉の周辺に出土した非常に少量の遺物があるにすぎない。所属時期は不明であるが、Ⅱ層上面に炉をもつことから、層的には新しい時期に所属する。ただし、コ字形を示す石組みは焼成痕を伴わないことから、見方を変えたと配石の一種である可能性もある。

GⅡ-5住居址(第173図1694-1697、写真図版45)

土器 (1694-1696) 1694は炉埋設土器である。上半の一部を欠くが、単節斜縄文を地文にもつ粗製深鉢形土器である。1695の地文も1694と同様である。1696は隆起線口縁部で、大木10式に併行する。1694も、器形や作りからみて、同時期のものである。

切片石器 (1697) 使用痕をもつ切片である。

この住居址は、埋土の保存状態が悪く、出土遺物は少ない。炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に属するものである。また、埋甕も伴っていたのだが、行方不明である。

GⅡ-6住居址(第173図1698-1703、図版61)

土器 (1698-1700) 1698は2条の隆起線と磨消縄文による文様をもつ。1699・1700は刺突文充填の円形区画帯を体部文様に伴い、1700では鱗状陰帯も伴う。いずれも大木10式に併行。

切片石器 (1701) 断面形が三角形の分厚い切片の1側縁に、不規則で粗い2次加工がおこなわれている。

土製品 (1702・1703) 1702は滑車形耳飾りである。保存のよい片面には渦巻文が沈線によって描かれている。反対面の文様も同様のものであろう。1703は一部が欠けるとともに、表面の剥落が著しい。両面とも不規則な列点文が加えられている。

この遺構は、柱穴とみられるピット群の配置から住居址として登録したもので、平面形や炉は不明で、固有の埴土も見い出せなかった。所属時期は不明である。

GⅡ-7住居址(第174図-第176図1704-1741、図版26・51・59・61-63・65・67)

土器 (1704-1725) 1704は沈線区画の逆S字形の文様が展開するものであろう。文様単位の繰り返しは不明で、地文は単節斜縄文である。1705は無文の深鉢形土器である。1706・1707

・1718・1719は沈線文口縁部である。1708—1713は隆起線文口縁部で、1708を除いては竹管文や刺突文を伴う。1711は内面にも隆起線がめぐる。1725は高台部あるいは器台である。無文で、円孔をもつ。1724は櫛歯状文を地文にする。1704・1706—1720は大木10式に併行する。1721は平行する沈線間に狭い磨消帯が形成されている。後期初頭の土器かもしれない。

土製品 (1726) 体部は板状であるが、裾が大きく広がり、底部はほぼ円形を示す。先端部はすばまって丸味をおびている。体部文様は、両面とも右下がりの隆起線と規則的な列点文で構成される。側縁にも刺突が加えられる。底部は上げ底になり、4個2対の小孔がある。

円盤状土製品 (1727—1732) 1729は、当初から円盤状土製品を目的にして製作されている。本遺跡では、同様のものは他に1点あるだけである。1727・1728・1730・1732は周縁が打ち欠かれ、1731は周縁が研磨されている。1727・1730は沈線区画の磨消帯を伴う土器片を利用し、1727は刺突文もみられる。1731は磨消帯の部分の利用で、ほぼ方形である。1732は粗製土器の口縁部破片を利用している。

剥片石器 (1733・1735—1741) 1333は非折り面型尖頭形の彫器である。1736は2辺を折断して方形に形を整えた抉入石器である。1737は削器の破損品である。1738は縦長剥片の両端に2個1対の刃部をもつピエス・エスキュー、1739は削器状石器である。1740は両側縁に鋸歯縁状の刃部が作られる。1741は素材の自然の浅い抉入部分に微細剝離痕を伴う。1735は彫器に分類したが、除外する。

礫石器 (1734) 石皿の破片である。皿部の縁は高く作り出され、裏面には2個の脚を伴う。

この住居地の炉は石囲いの形態をもつもので、埋設土器は伴わない。この形態の炉は大木10式併行期の住居地に認められる1種であり、同時期の住居地であろう。

GⅡ-8住居址 この遺構は欠番である。

GⅡ-9住居址 (第176図—第178図1742—1773、図版61・68—70・73・78)

土器 (1742—1750・1752・1754—1764) 1742—1744・1754・1755は沈線文口縁部である。1746・1747・1756—1760は隆起線文口縁部である。1746・1747・1759・1760などは刺突文を伴う。1745・1758は内面にも隆起線を伴う。1752は無筋縄文を地文にした粗製の深鉢形土器である。文様によって時期が識別できる土器はすべて大木10式に併行する。

土製品 (1753) 滑車形耳飾りである。正面には、中央部の1個を中心にして、同心円状に竹管文が2重にめぐる。背面は一部が欠けているが、同心円が3重になる。

円盤状土製品 (1768・1769) いずれも周縁は研磨されている。

剥片石器 (1751・1765—1767・1770—1772) 1751・1765はほぼ直線形の刃部、1766は破損しているが、やや凸形の刃部をもった削器である。1771は側縁の一部に削器としての刃部が作

られるが、短い。1772は横形削器である。1767は尖頭部先端に2次加工が施されている。1770は周縁に微細刻線痕を伴う。

礫石器 (1773) 半分ほどを欠いた石皿である。楕円形に成形加工されるが、脚は伴わない。皿部はほぼ平担である。

この住居址は炉が輸出されなかったが、炉埋設土器の抜き取りが考えられる痕跡があった。そのことや占地・住居形態・埋土などからは、大木10式併行期の住居址と考えられる。

GⅡ-10住居址 (第179図-第182図1774-1827、図版41・54・57-59・61・62・64・65・68・69・71・75・76・85)

土器 (1774-1794) 1774は底部を欠いた深鉢形土器である。外面は無文で、ていねいに全体が磨かれている。1775・1776は体部下半から底部にかけての残りである。1777-1779は沈線文口縁部で、1777は刺突文を伴う。1777・1779は内面に緒状隆帯をもつ。1780-1784は刺突文・竹管文を伴った隆起線文口縁部である。1783は中空突起部の破片である。1784は隆起線で区画された口縁部の一部が刺突文で充填されている。隆起線および口唇部に沿っては竹管文が加えられる。1792は高台あるいは器台の部分であろう。無文で、円孔を有する。1777-1786・1788-1791は大木10式に併行する。1774は器形や共存遺物からみて、同時期のものであろう。

土製品 (1795) 破片であるが、完形品は1726のような形態をもつ土製品である。両面は円形刺突文が加えられ、側縁にも刺突文を伴う。

円盤状土製品 (1796-1798・1804-1806) 周縁への加工は、1797・1798が研磨、他は打ち欠きである。1796・1797は沈線区画の磨消帯の文様部分、1798は土器底部を利用する。

切片石器 (1799-1803・1807-1820・1822) 1799-1801は石鏝である。基部形態はいずれも凹基である。1802は2個1対の刃部をもったピエス・エスキュー、1803・1808は石錐である。1808は刃部先端を欠いている。1809・1810は非折り面型、1811・1812は折り面交差型の彫器である。1816-1820は削器である。1814は削器の破損品である。1807は小型の削器に含めておく。1815は両面に削器としての刃部が作られ、先端部には急傾斜の2次加工がおこなわれる。1813・1822は削器状石器である。

礫石器 (1821・1826・1827) 1821は珪質凝灰質泥岩の小型の礫を素材にし、1側縁から先端部にかけて2次加工された打裂石斧の1種である。側縁の刻線は粗雑であり、刃部は先端部にある。1826はやや扁平な球形の溶岩が素材で、片面にくぼみ気味の平担面が形成されている。磨石の一種かもしれない。1827は接合復元した石皿の完形品である。長楕円形の形状で、低い脚が4個の脚部が形成される。皿部の縁はやや高く残される。

円盤状石製品 (1824・1825) 1824は全体をていねいに研磨し、ほぼ円形である。1825は周縁約1/3に素材の自然面を残し、他の部分を打ち欠いて成形している。

この住居址の炉は、炉縁に黄褐色細礫が敷設された摺鉢状の形態をもつもので、斜位埋設土器を伴う。埋設土器が行方不明であるが、炉の形態からみれば、大木10式併行期に属する住居址である。重複するGⅡ-12住居址を切っている。

GⅡ-11住居址 (第182図1828・1829、図版77)

土器 (1828・1829) 1828は刺突文を伴う隆起線が頸部にめぐり、1829は沈線の接触部に刺突文が加えられた体部破片である。いずれも大木10式に併行する。

この住居址は、床面に直接Ⅱ層が載る在り方を示すため、固有の埋土は確認されていない。したがって、非常に少量の遺物が床直上に出土したにすぎない。炉は、GⅡ-10住居址と同様の形態のものに、直立の埋設土器を伴う。しかし、埋設土器は、深鉢形土器の底部の利用であるうえに、復元できない状態である。炉形態からは、大木10式併行期に属する住居址である。

GⅡ-12住居址 (第182図・第183図1830-1839、図版30・53)

土器 (1830-1836・1838・1839) 1838は文様帯上部から口縁部にかけて大きく破損するために、文様の詳細は不明である。単節斜縄文を地文にし、沈線区画の磨消帯・刺突文充慎の円形区画帯が文様を構成する。1839は有孔の高台部で、つけ根には隆起線がめぐり、1830・1831は沈線文口縁部である。1833は刺突文、1834は鱗状隆帯、1835は刺突文充慎の円形区画帯を体部文様に伴う。1830-1835・1838は大木10式に併行、1839は他の出土土器との共伴関係からみて、同時期のものであろう。

円盤状土製品 (1837) 周縁を打ち欠いて成形し、ややいびつな円形である。

この住居址の炉は、直立埋設土器を伴う浅皿状の形態をもつもので、大木10式併行期に属する。なお、炉埋設土器とともに埋裏が行方不明である。重複するGⅡ-10住居址には切られていた。

GⅡ-13住居址 (第183図1840-1853、図版45・55・83)

土器 (1840-1850) 1843は炉埋設土器である。上半を欠くが、単節斜縄文を地文にした粗製の深鉢形土器である。1840・1841・1844は沈線文口縁部で、1841は隆起線、1844は鱗状隆帯を内面に伴う。1842・1845-1847は隆起線文口縁部である。1842は小円孔を有し、裏面には鱗状隆帯を伴う。1845は波状頂部に小円孔をもち、隆起線は刺突文を伴っている。1846は中空突起をもつ。1849は、体部文様に刺突文が加えられる。1840-1842・1844-1847・1849は大木10式に併行する。1843は器形や作りからみて、同時期のものである。

1843は器形や作りからみて、同時期のものである。

剣片石器 (1851・1853) 1851は尖頭部の周辺に細かな刃部加工をした石錐である。1853は折り面交差型の彫器である。

石製品 (1852) 暗褐色の砂質凝灰岩を素材にした管状石製品である。断面は楕円形である。

表面は研磨されて滑らかであるが、敲打痕をとどめている。一端の面は研磨されて擦痕が著しいが、他端は切截されたままで研磨されていない。長さ7.8cm・直径2.5cm×1.9cm・管の直径6mm～8mmである。

管は断面の中央部から一方によった部分にあけられている。半割の状態で出土したために、穿孔の状態が良く分かる。穿孔は図下端からの1方向穿孔であろう。中央部付近では管がロート状の広がりを示し、直径は最大になる。そのすぐ下にも挟りが深くなる部分がある。さらにその下方では穿孔具の回転状態に対応する最底6単位を把握できるが、長短がある。ロート状の広がりを示す部分から図上方では、穿孔具のブレはほとんどみられず、直線的で滑らかである。穿孔は回転穿孔、穿孔具はロート状の広がりを示す部分があることからみて、管骨類や竹管類の管錐（寺村、1980）である。なお、図上方の端は大部分が製作時の破損であり、管の断面を斜めに切るように研磨されていた。

このような穿孔技術は、本遺跡で出土している笛状石製品（1076・2436）のように長い管を必要とする製品においても応用されているであろう。

この住居址は、炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に所属する。

GⅡ-14住居址（第184図1854—1860、図版34・68）

土器（1854—1860） 1860は炉埋設土器である。底部から口縁部までほぼ直線的に外傾する。頭部にめぐる沈線を基点として、下端に緒状隆帯を伴った沈線区画のU字状磨消帯が4回繰り返され、その間は連続刺突文が加えられた幅の狭い磨消帯で接続される。U字状の文様の内側にも刺突文が沿う。頭部内面には隆起線がめぐり、4ヵ所で口唇にはねあがる。1854・1859は竹管文、1855は刺突文を伴う隆起線文口縁部である。1858は体部に刺突文がもちいられる。1854・1856—1860は大木10式に併行する。

この住居址は全体に削剝を受けていることやⅡ層が直接床面に載る在り方を示しているために、出土遺物は非常に少ない。炉形態や炉埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。

GⅡ-15住居址（第184図—第186図1861—1892、図版26・53・55・57・66—69）

土器（1861—1876・1879） 1868は埋甕である。体部文様は沈線区画のS字状磨消帯が4回繰り返り返され、末端は互いに接触する。地文は単節斜縄文である。口縁部外面と文様単位の接触部には緒状隆帯を伴う。1861・1876は隆起線文口縁部である。1861は小波状口縁部に垂下する隆起線に横方向の刺突が重ねられ、刻みの効果をもつ。1876は刺突文を伴い、口縁部には単節縄文の原体が縦に押圧される。体部は地文だけである。1862・1863・1866・1867・1869は鎖状隆起線文口縁部である。1862・1863は波状口縁の頂部にボタン状突起が貼付される。1869はボタン状突起を伴う鎖状隆起線が頸部にめぐり、体部文様は隆起線で区画される。1870—1872は体部文様が隆起線で区画され、その上に、1870は刺突文、1872は縄文原体が重ねられる。1874は沈線や隆

起線の代わりに竹管文が文様を区画している。1875では体部に刺突文が多様される。1868・1874—1876は大木10式に併行し、1861—1864・1866—1872は後期初頭の土器群であろう。

剃片石器 (1877・1878・1880・1882—1886) 1877は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。1878は1辺、1880は2辺が折断され、刃部には微細刺刺痕を伴う。1882・1883は非折り面型、1884は折り面交差型の彫器である。1886は、交差する折断面に2次加工をして尖頭形の刃部を作った石錐状石器である。1885は削器の破損品である。

磨製石斧 (1881) 茎部側だけが残る。断面が楕円形をした棒状の石斧である。

礫石器 (1887・1890・1892) 1887は五角形柱状の礫で、完形品である。それぞれの面が平滑であるが、図示した面とその反対面が使用によって光沢をおび、床面からの出土ということと併せて台石に分類する。1890は破損した石皿である。成形加工はおこなわれていない。皿面には斜め方向に幅広い凹面が形成され、裏面は平坦である。1892は扁平な球形の礫である。両面に、全体が浅くぼんだ面が形成され、特に片面に著しい。磨石の一種、あるいは見方を変えれば小型の石皿に含まれるであろう。

円盤状石製品 (1888・1889・1891) 周縁を含む全体を研磨し、ほぼ円形に作り上げている。

この住居地の炉は埋設土器や黄褐色細礫を伴わない浅皿状のものである。埋設を手がかりにすれば、大木10式併行期に属する住居地である。

G II—16住居地 (第187図1893—1907、図版56・64・65・75・85)

土器 (1893—1901) 1894—1896は沈線文口縁部である。1895は内面に鱗状隆帯を伴い、1896は刺突文充填の半円形が沈線によって区画される。1897・1898は隆起線文口縁部である。1897は小円孔を有し、刺突文を伴う。1898は竹管文が加えられる。1899・1900は刺突文が体部に多用される。1893は土器底部で、器面は磨滅している。1894—1900は大木10式に併行する。

円盤状土製品 (1902) 形状はいびつな方形であるが、周縁は研磨されている。

剃片石器 (1903・1906・1907) 1903は縦形石匙である。つまみ部と刃部を分ける挟入部は、奥行きが浅い。1906は刃部形態からみて、双刃の錐に含まれるであろう。1907は挟入石器であるが、刃部は小さく、挟りも浅い。反対の側縁には微細刺刺痕がみられる。

磨製石斧 (1905) 長さに比べると幅が広い、小型の製品である。刃部は凸刃形を示す。表面には製作時の擦痕が著しい。

円盤状石製品 (1904) 形はいびつであるが、完形品である。周縁の一部に素材の自然面を残し、他の部分は打ち欠いている。

この住居地の炉は斜位埋設土器を伴う摺鉢状の形態のものであるが、土器が行方不明である。しかし、炉の形態からは大木10式併行期に属するものである。

G II—17住居地 (第187図—第189図1908—1933、図版38・49・55・57・62・64・66—68・70—72)

土器 (1908—1920) 1908は埴埋設土器である。上半の一部を欠くが、単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。1909は台付の深鉢形土器である。台部は無文で、2個1対の小円孔が4ヵ所にあげられる。1911は朱塗りの小型土器であるが、付着痕はわずかしか残らない。口唇部は肥厚して1個の小円孔を有している。無文である。1912・1913は小型土器の底部である。1912は単節斜縄文、1913は無節斜縄文を地文にする。1910・1914は沈線文口縁部で、1914は浅鉢形土器である。1915は肥厚した口唇部に刺突文が加えられる。1916は刺突文を伴う隆起線文口縁部である。1917は中空突起、1918は環状把手をもつ。1920は体部に鱗状隆帯を伴い、磨消帯には朱の付着がみられた。1910・1914—1920は大木10式に併行、1908は器形や作りからみて、同時期のものであろう。1909・1911—1913も共伴土器からみて、大木10式に併行するものである。

円盤状土製品 (1921・1922) 周縁への加工は、1921が部分的研磨、1922が全面研磨である。1921は沈線区画の磨消帯をもつ土器片を利用している。

剥片石器 (1923—1929) 1923は非折片面型の彫器である。1927はほぼ直刃の削器、1929は削器の破損品である。1926・1928は刃部形態からみて、削器状石器である。1924は先端部が折断され、側縁に微細刻離痕を伴う。1925は打面を欠いた部分に微細刻離痕を伴う。

礫石器 (1931—1932) 1931は両面の短軸の中央部に痕を伴う。凹石の一種であらう。1932は大きく深い凹みが両面にあり、片面には著しい擦痕がみられる。凹石と磨石の複合である。

石製品 (1933) 破損している。断面が長方形の細長い小型礫の全面が研磨され、擦痕を伴う。他に加工痕を伴わないことや形態からは、磨石や砥石の類であることも考えられる。

円盤状土製品 (1930) 全面がていねいに研磨され、ほぼ円形である。

この住居址は、埴形態や埴埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。重複するGⅡ-18住居址には切られていることが推定できる。

GⅡ-18住居址 (第189図1934—1939)

土器 (1934—1939) 1934は埴埋設土器であるが、体部下端から底部の部分の利用である。単節斜縄文を地文にする。1935・1936・1938・1939は土器片圍い埴を構成する土器片の一部で、同一個体の破片である。1935が沈線文口縁部であるほかは、沈線区画の磨消帯による文様が体部に展開され、1936・1938は鱗状隆帯、1939は刺突文を伴う。1937は刺突文を伴った沈線文口縁部である。1935—1939は大木10式に併行する。

この住居址は大半がかなりの削割を受け、出土遺物は少ない。埴形態は斜埋設土器を伴う土器片圍い埴で、それを構成する土器片からみて、大木10式併行期に属する住居址である。

GⅡ-19住居址 (第189図一第194図1940—2015、図版51・54・55・58・59・61・62・64・66—

土器 (1940—1978) 1942は体部上半の一部に沈線区画の磨消帯があるものの、破損のために文様についての詳細は不明である。単節斜縄文を地文にする。1940は単節斜縄文、1941は複節斜縄文を地文にした体部下端から底部にかけての土器である。1943—1946・1949・1950・1952・1953・1957は沈線文口縁部である。1946は鱗状隆帯、1949・1950・1952・1953は頸部にめぐる隆起線を内面に伴う。1951は口唇部を起点にして沈線区画の磨消帯が真直ぐに下がり、刺突文で充填されている。1954—1956・1958—1962・1964・1965は隆起線文口縁部である。1954・1955・1959などでは刺突文や竹管文を伴う。1964は小円孔を波状部にもち、刺突文も伴う。1965は刺突文を伴った隆起線が波状部で渦巻く。1963・1966は口縁部内外面に鱗状隆帯を伴う。1970—1973は体部文様に刺突文・竹管文を伴う。1975・1978は波状口縁部内面に鱗状隆帯を伴う粗製土器で、1978は歯状文を地文にした小型土器である。1977は有孔の高台がついている。1942—1975・1978は大木10式に併行し、1976—1978も共伴関係からみて、同時期のものであろう。

土製品 (1989—1992) 1989は環状形耳飾りの破片で、2列の竹管文がめぐる。1990—1992は土偶の破片である。1990は下半の一部が残る。裾部が広がる板状土偶で、正面は規則的に並ぶ刺突文、背面は1個の刺突文から放射状に引かれた沈線で文様が構成される。1991は細かい刺突文が著しい。1992は左乳房を含み、肩部には縦の貫通孔がある。正面から側面には細かい刺突文が加えられるが、背面は無文である。

円盤状土製品 (1979・1982) いずれも周縁は研磨されているが、いびつである。1979は土器底部の破片を利用している。

剥片石器 (1980・1981・1983—1988・1993—2002・2004・2005・2007・2010) 1980は横形石匙である。1981は2辺を折断して三角形に形を整え、2次加工をしている。1983は1辺が折断されている。1984は先端部を折断し、尖頭形の先端部に2次加工をおこない、石錐状の刃部を作る。1985は両面加工の尖頭形の石器である。1986—1988・1993は彫器である。1986・1988は非折り面型、1987は折り面と自然面の交差部が刃部のもの、1993は折り面交差型である。1994・1997は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユである。1997は小型の三角形の剥片の周縁に刃部加工されていることから、削器状石器から転用されたものである。1995は凹形、2001・2004は横形の刃部をもつ削器である。1996—1999・2000・2005・2007は刃部形態からみて削器状石器に含まれる。2007は刃部の一部が挟入しており、挟入石器かもしれない。2002は素材の挟入部に微細剥離痕を伴った挟入石器である。2010は指指状の削器である。

礫石器 (2008・2011—2015) 2008は小型の磨石である。使用面は平坦で、擦痕を伴う。2011・2012は凹石である。2011は両面に合計3個の浅い凹みがある。2012は破損しているが、大型のものである。くぼみは大きく、円錐状に深い。2013は断面が三角形をした長大な礫で、使

用面が大きく凹形にくぼむことからみて、石皿の様な機能を果たしたものであろう。2014は中央部から1辺にかけて浅い溝が形成される。石皿から有孔砥石への転用である。2015は球形の敲石の可能性はあるが、確実なことは言えない。

円盤状土製品 (2003・2006・2009) 2003は約1/2を欠く。いずれも全体がていねいに研磨され、ほぼ円形を示す。

この住居地の炉は直立埋設土器を伴う摺鉢状の形態をもち、炉縁には黄褐色細礫が敷設されている。土器は体部下端から底部にかけての部分を利用するが、もろくて復元ができなかった。炉形態からは大木10式併行期に所属する住居地である。この住居地は重複するGⅡ-20住居地を切っている。

GⅡ-20住居地 (第194図・第195図2016—2029、図版59・61・63・73)

土器 (2016—2020) 2016・2019は沈線文口縁部で、2016は内面に鱗状隆帯を伴う。2017・2018は隠起線文口縁部で、2018は刺突文を伴う。2020は2個1対の小円孔をもつ台部である。2016—2019は大木10式に併行する。

土製品 (2022) 滑車形耳飾りの破片である。沈線によって同心円が描かれたものであろう。

円盤状土製品 (2023) 沈線区画の磨消帯をもつ土器片の周縁をていねいに研磨している。

削片石器 (2021・2024—2026・2028) 2021は折り面交差部を刃部にした彫器である。2025は直刃削器、2024・2025は削器状石器である。2028は先端部に急傾斜の刃部加工をした小型の挿器である。

礫石器 (2027) 円形の脚部1個を含んだ石皿の破片である。皿部の縁は高く残る。

円盤状土製品 (2029) 周縁も含めた全体がていねいに研磨され、ほぼ円形である。

この住居地は炉埋設土器を伴う浅皿状の形態をした炉をもつが、土器は底部だけの利用である。炉形態からは大木10式併行期に所属する住居地である。重複するGⅡ-19住居地には切られている。

GⅡ-21住居地

重複するGⅡ-13住居地に大半が切られて断片的に残るにすぎないことやⅡ層が直接床面を覆うために、非常に少量の遺物が出土したにすぎない。炉はGⅡ-13住居地に貼り床されていたが、埋設土器などは伴わない。GⅡ-13住居地が大木10式併行期に所属することやⅡ層に直接覆われる在り方からは、大木10式併行期の住居地であるとみられる。

HⅡ-1住居地 (第195図・第196図2030—2041、図版48・52・54・84)

土器 (2030—2038) 2035は炉埋設土器である。口縁部を欠くが、無節縄文を地文にした厚手の粗製深鉢形土器である。2030・2031・2033は隠起線文口縁部で、竹管文を伴う。2031・2033は体部にも竹管文が用いられる。2032は波状口縁部の口唇に竹管文が沿う。2036・2037は沈

縄文口縁部であるが、体部は地文以外に文様をもたない。2034は沈線区画の磨消帯の文様が体部に展開し、刺突文を伴う。2030-2034・2036・2037は大木10式に併行する。2035は他の大木10式に併行する粗製土器とは異なり、厚手の土器である。

剃片石器 (2039・2040) 2039は奥行き深い2個の刃部をもつ抉入石器である。2040は削器状の刃部とともに抉入する刃部をもつ。

礫石器 (2041) 小型の垂円礫を素材にする。凸面の一部を除いた大半に擦痕が認められる。特に、凸面の反対には不定方向の擦痕が著しい平坦面が形成される。磨石の一種である。

この住居址の炉は、斜位埋設土器を伴った楕円状の形態を示し、大木10式併行期に属するものである。

HI-2 住居址 (第196図2042・2043)

土器 (2043) 沈線文系口縁部である。大木10式に併行する。

礫石器 (2044) 石皿の破片である。縁は厚く残るが、両面が使われた皿部は減りが著しい。

この住居址は大半が調査区域外にあって、一部が調査できたにすぎないため、出土遺物はほとんどない。炉の形態も不明である。確実な時期は不明であるが、埋土や占地・周辺の住居址の所属時期からは大木10式併行期のものと推定できる。

HI-3 住居址 (第196図一第198図2044-2063、図版27・50・65・74・81・85)

土器 (2044・2045・2048-2055・2057) 2048は埴壇土器である。文様帯の大部分を欠くために詳細は不明である。残存部では沈線区画の磨消帯の下部のみみられる。2049は単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。2044は沈線文口縁部で、頸部内面に隆起線がめぐる。2045・2050-2052は隆起線文口縁部である。2045は竹管文が隆起線に重なるように加えられる。2050・2051は小円孔を有し、竹管文・刺突文を伴う。2055は頸部にめぐる2条の隆起線間が磨消され、隆起線の上には縄文原体が押圧される。2057は無文である。2044・2045・2048・2050-2052は大木10式に併行、2055は後期初頭の土器である。

円盤状土製品 (2046・2047) 2046は周縁を部分的に研磨している。2047は底部近くの土器片を利用するために湾曲し、周縁は約1/2が研磨されている。

剃片石器 (2053・2054・2056・2058・2059) 2054は石錘、2058・2059は削器である。2058は細長い複刃削器である。2053は先端部に尖頭状の刃部が作られる。2056は突出部2ヵ所に丸味をもった刃部が作られる。

礫石器 (2061-2063) 2061はやや扁平だが、球形の磨石である。正面に1個、背面に2個の浅く小さな凹みを伴い、複合石器である。2062は円棒状礫の一端に潰痕を伴う敲石である。2063は使用痕は認められないが、形態を他の類例と比較すると、敲石の可能性はある。

石製品 (2060) 大型の石棒であるが、破損している。頸部と体部は隠帯状に残された高ま

りによって境されている。断面形は頸部・体部とも円形で、頸部に行くにしたがい、細くなる。

この住居址は、埴形態や埴埋設土器からみて、大木10式併行期に属する。

Ⅱ-4 住居址 (第198図・第199図2064-2073、図版25・56・80・81)

土器 (2064・2065・2068-2073) 2065は体部を利用した埴埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。2064は複節斜縄文を地文にし、末端に鱗状隆帯を伴った沈線区画のJ字状磨消帯が4回繰り返される。2068・2073は竹管文を伴った隆起線文口縁部である。2073は中空突起をもち、口唇に沿っても竹管文が連続する。頂部には貫通孔1個がある。2069は小型の土器で、波状部に刺突文を伴う。2072は櫛歯状文を地文にする。2064・2068-2071・2073は大木10式に併行し、2065も同時期の粗製土器であろう。

礫石器 (2066・2067) 2066は石皿の破片を凹石に転用したものである。両面に深く大きい凹みが1個ずつ伴う。他の浅い凹みの多くは素材がもつ自然のものであろう。2067は扁平な球状の礫を素材にする。両面は非常に滑らかであるが、側縁には潰痕が著しい。敲石と磨石の複合石器である。

この住居址は、埴形態からみて、大木10式に所属する。

Ⅱ-5 住居址 (第199図-第203図2074-2123、図版37・49・52・55・65・66・69・70・72・81・85)

土器 (2074-2076・2078-2100) 2074-2076はミニチュア土器である。2074は鉢形土器の完形品である。口縁部は内側に屈曲し、頸部に1条の沈線がめぐる。2075は高台部である。2076は無文である。2078は口縁部を欠いた小型の土器で、沈線区画の磨消帯が曲線的な文様を展開し、文様は体部下半にも及ぶ。2079・2080・2085は沈線文口縁部で、2085は波状部に小円孔をもち、内面には鱗状隆帯を伴う。2081・2083・2086・2087は隆起線文口縁部で、2081・2086は内面にも隆起線を伴う。2087は垂下する隆起線に横方向の刺突が重ねられ、刻みのような効果をもつ。2082・2088は鎖状隆起線文口縁部である。2088は連続刺突文が頸部にめぐる。2090は中空突起部分の破片である。2091は中空の突起部である。内外面とも2個の貫通孔の下に渦巻状の沈線が垂下し、外面には刺突文を伴う。2092-2094は刺突文、2095は刺突文充填の円形区画帯、2096は鱗状隆帯を体部文様に伴う。2089・2097は沈線による地文である。2098は有孔の高台付土器の破片である。2100は櫛歯状文を地文にする小型の土器である。2079-2081・2083-2086・2090・2092-2096・2099・2100は大木10式に併行、2078・2082・2088・2089・2091・2097は後期初頭の土器である。

土製品 (2077) 土製品の破片で、正面に刺突文が加えられている。1726のような形態をもつものかもしれない。

円盤状土製品 (2101-2104) 周縁への加工は、2101が一部研磨、2102は全周研磨、2103・

2104は打ち欠きである。2101は口唇部を含む土器片を利用している。

剃片石器 (2105—2118) 2105は双刃の石錐である。2107は1辺、2108は2辺を折断し、鋭い1辺を刃部にする。2106は一部を欠くが、周縁を2次加工して、尖頭形の刃部を含むいくつかの刃部が作られる。2109—2111・2114・2115は削器である。2110・2115は複刃である。2109は鋭い尖頭状の刃部も作り出している。2112・2113・2116—2118は削器状石器である。2112は基部側の1辺にタール状付着物が残る。

礫石器 (2119—2122) 2119は石皿の破損品である。皿部の縁はやや高く作られるが、脚は伴わない。2121は卵形の礫を素材にする。磨ったことによる平坦面が一部に形成された磨石である。2122は棒状礫を素材にするが、破損している。両面に浅い潰痕、1側縁に敲打による潰痕を伴う。2120は断面が三角形に近い棒状礫である。使用痕は認められないが、形態からは敲石に含まれる可能性がある。

円盤状石製品 (2123) 全面がていねいに研磨され、ほぼ円形である。

この住居址は拡張住居址で、出土遺物は新期の住居址に共伴する。古期の住居址の炉は検出されなかったが、新期の住居址の炉は浅皿状の形態をもち、埋設土器は伴わない。大木10式併行期に所属するとみられるHⅡ-13住居址に切られていることや出土土器・占地・埋土などから考えて、大木10式併行期に属する住居址であることが推定できる。

HⅡ-6 住居址 (第203図2124—2133、図版66・67・81)

土器 (2124—2126) 2126は隆起線文口縁部で、頸部にめぐる隆起線の上には竹管文が重ねられる。2124は単節斜縄文の上に、1条の沈線が横に引かれる。2125はやや小型の粗製土器である。2126は大木10式に併行する。

剃片石器 (2127—2129・2132・2133) 2128は小型の削器、2127は刃部形態からみて削器状石器である。2129は先端部から1側縁にかけての角を含んだ部分に刃部加工される。2132は削器状刃部と石錐状刃部とが複合する。2133は非折り面型の削器である。

礫石器 (2130・2131) 2130は棒状礫が素材である。長軸方向の中央部には敲打による潰痕が連続し、一端にも潰痕を伴う。また、一面では擦痕が一部に認められる。2131は側縁の一部に潰痕を伴い、両面から側縁にかけては擦痕が認められる。敲石と磨石の複合である。

この住居址は、削割を受けていることや他の遺構との重複により破壊が著しく、出土遺物は少ない。炉は石囲いの形態であり、埋設土器はもたない。大木10式併行期に所属するHⅡ-11住居址に切られていることや占地・埋土などを考慮すると、大木10式併行期に属するとみられる。

HⅡ-7 住居址 (第204図・第205図2134—2159、図版50・60・64・66・68・75・84・85)

土器 (2134—2146) 2134は埋設土器である。体部上半を欠くが、単節斜縄文を地文にす

る粗製深鉢形土器である。2135は波状部に隆沈線による渦巻文をもつ。2136は沈線文口縁部で、内面に縞状隆帯を伴う。2137—2143は隆起線文口縁部である。2140は垂下する隆起線に横方向の刺突が重われ、山形をした頂部の口唇部には1個の竹管文が穿たれ、両脇には刻みが入る。2142は低い隆帯に縄文原体が押圧され、2143は半截竹管文が重られる。2141は中空突起である。2144は櫛歯状文を地文にする。2135は大木9式、2136—2139・2141・2143は大木10式に併行する。2140・2142は後期初頭のものであろう。2134は器形や作りからみて、大木10式に併行するであろう。

円盤状土製品 (2147・2148) 2147は口縁部にボタン状突起と沈線による小渦巻文をもつ後期初頭の土器片を素材にし、周縁の約1/2を研磨している。2148は全周を研磨している。

剃片石器 (2149—2155) 2149は石鏃で、基部形態は凹基である。両面の一部にタール状付着物が残る。2150は2辺が折断された折断石器、2151は刃部加工や形態からみて石鏃、2152は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。2154は1辺を折断して形態を整えた削器、2155はほぼ直線形の刃部をもつ削器である。2153は尖頭形の刃部をもつ小型の削器である。

礫石器 (2156) 敲石・磨石・凹石の複合した石器である。敲打による潰痕は両端にみられ、特に一端ではそれが著しい。磨石としての使用痕は両側縁に認識でき、凹みは両面に形成されるものの、浅い。

磨製石斧 (2157) 小型である。基部側を欠くが、破損後は片面を研磨して再生している。刃部形態はやや凸形になる。

石製品 (2158) わずかに破損しているが、全体がていねいに研磨されている。その他の加工痕はみられない。

円盤状石製品 (2159) 全体が研磨され、ほぼ円形になる。

この住居地の炉は石囲いに埋設土器を伴う形態のものである。そのことや埋設土器からみて、大木10式併行期に属する住居地であろう。

HⅡ—8 住居址 (第205図—第208図2160—2206、図版34・37・51・53・55・57・64・65・67・80・85)

土器 (2160—2187・2201) 2160は斜位の炉埋設土器である。口唇部を欠くが、頸部には鎖状隆起線がめぐり、ボタン状突起が貼付された部分から口唇部へはね上がってゆく。単節斜縄文を地文にする。2161は直立の炉埋設土器である。単節斜縄文を地文にした粗製深鉢形土器である。2164は4個の波状部を口縁にもつ。波状部では頂部と頸部にボタン状突起が貼付され、両側に2列の連続刺突文を伴った鎖状隆起線がつながる。口縁部無文帯では鎖状隆起線間が沈線によって長方形に区画され、頸部には隆起線がめぐり、体部文様の詳細は不明であるが、沈線区画の磨消帯がみられる。2201はミニチュア土器で、浅い縦方向の沈線が地文である。

2162は複節斜縄文、2163は摺糸文を地文にする。2165・2168は沈線文口縁部、2166・2169・2170—2172・2174—2176・2180は隆起線文口縁部である。2174は刺突文、2176は竹管文が隆起線の上に重ねられる。2175はボタン状突起、2180は凹孔をもち、隆起線には刺突文が重ねられる。2167・2173・2177は鎖状隆起線文口縁部である。2173は波状部の口唇には3個の刻みをもち、鎖状隆起線は頸部をめぐる隆起線と波状部をつなぐ。その接触部にはボタン状突起と同じ効果をわらせた円形の刺突文が加えられる。2167・2177はボタン状突起を伴う。2179は体部に垂下する隆起線を切るように刺突文が重ねられる。2182・2183は同一個体の破片で、沈線区画の狭い、磨消帯が曲線的な文様を描く。2181は口唇に刻みを伴う小突起がある。2184・2186は櫛歯状文を地文にし、2185は口唇部に縄文原体が押し込まれる。2160・2164・2167・2173—2175・2177などは後期初頭土器群、2165・2166・2168—2170などは大木10式に併行するであろう。

円盤状土製品 (2188・2189) 周縁への加工は、2188が部分研磨、2189は打ち欠きである。

剥片石器 (2190—2197・2199) 2190は裏面の一部を欠く飛行機鏃である。2191は横形石匙、2195は石鎌である。2194は基部を折断して長方形に形を整えている。2197は削器、2196は削器状石器である。2199は粗い2次加工によって、丸味をわびた刃部が先端部に作られる。2192・2193は小型の剥片に使用痕がみられる。

礫石器 (2198・2203・2204) 2198は裏面に大きな剝離面を伴う。そのために、一端は片刃様の刃部になり、使用によるとみられる剝落痕を伴う。表面には磨ることによって平坦面が形成され、擦痕が著しい。それに接して潰痕がある。磨石と凹石・チョッパー様の石器が複合している。2203は1個の脚部を含む石皿片である。2204は形態的には磨石に含まれる可能性がある。

石製品 (2000) 小型の有孔石製品で、約1/2を欠く。本来の形状は長方形で、全体が磨かれている。中央部には両面から回転穿孔している。

円盤状石製品 (2202・2205・2206) いずれも全体が研磨されている。2202は2個1対の浅い抉り2組を伴う。

この住居址の炉は、直立と斜位の2個の埋設土器を伴う石囲いの形態である。斜位埋設土器は鎖状隆起線とボタン状突起による文様をもち、後期初頭に属するものであり、住居址もその時期に属するものであろう。

II-9 住居址 (第208図・第209図2207—2217、図版49・57・64・75)

土器 (2207—2211・2214) 2208は刺突文を伴う隆起線文口縁部、2209は鎖状隆起線文口縁部である。2210は波状頂部にボタン状突起があるが、沈線による文様が摺糸文の地文の上に引かれる。2211は網目状摺文が地文である。2214は小型の無文土器である。2208は大木10式に併行、2209—2211は後期初頭の土器である。

円盤状土製品 (2216) 網目状摺糸文の土器片の周縁を打ち欠いている。形はいびつである。

剃片石器 (2212・2213・2215) 2212は石刃である。表面に2条の稜線が形成される。2213は基部形態が凹基の石鏃、2215は削器状石器である。

磨製石斧 (2217) 基部側の残存である。表面には製作時の擦痕を伴う。

この住居址は出土遺物が少ない。伊の形態は石圍いで、埋設土器は伴わない。確実な所属時期は不明である。2212の石刃は旧石器時代の遺物である。他の同時代遺物と同様、縄文時代に諸施設が構築されたときに掘りあげられた可能性が強い。

HⅡ-10住居址 (第124図1013・第209図一第211図2218—2237、図版61・62・66・69・76・77・79・81)

土器 (2218—2220・2222—2224・2226) 2226は一部が破損しただけの小型の双口土器である。単筋斜縄文が加えられる。2218は粗製深鉢形土器の体部である。無筋斜縄文を地文にする。2219は刺突文を伴う隆起線文口縁部、2222は沈線文口縁部である。2223は浅鉢形土器であろう。2219—2224は大木10式に併行する。

土製品 (2221・2225) 2221は2個1対の小孔をもつ蓋状の土製品である。ていねいに研磨され、無文である。2225は土偶の破片である。左乳房と左肩部の部分で、両面は規則的な刺突文と竹筥文が加えられる。肩部には浅い刺突1個が縦方向に加えられる。

剃片石器 (2227—2232) 2227は2個1対の刃部をもつピエス・エスキュー、2229・2231は削器である。2232は刃部の奥行きは浅く、削器状石器に含める。2228・2230は細かな2次加工を施し、尖頭形の刃部を作る。

磨製石斧 (2233) 刃部側を破損している。破損して片刃様になった先端は細かな剥落がみられるとともに鈍くなっている。破損状態での再利用が考えられる。

礫石器 (1013・2234—2237) 1013は一部を欠くが、長方形の形をした石皿である。皿部の周縁は高く作られ、裏面には円形～楕円形の4個の脚を伴う。2234は1個縁に著しい潰痕を伴う敲石である。2235は1面に浅い潰痕と擦痕がみられる複合石器である。2236は小型の完形品である。縁の約1/2が高が残るが、使用面が凹面を示すことから、石皿の1種であろう。2237は台石である。断面形がほぼ方形をした長大な礫で、1面では長軸方向に走る擦痕が著しい。(1013は割り付けの誤りにより、第124図に掲載した)

この住居址の伊は黄褐色細礫を伊縁に敷設した深鉢状の形態である。埋設土器は伴わないが、その形態と構築方法は大木10式併行期に属する伊のひとつの型に共通するものである。なお、磨製石斧2233は石皿1013の上に載った状態で、南西壁際の床面から出土した。

HⅡ-11住居址 (第211図一第213図2238—2274、図版47・49・53・57・60・71・75・84)

土器 (2238—2253) 2238は伊埋設土器である。上半部を欠いた粗製深鉢形土器で、単筋斜縄文である。2239は鉢形土器のミニチュアで、無文である。2240は沈線文口縁部である。2242・

2245・2247—2249・2253は隆起線文口縁部である。2242は内面にも隆起線を伴い、2247・2249はボタン状突起が貼付される。2247は隆起線に重なるように刺突が加えられ、鎖状隆起線の形になる。2244は鎖状隆起線文口縁部で、波状部口唇には2個の刻みをもつ。2241は波状口縁で、燃糸文を地文に沈線区画の狭い磨消帯が曲線的な文様を描く。2243も狭い磨消帯を伴う。2240・2242・2245・2248・2250・2253などは大木10式に併行、2241・2243・2244は後期初頭に属する。2247・2249もボタン状突起を識別形質とすれば後期初頭に属する。

円盤状土製品 (2254・2257・2260・2264) 周縁への加工は、2254が一部研磨、2257・2260が全周研磨、2264が打ち欠きである。2257は磨消帯部分を利用する。2260は形が方形である。

剃片石器 (2255・2256・2258・2259・2261—2263・2265—2270) 2255・2256は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。2258は2辺、2259は1辺が折断された折断石器である。2261は折断面と剝離面が交差する部分を刃部にした影器、2262・2263・2265・2267・2268は削器である。2267・2268は破損している。2266は横刃の削器状石器である。2270は1側縁は削器状、反対側は浅い抉入部が刃部になる。2269はいびつな三角形の剃片の2辺に刃部加工を施し、他の1辺には90°に近い角度の2次加工がおこなわれる。

磨製石斧 (2271) 小型の石斧で、刃部の大半を欠いている。

礫石器 (2272—2274) 2272は楕円形をした扁平な礫の両側縁中央部に2個1対の浅い抉入部を作り出す。形態からは石錘に分けることができる。2273・2274は石皿の破片である。2273は皿部の縁が高く作られ、裏面には1個の低い脚がある。2274は楕円形の脚2個がある。脚部の間隔は狭く、やや小型である。皿部はわずかに凹面を示す。

この住居址は拡張住居址で、出土遺物は新期住居址に伴うものである。炉は2基が検出され、古期の炉は直立埋設土器を伴う浅皿状の形態を示す。この土器はほぼ底部だけの利用である。新期の炉は石囲いに斜位埋設土器2238を伴う形態を示す。所属時期は、炉形態や占地・出土土器・埋土・重複などを考慮すると、大木10式併行期あるいは後期初頭であろうが、そのどちらであるかは確実ではない。重複するHⅡ—6住居址を切っている。

HⅡ—12住居址 (第213図・第214図2275—2285、図版69・75・76)

土器 (2275・2282—2284) 2275は炉埋設土器である。単筋斜縄文を地文にする。2282—2284は小破片である。2282・2283は沈線区画の磨消帯を体部にもち、2284は網目状燃糸文である。

剃片石器 (2276—2278・2281・2285) 2276は非折り面型尖頭形の影器である。2277は1辺が折断された折断石器で、刃部には微細剝離痕を伴う。2278は削器、2285は削器状石器である。2281は大型の剃片の両側縁に粗雑な刃部加工を施こした削器である。

磨製石斧 (2279・2280) 2279は基部側約1/2を欠く。両面に製作後の剝落が著しい。刃部は磨滅している。2280は基部の破損後、調整を加えて再生をしている。刃部は磨滅している。

この住居址からの出土遺物は少ない。炉は石囲いに斜位埋設土器を伴う形態のものである。

HⅡ-11住居址と同様、所属時期が大木10式併行期なのか後期初頭なのか、確実でない。

HⅡ-13住居址 (第214図2286)

土器 (2286) 炉埋設土器である。上半部を欠く粗製深鉢形土器で、単節斜縄文地文にする。

この住居址は、大きく擾乱を受けていることなどから、出土遺物をほとんど伴わない。炉は斜位埋設土器を伴う楕円状の形態を示し、黄褐色細礫も敷設されている。炉の作りと形態は大木10式併行期住居址にみられるものである。重複するHⅡ-5住居址を切っている。

HⅡ-14住居址

この住居址は壁が確認できない状態であったため、固有の埋土をほとんど欠き、出土遺物は非常に少ない。炉は直立埋設土器を伴う楕円状の形態を示すものであるが、土器は行方不明である。炉形態は大木10式併行期にみられるものである。

IⅡ-1住居址 (第214図2287-2291、図版48)

土器 (2287・2289-2291) 2289は炉埋設土器である。粗製深鉢形土器で、口縁部はわずかに内湾する。単節斜縄文を地文にする。2290は波状口縁になり、口唇部に刺突を伴う。

製片石器 (2288) 2個1対の刃部をもつピエス・エスキューである。

この住居址は埋土の保存状態が悪く、出土遺物は少ない。炉は石囲いに斜位埋設土器を伴う形態のものである。時期については確実ではないが、炉形態は隣接するHⅡ-11住居址・HⅡ-12住居址に類似する。この3棟は時間的にも近い関係にある1群として把握できるであろう。

IⅡ-2住居址 (第214図2292・2293、図版75)

製片石器 (2292・2293) 2292はナイフ形石器である。直線形を示す刃がブランディングされている。2293は2個1対の刃部をもつピエス・エスキューで、刃部は階段状剥離を示す。

この住居址は全体に削剝が著しく、柱穴の配置から住居址として認定したもので、炉も確認されていない。したがって固有の埋土を欠き、出土遺物はほとんどない。旧石器時代遺物2292は柱穴付近から出土した。住居址の所属時期は不明であるが、占地からはIⅡ-3住居址・IⅡ-4住居址などと時期的な関係をもつことが考えられる。

IⅡ-3住居址 (第215図2294-2307、図版26・46・62・64・74・85)

土器 (2294-2301) 2294は直立の炉埋設土器である。口縁部を欠くが、頸部にはボタン状突起間をつなぐように鎖状隆起線を配する。2295は斜位の炉埋設土器である。網目状燃糸文を地文にする。2297は炉上から出土し、網目状燃糸文を地文にしている。2298は頸部下の破片で、頸部には隆起線がめぐり、体部にはボタン状突起を起点にする隆起線が垂下する。2299は燃糸文の地文に鎖状隆起線を伴う。2296は沈線区画の磨消帯による文様が展開する。2300は網目状燃糸文を地文にし、頸部に隆起線がめぐり、2301は波状部から垂下する隆起線に横方向の刺突

が重ねられる。2296は大木10式に併行、2294・2298・2299・2301は後期初頭土器である。網目状燃糸文をもつ2295・2296・2300も後期初頭のものであろう。

円盤状土製品 (2302) 網目状燃糸文の土器片を利用し、周縁を打ち欠いている。

削片石器 (2303・2304・2306・2307) 2303は石鏃である。基部形態は凹基で、左右非対称である。2304は表面約1/2に粗い2次加工、残り約1/2に細かな2次加工を施した削器である。2307は1辺を折断し、凸形の部分に短い刃部を作る削器状石器である。2306は自然の扶入部とその対辺に微細剥離痕を伴う。

円盤状石製品 (2305) 周縁を打ち欠いている。いびつな多角形に近い形になる。

この住居地の炉は、石囲いに直立と斜位の埋設土器を伴う形態を示す。埋設土器からは後期初頭に属するものである。

I II - 4 住居址 (第216図2308-2318、図版55・61)

土器 (2308・2310-2317) 2310は炉埋設土器である。無節斜縄文を地文にした下半が残る。2308は複節斜縄文を地文にする。2311は隆起線文口縁部で、隆起線を切るような形での刺突が重ねられる。2313-2316は鎖状隆起線文口縁部で、2314を除いてはボタン状突起を伴う。2312は沈線区画の磨消帯を文様にした体部破片である。2317は網目状燃糸文である。2313-2317は後期初頭に属する。

土製品 (2309) 先端部側を欠いた斧状土製品である。側縁に接して引かれた沈線間の両面には、単節斜縄文を地文にする。

円盤状石製品 (2318) 打ち欠いた際の稜が周縁に残って不整な多角形を示すが、全体が研磨されている。

この住居址からの出土遺物は少ない。炉の形態は直立埋設土器を伴った摺鉢状の形態を示すもので、その形態は大木10式併行期にみられるものである。重複するI II - 5住居址には切られている。

I II - 5 住居址 (第216図2319-2321、図版75)

削片石器 (2321) 刃部形態が横刃である削器状石器である。

磨製石斧 (2319) 小型の完形品である。刃部は直刃である。

円盤状石製品 (2320) 1/2を欠く。全体がていねいに研磨されている。

この住居址は出土遺物が非常に少ない。炉は斜位埋設土器を伴うものであるが、土器が行方不明である。所属時期は不明であるが、重複するH II - 4住居址を切っている。

I II - 6 住居址 (第216図・第217図2322-2328、図版72)

土器 (2322・2323・2326) 2322は円孔をもつ中空突起で、頂部にはボタン状突起が貼付され、鎖状隆起線と刺突文が文様を構成する。2323はボタン状突起を口縁部にもち、竹管文が重

わられた隆起線が頸部にめぐる。2322・2323は後期初頭に属する。

制片石器 (2324・2325・2327・2328) 2325・2327は削器である。2324は1辺が折断されている。2328は周縁に細かな2次加工をし、尖頭形の刃部2個を作り出す。

この住居址は直立埋設土器と柱穴によって確認された住居址のため、出土遺物は非常に少ない。炉は試掘の際に大半が破壊され、形態は不明であり、埋設土器も底部だけが残る。所属時期は不明である。

IⅡ-7住居址 (第217図・第218図2329-2333・2336・2337、図版37・57・64・65)

土器 (2329・2330・2336・2337) 2329は炉埋設土器である。口縁部は内傾し、頸部にめぐる隆起線には刺突文が重なって鑄状隆起線に似た形になり、ボタン状突起も伴う。地文は燃糸文である。2330は網目状燃糸文を地文にしている。頸部に沈線がめぐららしい。2336は波状口縁である。波状部にはボタン状突起が配され、口唇に沿っては2条の沈線がその間をつなぎ、体部には沈線区画の磨消帯による文様が展開し、体部にもボタン状突起を伴う。地文は網目状燃糸文である。2337はボタン状突起と隆起線によって加飾され、隆起線には縄文原体が押圧される。いずれも後期初頭の土器である。

制片石器 (2331-2333) 2331は基部形態が凹基の石鏃、2332は両面加工の石鏃である。2333は削器状石器である。

この住居址の炉は石囲いに斜位埋設土器を伴う形態のもので、埋設土器を手がかりにすると、後期初頭に所属する住居址である。

IⅡ-8住居址 (第217図2334・2335)

土器 (2334) 沈線区画の磨消帯をもつ体部破片で、大木10式に併行する。

円盤状土製品 (2335) 周縁への加工は打ち欠きである。

この住居址は埋土の大部分を欠き、出土遺物は少量である。炉は、斜位埋設土器を伴う石囲い炉が存在したと推定されるが、破壊されてしまい、埋設土器の底部だけが残っていた。確実な所属時期は不明である。

2. フラスコ形ビット・ピーカー形ビット

CⅢ-54フラスコ形ビット (第218図2338、図版68)

2338は直刃削器である。

CⅢ-57フラスコ形ビット (第218図2339-2342、図版72・76)

2339は沈線区画の磨消帯と刺突文充填の円形区画帯をもつ体部破片で、燃糸文が地文である。大木10式に併行する。2340は両面の周縁を2次加工した石鏃である。2341も2340に類似の形態をもつ。2342は刃側側を大幅に欠いた磨製石斧である。破損部の一部には、破損後に生じた敲

打による潰痕を伴う。

CⅢ-58フラスコ形ビット (第218図2343-2346、図版64)

2345は撚糸文の土器片を利用した円盤状土製品で、周縁は研磨されている。2343は縦形石匙、2344は槌形削器である。2346は刃部の加工形態からみて、削器状石器に含める。

DⅡ-52フラスコ形ビット (第219図2347、図版64)

2347は有茎の石鏃である。刃部は周辺加工によって作られる。

DⅡ-53フラスコ形ビット (第219図2348-2353、図版53・75)

2348・2349は沈線文口縁部で、2348は口縁部無文帯に2列の連続刺突文を伴う。2350は鱗状隆帯、2353は刺突文充填の円形区画帯と刺突文を体部文様に伴う。2348-2351・2353は大木10式に併行する。2352は小型磨製石斧である。中央部で折れていたものが接合した。刃部は凸刃である。

DⅡ-55フラスコ形ビット (第219図2356)

2356は撚糸文を地文にし、沈線区画の磨消帯が体部文様を構成する。大木10式に併行する。

DⅡ-58フラスコ形ビット (第219図2354・2355)

2355は、周縁が研磨されてほぼ円形の形をした円盤状土製品、2354は削器である。

DⅡ-60フラスコ形ビット (第220図2360)

2360はいびつな円形をした円盤状土製品であるが、周縁は研磨されている。

DⅡ-61ピーカー形ビット (219図2357-2359、図版39)

2359は下半の一部を欠く。頸部には1条の沈線がめぐり、口縁部無文帯が形成される。地文は単節斜縄文である。大木10式に併行する。2358は口縁部を欠いたミニチュア土器で、無文である。2357は使用痕をもつ大型剥片である。

DⅡ-62フラスコ形ビット (第220図2361)

2361は隆起線文口縁部で、口縁部無文帯には2列の連続刺突文が加えられる。大木10式に併行する。

DⅡ-56フラスコ形ビット (第220図2363)

2363は沈線区画の磨消帯がS字形のくずれた文様を描き、末端に鱗状隆帯を伴う。大木10式に併行する。

DⅡ-57フラスコ形ビット (第220図2362、図版27)

文様帯を含む体部中部の残存である。下半と区画する波状沈線がめぐり、その上部には先端に鱗状隆帯を伴う沈線区画の波頭状磨消帯などの文様が4回繰り返される。大木10式に併行する。

DⅡ-65フラスコ形ビット (第220図2364・2365、図版49・76)

2356は双口土器であるが、双口の部分を欠いている。本体部分は環状になり、単節斜縄文が上半に施文され、沈線区画の磨消帯を一部に伴う。2364は基部側約1/2と刃部を欠いた磨製石斧である。基部側の破損部分は片面が調整され、刃部も再生されている。

DⅢ-66ピーカー形ビット (第221図2366、図版38)

2366は小型の深鉢形土器である。体部上半の文様は、5条の平行沈線がめぐり、沈線間は刻目文によって充填される。体部下半は無文である。後期末葉に属する。

DⅢ-67フラスコ形ビット (第221図2367)

2367は刃部の一部が破損した横形削器である。

DⅢ-79ピーカー形ビット (第221図2368)

2368は先端部に急傾斜の刃部加工がおこなわれた搔器である。

EⅡ-56フラスコ形ビット (第221図2369・2370)

2369は周縁が研磨加工された円盤状土製品、2370は凹形の刃部をもつ削器状石器である。

EⅡ-57フラスコ形ビット (第221図2371)

2371は1側縁から先端部にかけて刃部が作られた削器である。

EⅡ-60フラスコ形ビット (第221図2372-2377、図版57)

2376・2377は沈線文口縁部で、2377は刺突文を伴う。2372-2374は隆起線文口縁部である。2372は頸部に環状突起を伴う。2374は中空突起をもち、隆起線には刺突文が沿う。2373も連続刺突文を伴う。2375は体部に刺突文を伴う。いずれも大木10式に併行する。

EⅡ-61フラスコ形ビット (第221図2378)

2378は環状形耳飾りの完形品である。正面には竹管文、背面には細かな刺突文が2重にめぐらる。

EⅡ-63フラスコ形ビット (第221図2379・2380、図版40・76)

2380は粗製深鉢形土器の完形品である。地文は単節斜縄文である。器形や作りからみて、大木10式に併行するものである。2379は磨製石斧の未製品である。側面は磨かれて平滑であるが、両面には痕痕が著しい。刃部も作られていない。

EⅡ-66フラスコ形ビット (第222図2381-2388、図版37・50・52・62)

2381は上半部を欠くために詳細は不明であるが、沈線区画の磨消帯が一部みられる。地文は単節斜縄文である。2384は体部下半から底部にかけて残り、単節斜縄文を地文にする。2382は波状口縁部に沈線による渦巻文を伴う大木9式土器である。2383は沈線文口縁部である。2385-2387は沈線区画の磨消帯を体部文様にもつ。2383・2385-2387は大木10式に併行する。2388は周縁が研磨加工された円盤状土製品である。

EⅡ-67フラスコ形ビット (第222図2389-2395、図版36・40)

2389は破損が著しく、文様の詳細は不明である。沈線区画のJ字状の磨消帯による文様が展開し、鱗状隆帯と刺突文を伴う。2295は頸部に1条の沈線がめぐり、口縁部無文帯が作られる。地文は横位のRLである。2390・2392・2394は沈線文口縁部である。2392は内面に鱗状隆帯を伴う。2389・2390・2392-2394は大木10式に併行する。

EⅡ-69フラスコ形ビット (第222図2396)

2396は綾杉文を地文にし、大木10式に併行する土器であろう。

EⅡ-51フラスコ形ビット (第223図2397、図版53)

2397は連続刺突文を伴った隆起線文がめぐり、隆起線文口縁部で、大木10式に併行する。

EⅡ-52フラスコ形ビット (第123図2398-2400)

2398は沈線文口縁部、2399は沈線区画の磨消帯を体部にもち、2点は大木10式に併行する。2400は表面左側縁と先端部が作る角に2次加工が施され、石錐状の刃部になる。

EⅡ-54フラスコ形ビット (第123図2401-2403)

2401と2402は同一個体であるが、接合しない。単節斜縄文を地文にする大型の粗製深鉢形土器である。2403は2条の隆起線が頸部にめぐり、その下の体部には鱗状隆帯が貼付される。2403は大木10式に併行、2401・2402は器形や作りからみて、同時期のものであろう。

EⅡ-57フラスコ形ビット (第223図2405・2406)

2405・2406は沈線区画の磨消帯をもつ大木10式併行の土器である。

EⅡ-58フラスコ形ビット (第223図2404、図版62)

2404は円盤状土製品である。沈線文口縁部を素材に、打ち欠いたあと、一部を研磨する。

EⅡ-63フラスコ形ビット (第223図2407)

2407は、縹糸文の地文に沈線区画の磨消帯を伴う大木10式に併行する土器である。

EⅡ-65フラスコ形ビット (第223図2408-2410、図版67)

2408・2409は刺突文を伴った隆起線文口縁部で、大木10式に併行する。2410は尖頭形の刃部をもった削器である。

EⅡ-66フラスコ形ビット (第223図・第224図2411-2417、図版52・84)

2411・2412は隆起線文口縁部で、2412は連続刺突文を伴う。2415は沈線文口縁部で、内面に低い隆起線がめぐり、2413・2414は沈線区画の磨消帯をもつ体部破片で、2414は刺突文も加えられる。2411-2416は大木10式に併行する。2417は暗赤褐色をした石質細粒凝灰岩を素材にした小型の石棒である。やや扁平な棒状の礫の全体を研磨し、両端は丸味をおびる。頭部と体部は浅い沈線によって画される。

EⅡ-67フラスコ形ビット (第225図2436、図版82)

2436は筒状石製品である。吹口の一部がわずかに破損しただけの、ほぼ完形品である。石質は硬質凝灰岩である。管は直径8mmであり、楕円形(28mm×12mm)をした押えの孔を挟んで大きく

曲がる。指がかりの孔は楕円形にくぼみ、押えの孔とは逆の面に斜交いに2個がある。全長11cm・幅5.8cm・最大厚3cmである。類似の製品はEⅢ-2住居址からも出土している。(第128図1076)。また、管の穿孔方法についての良好な資料はGⅡ-13住居址から出土している(第184図1852)。

EM-52 フラスコ形ビット (第224図2429)

2429は削器状の刃部をもつ剥片石器である。

FⅡ-51 フラスコ形ビット (223図2426)

2426は凸刃削器である。刃部加工は両面からおこなわれる。

FⅡ-52 フラスコ形ビット (第223図2427)

2427沈線区画の狭い磨消帯を体部にもつ大木9式土器である。

FⅡ-53 フラスコ形ビット (第223図2418-2425、図版53)

2418は口縁部の屈曲が著しい。2421・2423・2424は隆起線文口縁部である。2421は刺突文を伴い、内面にも隆起線をもつ。2424も刺突文を伴う。土器片はいずれも大木10式に併行する。2420・2422は周縁を研削加工された円盤状土製品で、いびつな円形を示す。2425は縁を高く作り出した石皿の破片を凹石に転用している。両面のほぼ同位置に深い凹みが1個ずつある。

FⅡ-54 フラスコ形ビット (第224図2428)

2428は刺突文を伴う隆起線文口縁部で、大木10式に併行する。

FⅡ-55 フラスコ形ビット (第224図・第225図2430-2435、図版35・50)

2430は下半を欠く。本来は3個の中空突起を口縁部に伴うものであるが、1個を欠いている。中空突起から下がる隆起線は頸部をめぐり、その一部に重なるように竹管文が口縁部無文帯に加えられる。体部文様は沈線区画のJ字状磨消帯が6回繰り返され、地文は単節斜縄文である。2431-2433は沈線文口縁部である。2433は内面に鱗状隆帯を伴う。2435は隆起線が文様を区画するらしいが、詳しくは分からない。残存部では環状突起を伴い、無文である。部分的に朱が付着している。2431・2432・2434・2435は大木10式に併行する。

FⅡ-58 フラスコ形ビット (第225図2437-2440、図版55・60・70)

2437はやや小型の深鉢形土器の下半部分で、単節斜縄文を地文にする。2438は沈線文口縁部で、小円孔があり、内面には鱗状隆帯を伴う。2439は地文が縦回転の摺糸文であるが、口縁部には狭い幅で摺糸文が横位に施文される。2438・2439は大木10式に併行する。2440は尖頭形の削器である。

FⅡ-59 フラスコ形ビット (第226図2441・2442、図版52・53)

2441は隆起線文口縁部である。2442・2443は沈線区画の磨消帯を体部にもつ。いずれも大木10式に併行する。

FⅡ-60 フラスコ形ビット (第226図2444-2449、図版56・60・63)

2444は刺突文を伴う隆起線文口縁部、2446は沈線文口縁部である。2445は綾杉文を地文にする。2444-2447は大木10式に併行する。2449は周縁を研磨された円盤状土製品である。形はほぼ方形である。

F II-61 フラスコ形ビット (第226図2450-2455、図版61・62・66)

2450は沈線文口縁部、2454は刺突を伴った隆起線文口縁部である。2452は鱗状隆帯を体部に伴う。2450-2452・2454は大木10式に併行する。2453は周縁を打ち欠いただけの円盤状土製品である。2455は先端部に急傾斜の2次加工がおこなわれた搔器状の石器である。

F II-62 フラスコ形ビット (第226図・第227図2456-2467、図版61・71)

2458は沈線文口縁部、2460は刺突文を伴う隆起線文口縁部である。2457では鱗状隆帯を囲むように刺突文が加えられる。2458・2459は沈線区画の磨消帯を体部文様にもつ。2456-2460は大木10式に併行する。2462は環状形耳飾りの破片で、2重の円形刺突文が両面に加えられる。2463・2464は小型の削器、2465は凸形の刃部をもつ横形削器である。2466は傾斜する先端部に粗い刃部加工が施される。2467はほぼ中央部で折れていたものが接合した。両面にひび割れや剥落が著しいのは加熱を受けたためである。部分的には赤色変化し、煤が付着している。片面にやや大きな凹み1個が形成されているが、形態や大きさからは台石とみることができよう。

F II-64 フラスコ形ビット (第227図2468)

2468は非折片面型の尖頭形をした彫器である。

F II-66 フラスコ形ビット (第227図2469・2470)

2469は体部に刺突文が多用され、鱗状隆帯も伴う大木10式併行の土器である。2470は横刃の削器状石器で、表面には自然面を残す。

F II-68 ビーカー形ビット (第228図2471-2476、図版31・71)

2471は、口縁部の一部を欠いただけのほぼ完形品である。頸部には沈線がめぐり、体部には沈線文区画のくずれた逆S字状磨消帯が4回繰り返され、各単位の接触部には刺突文が加えられる。また磨消帯の末端には鱗状隆帯が貼付され、楕円形区画のうち、隣合う2個には刺突文が充填される。地文は縦位のLRである。2472は上半部が残る粗製深鉢形土器で、RLを地文が充填される。地文は単節斜縄文である。2472は上半部が残る粗製深鉢形土器で、単節斜縄文を地を構成する。2471・2473・2475は大木10式に併行、2472も器形や作りからみて同時期であろう。2476は横形削器に含まれるであろうが、刃部加工は粗雑である。

G II-51 フラスコ形ビット (第228図・第229図2477-2486)

2478・2479は体部下半から底部にかけて残存し、いずれも燃糸文を地文にする。2477は沈線文口縁部、2480は内面にも隆起線を伴う隆起線文口縁部である。2481は内面に鱗状隆帯を伴う。2482は頸部に連続刺突文が加えられる。2483・2485は沈線区画の磨消帯が体部文様にみられる。

2477・2480—2483・2485は大木10式に併行する。

G II—52 フラスコ形ビット (第229図2487—2490、図版58)

2487は幅が広く厚い隆起線が頸部にめぐり、上下に抜ける貫通孔1個を伴う。口縁部側では刺突文が重なられ、体部文様は沈線区画の磨消帯により構成される。2490は体部に刺突文を伴う。2488は口縁部が内傾するが、地文をそのまま残す。2487—2490は大木10式に併行する。

G II—53 フラスコ形ビット (第229図・第230図2491—2507、図版47・48・51・53—56・58・59・67)

2496は体部下半の一部から底部を欠いた大型の粗製深鉢形土器である。体部は緩やかに外傾して、ほぼ直線的に口縁部に達する。地文は無節と単節の2種の斜縄文が混じる。2497は上半が残った粗製の深鉢形土器で、無節縄文を地文にする。2491は沈線文系口縁部で、内面には鱗状隆帯を伴う。2492・2493・2495・2501・2502・2505・2507は隆起線文口縁部である。2501は内面にも隆起線を伴う。竹管文や刺突文を伴うものが多い。2507は中空突起をもつ。2494は波状部外面に低い鱗状隆帯をもつ。2506は刺突文充填の円形区画帯を体部に伴う。2491—2495・2501・2502・2505・2507は大木10式に併行する。2496・2497は器形や作り・共伴土器からみて、同時期のものであろう。2498は非折り面型、2499は折り面と刺離面の交差部を刃部にした形器である。2499は刃部付近にタール状付着物が残る。2500は周縁加工の石鏃である。2503は削器で、打面にも2次加工をおこなっている。

G II—54 フラスコ形ビット (第230図2508・2509)

2508・2509は沈線区画の磨消帯による文様が体部にみられ、大木10式に併行する。

G II—55 フラスコ形ビット (第231図2510—2513、図版54)

2510・2511は沈線文口縁部である。2512・2513は沈線区画の磨消帯が体部文様を構成し、2513は刺突文を伴う。いずれも大木10式に併行する。

G II—56 フラスコ形ビット (第231図2514—2519、図版52)

2514は沈線文口縁部、2516は刺突文を伴った隆起線文口縁部、2515・2517は沈線区画の磨消帯を体部にもつ。いずれも大木10式に併行する。2518は直刃削器である。

G II—57 フラスコ形ビット (第232図2526—2530、図版52)

2526と2527は同一個体の破片である。2526は沈線文口縁部であるが、内面に隆起線を伴う。2527では鱗状隆帯と刺突文が加えられる。2529・2530は沈線区画の磨消帯をもつ体部破片で、2530では刺突文を伴う鱗状隆帯がみられる。2528は地文の上に沈線が引かれるが、磨消されない。2526・2527・2529・2530は大木10式に併行する。

G II—58 フラスコ形ビット (第233図2531—2533)

2531は隆起線文口縁部で、刺突文を伴う。2532・2533は沈線区画の磨消帯の体部文様に刺突文を伴う。いずれも大木10式に併行する。

GⅡ-59 フラスコ形ビット (第233図2534-2536)

2535は沈線区画の磨消帯と刺突文を体部文様にし、2136は地文の上に引かれた沈線に刺突文を伴う。いずれも大木10式に併行する。

GⅡ-60 フラスコ形ビット (第233図2537・2538)

2537は横位のRLを地文にした深鉢形土器の底部である。2538は、2個の尖頭状の刃部が斜交いの位置につくられ、1個は石錐の刃部に似る。

GⅡ-61 フラスコ形ビット (第233図2539、図版54)

2539は刺突文を伴った隆起線文口縁部で、大木10式に併行する。

GⅡ-63 フラスコ形ビット (第233図2545・2546、図版84)

2545は粘板岩を素材にする。全体が研磨され、直線の縁に寄った部分に楕円形の大きな孔があげられる。厚さは、縁が厚く、凸形の縁から孔へ向って次第に薄くなる。装飾品の一種であろう。2546は周縁が研磨された円盤状土製品である。体部下端を利用するために湾曲している。

GⅡ-64 フラスコ形ビット (第231図・第232図2520-2525、図版57)

2520はミニチュア土器の下半部で、単節斜縄文が施文される。2521は鎖状隆起線文口縁部で、波状口縁の頂部にはボタン状突起がある。2523は波状口縁頂部の口径に刻みがあり、垂下する2条の隆起線には直交する形で刺突文が重なる。2524は網目状燃糸文を地文にする。2521・2523は後期初頭の土器である。2525は周縁が打ち欠かれただけの円盤状土製品である。

GⅡ-65 フラスコ形ビット (第233図2540-2544)

2540は沈線文口縁部である。2542は頸部に隆起線がめぐり、その下にある2個のボタン状突起からは隆起線が垂下する。2541は磨消帯の末端に鱗状隆帯を伴う。2540・2541は大木10式に併行、2542は後時初頭の土器である。2543は折り面交差型、2544は非折り面型尖頭形の形器である。

GⅡ-66 フラスコ形ビット (第234図2547-2558、図版35)

2547は本来は4個の中空突起をもつものであるが、2個を欠いている。刺突文を伴った隆起線は頸部をめぐり、4ヶ所で口径部へはねあがる。体部文様は主に沈線区画の磨消帯による構成で、一部に刺突文を伴う。破損のために文様についての詳細は不明である。2548は燃糸文、2549は単節斜縄文を地文にした下半部の残存である。2550・2551・2558は沈線文口縁部、2552・2553は刺突文を伴った隆起線文口縁部である。2557は環状突起をもつ口縁部破片である。2555・2556は沈線区画の磨消帯を体部に伴う。2547・2550-2553・2555-2558は大木10式に併行する。

GⅡ-67 フラスコ形ビット (第234図2559-2561)

2559は深鉢形土器の下半部の残存で、単節斜縄文を地文にする。2560は隆起線文口縁部である。2560・2561は大木10式に併行する。

GⅡ-68ピーカー形ビット (第234図2562)

2562は折り面交差部を刃部にする形器で、刃部は磨滅している。

GⅡ-69ピーカー形ビット (第235図2563-2565、図版53)

2563は沈線文口縁部、2564は竹管文を伴う隆起線文口縁部であり、大木10式に併行する。2565は頭部に2条の隆起線がめぐる。

HⅡ-51フラスコ形ビット (第235図2566-2576、図版53・58)

2566はミニチュア土器の完形品で、無文である。2567は波状部を欠いた沈線文口縁部で、内面には低い隆起線を伴う。2571は竹管文を伴った隆起線文口縁部である。2568は有孔の環状突起を頭部にもち、朱が付着している。2569・2570・2572は沈線区画の磨消帯を体部文様にし、2572では鱗状隆帯と刺突文を伴う。2567-2572は大木10式に併行する。2573-2575は円盤状土製品である。2573は刺突文を伴う隆起線文口縁部を利用している。3点は周縁を研磨されているが、いびつな円形～多角形である。2576は複刃の削器状石器の破片である。

HⅡ-53フラスコ形ビット (第235図・第236図2577-2579、図版56)

2579は3個の大波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁部は刺突文を伴う隆起線によって加飾される。体部文様は波状部の下に刺突文充填の格円形区画帯をもつほか、鱗状隆帯を伴う沈線区画の磨消帯によって構成される。2578は土器の中空突起部であろう。外面の隆起線には刺突文を伴う。2577は沈線文口縁部で、内面頭部には隆起線がめぐる。いずれも大木10式に併行する。

HⅡ-54フラスコ形ビット (第236図2580-2582、図版36)

2580と2581は同一個体の破片で、沈線文口縁部である。2581は鱗状隆帯を伴う。大木10式に併行する。2582は周縁が研磨された円盤状土製品である。

HⅡ-58フラスコ形ビット (第236図2583・2584)

2583は内湾する側辺に粗雑な2次加工が施される。2584は基部が両面から2次加工される。

HⅡ-59フラスコ形ビット (第236図2585・2586、図版54・76)

2585は刺突文を伴う沈線文口縁部で、大木10式に併行する。2586は基部側を欠いた磨製石斧で、刃部はほぼ直刃である。

HⅡ-60フラスコ形ビット (第236図2588)

2588は、鋭い1辺に細かな剥離痕を伴う削器状の石器である。

3. 陥し穴状遺構

CⅢ-108陥し穴状遺構 (第236図2587)

2587は、尖頭部を含めた刃部をもつ削器状石器である。

C III-116 陥し穴状遺構 (第237図2590)

2590はひとつの角を挟んだ側縁に短かい刃部が作られた削器状石器である。

C III-123 陥し穴状遺構 (第237図2589・2592)

2592は直刃削器、2589は両側縁に細かな剥離痕をもつ削器状石器である。

C III-125 陥し穴状遺構 (第237図2596、図版72)

2辺が刃部加工され、尖頭状の刃部を含む削器である。

D II-107 陥し穴状遺構 (第237図2597)

2597は深鉢形土器の下半部が残る。地文は燃承文である。2598は削器の破損品である。

D II-108 陥し穴状遺構 (第237図2591)

2591は刺突文を伴った隆起線文系口縁部で、大木10式に併行する。

D II-110 陥し穴状遺構 (第237図2599)

2599は注口土器の注口部である。付け根の下に2股に分かれた頬を伴う特徴は後期末葉に併行するものであろう。

D IV-103 陥し穴状遺構 (第237図2594)

2594は沈線区画の磨消帯を体部にもつ大木10式併行の土器である。

D IV-109 陥し穴状遺構 (第237図2595)

2595は縞状隆帯を伴う磨消帯を体部にもつ大木10式併行の土器である。

D IV-110 陥し穴状遺構 (第237図2593)

2593は両側縁に2次加工されている削器状石器で、尖頭状の刃部も含む。

E II-101 陥し穴状遺構 (第237図2600)

2600は片面加工の塊状石器である。

E II-108 陥し穴状遺構 (第238図2601-2604、図版67・84)

2601は竹管文を伴う隆起線文口縁部で、大木10式に併行する。2602は周辺に2次加工が施された尖頭石器である。2603は破片であるが、表面には擦痕が著しく、一面には平坦面が形成されている。器種は不明である。2604は小型の石製品の完形品である。ほぼ円柱状で、全体がていねいに研磨されている。

この遺構に出土遺物が多いのは、E II-24・25の2棟の住居址と重複するためである。

F II-101 陥し穴状遺構 (第238図2605-2607)

2606は沈線文口縁部である。2607は沈線区画の磨消帯を体部文様にする。2605-2607は大木10式に併行する。

F II-108 陥し穴状遺構 (第238図2608・2609)

2608はやや小型の土器の底部である。2609は沈線区画の磨消帯に刺突文を伴う体部破片で、

大木10式に併行する。

FⅡ-110陥し穴状遺構 (第238図2610-2613)

2610・2611は刺突文を伴う隆起線文口縁部である。2612は刺突文を体部に伴う。いずれも大木10式に併行する。

FⅢ-101陥し穴状遺構 (第238図2614・2615)

2614・2615は同一個体破片で、頸部には沈線がめぐり、体部文様は沈線区画の磨消帯が構成する。大木10式に併行する。

HⅡ-101陥し穴状遺構 (第238図2617)

2617は底面から出土した。刺突文を伴う隆起線文口縁部で、大木10式に併行する。

4. 不整形ビット

DⅢ-151不整形ビット (第239図2618、図版41)

2618は無文の深鉢形土器である。底部はわずかに上げ底になり、外傾して立ち上がった体部は上半で直立して口縁部に達する。

DⅢ-153不整形ビット (第239図2619、図版38)

2619は小突起をもつ深鉢形土器である。入組文による文様を展開する後期末葉のものである。

DⅢ-156不整形ビット (第239図2620-2624、図版52)

2620は破片のため詳細は不明であるが、頸部には沈線がめぐり、体部には沈線区画の磨消帯による文様が展開する。2621は沈線区画の磨消帯による文様をもつ体部破片で、刺突文を伴う。2620・2621は大木10式に併行する。2622は、表面が全面加工、裏面が周辺加工された石鎌である。2623は削器の破損品、2624は横形削器である。

FⅡ-151不整形ビット (第239図2625-2628、図版56)

2627は刺突文を伴う隆起線文系口縁部である。2625は口縁部に小円孔をもつ。2626は体部に縞状隆帯を伴う。2625-2627は大木10式に併行する。2628は直刃削器で、刃部の反対側縁には急傾斜の2次加工がおこなわれる。

IⅡ-151不整形ビット (第239図2629、図版75)

2629は基部側を欠いた小型の磨製石斧である。

IⅡ-155不整形ビット (第239図2630)

球形の土製小玉である。表面は非常に滑らかである。直径は1cmである。

IV. 遺物についての若干のまとめ

1. 土器 (第246図)

本遺跡から出土の大部分を占めるのは大木10式に併行する時期のものである。完形品あるいは接合復元できた土器はすべて遺構から出土した。第246図にはその代表例と時期的には次に続く土器のいくつかを集成したが、図について若干の説明をしておく。

現在、一般的におこなわれている土器分類の方法は類型分類であり、入為分類に近いものである。いくつかの識別形質を抽出し、その組合せから類型化をおこない、それまでに記載されてきた土器型式と同定する。分類学的にはいわゆる同定の段階にある。その結果、同定できない新しいものがあれば、新たな型式名がつけられて記載される。

大木10式という土器型式名は山内(1937)に priority があるが、その実体には不明の点が多いとされている(丹羽, 1981ほか)。もちろん、山内が大木10式を設定した時代と今日では類似資料の量は比較にならないものがあり、ある識別形質のもとに大木10式とされる土器群が現実には存在し、編年作業がおこなわれている(丹羽, 1971・1981・柳沢, 1980)が、まだ確立したものではない。したがって、従来いわれてきている大木10式土器に形態的形質や所属時期が類似するであろう1群の土器という意味で、本報告書では、大木10式に併行する土器、あるいは大木10式併行土器、さらに時間性を内包させる場合には大木10式併行期のように記載している。

図示した資料の配列は編年といった時間的な序列の意味は含まない。文様を識別形質にして、類似する資料を順次配列したものである。それはⅠ群からⅢ群に分けることができる。

Ⅰ群：沈線土器。文様は沈線で構成されるが、一部では鱗状隆帯といわれる短かい隆起線を伴う。

Ⅱ群：隆起線土器。口縁部文様が隆起線によって構成される場合と体部文様も隆起線によって構成される場合とがある。

Ⅲ群：鎖状隆起線土器。鎖状隆起線が文様の主な部分を構成する。

次に各群を細分する。

Ⅰ群 (1-23)

文様の展開の仕方によって細分される。

A類：体部文様がJ字形(1・2・10・15・22)や逆S字形あるいはそれがくずれた形(5・6・9・14・17・18・20)の磨消帯によって構成される。

B類：体部中部に波状の沈線がめぐり、その上半に磨消帯あるいは充填縄文帯が文様を展開

する (3・4・7・8・11・12・13)。

C類：A類あるいはB類に含まれないもの (16・19・21・23)。ただし、16はA型のJ字形のもの、21はB型に含まれるかもしれない。21・23も単一文様形が横方向に繰り返される点ではA類に近い。

I群A類のJ字形磨消帯をもつもののうち、1は単独の展開、2は文様単位が接触、10・15は末端に鱗状隆帯を伴う。22はJ字形よりもむしろ波頭状形を示すが、口縁部内面には隆起線がめぐり、口唇部にはねあがる部分では小突起をもつ。逆S字形の磨消帯をもつものには3種がある。ひとつは5・6・9のように逆S字形を良く保っているもので、9は口縁部と文様単位の接触部に鱗状隆帯を伴う。2つめは14・17・20のように逆S字形がくずれて末端が楕円形の区画帯を作りだす。文様単位の接触部には、14が刺突文、17が刺突文を伴った鱗状隆帯が加えられ、いずれも末端に鱗状隆帯を伴う。20は地文を残した楕円形区画帯のなかに刺突文が充填される。3つめは18で、逆S字形の末端が流れているとみられる。文様単位の接触部には刺突文を伴った鱗状隆帯をもつ。

I群B類の土器のうち、3・4・7・11・12は同一の文様意匠である。13も類似するが、頸部には沈線がめぐらない。11は文様単位の接触部に鱗状隆帯を伴う。12・13では体部中部を区画する波状沈線に、刺突文充填の円形区画帯を伴い、13では口縁部内面に鱗状隆帯をもつ。8は先のI群とは異なり、単節縄文の逆S字形帯が沈線で区画された上半に横方向に展開する。

I群C類では、16は刺突文充填の円形区画帯を伴う。19は文様単位接触部に刺突文と鱗状隆帯を伴うほか、円形区画帯内は地文の上に刺突文で充填される。21は楕円形区画帯の内部に沈線に沿う刺突文を伴うほか、体部中部には鱗状隆帯を伴う。23はU字形磨消帯が刺突文充填の横方向の磨消帯によって接続され、刺突文と鱗状隆帯を伴う。口縁部内面には隆起線がめぐり、口唇部にはねあがる部分では小波状口縁になる。

I群土器の器形は、5・9のように底部からの立上がりか緩やかで、体部上半が直立気味になって、口縁部がわずかに開く口径と底径比の値が小さいものと、3・11・12・13などのように下半が底部に向かってせばまるため、口径と底径比の値が大きいものがある。他に、やや小型の2は器高に比べて口径が大きく、口径と底径比の値も大きい。23は底部から緩やかに外傾して立ち上がり、ほぼ直線的に口縁部に達する器形をもつ。地文は単節斜縄文が多いが、複節斜縄文 (10) や単節斜縄文と燃糸文を併用 (13) がある。

II群 (24—27・30・33)

隆起線文の用いられ方によって細分できる。

A群：口縁部文様は隆起線によって構成されるが、体部には沈線区画の磨消帯による文様が展開する (24—26・30・33)

B類：体部文様が隆起線によって区画されている(27)。

Ⅱ群A類は口縁部の形態を識別形式にして細分できる。ひとつは24・25のように平縁、2つめは26のように波状口縁、3つめは30・33のように中空の突起をもつものである。全体の器形をみた場合、24は底部から緩やかに外傾して立ち上がり、上半は直立気味になって口縁部がやや外傾するのに対し、25・26・30・33は底部から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は直立気味(26)あるいは内傾する(25・30・33)。後者のⅡ群は器高が低く、口径と底径比の値が大きい特徴をもつ。

いずれの土器も、隆起線に沿う口縁部無文帯に刺突文(24-26・33)や竹管文(30)を伴う。体部には、30がJ字形磨消帯、33が逆S字形がくずれた磨消帯による文様をもつ。33では文様単位の接触部と末端に鱗状隆帯を伴う。24は沈線に沿って刺突文が多用されるほか、鱗状隆帯を伴う。25は末端に鱗状隆帯を伴った逆J字形の磨消帯が刺突文を伴った狭い磨消帯によって連結される。26は波状部下に刺突文充填の楕円形区画帯をもち、鱗状隆帯を伴う。

Ⅱ群B類は1点だけである。27は3個の小突起を口縁にもち、直下には竹管文を伴った鱗状隆帯がある。口唇部にも1個の竹管文が施される。体部は隆起線による方形の区画帯が3単位の文様を構成する。口縁部には連結刺突文を伴い、地文は撚糸文である。器形は、緩やかでほぼ直線的に外傾する。

Ⅲ群(28・29・31・32)

この群は資料が少ない。文様構成によって2分される。

A類：口縁部文様はボタン状突起を伴った鎖状隆起線で構成されるが、体部は地文が施されるだけの粗製土器である(28・29・31)。

器形は、28のように体部が緩やかに外傾し、口縁部がやや外反するものと29のように外傾して口縁部が内傾するものがある。

B類：口縁部文様はボタン状突起間に垂下する鎖状隆起線とそれに沿う刺突文、頸部にめぐる隆起線によって構成される。32が1点だけである。口縁部無文帯には沈線区画の長方形が描かれ、体部には沈線区画の磨消帯による文様が展開される。

以上のようにⅠ群～Ⅲ群に分けることができる。それらの新旧関係を遺構の重複関係から把握することを試みた。当初は、住居址に固有のものであるが埋設土器や埋壘・床面の土器に限定したが、例が非常に少なかったため、埋土出土のものへと広げた。しかし、それでも例は少ない。

1. CⅢ-6住居址はCⅢ-5住居址を切っている。それを第246図の番号で置き換えると、1(が埋設土器)は25(が埋設土器)を切っているということになる。 2. EⅡ-11住居址

はEⅡ-12住居址を切っている。EⅡ-11住居址の床面出土土器（第103図702）はⅡ群A類の浅鉢形土器で、EⅡ-12住居址の炉埋設土器（第105図732）はⅠ群C類である。

他にも重複関係はあるが、一方あるいは両方が粗製土器であったり、破損のために体部文様の詳細が不明であるために詳しくは分からない。

I群-Ⅲ群のうち、鎖状隆起線とボタン状突起を識別形質にするⅢ群は後期初頭に位置づけられるであろう。Ⅱ群A類のうち、中空突起をもつ30・33はⅠ群A類にみられる体部文様をもつ。器形や口縁部文様構成は全く異なるが、体部文様にはⅠ群A類との強い関係がうかがえる。しかし、両者の関係が新旧関係としてあるのか、系統の異なるものとしてあるのかは明らかではない。先にも述べたように1は25を切っている。もちろん、炉埋設土器は、住居址を構築する集団に固有の土器が使用されると仮定してのことである。25は器形や文様構成からは30・33に近い仲間の可能性がある。Ⅱ群B類27は1例だけで、全体に占める位置は不明である。Ⅰ群B類は体部中部に波状沈線がめぐり、文様が体部上半に展開するが、丹羽（1981）はそのような特徴の土器を大木10式土器のⅡ段階に位置づけている。しかし、Ⅰ群A類やC類との前後関係や系統的な関係は明らかでない。Ⅰ群C類に含めた23は口縁部内面に隆起線がめぐり、文様単位を横方向の磨消帯でつなぐ文様意匠は25との関連がうかがえる。本遺跡の場合、口縁部内面に隆起線をもつもので竹管文を伴う例がある。23は、器形的には26などへつながる可能性があり、内面の隆起線は外面へ転化してゆくものかもしれない。

本遺跡の大木10式に併行する土器群Ⅰ群・Ⅱ群は文様や器形を識別形質にしてさらにいくつかに細分できる。しかし、例えば14や17と33の関係では、器形や口縁部文様構成が全く異なるにもかかわらず体部文様には類似性が認められる。土器分類には、形態的形質を識別形質にすると同時に系統的にみることができるとする形質の検討が必要であろう。その意味では、丹羽（1981）が指摘しているように、層位的にまとまりをもった資料の操作によって時間的な前後関係が決められなければならないであろう。第246図に掲載した土器群に時間的な序列を与えることは今後の作業である。

2. 「剥片貯蔵」（第240-245図、図版86-88）

住居址の柱穴や壁寄りのビット・床面上に剥片が集めた状態で出土する例が数多くあった。出土位置の共通性と選別された剥片の集合状態は、廃棄にかかわるものではなく、貯蔵形態をあらわすものと考え、「剥片貯蔵」の仮説をたてた（高橋ら、1978。なおpriorityは高橋文夫にある）。大木10式に併行する時期の14棟の住居址に確認され、1住居址に2-3ヵ所がある場合もあり、合計では20例になる（第2表）。剥片数は最小4片から最大72片である。

出土資料の接合は全部に試み、5例を図示した(第240-245図)。第240図はDⅡ-3住居址出土の接合例である。3種類の石質のもの15片が集合し、13片を占める硬質凝灰質泥岩12片が接合した。粒径7.6cm±の亜円礫を素材にし、すべて自然面を打面としている。打面は、例えば1・2と6・8では180°、6・8と7では90°転位されている。10は側縁に微細剝離痕が認められる。第241図はDⅢ-7住居址の珪質泥岩23片のうち接合した3ブロック19片の例である。全体の形状は復元できないが、粒径7.2cm±の亜円礫が素材となる。この例では打面は自然面を除去して作出している。第242図2633は、EⅡ-4住居址No.1出土の珪質極細粒凝灰岩9片が7片接合と2片接合の2ブロックになる。粒径8cm±×4.2cm±程度の亜円礫が素材で、打面は自然面を使い、すべて1方向からの剝片剝取をおこなっている。第242図2634は、EⅡ-4住居址No.3出土の硬質泥岩21片のうち16片が3ブロックに分かれて接合したものの一部である。この部分での打撃方向は一定である。6-8は自然面が除去されている。3・4の側縁には微細剝離痕が認められる。5片が接合した他の小ブロックは打面の転位がランダムにおこなわれている。これは母岩があらかじめいくつかに分割されていることによるのかも知れない。第243-245図はEⅢ-8住居址の接合例である。硬質泥岩72片のうち56片が4ブロックに分かれて接合した。2635dは2635eと2635gが接合した状態の図である。2635eでは大部分が自然面を打面とし、ほぼ同一方向から剝取されている。それに接合する2635g(2635hを含む)は2635eとは反対側の自然面・風化面を打面とする1群とともにそれと90°の打面をもつ1群とで構成される。2635a・2635b・2635iは2635dに接合できなかったブロックである。

以上の接合例にみられる傾向は、いずれも主に自然面を打面として同一方向から剝取できるだけの剝片を得たあとに打面を転位していることである。石核や打面の調整はおこなわれていない。したがって、得られた剝片は規格化された大きさや形状をもたないランダムなものになる。

集合状態にある剝片の構成は、単一石核からのものが全部を占める場合と石質が異なる複数の石核から剝取されたものが混じっている場合とがある。前者にはEⅢ-8住居址の例などがある。後者の例のひとつにEⅡ-2住居址No.1がある。7種類の石質の剝片が集合しているが、62片のなかには黒曜石1片・玻璃質流紋岩1片・玉髄4片などが含まれ、もっとも数の多い珪質泥岩でも27片である。

剝片は大部分が剝取されたままのものである。しかし、使用痕をもつ剝片や2次加工された製品を含む場合がある。DⅢ-7住居址No.2の11片中には石鏃1点が含まれ、EⅡ-8住居址では43片のなかには削器2点・鋸齒縁石器1点・削器状石器2点・使用痕のある剝片9点が入っている(使用痕としたものは肉眼で観察できる微細剝離痕を指す)。完全な石核に復元できる例がなく、復元できた点数以上に欠落した剝片も多い。貯蔵が、2次

加工を施して製品化するための素材貯蔵なのか、あるいは使用痕のある剥片などにみられるようにそのままの使用を目的にしているのかについては確実なことは言えない。

湯沢遺跡のほかにも県内の調査例にはいくつかの類別がある。高畑遺跡（鈴木ら、1980）・長者屋敷遺跡（高橋ら、1981）・名高根遺跡（三浦、1983）ではいずれも中期末葉の住居址にみられ、湯沢遺跡の場合と時期にも共通性があることが注目される。

第2表 「剥片貯蔵」一覧表

No.	住居址名	地点	出土位置	剥片数	接合数	石 質	備 考 欄	図版
1	DⅡ-3		南東壁際 小ピット	15	12	硬質泥質凝灰岩1) 石質細粒凝灰岩1) 硬質凝灰質泥岩13	U-flc (2) 折断石器1)	240
2	DⅢ-7	No.1	柱穴 埋土上部	23	16	珪質泥岩29	U-flc (1)	241
3	DⅢ-7	No.2	壁際 小ピット	11	2	珪質極細粒凝灰岩1) 濃緑質頁岩石8) 硬質凝灰質泥岩1) 硬質泥岩1)	U-flc (1) 石鏡1)	
4	DⅢ-8		柱穴 埋土上部	70	2	珪質泥岩52 珪質極細粒凝灰岩10	U-flc (8)	
5	EⅡ-2	No.1	壁際 ピット	62	2	珪質凝灰質泥岩5) 玉ずい4) 玻璃質流紋岩1) 黒曜石1) 珪質極細粒凝灰岩17 珪質泥岩29 石質細粒凝灰岩7)	U-flc (3)	
6	EⅡ-2	No.2	床面直上	8			不 明	
7	EⅡ-4	No.1	小ピット	27	18	珪質泥岩10 珪質極細粒凝灰岩9) 珪質凝灰質泥岩7)		242
8	EⅡ-4	No.2	壁柱穴	19	12	鉄石英19		
9	EⅡ-4	No.3	浅皿状ピット	21	16	硬質泥岩20	U-flc (6)	242
10	EⅡ-8		北西壁寄り 床面上	43	4	珪質泥岩13 珪質凝灰質泥岩17 珪質極細粒凝灰岩10 緑色凝灰岩1) 石英安山岩質角礫凝灰岩1) 玻璃質流紋岩1)	削器2) U-flc(9) 鋸齒状石器2) 削器状石器2)	
11	EⅡ-15		西南壁寄り 床面上	49	6	珪質泥岩1) 硬質泥岩1) 珪質凝灰質泥岩47	U-flc (5)	
12	EⅢ-8		壁柱穴	72	56	硬質泥岩22	U-flc (5)	243 245
13	FⅡ-7		柱穴状ピット	16		硬質泥岩16	U-flc (2) 2次加工のある剥片2)	
14	GⅡ-2	No.1	北西壁寄り 小ピット	32		珪質凝灰質泥岩32	削器状石器2) U-flc (9)	
15	GⅡ-2	No.2	厨 溝	17		珪質泥岩1) 珪質凝灰質泥岩1) 玻璃質流紋岩1) 珪質極細粒凝灰岩10	U-flc (3)	
16	GⅡ-2	No.3	厨 溝	4	3	珪質泥岩3) 珪質極細粒凝灰岩1)	播磨破片1) U-flc (3)	
17	GⅡ-5		西壁際 小ピット	数個			不 明	
18	GⅡ-10		床面上	9		珪質泥岩3) 硬質泥岩5) 硬質泥質凝灰岩1)		
19	GⅡ-19		北壁際 床面上	9		硬質凝灰質泥岩2) 珪質泥岩7)	U-flc (2) 削器2)	
20	HⅡ-3		南壁際 小ピット	20		硬質凝灰質泥岩19 珪質泥岩5)		

U-flc: 使用痕のある剥片

なお、「遺構編」の本文中に記載した銅片数と第2表の数とが異なっている場合があるが、第2表の数が正しいものとして訂正する。

3. 堅果類 (図版90)

遺構から出土した堅果類を一覧表にした(第3表)。堅果類を出土した遺構の種類と数は、住居址が23棟、フラスコ形ピットが2基、不整形ピット1基である。

遺構の精査時に見付けることができた堅果類は可能な限り取り上げたが、採集を目的として篩にかけることなどの方法はとっていない。したがって、第3表にあげ遺構数と乾燥重量は偶然性の強い限られた資料である。しかし、住居址にかぎれば、23棟は総数160棟の約14%を占めている。

堅果類は、オニグルミ・ドングリ・クリの3種類がある。ドングリとしたものは、本遺跡の地理的位置と時期から考え、コナラ・ミズナラの類である。出土件数は、オニグルミ19例・ドングリ9例・クリ6例である(Na12と13・21・22はそれぞれ1例として数えている)。乾燥重量の合計は、オニグルミ137.52g・ドングリ98.74g・クリ30.9gである(分離できなかったNa16は除外)。形が良く残っている1個体あたりの乾燥重量は、オニグルミ2.4g・ドングリ0.74g・クリ0.52gであり、その値で乾燥重量の合計を割ると、オニグルミ約57個・ドングリ約133個・クリ約59個の個体数を仮定することができる。

なお、EⅡ-30住居址からは乾し栗を模倣した土器が出土している(第126図1040)。

第3表 堅果類出土遺構

No.	遺構名	出土層位・地点	種類	乾燥重量g	No.	遺構名	出土層位・地点	種類	乾燥重量g
1	CⅡ-3住居址	床 面	オニグルミ	1.7	18	GⅡ-4住居址	床 面	ドンダリ	24.4
2	CⅡ-11住居址	埋 土	オニグルミ	1.5	19	GⅡ-5住居址	柱 穴	ドングリ	30.9
3	DⅡ-5住居址	埋 土	オニグルミ	47.3	20	GⅡ-9住居址	床 面	オニグルミ	2.25
4	DⅡ-7住居址	埋 土	オニグルミ	0.85	21	GⅡ-10住居址	床 面	オニグルミ	5.02
5	EⅡ-6住居址	貯	オニグルミ	0.15	22	GⅡ-10住居址	礎 土	オニグルミ	1.1
6	EⅡ-10住居址	砂埋設土器	オニグルミ	1.2	23	GⅡ-10住居址	埋 土	ドングリ	0.15
7	EⅡ-17住居址	貯	オニグルミ	0.7	24	GⅡ-10住居址	礎 土	ク リ	0.85
8	EⅡ-20住居址	埋 土	オニグルミ	39.5	25	HⅡ-5住居址	床 土	ドンダリ	20.64
9	EⅡ-20住居址	埋 土	ドングリ	4.2	26	HⅡ-5住居址	床 面	オニグルミ	0.55
10	EⅡ-20住居址	埋 土	ク リ	1.0	27	HⅡ-7住居址	貯	ドングリ	0.95
11	EⅡ-4住居址	柱 穴	ク リ	20.8	28	HⅡ-8住居址	埋 土	ドングリ	13.5
12	EⅡ-5住居址	▼ 面	ク リ	0.6	29	HⅡ-8住居址	埋 土	オニグルミ	10.45
13	EⅡ-5住居址	柱 穴	ク リ	7.65	30	HⅡ-10住居址	柱 穴	ドンダリ	0.6
14	FⅡ-6住居址	埋 土	オニグルミ	15.9	31	CⅡ-10フラスコピット	埋 土	オニグルミ	1.0
15	FⅡ-10住居址	柱 穴	オニグルミ	0.9	32	GⅡ-65795ピット	埋土上部	オニグルミ	1.55
16	FⅡ-10住居址	床 面	オニグルミ・ク リ	1.3	33	IⅡ-10不整形ピット	埋 土	オニグルミ	6.1
17	FⅡ-10住居址	埋 土	ドングリ	3.4					

V. おわりに

最初に、遺物の整理過程で明らかになった不備のひとつ、遺物の行方不明ということを取りあげる。

本文にも記載したが、埋設土器と埋甕の一部に行方不明のものがあった。不明になった原因は、野外調査時に何らかの理由による紛失、室内に持ち帰って復元作業に入った段階での混乱、遺物の保管場所の移動時での紛失などいくつかをあげることができる。行方不明による情報量の低下は著しいものがある。

本遺跡の出土土器は前期末葉・中期初頭～末葉・後期初頭～末葉の時期にわたるが、主体を占めるのは大木10式併行の土器群で、大多数の住居址もその時期に関連する。大木10式併行土器は、Ⅳ・1の項でも記載したようにいくつかの小群に分けることができ、それらは時間的に前後関係があるであろうが、層位的な把握はできなかった。

石器類は、剥片や使用痕をもつ剥片も含めた剥片石器の数が非常に多く、器種では削器や削器状石器が主体を占める。石鏃の数は非常に少ない。陥し穴状遺構や石弾とみられる製品が多数存在することに関連して、本遺跡での特殊形態の一端を示すものかもしれない。

「剥片貯蔵」の形態が14棟の住居址に合計20例みられた。「剥片貯蔵」の目的については、剥片の定量的な分析、折断石器や高橋（1982）が指摘した彫器のように、素材を未加工あるいは折断だけによって使用する器種が存在することからも考えてゆく必要がある。

数量の多きで目についたものは円盤状土製品や石弾とした製品である。出土層位や伴行土器、あるいは素材になった土器片そのものからみて、大部分は中期末葉、一部は後期初頭に所属するものである。

それらの遺物以外にも、筒状石製品2点・浮彫り様の技法によって絵画が描かれた石製品・乾し栗を模倣した土製品など、多様な活動の一端をうかがわせる好資料が出土している。なお、握斧をはじめとする数点の旧石器時代遺物も出土しているが、包含層は確認できなかった。

遺構のうち、住居址の所属時期が明らかなものは次の通りである。

前期末葉：EⅣ-4・EⅣ-5・FⅣ-1～FⅣ-4・FⅣ-6～FⅣ-8の各住居址で拡張住居址であるFⅣ-4住居址を2棟に数えると10棟。他にFⅣ-5住居址状遺構がある。

大木10式併行期：先に大木10式を小群に分けたが、埋設土器や埋甕・床面・床直上の土器を時期決定の資料として、住居址を各群に分けると次の通りになる。

I群A類の土器をもつ住居址：J字形磨消帯をもつ群に入るのは、CⅢ-7・DⅡ-7・D

Ⅱ-8・DⅢ-7・EⅡ-20・EⅢ-6・GⅡ-3・(FⅢ-8?)の各住居址である。S字形磨消帯をもつ群に入るのは、DⅢ-10・GⅡ-15・(EⅡ-7?)の各住居址、くずれたS字形磨消帯をもつ群に入るのは、DⅢ-8・FⅢ-5・HⅡ-3の各住居址である。

I群B類の土器をもつ住居址：CⅢ-11・CN-1・DⅡ-4・DⅡ-9・DⅢ-3・DⅢ-5・EⅡ-2・EⅢ-4・FⅢ-2の各住居址である。

I群C類の土器をもつ住居址は、CⅢ-3・EⅡ-14・EⅡ-24・EⅢ-8・FⅡ-6の各住居址である。

Ⅱ群A類の土器をもつ住居址は、CⅢ-5・EⅡ-11・EⅡ-15・GⅡ-14の各住居址である。

後期初頭：HⅡ-8・IⅡ-3・IⅡ-7の各住居址である。

後期末葉：CⅢ-10住居址である。

以上であるが、他に主に炉形態や占地などから時期が推定できる住居址を入れると、前期末葉10棟と住居址状遺構1棟、大木10式併行期123棟、中期末葉～後期初頭3棟、後期初頭3棟、後期末葉1棟、所属時期不明が24構である(拡張住居址のうち、時期が分かる場合は2棟に数えた)。

以上のうち、前期末葉の遺構群は東側斜面下方の湧泉を中心にして営なまれ、重複形態の在り方からみて、少なくとも2時期にわたり営なまれている。後期初頭の住居址群が占地するのは調査区域内でもっとも南側の一区画である。後期末葉の住居址は大木10式併行期の住居址群が周辺に分布するなかに単独であった。

もっとも数が多く、広範囲な分布を示すのは大木10式併行期の住居址全てが同時に存在したものでないことは、住居址の重複形態や陥し穴状遺構との関係、先にあげたように土器が小群に分けられることなどから、当然推測できる。したがって、何らかの識別形質をもとにして、それらの住居址群を分類する必要がある。それは、同時存在の群を抽出し、その間の関係や変遷を明らかにし、そのなかで個別の住居址間の関係を説明することができるようなものであることが望ましい。

上述のように土器を識別形質にしてサブ・グループに分けることも基本的な作業のひとつである。しかし、それによって分類できる住居址は数としては一部にすぎないし、大木10式併行期に属する住居址全体の広がりからみて、同型式の土器をもつ一群として位置づける以上の把握は困難である。遺跡や遺構・遺物をもつ多くの形質に分類の基準を求め、しかもできる限り多くの形質を組合せた資料操作が必要であろうが、本報告書ではその試みをおこなうことができなかった。そこで、遺構に固有の形質のうち、2つだけをとりあげてみることにする。

本遺跡では大木10式併行期～後期初頭の住居址がもつ炉形態は5群14類がある。このうち、

石囲いに埋設土器を伴う形態のものの中で、埋設土器から所属時期が分かる1群は後期初頭に属している。しかし、その形態は大本10式併行期の住居址にもみられるものであり、後期初頭に限定されるものではない。各群各類型の炉を個々の住居址にあてはめて、相似性をもつサブ・グループに分類しようとしても、遺跡内における分布にバラツキがみられ、特定のグループとして把えるだけの相互間の関連が明らかでない。また、住居址の重複関係にみられる炉の変遷については、石囲い炉の形態をもつものが相対的に新しい時期にあることが分かるものの、その他では一定の変遷のパターンはでてこない。更に炉埋設土器を組み合わせても同様の結果である。

その他に、床面積も分類に際しての形質のひとつになる可能性があった。しかし、そこではFⅢ-3住居址とFⅢ-4住居址のように床面積が他に類例がないほど極端に小さく、しかも形態が類似することや隣接する位置関係からは、2棟1群としてのサブ・グループを抽出することができるが、他の住居址を分類する際の識別形質としては単独では使えない。なお、大本10式併行期のCⅢ-7住居址は床面積が48㎡と本遺跡のなかでは非常に大型である。大型住居址の認定や定義にはまだまだ異論があるが、岩手県内での大型住居址の変遷をたどると、大本10式併行期では、通常の型の住居址とは形態的な形質において差は認められず、単に相対的な大きさの違いにある。そのことから、CⅢ-7住居址は大型住居址に分類している。

土器型式では一型式の幅に含まれるとみられる多数の住居址が重複関係も伴って広範囲に分布している場合、土器の型式細分による分類とともに、例えば赤澤ら(1978)がおこなったような統計学的な分析の方法などを試み、可能な限り同時存在の住居址に分類してゆく必要がある。

引用・参考文献

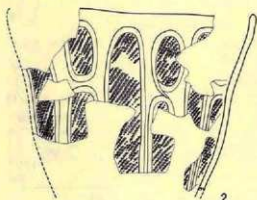
- 赤沢 威・塚原和郎(1978)：「長野県と助尾根遺跡の統計学的分析」季刊人類学 9-2、76-93
- 阿子島香(1979)：「折断調整石器」『聖山』、149-153、東北大学文学部考古学研究会
- 井上克弘(1982)：「東北地方北部の火山灰」考古風土記第7号、1-41
- 及川 洵・遠藤勝博・金子浩昌・柳沢清一(1974)：「門前貝塚発掘調査概要」、1-57、岩手県陸前高田市教育委員会
- 大上和良・土井直夫(1978)：「北部北上低地帯の鮮新-更新両統の層序について」岩手大学工学部研究報告Vol. 31、63-79
- 岡村道雄(1976)：「ビエス・エスキューニについて-岩手県大船渡市赫石遺跡出土資料を中心として-」『東北考古学の諸問題』、76-96、東北考古学会
- 岡村道雄(1979)：「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例-その1-」東北歴史資料館研究紀要第5巻、1-19
- 鈴木道之助(1981)：「図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文」1-152、柏書房
- 鈴木優子・菅原弘太郎(1980)：「高畑遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-V』、163-252 岩手県教育委員会
- 高橋文夫・三浦謙一・金沢光孝・高橋信雄(1978)：「都南村湯沢遺跡」1-535、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文夫(1979)：「遺跡の概略」『長者屋敷遺跡-現地説明会資料-』、13-31、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文夫・佐藤 勝(1981)：「松尾村長者屋敷遺跡(Ⅱ)-遺構編Ⅱ-」1-334、図版1-495、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文夫(1982)：「縄文時代の形器」紀要Ⅱ、55-73、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 寺村光晴(1980)：「石工(玉工)」『新版考古学講座 第9巻』、118-137、雄山閣
- 丹羽 茂(1971)：「東北地方南部における縄文時代中-後葉土器群研究の現代階」福島考古第12号、1-21
- 丹羽 茂(1981)：「大木式土器」『縄文文化の研究 4』、43-60、雄山閣
- 柳沢清一(1980)：「大木10式土器論」『古代探叢-滝口宏先生古稀記念考古学論集-』、55-77
- 八幡一郎(1979)：「石弾・土弾」1-82、人文学会
- 八幡一郎編著(1982)：「彈談義」1-318、六興出版
- 三浦謙一(1983)：「名高根遺跡発掘調査報告書」1-75、(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 山内清男(1937)：「縄文土器型式の細別と大別」先史考古学第1巻第1号、29-32
- 吉田義昭(1960)：「門前貝塚」1-31、盛岡市公民館

圖 版

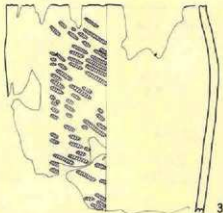
FVKK-I 層



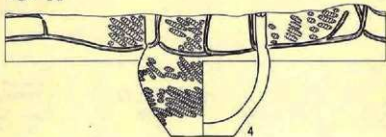
DN40 II 層



FN13 II 層

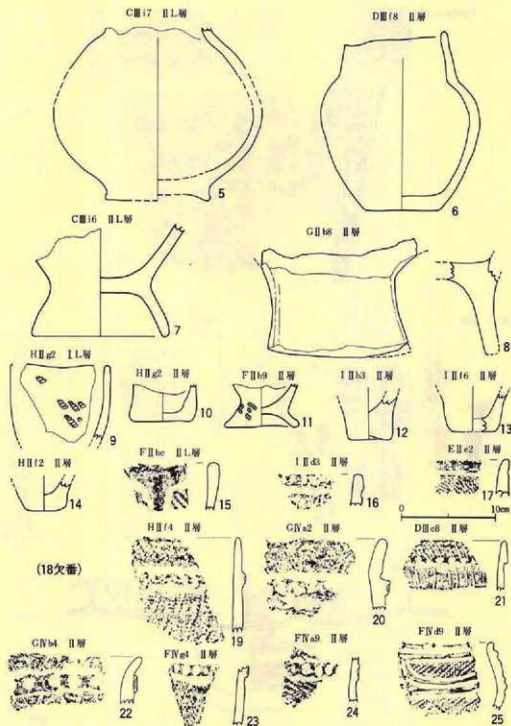


HII.09 II 層



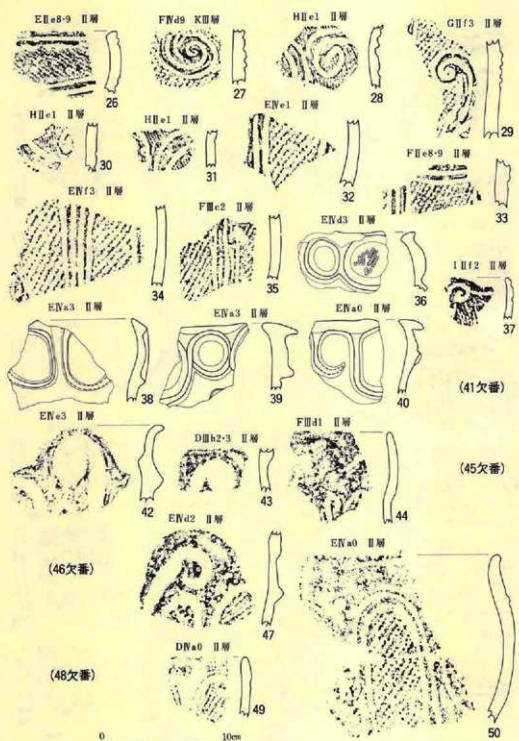
第1圖 遺構外出土遺物(土器)

縮尺
 1~3 1/4
 4 1/2



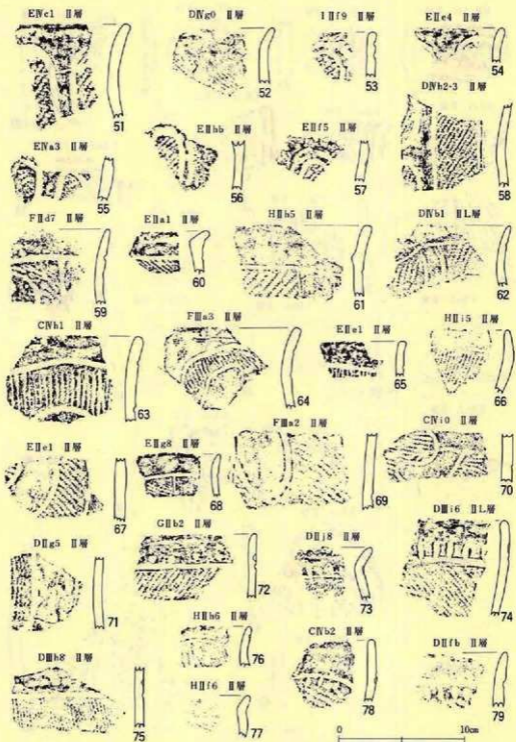
第2圖 遺構外出土遺物(土器・拓影)

縮尺
 5~17 十
 18~25 十



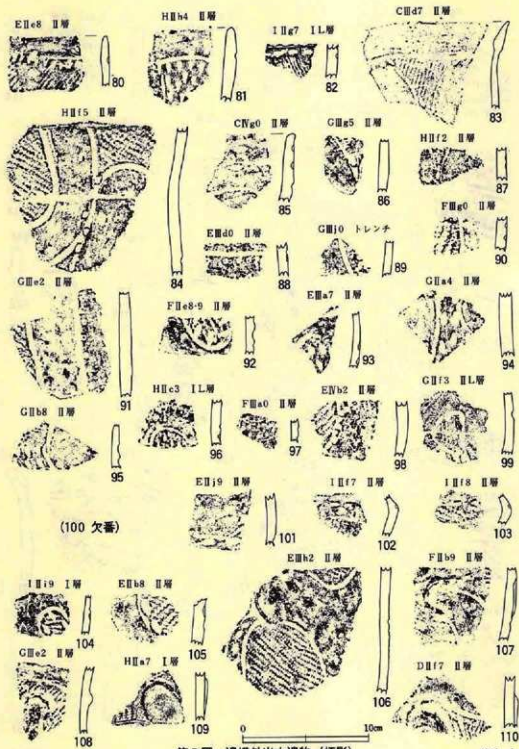
第3圖 遺構外出土遺物(拓影)

縮尺 十



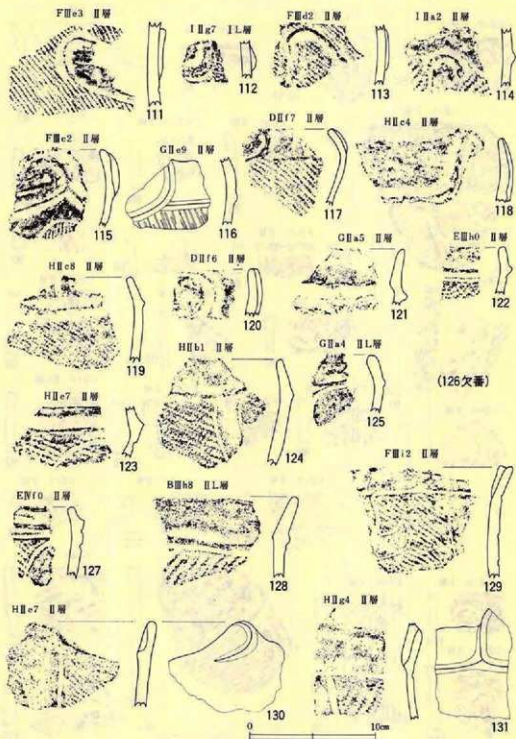
第4圖 遺構外出土遺物(拓影)

縮尺 十



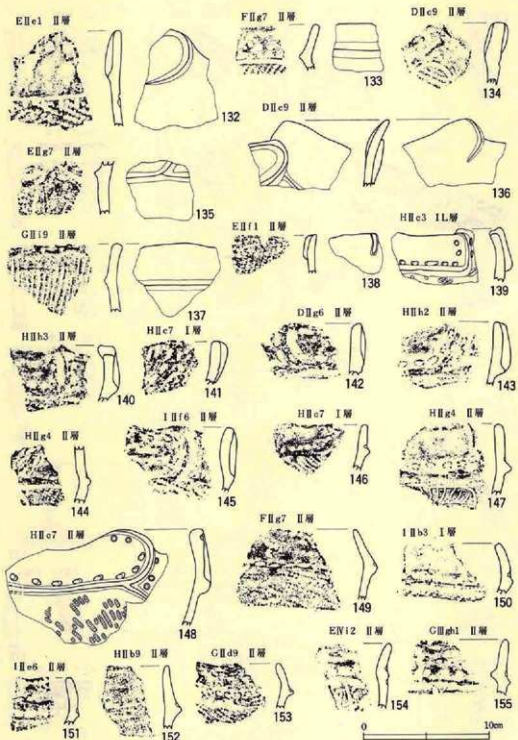
第5図 遺構外出土遺物(拓影)

縮尺 1/5

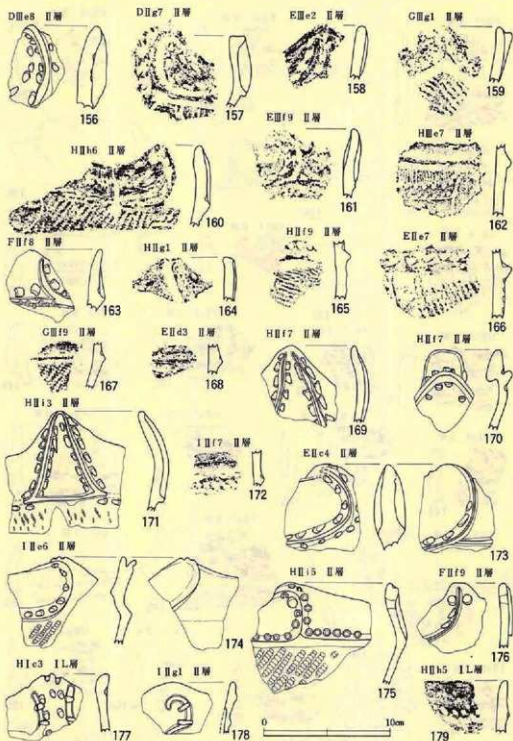


第6圖 遺構外出土遺物(拓影)

相尺 寸

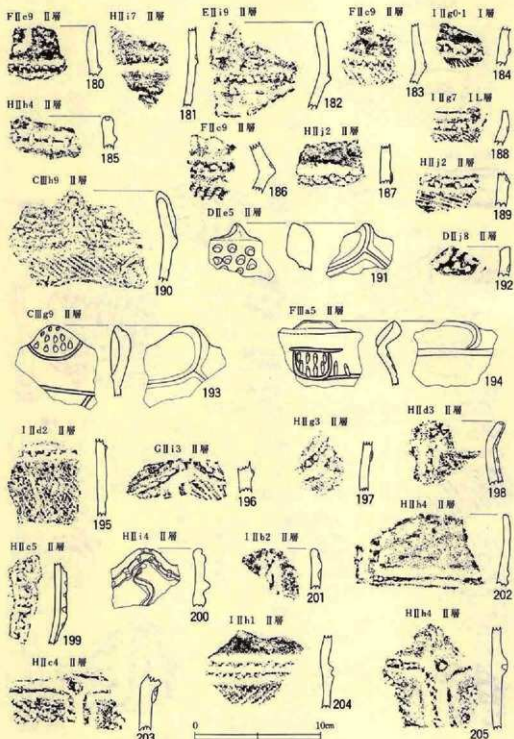


第7圖 遺構外出土遺物(拓影)



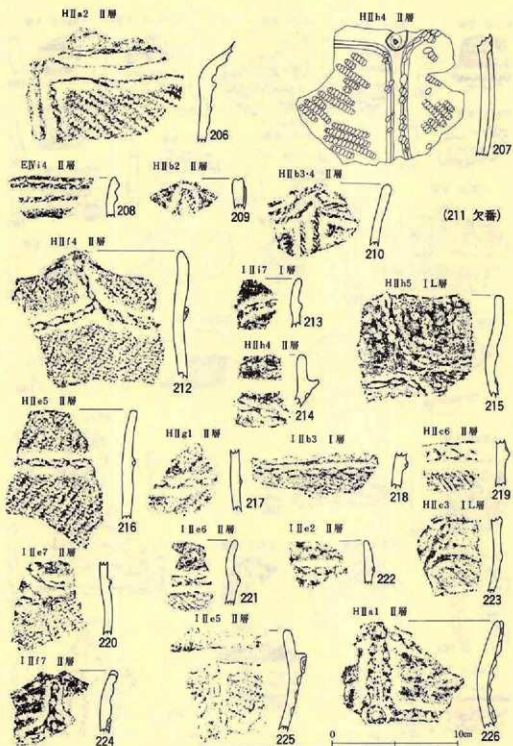
第8圖 遺構外出土遺物(拓影)

縮尺 1/2



第9圖 遺構外出土遺物 (拓影)

縮尺 十



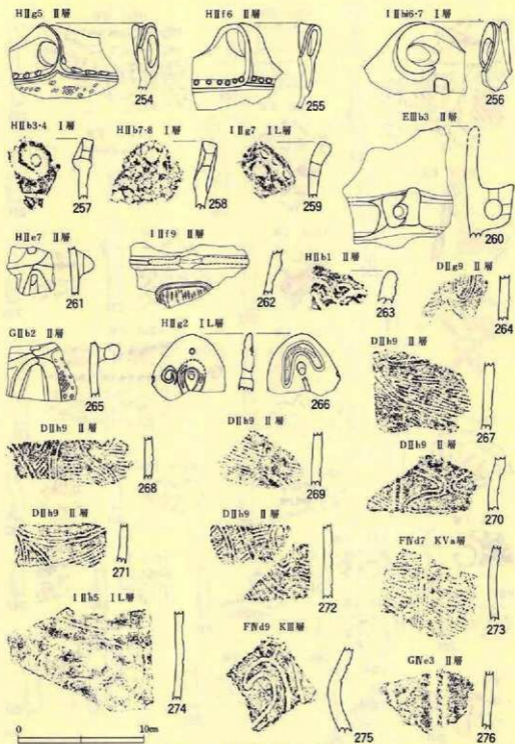
第10圖 遺構外出土遺物 (拓影)

縮尺 十



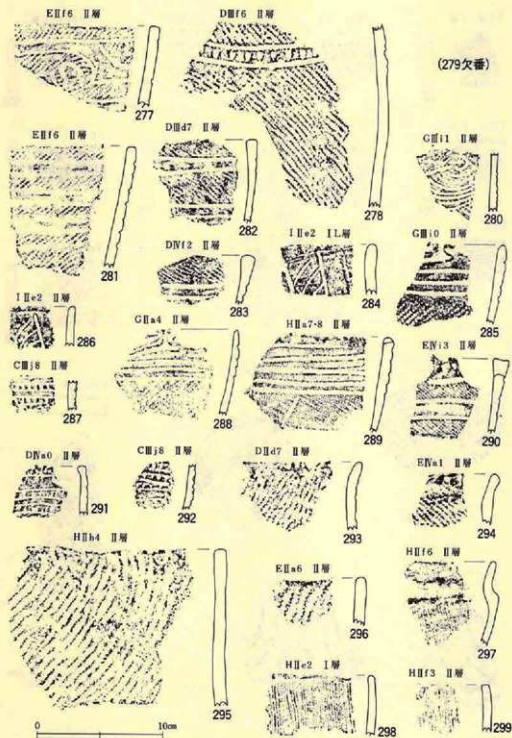
第11圖 遺構外出土遺物 (拓影)

0 10cm
縮尺 十



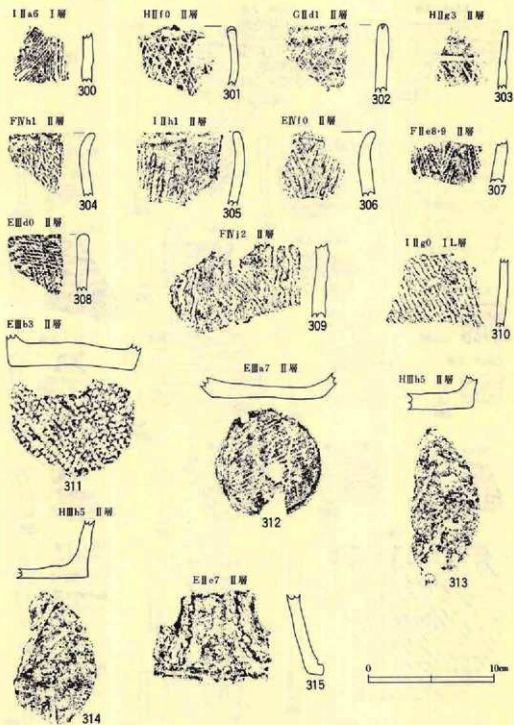
第12圖 遺構外出土遺物 (拓影)

縮尺 ±



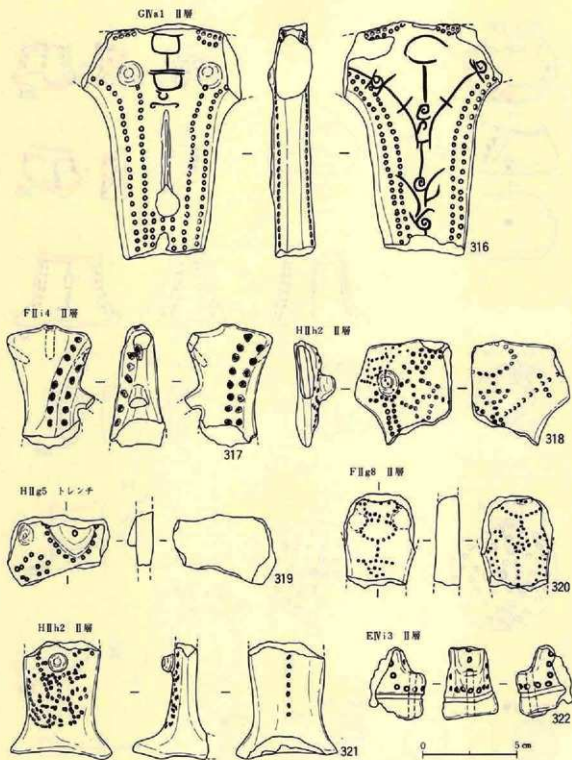
第13圖 遺構外出土遺物(拓影)

縮尺 十



第14圖 遺構外出土遺物 (拓影)

縮尺 1/5

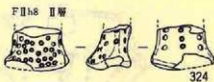


第15図 遺構外出土遺物 (土製品)

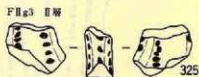
原尺寸



323



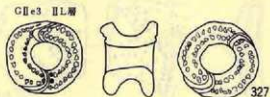
324



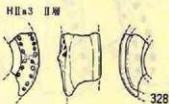
325



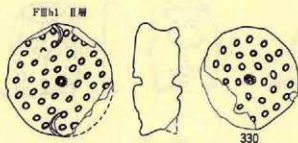
326



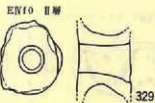
327



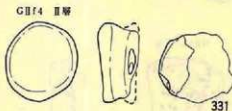
328



330



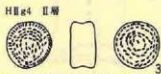
329



331



332

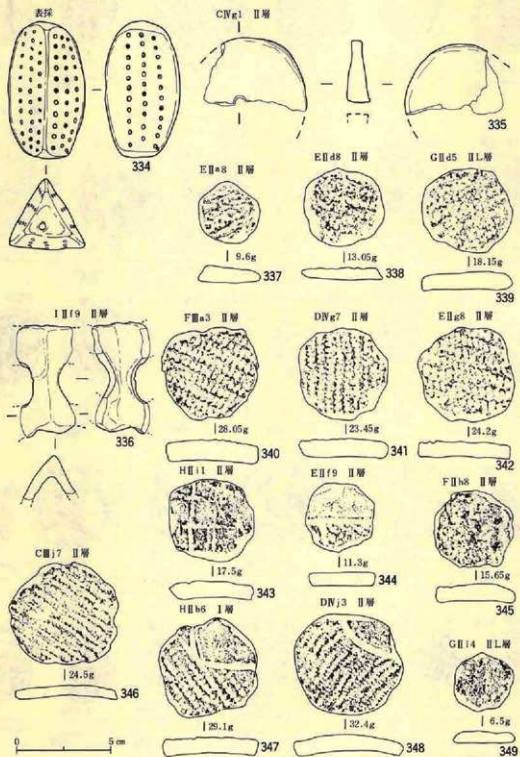


333

第16図 遺構外出土遺物(土製品)

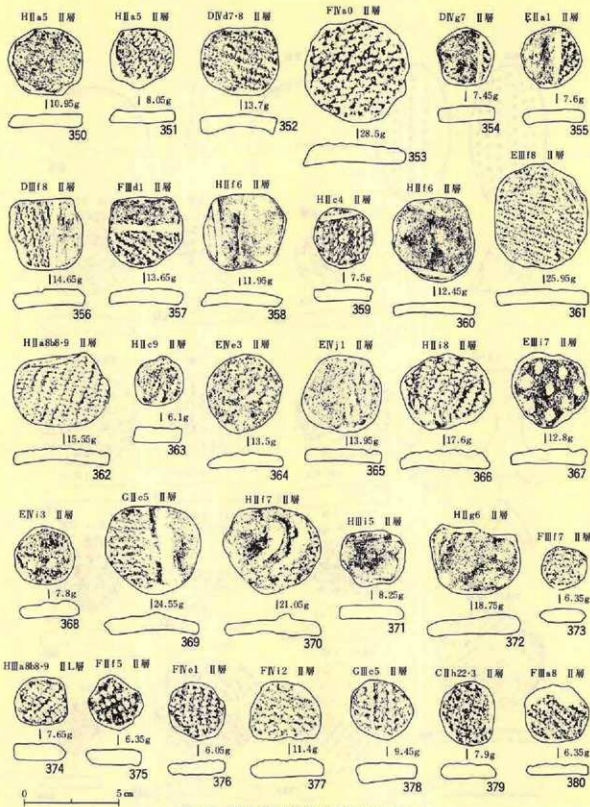
0 5cm

縮尺寸



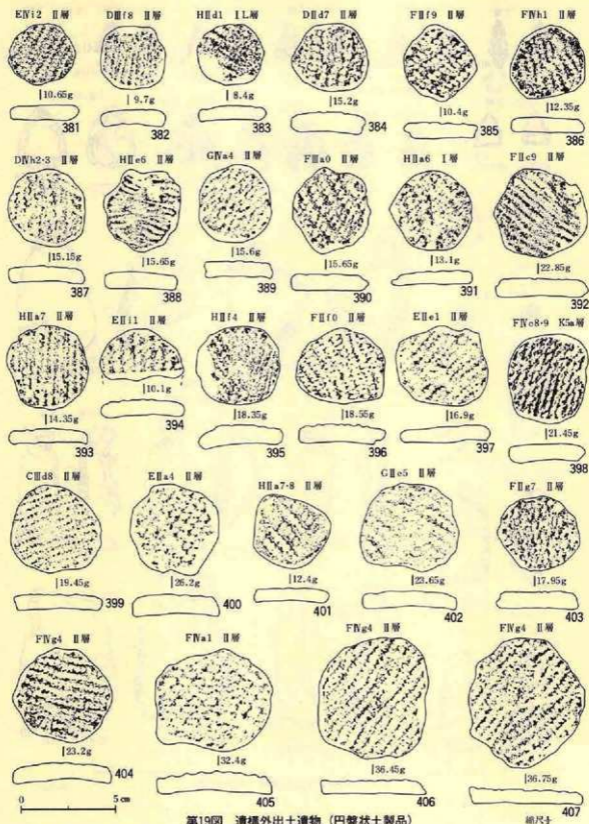
第17圖 遺構外出土遺物（土製品・円盤状土製品）

縮尺十

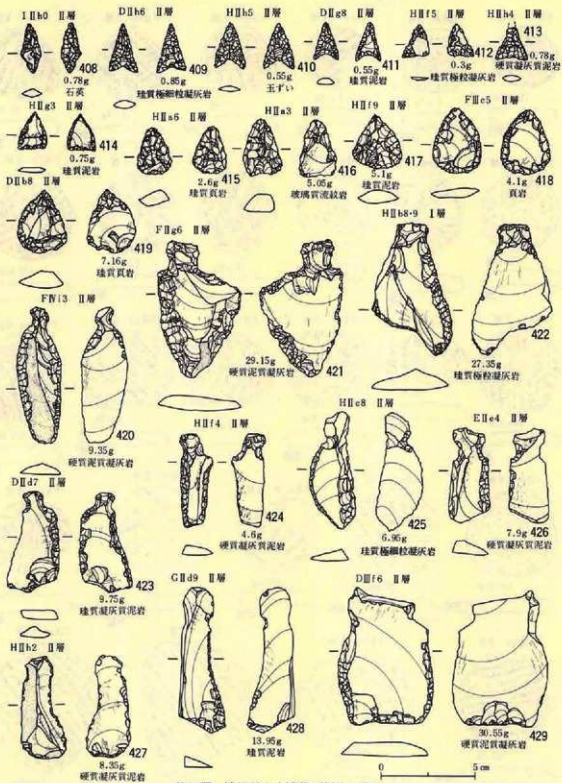


第18圖 遺構外出土遺物 (円盤状土製品)

縮尺寸

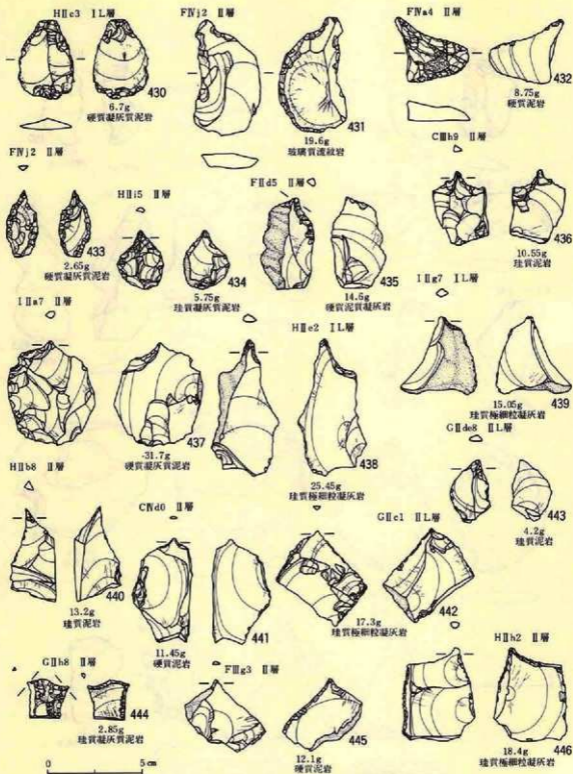


第19圖 遺構外出土遺物 (円盤状土製品)



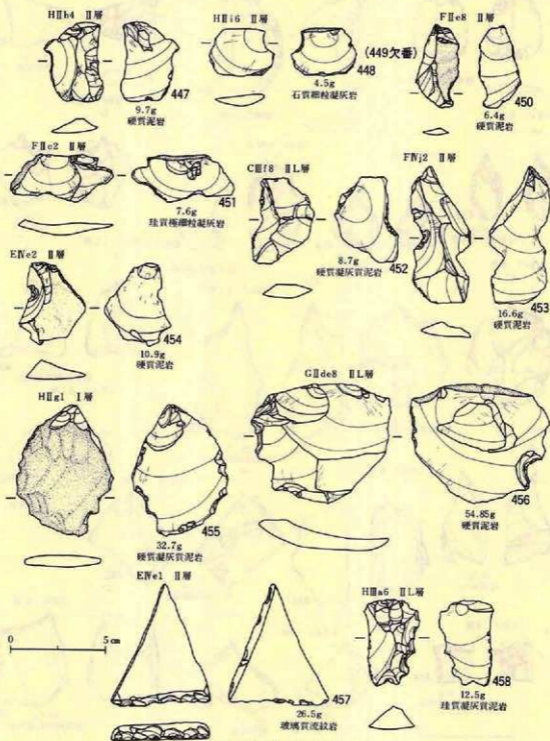
第20圖 遺構外出土遺物 (刮片石器)

縮尺十



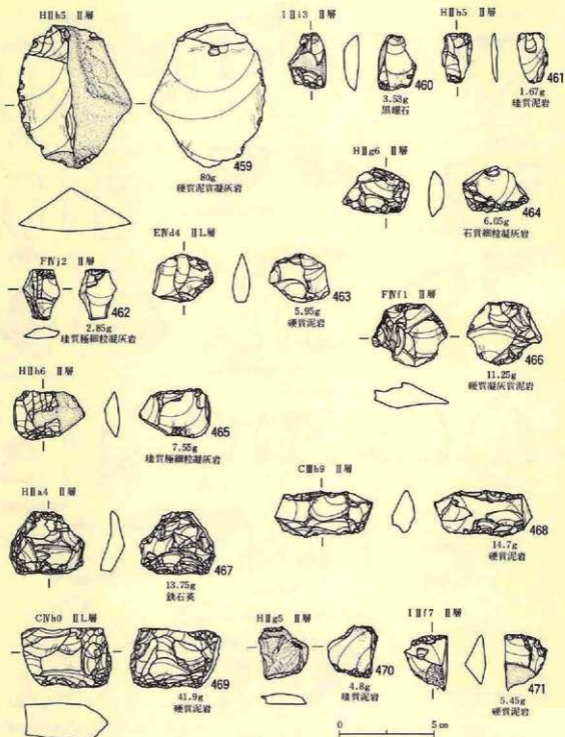
第21圖 遠溝外出土遺物(剝片石器)

縮尺±



第22圖 遺構外出土遺物(制片石器)

縮尺十



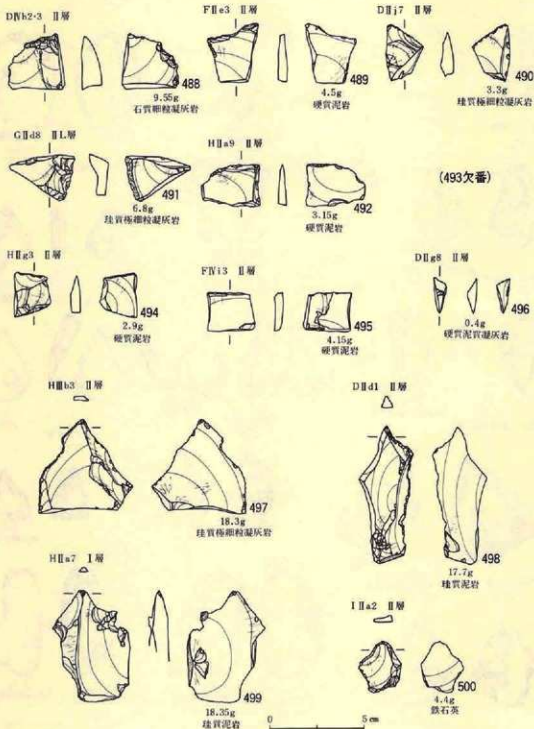
第23圖 遺構外出土遺物(剝片石器)

縮尺



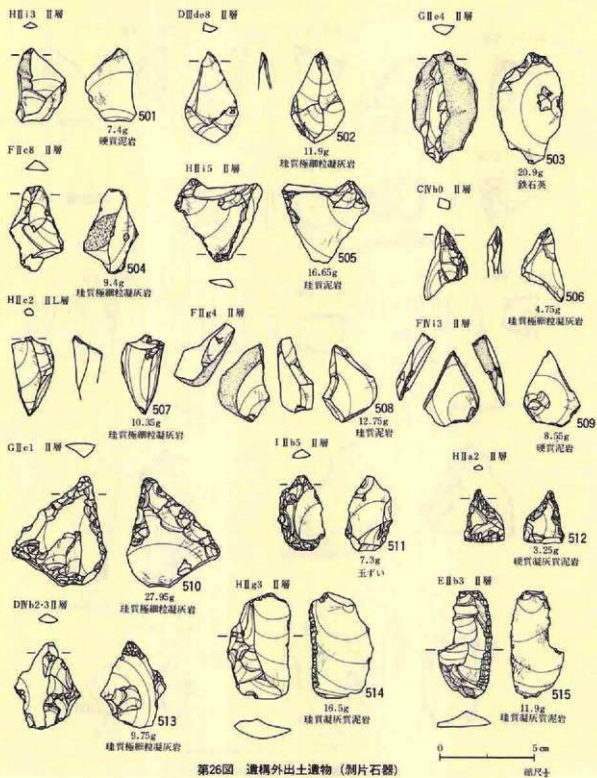
第24圖 遺構外出土遺物(剝片石器)

縮尺子

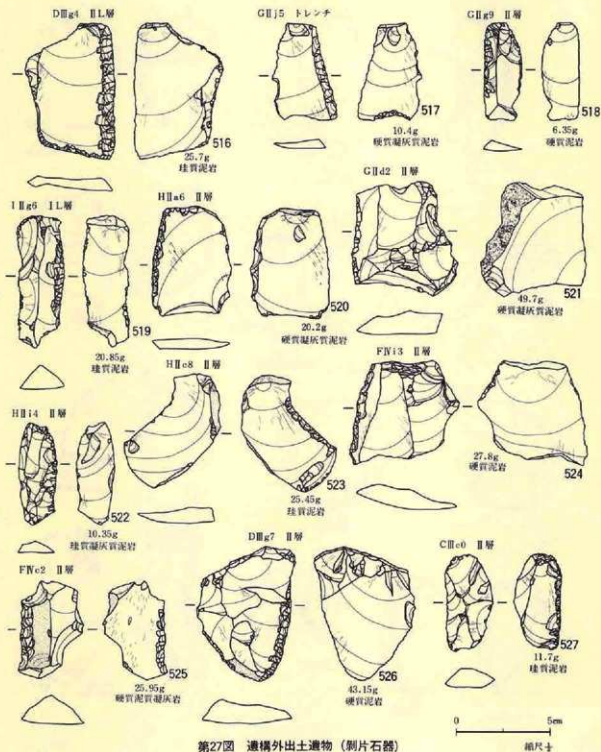


第25圖 遺構外出土遺物(制片石器)

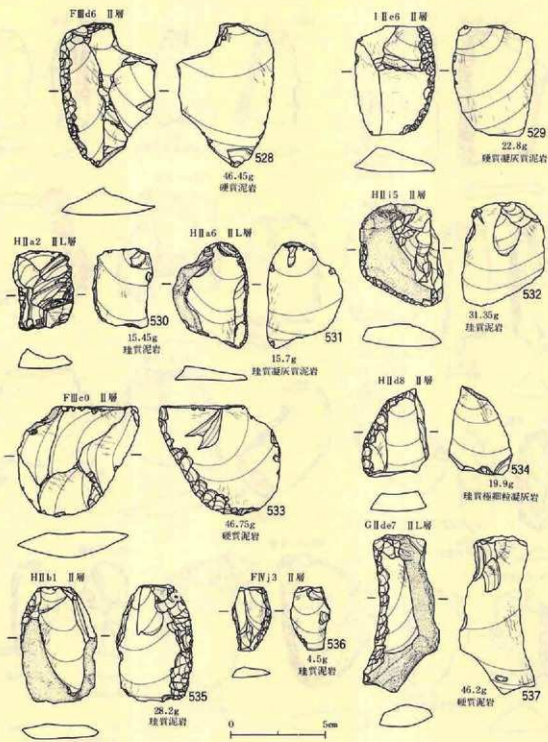
船尺士



第26圖 遺構外出土遺物(制片石器)

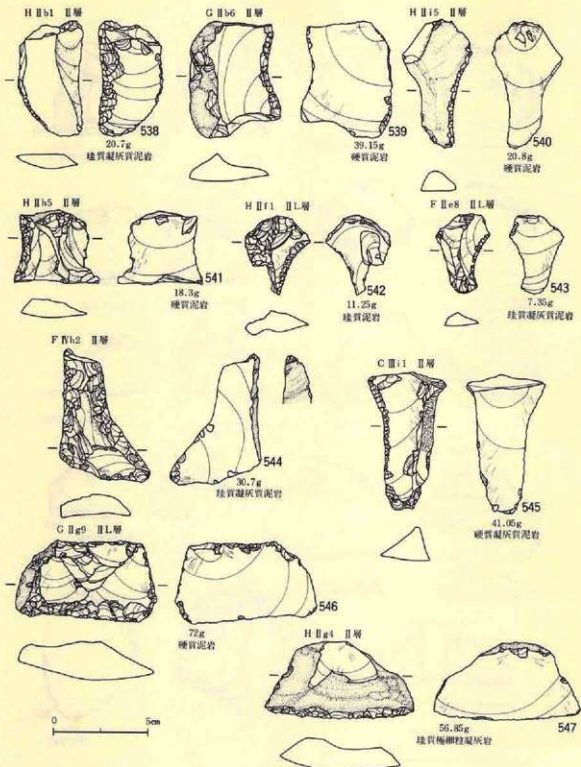


第27図 遺構外出土遺物(剝片石器)



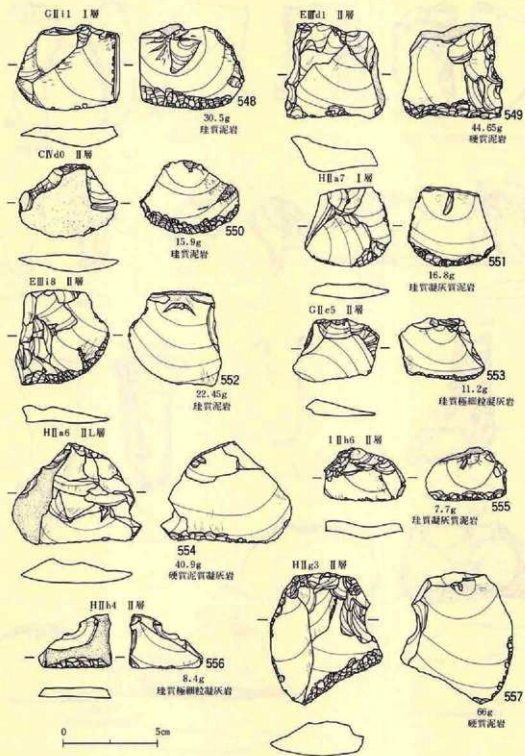
第28圖 遺構外出土遺物 (制片石器)

縮尺+



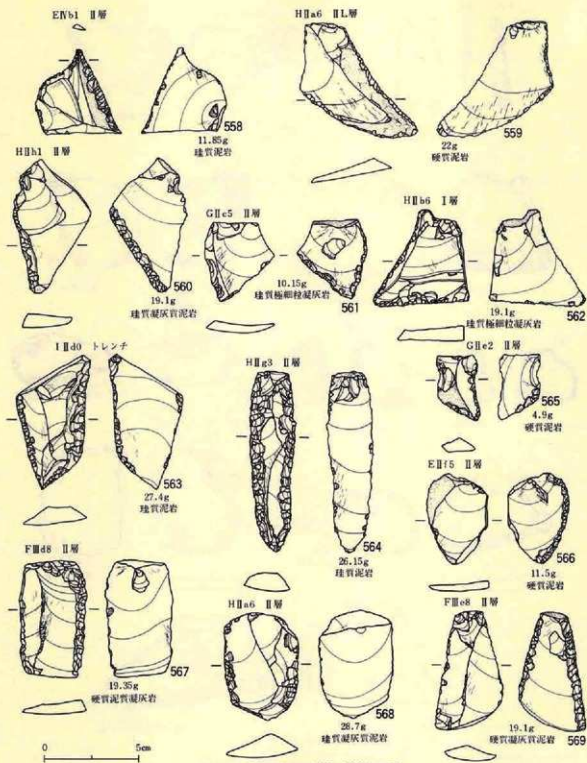
第29圖 遺構外出土遺物 (切片石器)

縮尺子



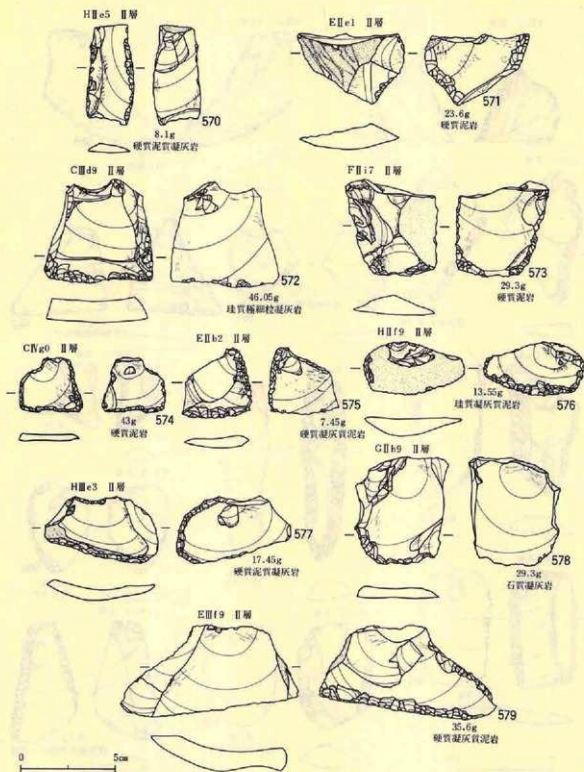
第30圖 遺構外出土遺物(制片石器)

縮尺士



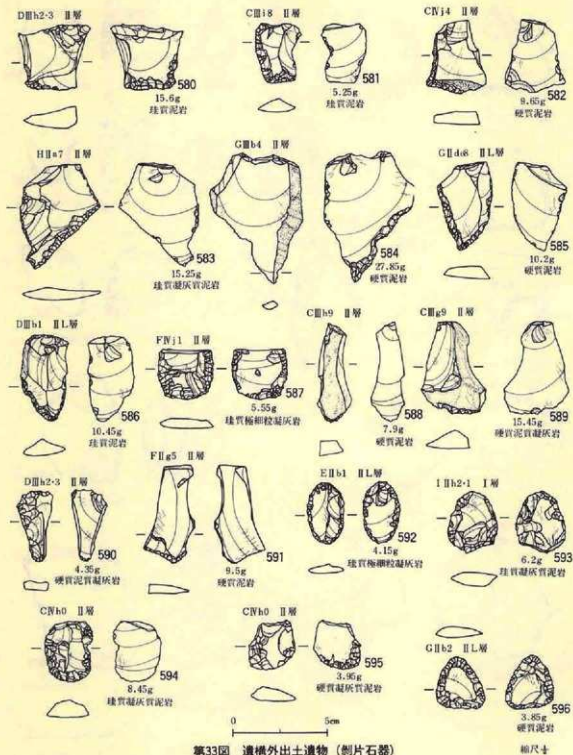
第31回 遺構外出土遺物 (制片石器)

縮尺±

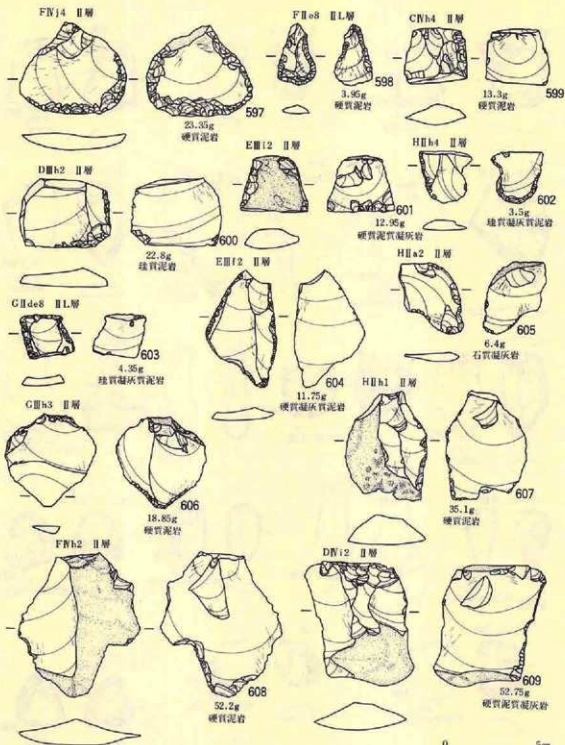


第32圖 遺構外出土遺物（制片石器）

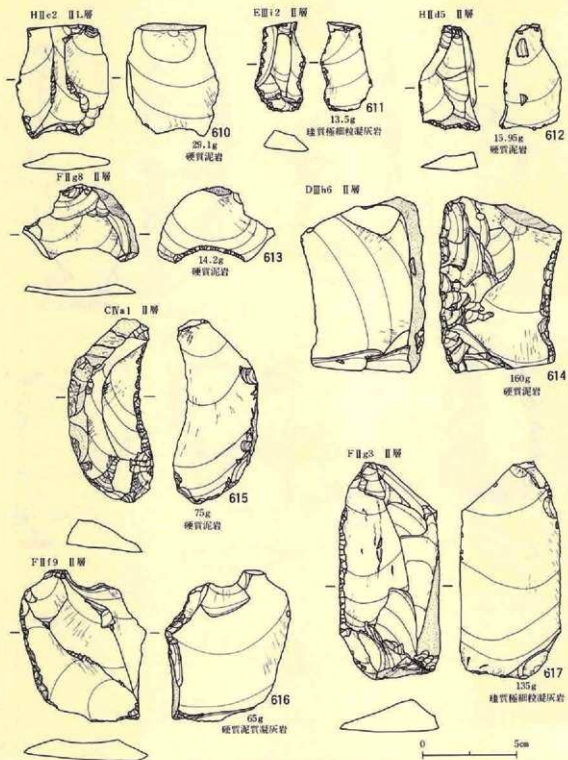
縮尺寸



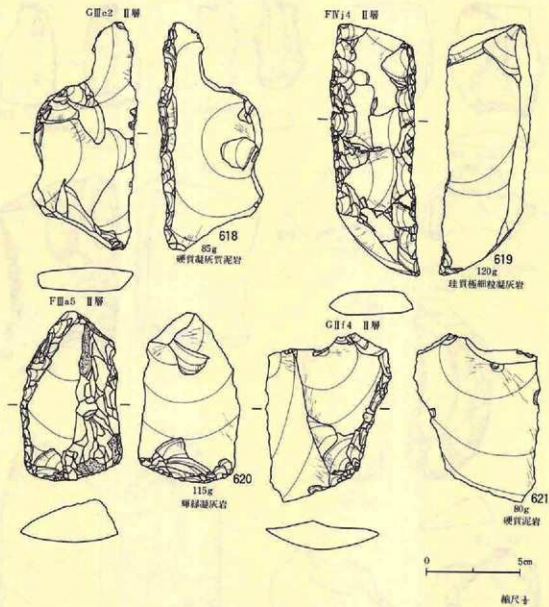
第33圖 遺構外出土遺物(制片石器)



第34圖 遼構外出土遺物(剝片石器)

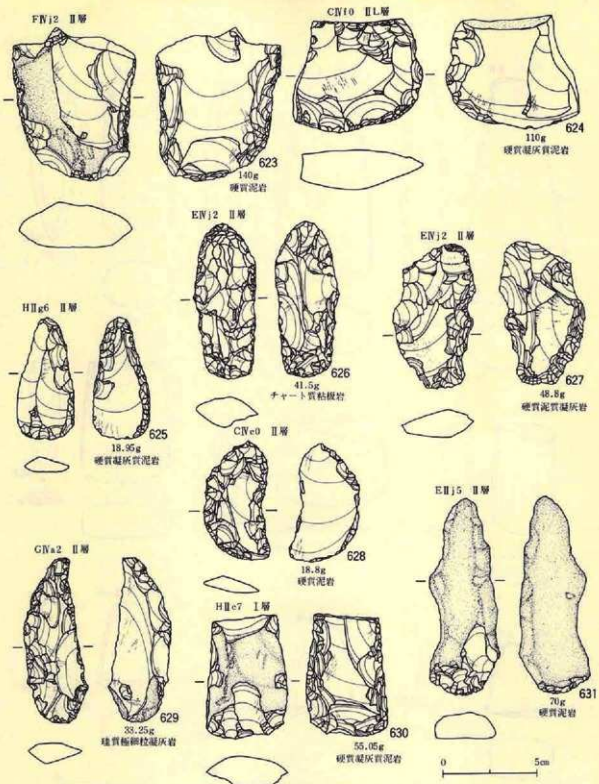


第35圖 遺構外出土遺物(剝片石器)



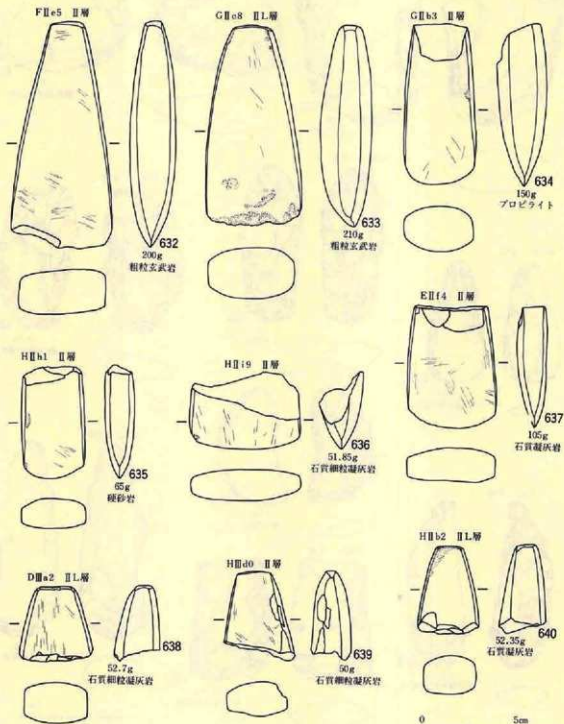
(622欠番)

第36圖 遺構外出土遺物 (剝片石器)

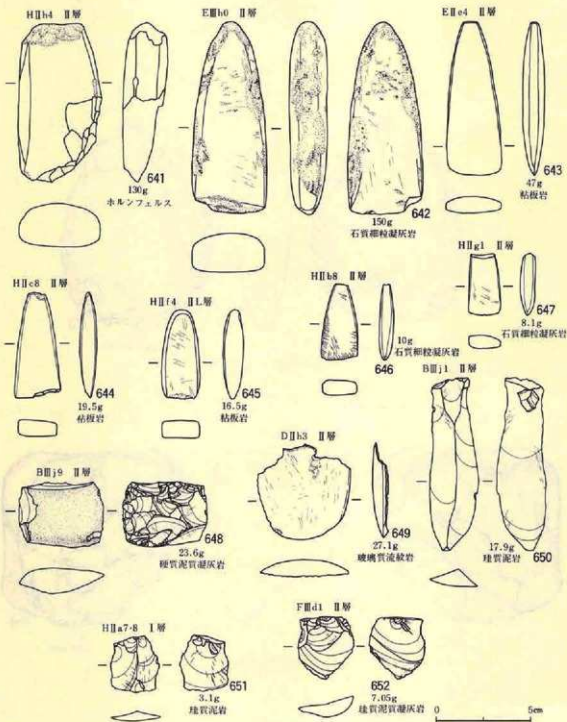


第37圖 遺構外出土遺物(剥片石器・礫石器)

86尺±

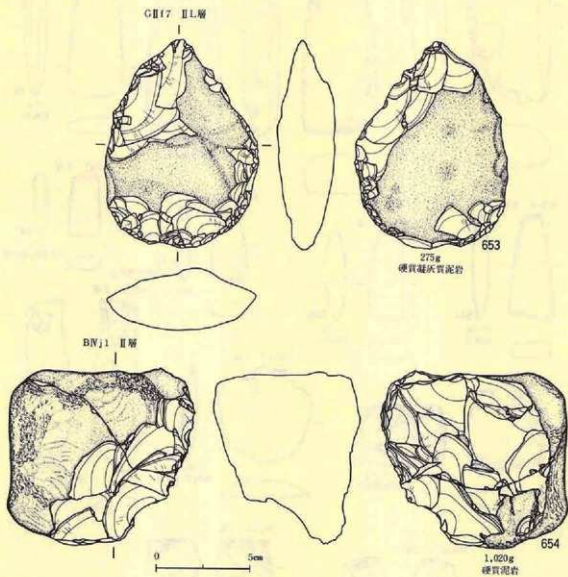


第38圖 遺構外出土遺物 (磨製石斧)



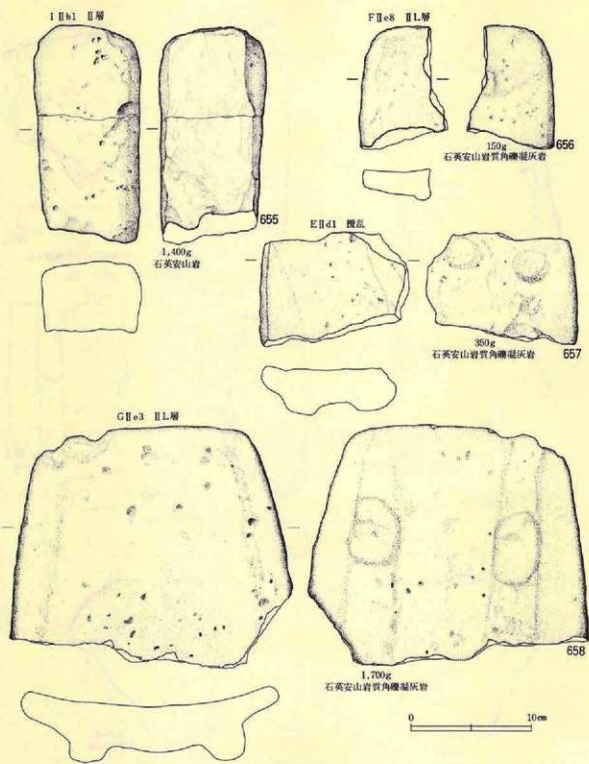
第39図 遺構外出土遺物（磨製石斧・剥片石器）

縮尺寸



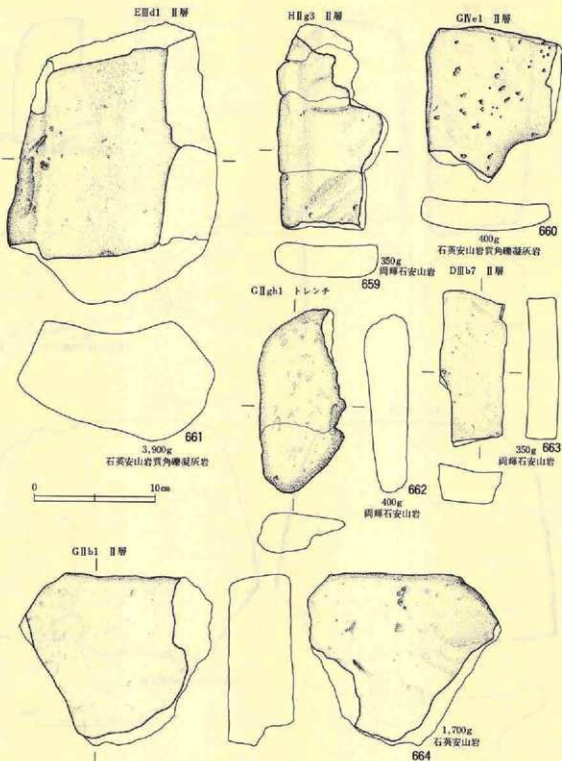
第40圖 遺構外出土遺物（礫石器・石核）

縮尺子



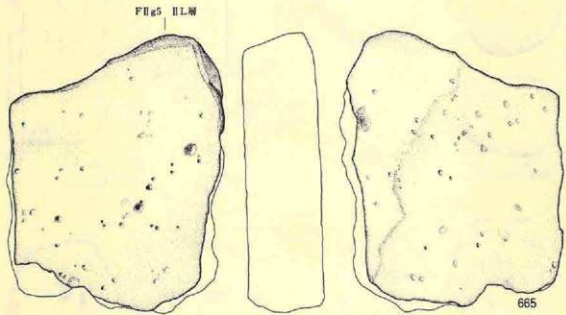
第41圖 遺構外出土遺物 (礫石器)

相尺 十

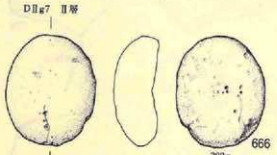


第42図 遺構外出土遺物 (礫石器)

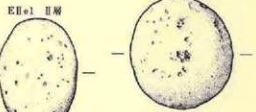
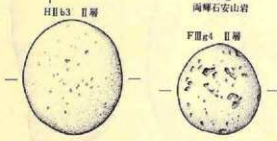
縮尺 十



4,500g
石英安山岩質角礫凝灰岩



110g
石英安山岩質角礫凝灰岩

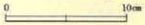


640g
同層石英安山岩

700g
玻璃質流紋岩

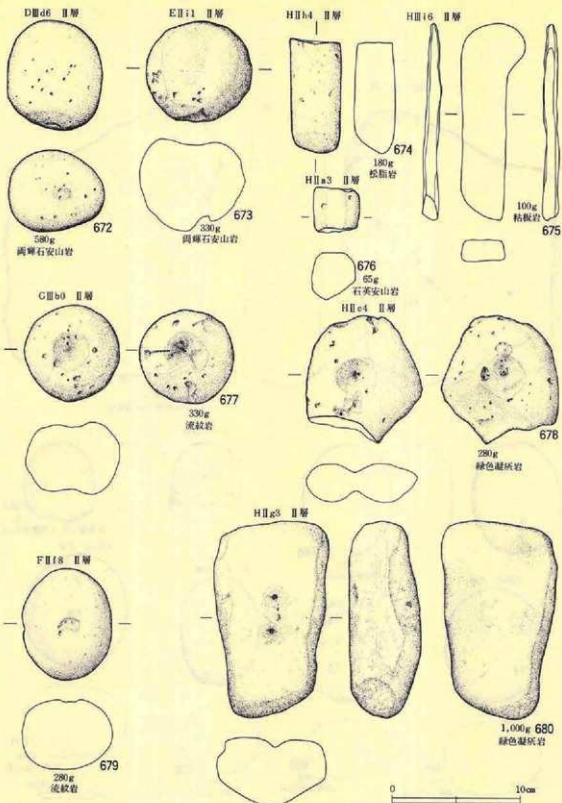
180g
同層石英安山岩

520g
同層石英安山岩



第43圖 遺構外出土遺物(礫石器)

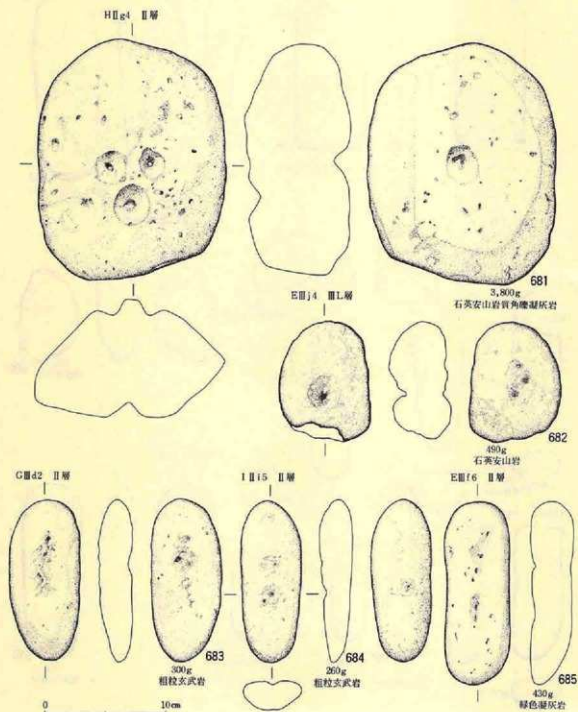
縮尺 4



第44圖 遺構外出土遺物(礫石器)

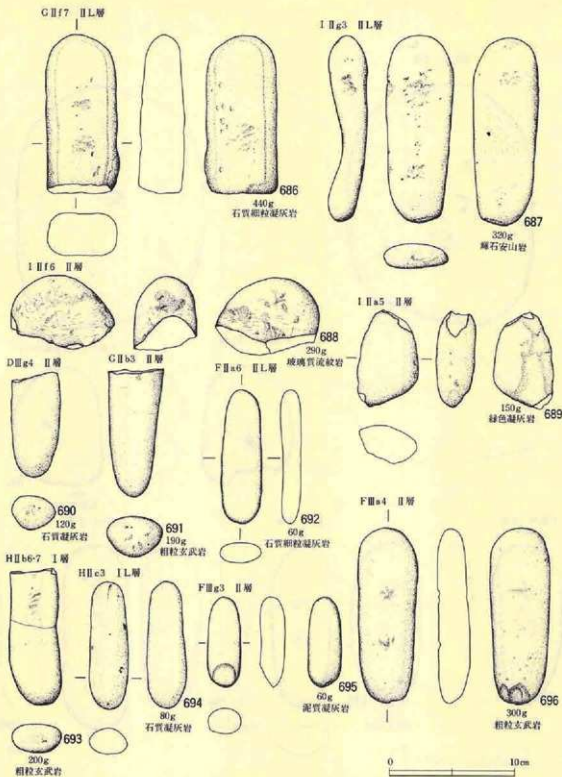
0 10cm

縮尺 十

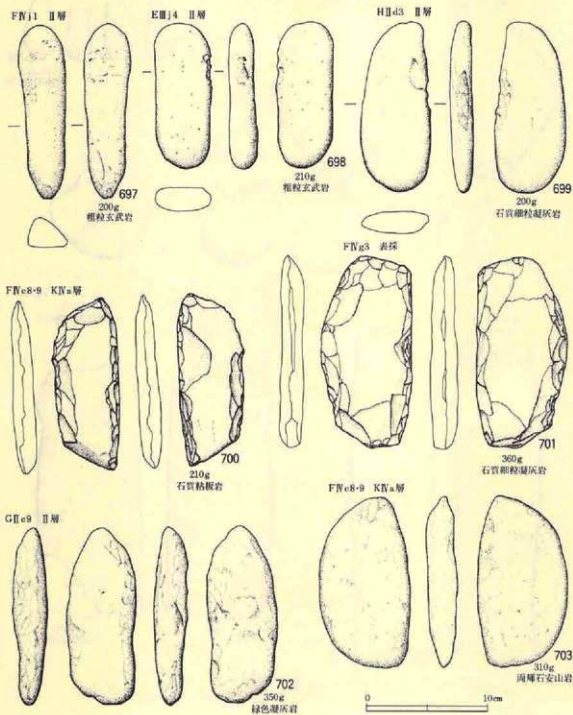


第45圖 遺構外出土遺物 (磨石器)

縮尺 十

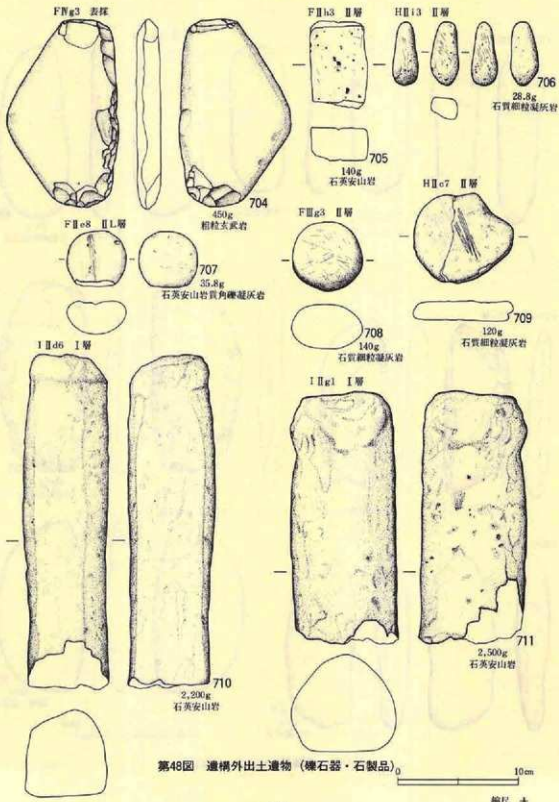


第46圖 遺構外出土遺物(礫石器)



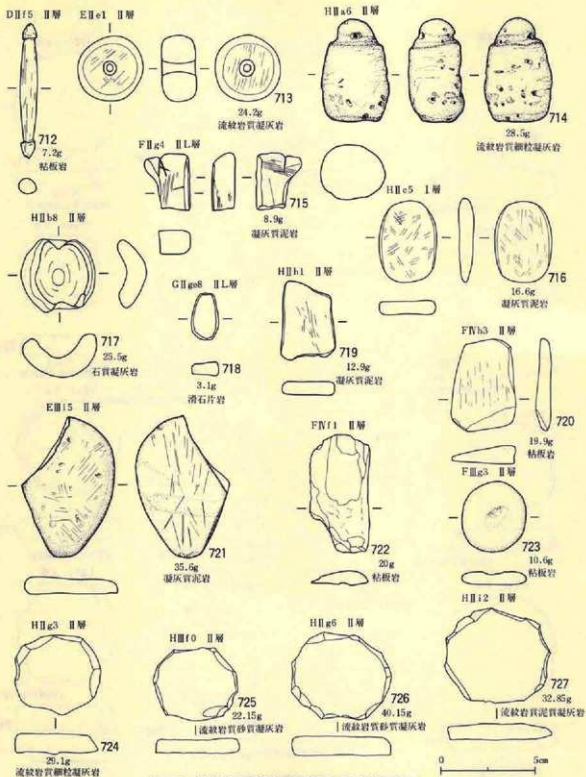
第47圖 濠溝外出土遺物 (礫石器)

縮尺 十

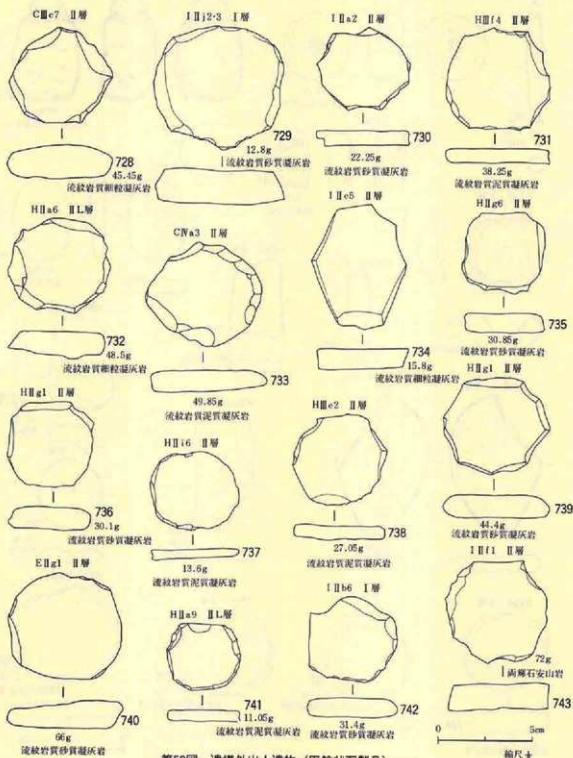


第48圖 遺構外出土遺物（礫石器・石製品）₀

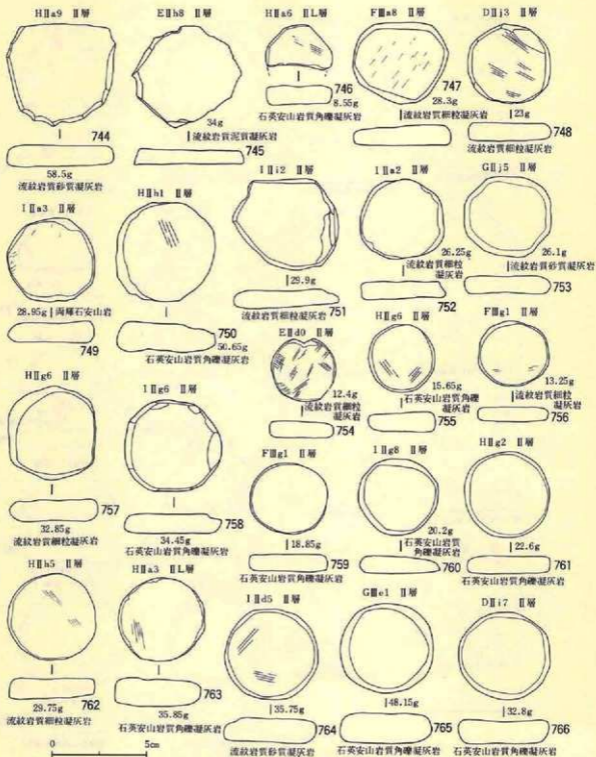
10cm

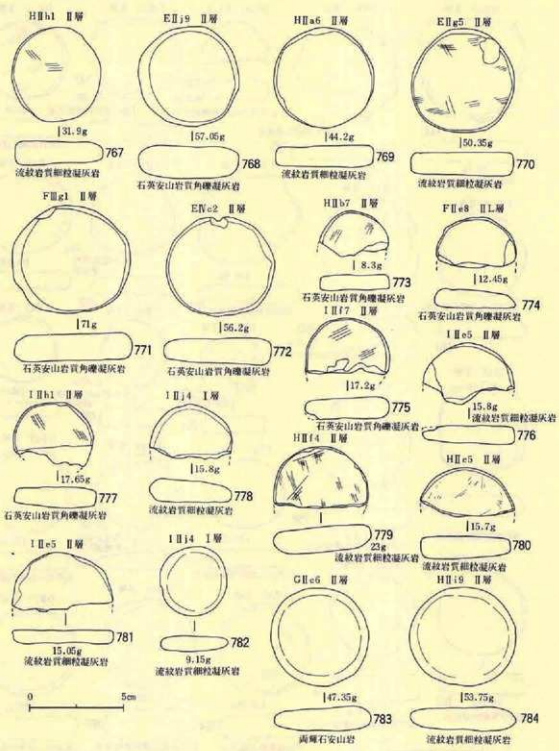


第49圖 遺構外出土遺物 (石製品・円盤状石製品)



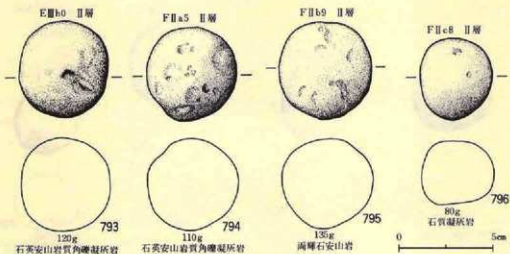
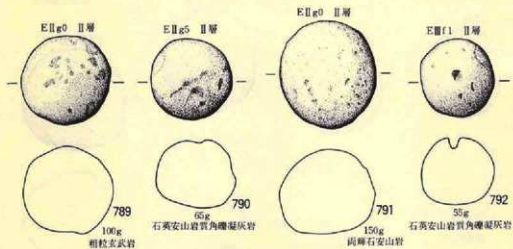
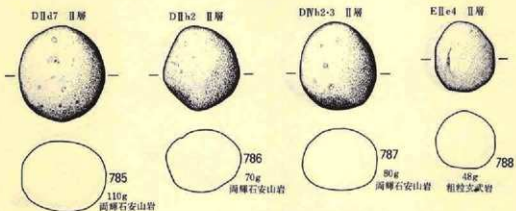
第50圖 遺構外出土遺物 (円盤状石製品)



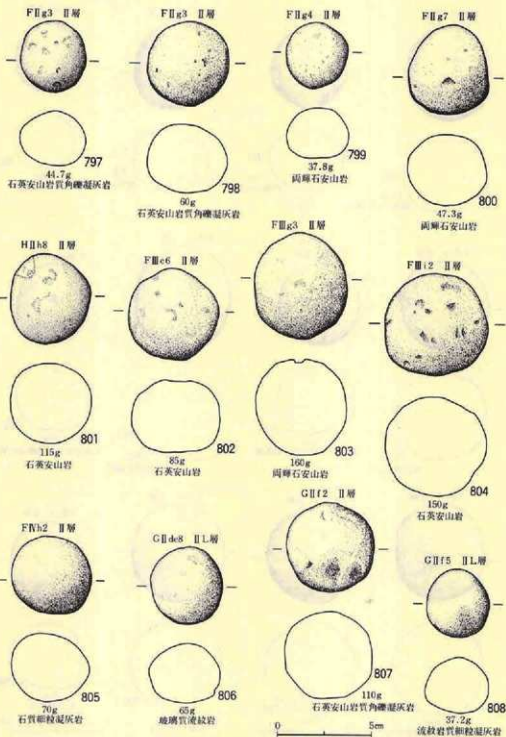


第52圖 遺構外出土遺物 (円盤状石製品)

縮尺十

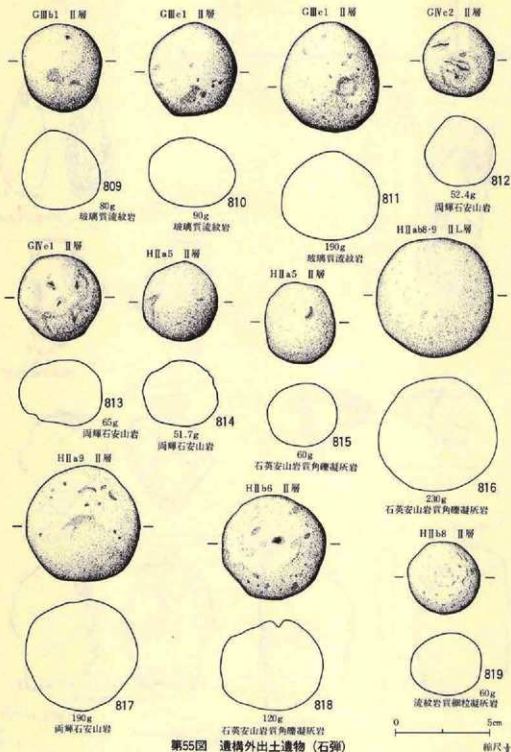


第53圖 遺構外出土遺物(石彈)



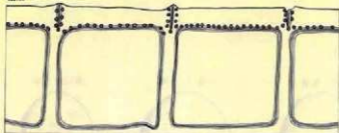
第54圖 遺構外出土遺物(石彈)

縮尺



第55圖 遺構外出土遺物(石彈)

埋土



1a

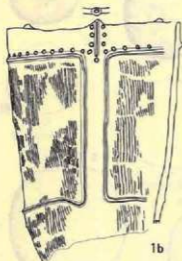
埋土下部



2

埋土

1bの展開図



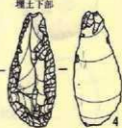
1b



3

43.65g
砂質凝灰岩

埋土下部



4

11.9g
硬質凝灰質泥岩

埋土下部



5

25.56g
珪質極細粒凝灰岩

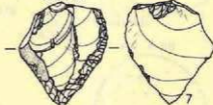
埋土下部



6

12.9g
珪質泥岩

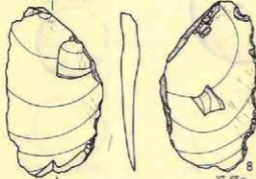
埋土下部



7

18.65g
珪質泥岩

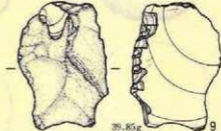
埋土下部



8

37.65g
硬質凝灰質泥岩

埋土下部



9

39.85g
珪質極細粒凝灰岩

縮尺 1a、1b 1/4

2 1/2

3-9 1/4

第56図 BV-1住居址

0Ⅲ-1 住居址
埋土



10

埋土



11

埋土



12

埋土



13

埋土



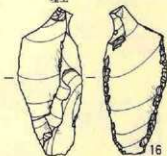
14

埋土



15

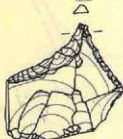
埋土



16

14.2g
硬質泥岩

埋土



38.9g
硬質凝灰質泥岩



17

埋土



7.45g
綠質泥岩

18

埋土



4.85g
玻璃質流紋岩

19

埋土



12g
石質細粒凝灰岩

20

埋土



15.1g
石質細粒凝灰岩

21

埋土



15.55g
綠質泥岩

22

埋土



6.55g
砂質凝灰岩

23

埋土



34.65g
硬質凝灰質泥岩

24

0Ⅲ-2 住居址



25

埋土



26

埋土



27

埋土



28

埋土



29

埋土



30

第57圖 0Ⅲ-1・2 住居址

縮尺
10~14 寸
15~24 寸
25~30 寸

○Ⅲ-2住居址
床面



31

○Ⅲ-3住居址
埋土



32

埋土黒土下



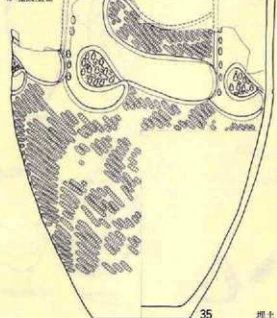
33

埋土



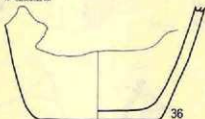
34

枳椇殻土器



35

枳椇殻土器



36

埋土



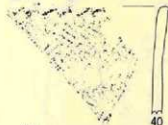
37

埋土



38

埋土



40

埋土



埋土



埋土



39

埋土



埋土



埋土



33

埋土



44

15.5g
珉質凝灰質泥岩

埋土



埋土



埋土



43

埋土



47

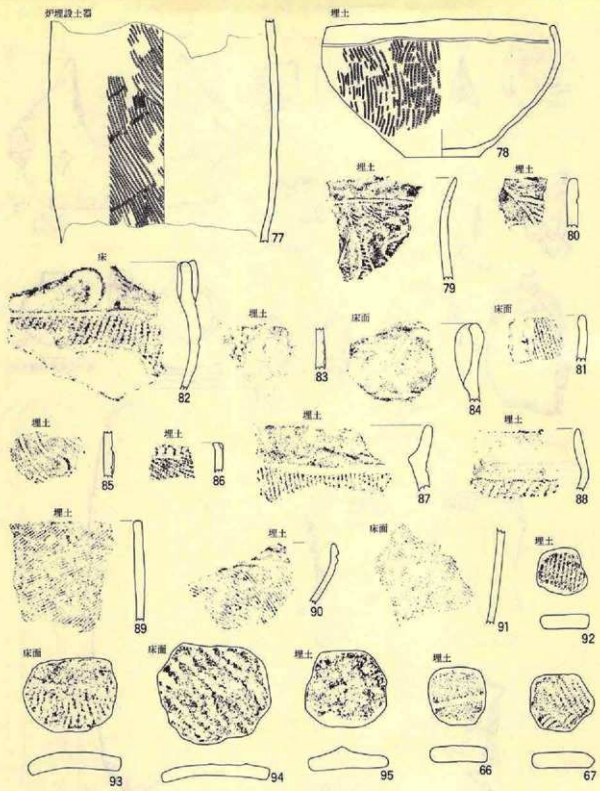
8.25g
珉質凝灰質泥岩

35.1g
珉質凝灰質泥岩

4.55g
珉質凝灰質泥岩

第58圖 CⅢ-2・3住居址

縮尺 36 ±
31-34 ±
37-40 ±
35 ±
41-47 ±



第61图 CIII-7住居址

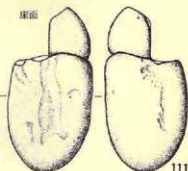
箱尺
77-78 寸
79-91 寸
92-97 寸

CⅢ-7住居址

床面



床面



280g

前岩

111

埋土



23.4g

泥質凝灰岩

112

CⅢ-8住居址

埋土



113

埋土



114

埋土

埋土



115

埋土

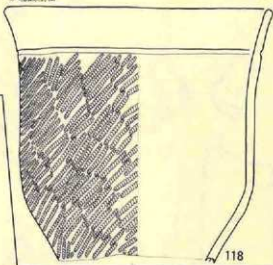


116



117

伊埋設土器



118

CⅢ-9住居址

埋土



119

埋土



120

埋土



121

埋土



122

埋土



123

埋土



124

第63圖 CⅢ-7・8・9住居址

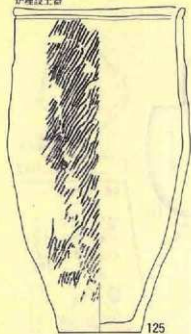
縮尺

110・111 1/2

112 1/2

113-124 1/2

炉埋设土器



床直上



埋土



埋土



170g
角閃綠岩

埋土下部



埋土



埋土下部



埋土下部



埋土



埋土



埋土



埋土下部



埋土



埋土



埋土



埋土下部



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土下部



埋土



埋土



埋土



9.75g
珪質凝灰質泥岩

埋土



埋土



埋土



埋土



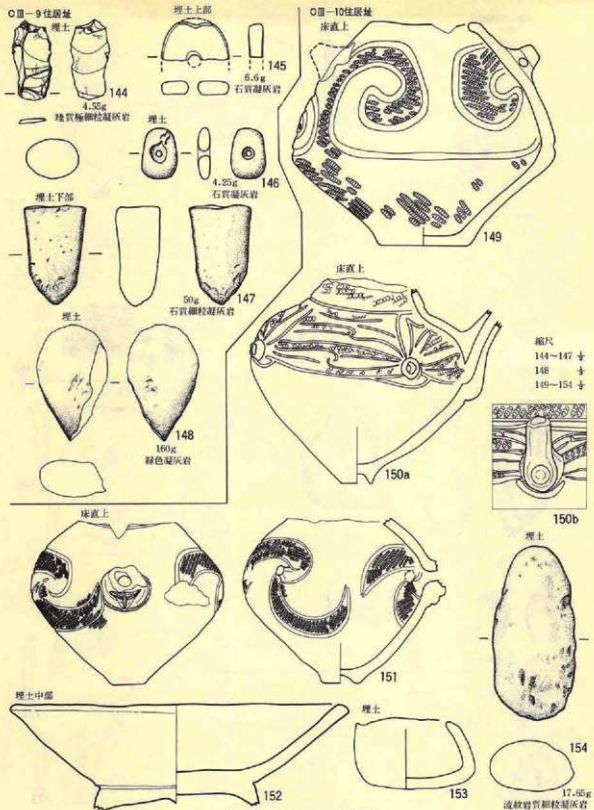
27.25g
珪質泥岩

第64图 CⅢ-9住居址

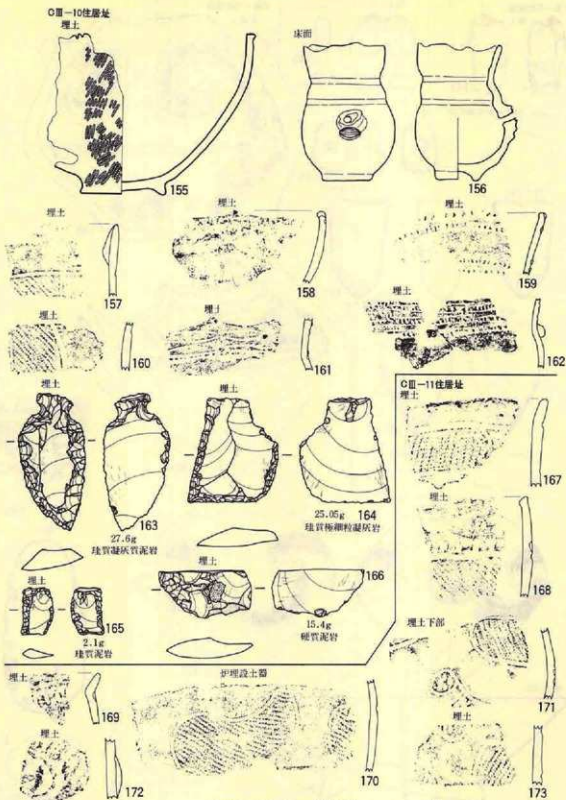
縮尺

125

126-143



第65圖 C III-9・10住居址



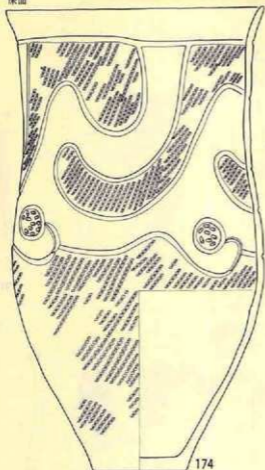
第66图 C III-10・11住居址

縮尺

155・156 \pm 163-166 \pm

157-162 \pm 167-173 \pm

宋面



埋土

埋土

175

埋土

埋土

177

埋土

埋土下部

178

埋土



179



180

埋土



埋土



181

3.5g
石膏細粒凝灰岩

埋土



182

5.75g
硬質頁岩

埋土下部



183

60g
石膏細粒凝灰岩

埋土



186

300g
粘板岩

埋土



184

7.75g
硬質泥岩

床面上



185

3.35g
波紋岩

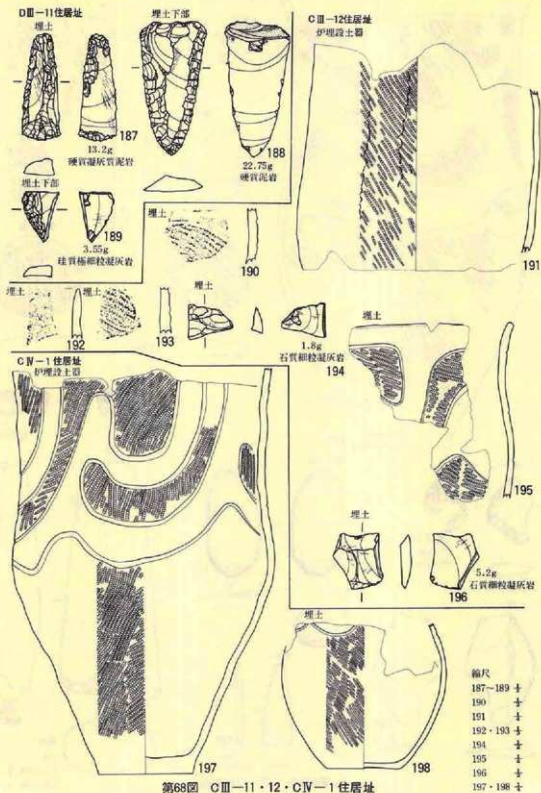
縮尺

174 十

175-178 十

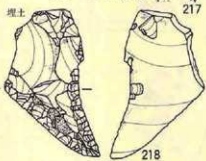
179-186 十

第67圖 CⅢ-11住居址



縮尺
 187-189 寸
 190 寸
 191 寸
 192・193 寸
 194 寸
 195 寸
 196 寸
 197・198 寸

ON-2住居址
伊羅段土器



35.25g
柱状凝灰質泥岩

DII-1住居址

埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土



埋土

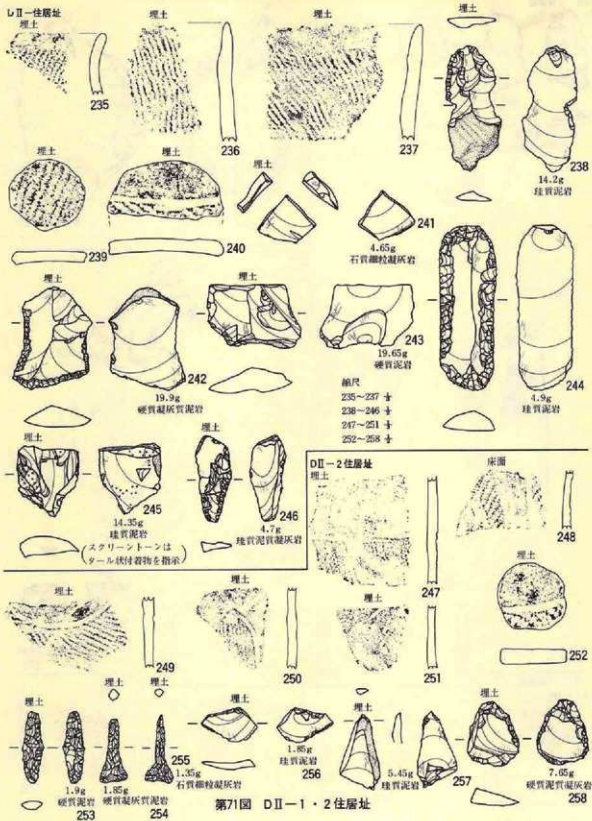


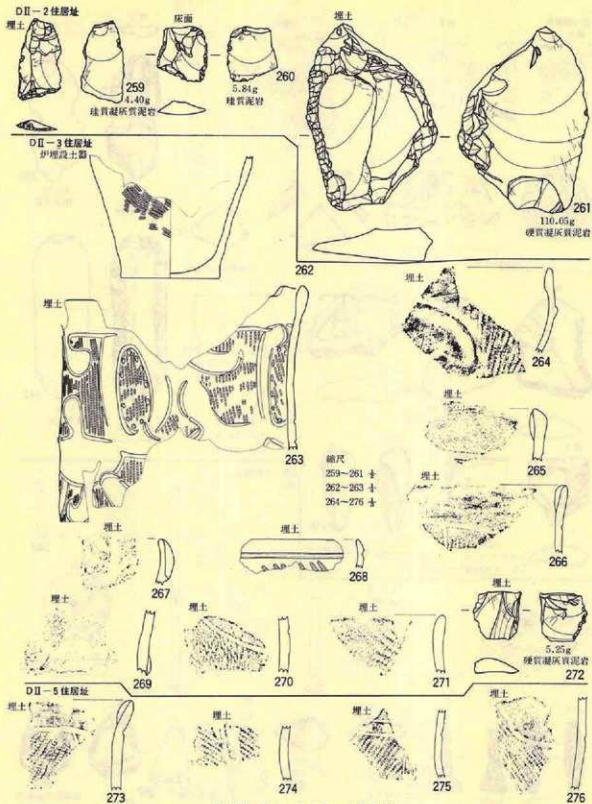
床直上



縮尺
215 十
216・217 十
218 十
219~234 十

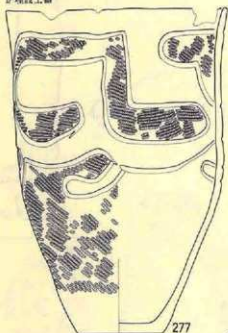
第70圖 CIV-2・DII-1住居址





第72圖 DII-2・3・5住居址

D II-4 住居址
埋設土器



277

床面



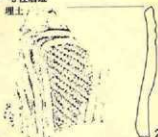
282

17.85g
珪質泥質凝灰岩



D II-5 住居址

埋土



278

埋土



279

床直上



280

2.6g
硬質泥岩

埋土



281

埋土



283

90g
珪質泥岩



D II-6 住居址

埋土

埋土



284

11.5g
珪質泥岩



285

80g
硬質凝灰質泥岩

縮尺

277 ±

278・279 ±

280~285 ±

第73圖 D II-4・5・6 住居址

DII-6 住居址

埋土



286

埋土



287

埋土



288

埋土



250g

玻璃質流紋岩



291

埋土



289

29g

硬質泥岩

埋土



290

18.1g

硬質泥岩



埋土



90g

293

硬質泥岩



埋土



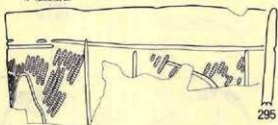
292

4.45g

柱狀泥岩

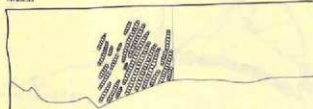


伊埋設土器



295

床直上



297

DII-7 住居址

埋土



294

伊埋設土器内



296

床直上



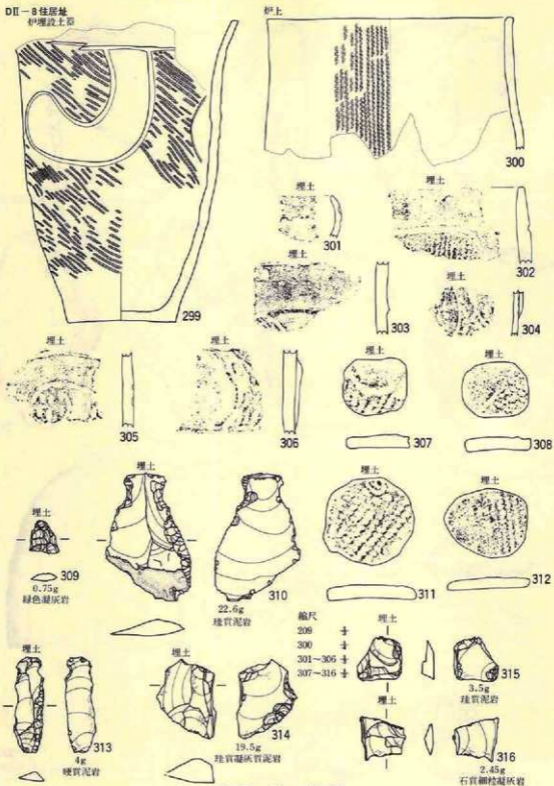
298

編尺

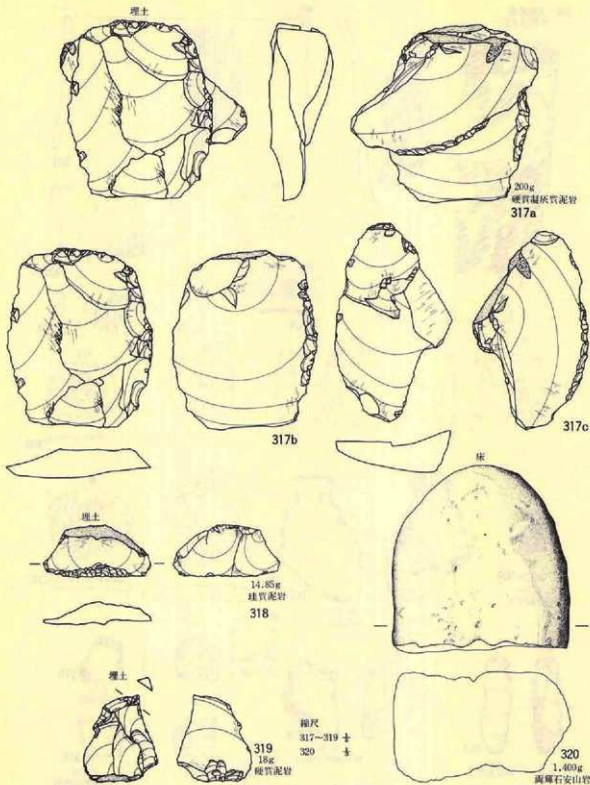
286-288	+	295	+
289-290	+	296	+
291	+	297	+
292-294	+	298	+

第74圖 DII-6・7 住居址

DII-8 住居址
和埋設土器

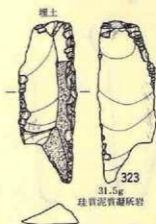
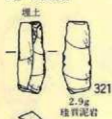


第75圖 DII-8 住居址

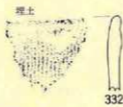
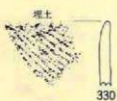


第76圖 DII-8住居址

DII-8 住居址



DII-9 住居址
砂埋土器



第77圖 DII-8・9 住居址

縮尺
321~323 + 325 +
324 + 326~333 +

D II-9 住居址
埋土

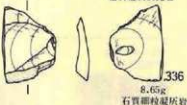


334
310g
石質細粒凝灰岩

埋土



335
9.55g
礫質凝灰質泥岩

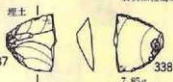


336
8.65g
石質細粒凝灰岩

埋土



埋土



338
7.85g
石質細粒凝灰岩

D II-10 住居址
埋土



339



340



341



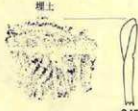
342



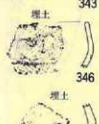
343



344



345



346



348



349



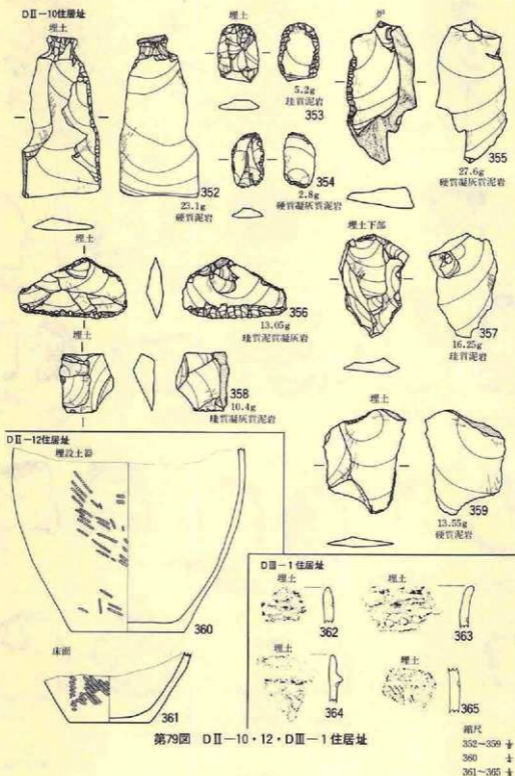
350



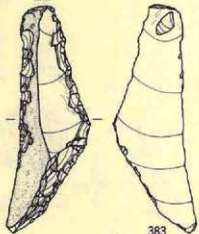
351

第78回 D II-9・10住居址

縮尺
334 ±
335-339 ±
340-351 ±



DⅡ-1住居址
埋土



383
7.05g
石質細粒凝灰岩



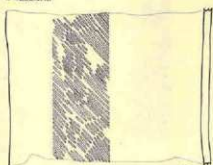
埋土



384
80.05g
石質細粒凝灰岩



DⅡ-2住居址
埋設土器



385

縮尺
383・384 寸
385 寸
386~389 寸
390・391 寸
392・393 寸

埋土



386

埋土下部



387

埋土下部



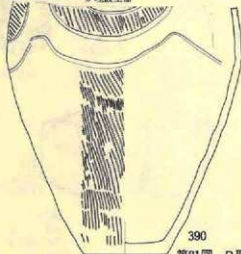
388

埋土



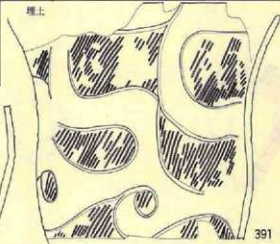
389

DⅢ-3住居址
埋設土器



390

埋土



391

埋土下部



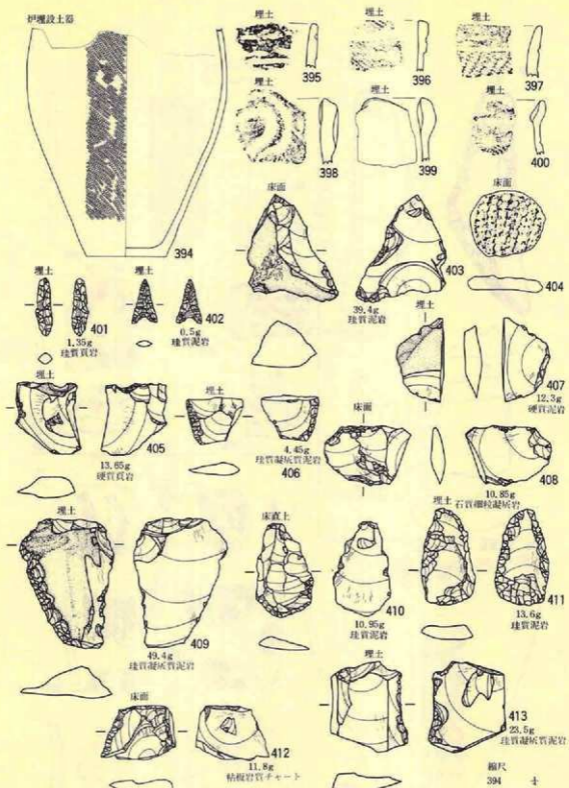
392

埋土



393

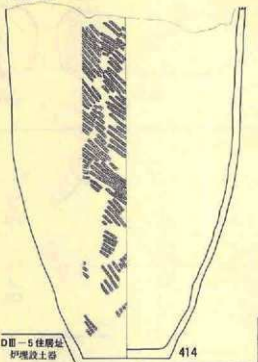
第81圖 DⅢ-1・2・3住居址



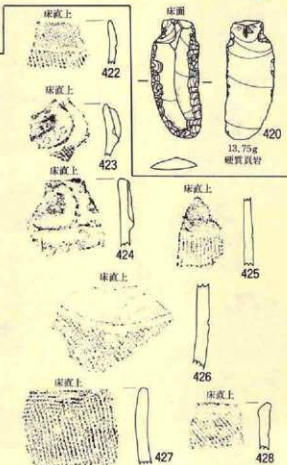
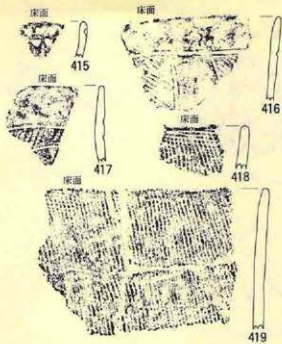
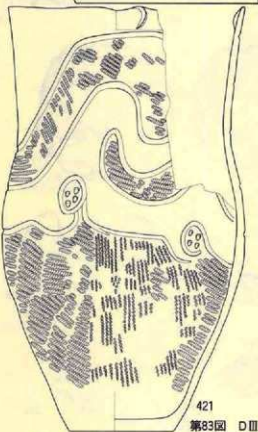
第82図 DIII-3住層址

縮尺
 394 寸
 395-400 寸
 401-413 寸

DⅢ-4住居址
伊壇段土器



DⅢ-5住居址
伊壇段土器

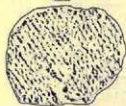


13.75g
硬質頁岩

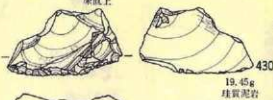
第83圖 DⅢ-4・5住居址

縮尺	420	+
414	+	+
415-419	+	+
421	+	+
422-428	+	+

DⅢ-5住居址
埋土

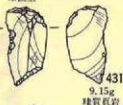


床直上



19.45g
埴質灰岩

床直上



9.15g
埴質灰岩

429

床直上



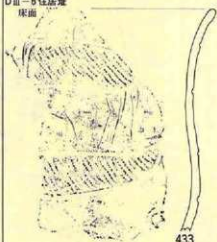
(スクリーントーンはタール状)
付着物を指示
9.45g
埴質泥岩
432a



432b

DⅢ-5住居址

床面



433

床面



434

床面



435

床面



436

DⅢ-7住居址
埋土



439

埋土



440

埋土



441

埋土



442

埋土



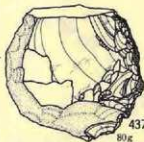
443

埋土



444

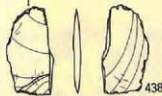
床面



437

80g
埴質凝灰質泥岩

床面



438

6.55g
埴質泥岩

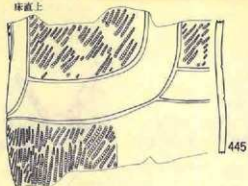
第84図 DⅢ-5・6・7住居址

縮尺

429-432 \pm 437-438 \pm

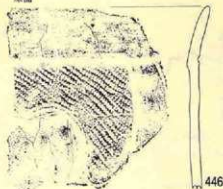
433-436 \pm 439-444 \pm

床直土



445

床面



446

埋土



447

床面



448

埋土下部



449

埋土下部



450

埋土



455

埋土



451

埋土



457

埋土



453

埋土



452

埋土



454

埋土



458

埋土



459

埋土上部



460

埋土

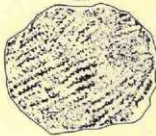


461

埋土



462



463

埋土



464

埋土



465

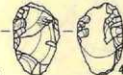
埋土



466

8.6g
磁質泥岩

埋土

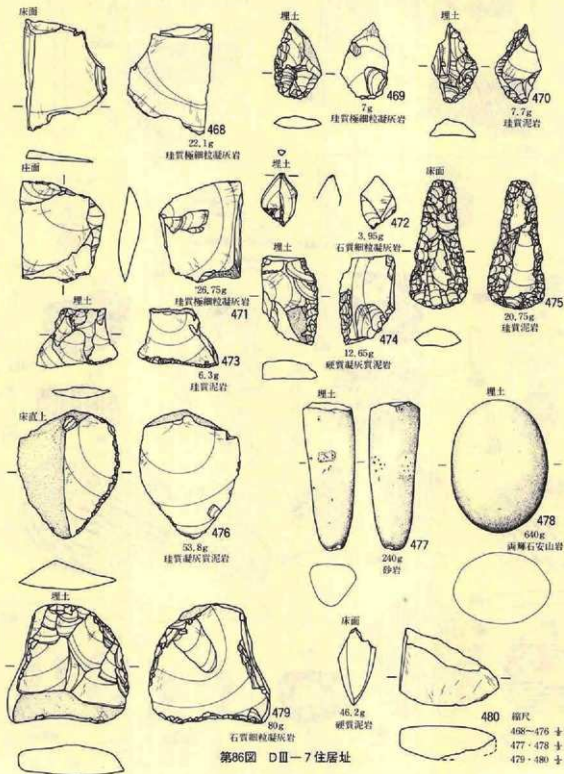


467

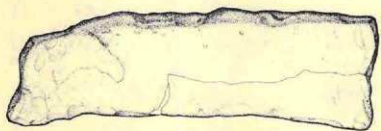
5.85g
磁質泥岩

第85圖 DⅢ-7 住居址

編尺	447	寸
445	448-457	寸
446	458-467	寸

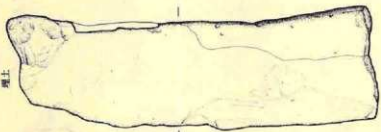


第86圖 DⅢ-7住居址

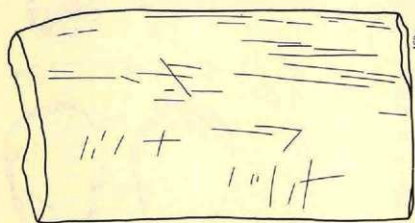


4,900g
石英安山岩
482

柳尺
481 ±
482 ±

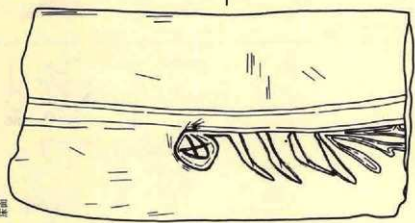


埋土



100g
凝灰岩
481

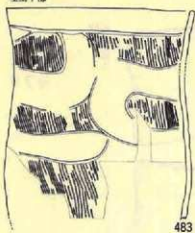
第87圖 DⅢ-7住居址



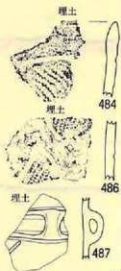
床頭



DⅢ-8住居址
埋土下部



483



484

486

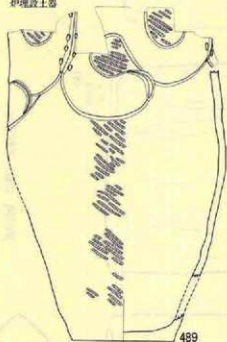
487



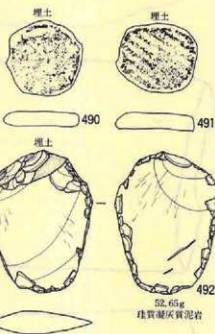
485

488

如埋設土器



489



490

491

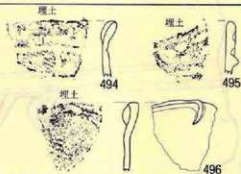
492

52.65g
珠質凝灰質泥岩

DⅢ-10住居址



493



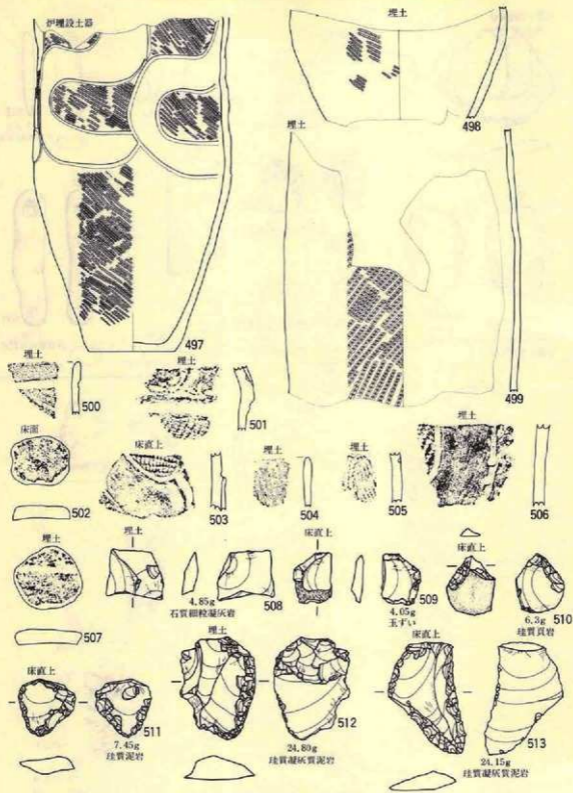
494

495

496

第88圖 DⅢ-8・10住居址

縮尺 489 ±
485 ± 490~492 ±
484~488 ± 493~496 ±

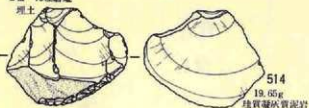


第89圖 D III-10住居址

細尺 502 寸
 497-498 寸 503-506 寸
 500-501 寸 507-513 寸

D III-10 住居址

埋土



514
19.65g
球質凝灰質泥岩

埋土



515
7.4g
粘板岩

埋土



516
11.85g
石質細粒凝灰岩

埋土



517
13.5g
球質凝灰質泥岩

埋土



518
7.75g
球質極細粒凝灰岩

床直土



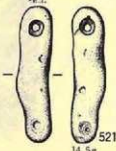
519
4.55g
球質極細粒凝灰岩

埋土



520
80.05g
硬質泥質凝灰岩

埋土



521
14.5g
硬質凝灰質泥岩

D III-9 住居址

埋土



522

埋土下部



523

埋土



524
2g
球質極細粒凝灰岩

D III-11 住居址

伊埋設土器



525

埋土



526

埋土



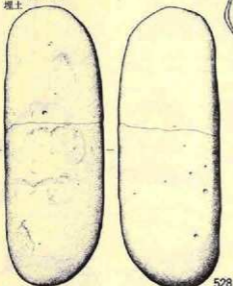
527

縮尺

- 514~521 1/2
- 522 1/4
- 523 1/4
- 524 1/4
- 525 1/4
- 526・527 1/4

第90圖 D III-9・10・11住居址

DⅢ-11住居址
埋土

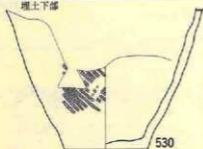


528

3,300g
岡輝石安山岩



埋土下部



530

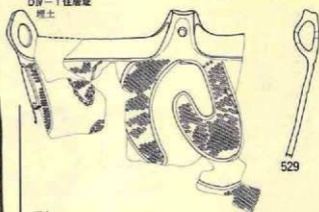
縮尺

528-532 1/4

533 1/4

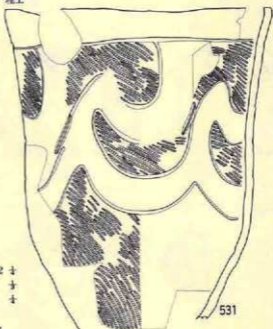
534 1/4

DⅣ-1住居址
埋土



529

埋土



531

炉埋設土器



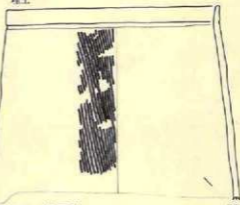
532

埋土



533

埋土



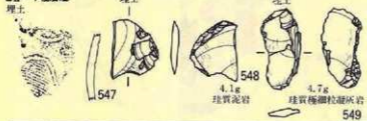
534

第91図 DⅢ-11・DⅣ-1住居址

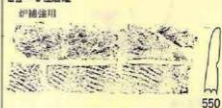
D IV-1 住居址



E II-1 住居址



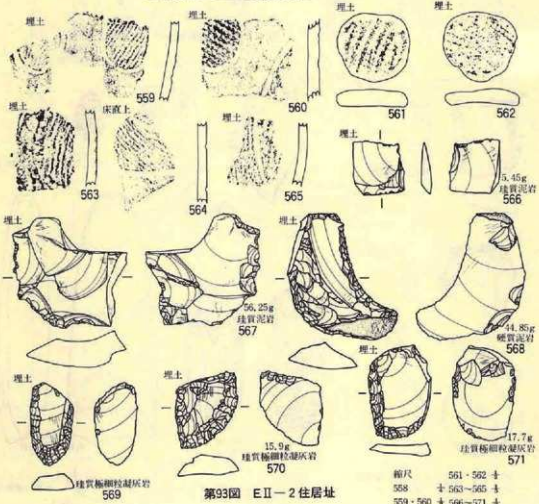
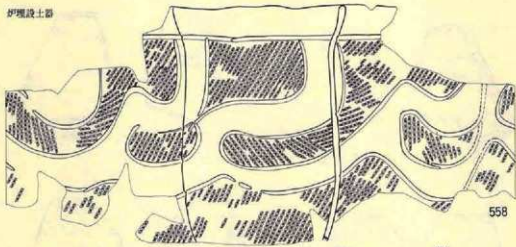
E II-2 住居址



第92图 D IV-1 · E II-1 · 2 住居址

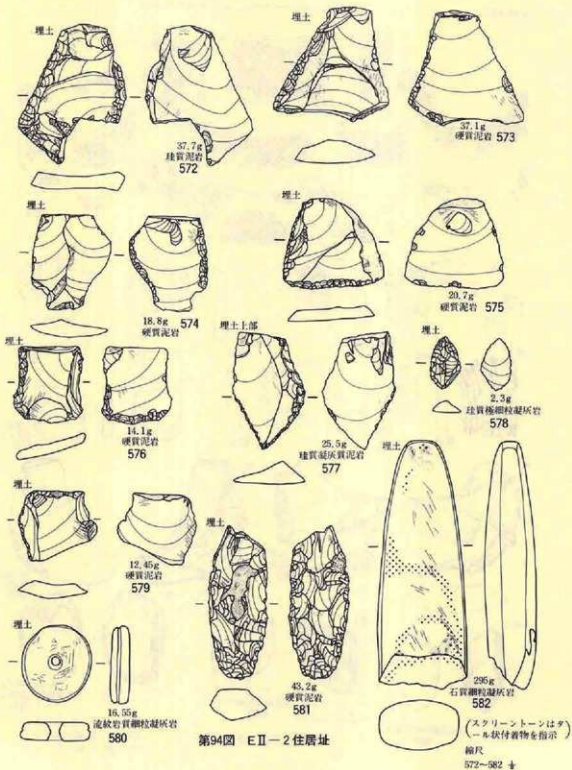
縮尺
535 · 536 ±
537 · 539 ±
540 · 541 ±
542 · 546 ±
547 ±
548 · 549 ±
550 · 557 ±

伊禮設土器



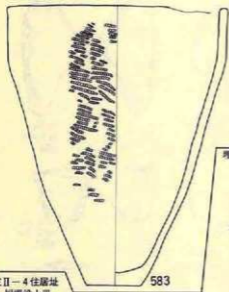
第93圖 E II - 2 住居址

縮尺 561 - 562 $\frac{1}{2}$
 558 $\frac{1}{2}$ 563 - 565 $\frac{1}{2}$
 559 - 560 $\frac{1}{2}$ 566 - 571 $\frac{1}{2}$

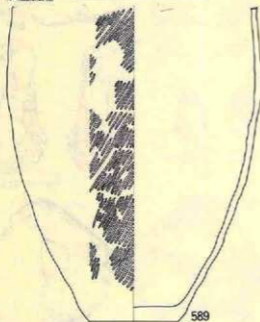


第94図 E II-2 住居址

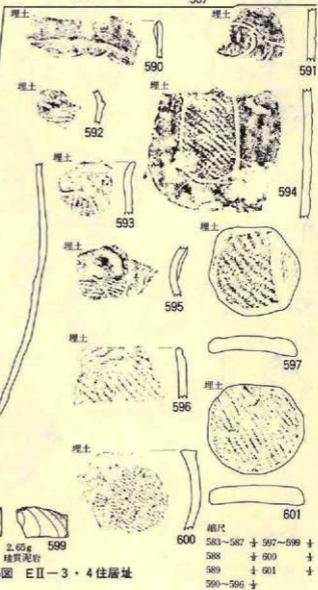
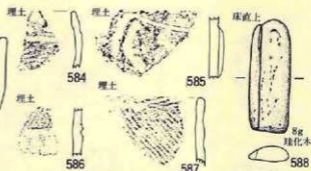
E II - 3 住居址
炉埋設土器



E II - 4 住居址
炉埋設土器

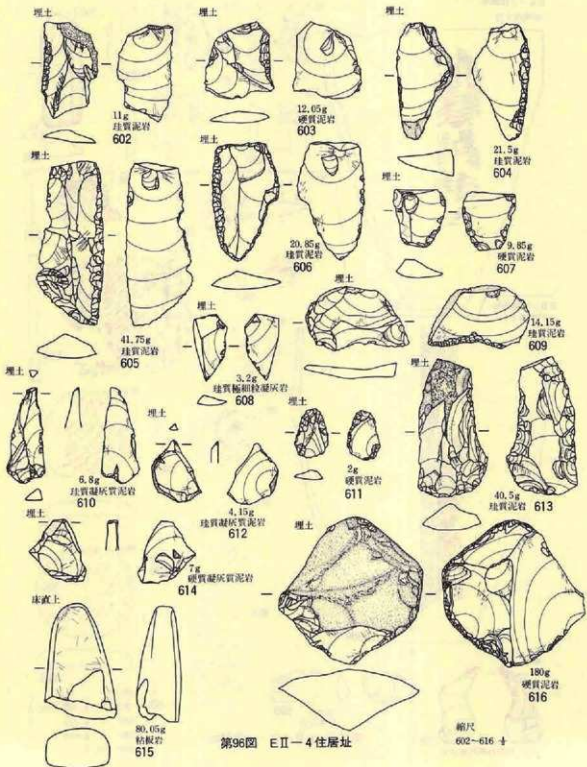


第95圖 E II - 3・4 住居址

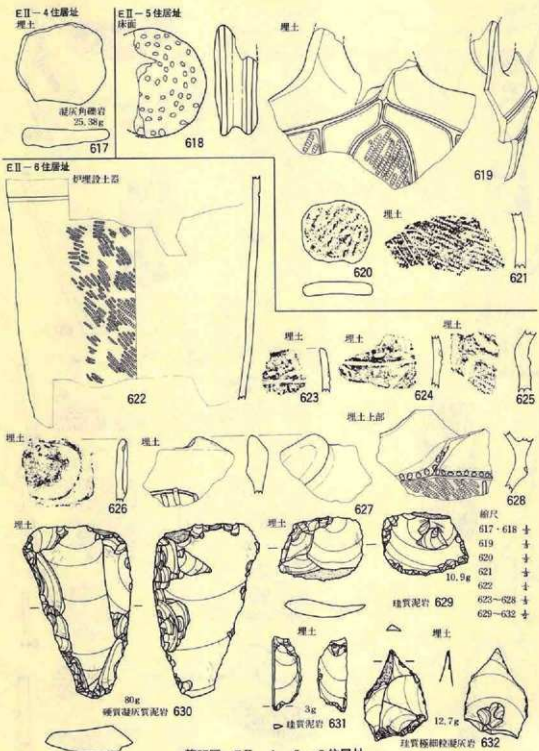


相尺

583~587	±	597~599	±
588	±	600	±
589	±	601	±
590~596	±		



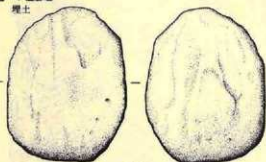
第96圖 E II-4 住居址



第97圖 E II-4・5・6住居址

E II - 7 住居址

埋土



648 両輝石安山岩 240g



埋土



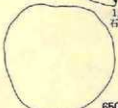
10.75g
珪質花岩

649

埋土



1,450g
石英安山岩



650

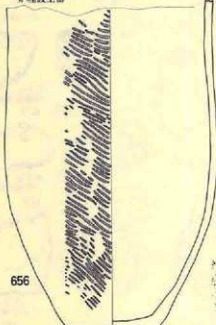
E II - 8 住居址

埋土



651

炉裡設土器



656

床直上



652

埋土



653



654



655

埋土

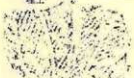


658



657

埋土



659

埋土

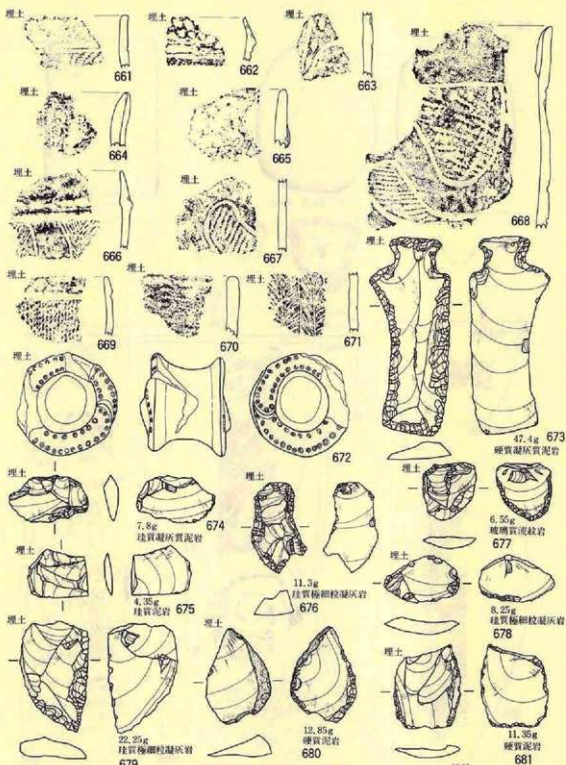


660

第99圖 E II - 7・8 住居址

縮尺

- 648 ± 651・652 ±
- 649 ± 653・655 ±
- 650 ± 656 ±
- 657・660 ±



第100圖 EⅡ-8 住居址

縮尺
 661-671 寸
 672-681 寸

E II - 8 住居址

埋土



硬質泥岩 24.4g

682

埋土

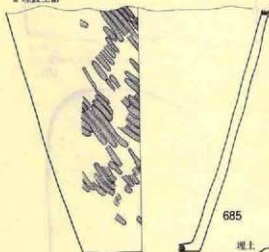


石質細粒凝灰岩 10.85g

683

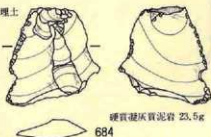
E II - 9 住居址

炉裡設土器



685

埋土



硬質凝灰質泥岩 23.5g

684

埋土



686

埋土



687

埋土



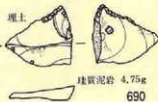
硬質泥岩 8.95g

689

柱穴



埋土



塊質泥岩 4.75g

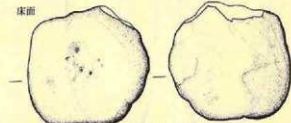
690

埋土



688

床面



石質凝灰岩 470g

692

埋土



硬質泥岩 10.15g

691

縮尺

682-684 十

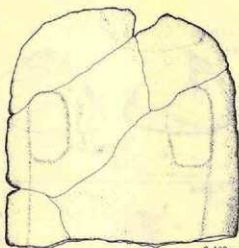
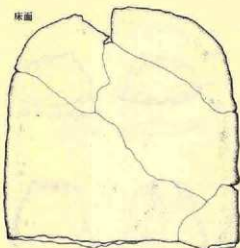
685-688 十

689-691 十

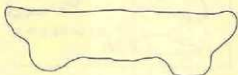
692 十

第101圖 E II - 8 · 9 住居址

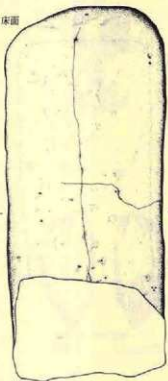
床面



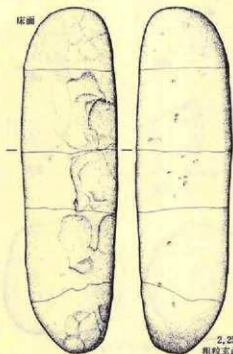
2,100g
石英安山岩質角礫凝灰岩
693



床面



床面



2,250g
粗粒玄武岩
694



第102圖 EII-9 住居址

7,800g
石英安山岩
695

0 10cm

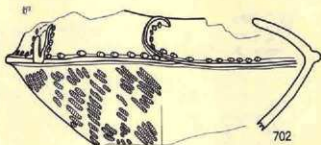
縮尺不定

E II-10住居址

床



696



702

床



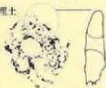
697

埋土



698

埋土



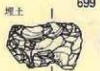
699

埋土



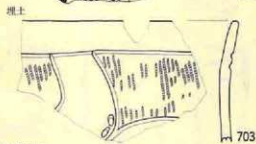
700

埋土



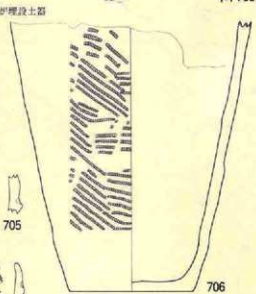
701

埋土



703

炉埋設土器



706

E II-11住居址

埋土



704

埋土



705

埋土



707

埋土



708

埋土



709

埋土



710

埋土



711

埋土



712

埋土

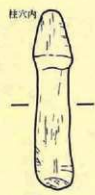


713

相尺 701・702 ±
696~700 ± 703~713 ±

第103図 E II-10・11住居址

E II-11住居址

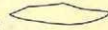


36.2g 硬質泥岩

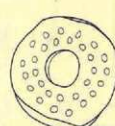
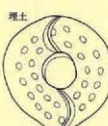
7.1g 粘板岩



17.95g 硬質凝灰質泥岩



E II-12住居址



720



721



723

724



725

726



727

728



728



729



730

731

縮尺

714-716 ±

717-718 ±

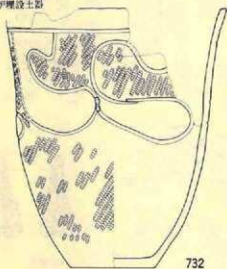
719 ±

720-721 ±

722-731 ±

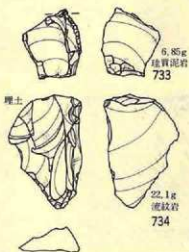
第104图 E II-11·12住居址

E II-12住居址
炉埋設土器



732

埋土



E II-13住居址

炉埋設土器



735

埋土



736

埋土



737

E II-14住居址

埋土下部



738

埋土下部



739

埋土



740

埋土下部



741

埋土



742

埋土



743

埋土



744

埋土



745

埋土



746

埋土



747

第105圖 E II-12・13・14住居址

縮尺

732 十

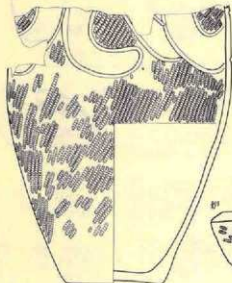
733・734 十

735-747 十

伊理設土器



763a



763b

縮尺
 763a 寸
 763b 寸
 764 寸
 765 寸
 766 不定

埋裏

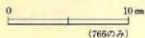
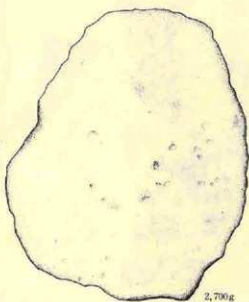
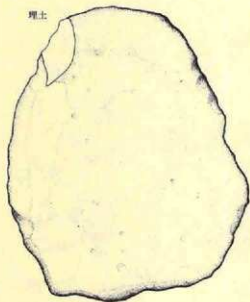


764



765

埋土



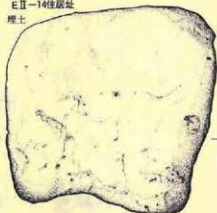
2,700g
石英安山岩質角礫凝灰岩

766

第107圖 E II-14住居址

E II-14住居址

埋土

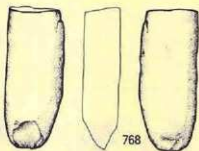


石英安山岩質角礫凝灰岩 4,000g



767

埋土



768

石質細粒凝灰岩 250g

E II-15住居址

埋土



769

埋土



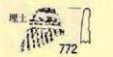
770

埋土



771

埋土



772

埋土



774

埋土



775

埋土



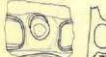
776

埋土



777

埋土



778

埋土



779

埋土



780

埋土



781

埋土

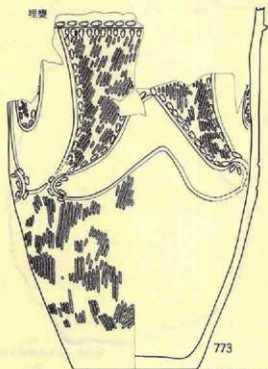


782

床直上



783



773

縮尺

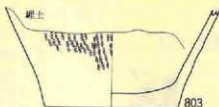
767-783 1/4

第108圖 E II-14・15住居址

E II-16住居址
埋土

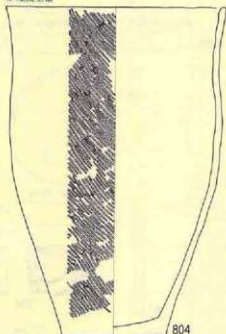


802

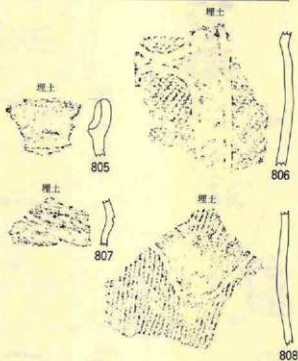


803

E II-17住居址
埋土



804



埋土

805

埋土

806

埋土

807

埋土

808

埋土



17.1g
硬質泥岩

埋土



809



12.75g
硬質凝灰質泥岩

810

埋土



39.75g
珪質泥岩

811

埋土



6.8g
珪質泥岩

812

埋土



6.3g
珪質泥岩

813

埋土

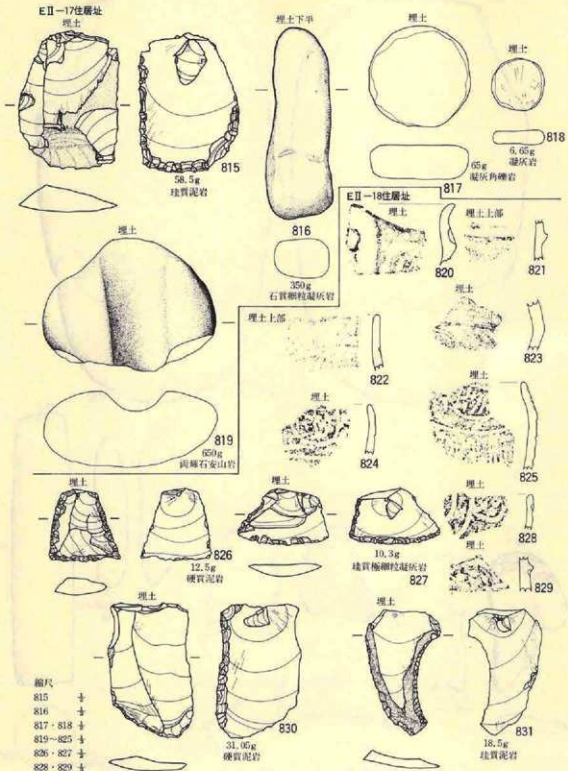


14.75g
硬質泥岩

814

第110圖 E II-16・17住居址

縮尺
802・803 寸
804 寸
805~808 寸
809~814 寸



第111圖 E II-17·18住居址

湯沢パターン上



埋土



853

床直上



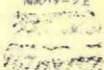
854

埋土



855

湯沢パターン上



856

埋土



857

埋土



858



859



860



861



862



863



864



865



866



867



868



869



870



871



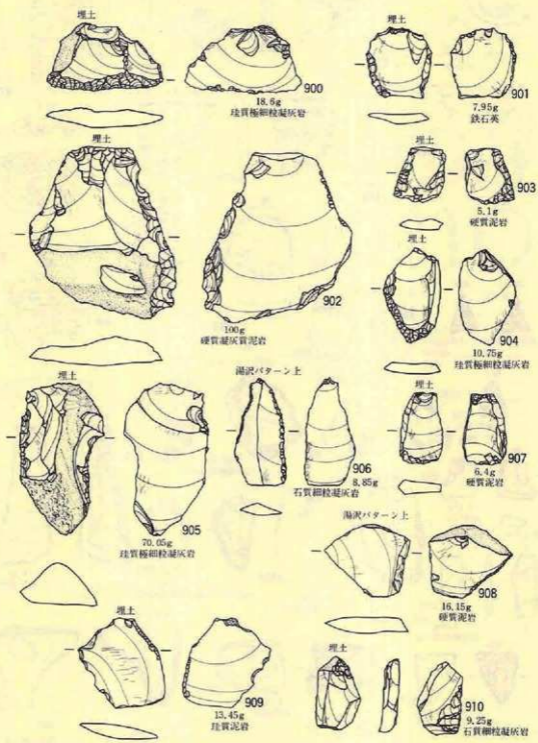
872



873

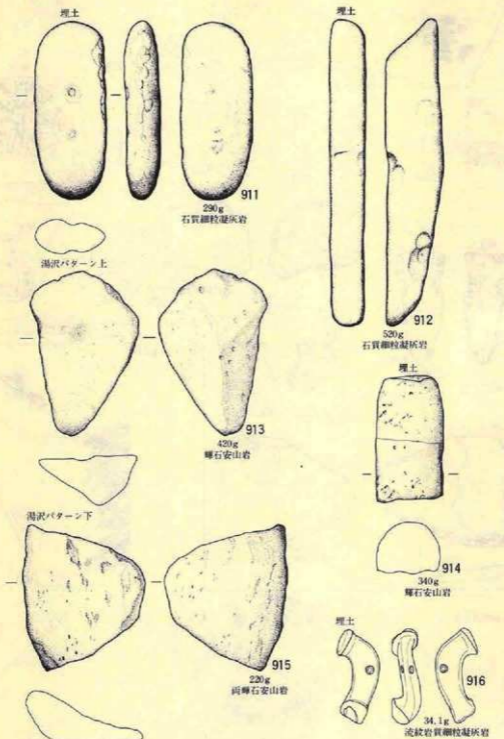
第114図 EⅡ-20住居址

縮尺
852-873 十

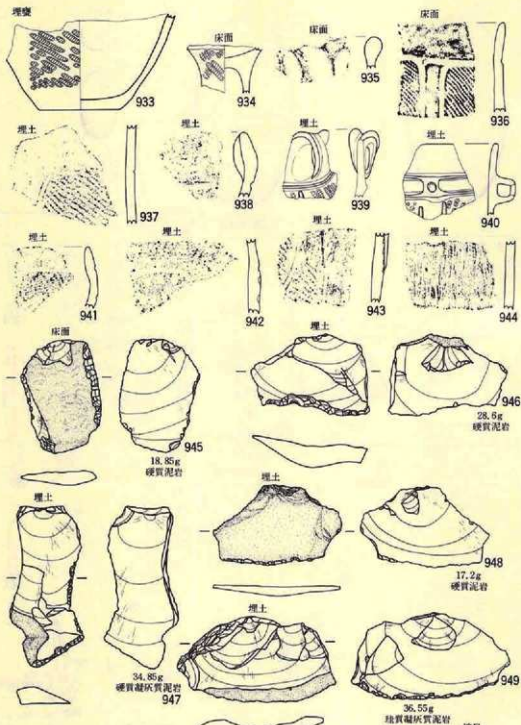


第116図 EⅡ-20住居址

縮尺
900~910 寸



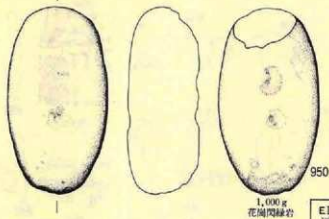
第117図 EⅡ-20住居址



第119圖 EⅡ-24住居址

縮尺
933-944 寸
945-949 寸

E II-24住居址
埋土



1,000 g
花崗閃綠岩

床直上

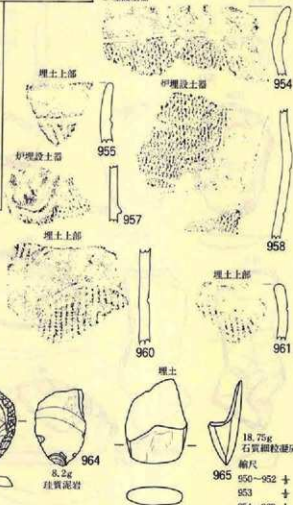


60 g
花崗岩

E II-25住居址

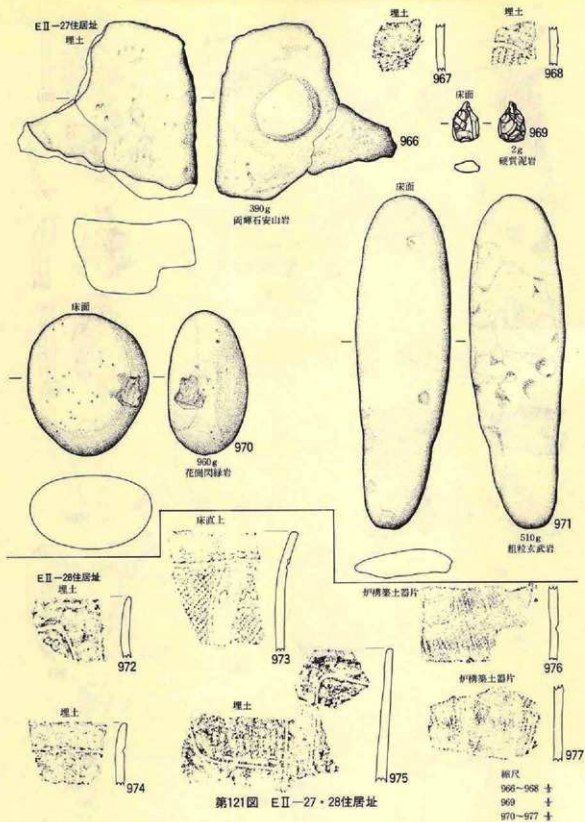


E II-26住居址
炉埋設土器

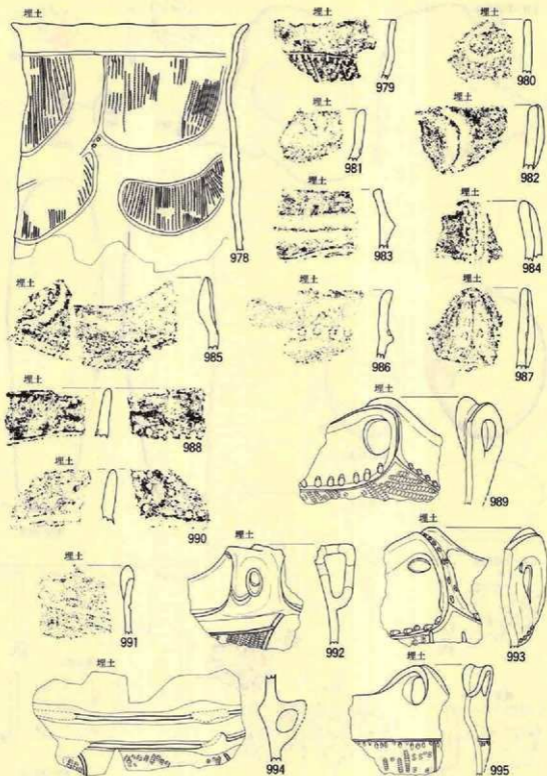


第120圖 E II-24・25・26住居址

18.75 g
石英細粒凝灰岩
輪尺
950~952 ±
953 ±
954~963 ±
964・965 ±

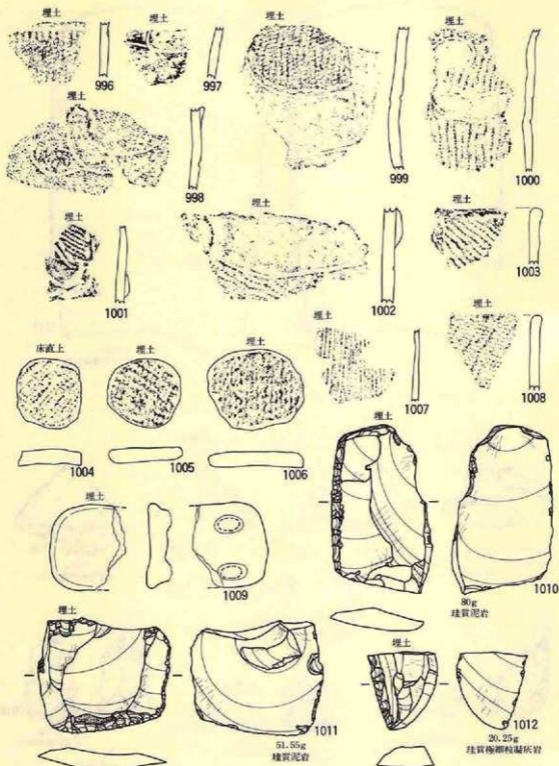


第121圖 E II-27・28住居址



第122圖 E II—28住居址

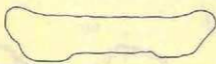
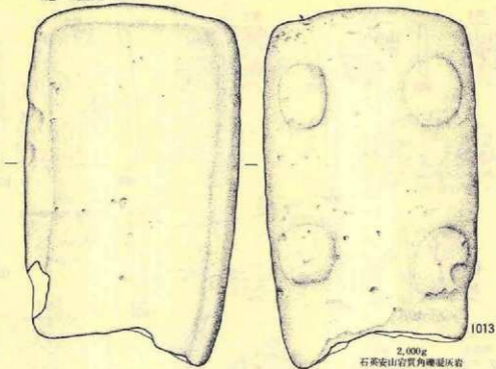
縮尺
978 十
979-995 十



第123圖 E II-28住居址

縮尺
 996-1003 † 1007-1008 †
 1004-1006 † 1009-1012 †

H II-10住居址 床面



E II-28住居址



1014

16.3g
石質細粒凝灰岩



1018

27.25g
珪質極細粒凝灰岩



1015

5.55g
硬質泥岩



1016

12.05g
珪質極細粒凝灰岩



1017

6.5g
珪質泥岩



床直上



1019

15.3g
石質細粒凝灰岩



第124圖 E II-28・H II-10住居址

縮尺
1013 +
1014-1019 +

E II-28住居址
埋土



埋土



29.25g
泥質凝灰岩



1021

E II-29住居址
埋土



1022



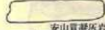
1023

埋土

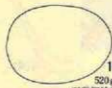


1024

44.4g



安山質凝灰岩



1020

520g
石質網粒凝灰岩

E II-30住居址
埋土



1025

埋土



1026

埋土



1027

埋土



1029

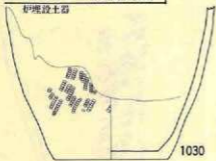


埋土



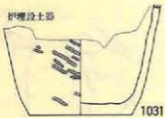
1028

炉埋設土器



1030

炉埋設土器



1031

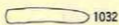
埋土



1033

31.15g

流紋岩質凝灰岩



1032

埋土



1034

3.4g
珪質凝灰質泥岩



1035

5.85g
硬質泥岩



1038

240g
綠色凝灰岩



1036

1.65g
珪質泥岩



1037

8.05g
綠色凝灰岩



縮尺

1020	+	1025~1029	+
1021	+	1030~1031	+
1022~1023	+	1032~1038	+
1024	+		

第125圖 E II-28・29・30住居址

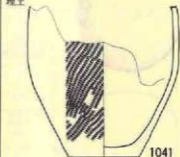
E II-30住居址
埋設土器内



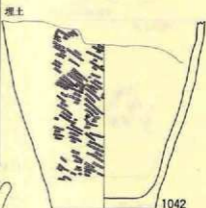
8.45g
石質凝灰岩
1039

1040

E III-1住居址
埋土



1041



1042



30.7g
硬質泥岩
1048

埋土



1043

埋土



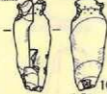
1044

埋土



1045

埋土



1046

埋土



1047

縮尺

1039・1040 ±
1041・1042 ±
1043~1045 ±
1046~1050 ±
1051~1054 ±

3.7g
硬質泥岩

9.9g
硬質泥岩

E III-2住居址



1051



1053



1052



1054



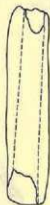
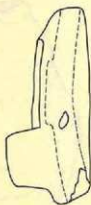
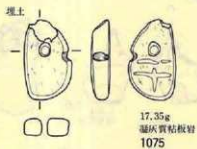
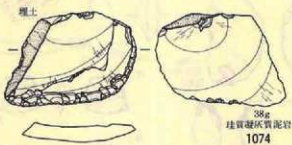
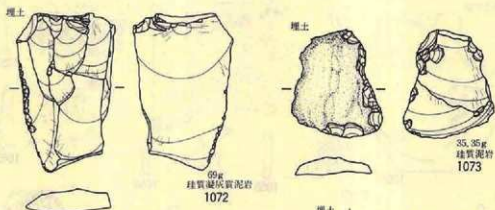
1049



28.2g

流紋岩質細粒凝灰岩
1050

第126図 E II-30、E III-1・2住居址

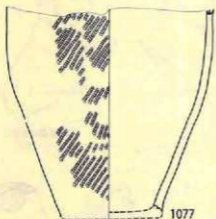


縮尺
1072-1075 十

第128圖 EⅢ-2 住居址

70.05g
硬質泥岩
1076

砂埋段土器

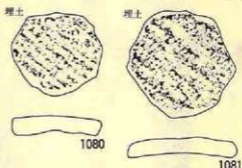


1077



1078

1079



1080

1081



11.35g
珪質粉砂凝灰岩
1082

7.1g
流紋岩
1083

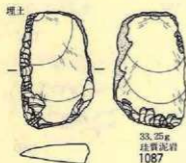


1084



7.95g
珪質凝灰質泥岩
1085

8g
珪質泥岩
1086



33.25g
珪質泥岩
1087



3.75g
珪質泥岩
1088

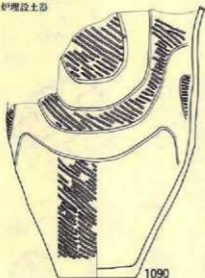
縮尺
1077~1079 十
1080~1088 十
1089 十



580g
石炭安山岩質角礫凝灰岩
1089

第129圖 EⅢ-3 住居址

EⅢ-4住居址
和埋設土器



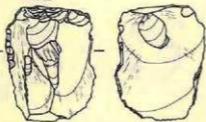
1090

埋土



1092

断面



34.66g
磁質凝灰質泥岩
1095

卵



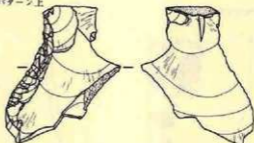
埋土

8.7g
石質凝灰岩
1100



5.06g
磁質凝灰質泥岩
1101

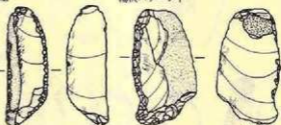
湯泥パターン上



磁質凝灰質泥岩
1091

埋土

湯泥パターン下



9g
磁質泥岩
1093

20.05g
磁質泥岩
1094

EⅢ-5住居址

埋土



1096

埋土



1097

埋土



1098

埋土



1099

埋土

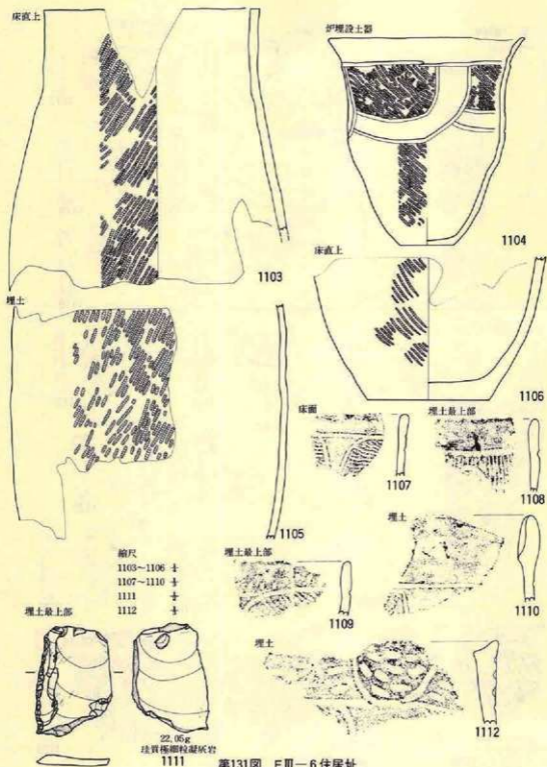


1102

縮尺

1090 寸
1091 寸
1092 寸
1093~1095 寸
1096~1099 寸
1100・1101 寸
1102 寸

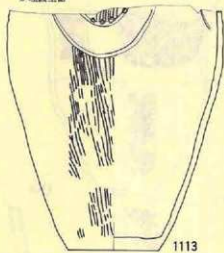
第130図 EⅢ-4・5住居址



第131圖 E III-6 住居址

EⅢ-7 住居址

伊埋設土器



1113

埋土



1114

埋土最上部



1115

埋土最上部



1116

EⅢ-8 住居址

埋土最上部



1117

埋土最上部



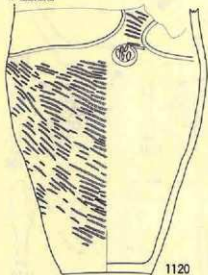
1118

埋土



1119

伊埋設土器



1120

埋土



1121

埋土



1122

埋土



1123

埋土



1124

埋土



1125

埋土



1126

埋土



1127

伊埋土



1128

第132图 EⅢ-7·8 住居址

縮尺

1113 ± 1121~1125 ±

1114~1119 ± 1126·1127 ±

1120 ± 1128 ±

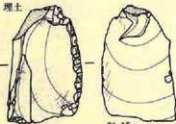
EⅢ-10住居址

埋土下部



1161

埋土



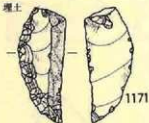
20.15g
地質凝灰質泥岩 1166

埋土



15.15g
硬質泥岩 1168

埋土



17.2g
硬質泥岩 1171

EⅣ-1住居址

埋土



1174

埋土



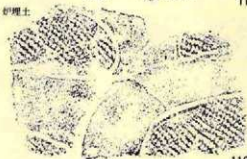
1162

柱穴



1164

砂埋土



1167

埋土



1169

埋土



122g
石質細粒凝灰岩 1172

柱穴



1163

埋土



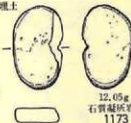
1165

埋土



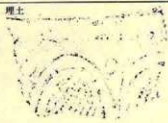
1170

埋土



12.05g
石質凝灰岩 1173

埋土



1175

埋土

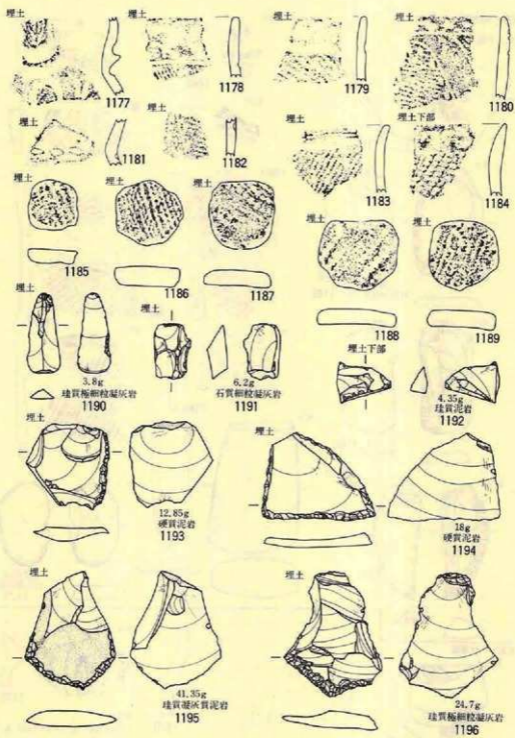


1176

縮尺

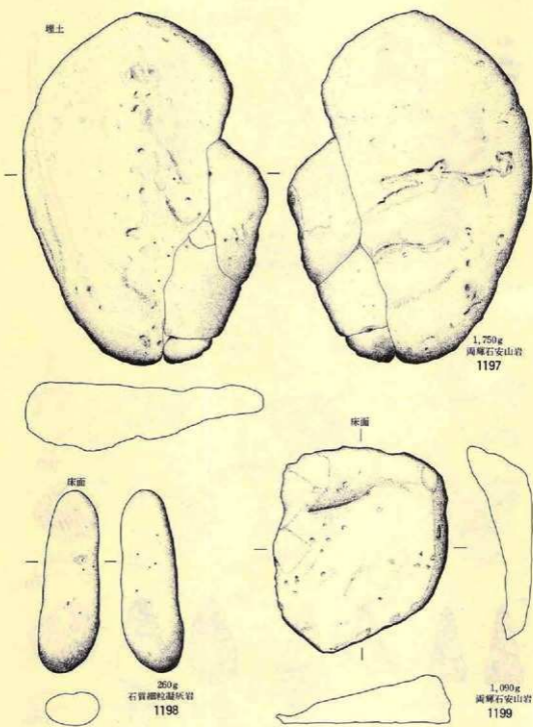
1161~1165 ± 1169·1170 ±
1166 ± 1171~1174 ±
1167 ± 1175·1176 ±
1168 ±

第135圖 EⅢ-10、EⅣ-1住居址



第136圖 E IV-1 住居址

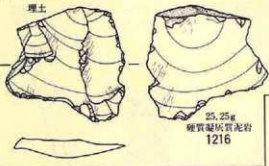
縮尺
1177~1184 ±
1185~1196 ±



第137圖 EN-1 住居址

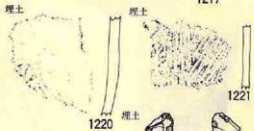
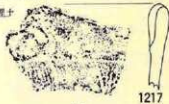
EIV-2 住居址

埋土



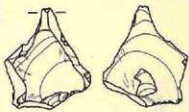
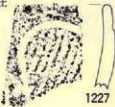
EIV-4 住居址

埋土



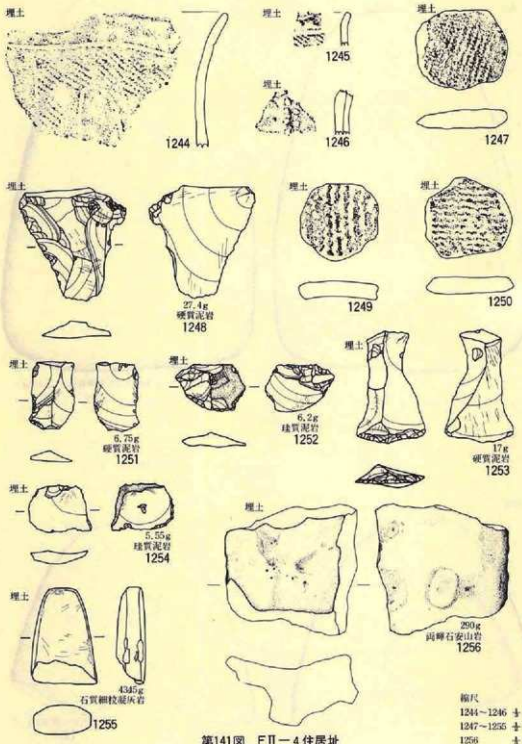
FII-2 住居址

埋土



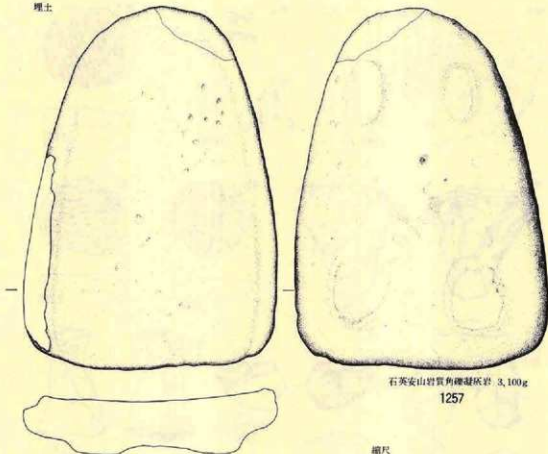
- 細尺
 1216 +
 1217-1222 +
 1223-1224 +
 1225-1228 +
 1229 +

第139圖 EIV-2・4、FII-2 住居址



第141圖 F II-4 住居址

埋土



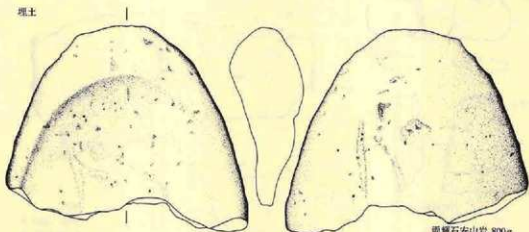
石英安山岩質角礫凝灰岩 3,100g

1257

縮尺

1257・1258 $\frac{1}{4}$

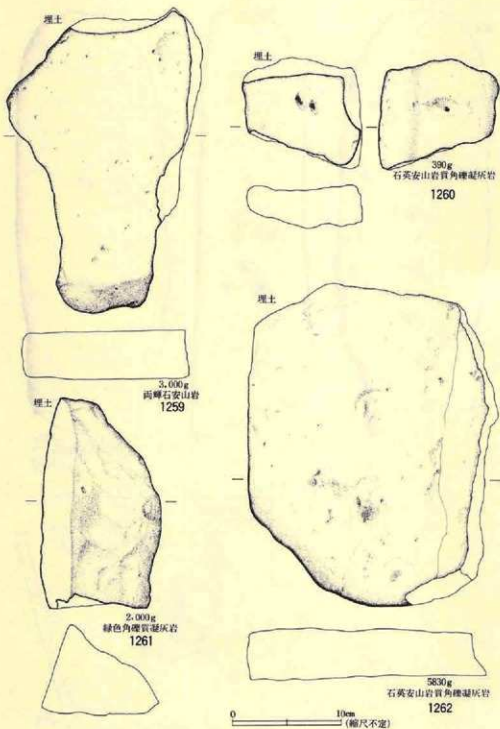
埋土



兩輝石安山岩 800g

1258

第142圖 FII-4 住居址



第143圖 F II-4 住居址

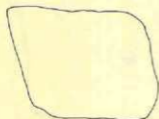
FII-4 住居址

埋土

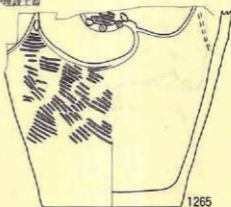


4.900g
石英安山岩質角礫凝灰岩
1263

縮尺
1263~1265 寸



FII-6 住居址
炉埋設土器



炉埋設土器

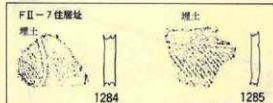
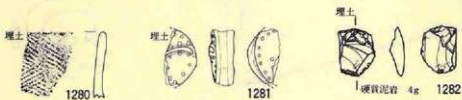
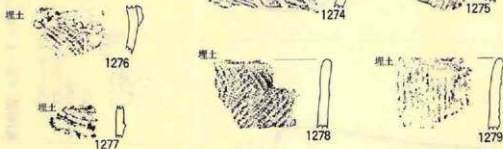
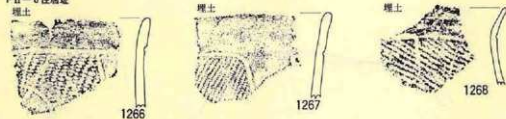


1264

1265

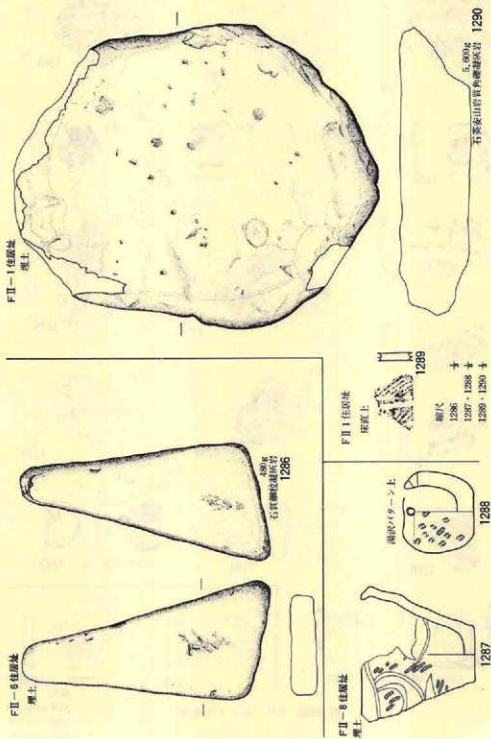
第144图 FII-4・6 住居址

FⅡ-6住居址

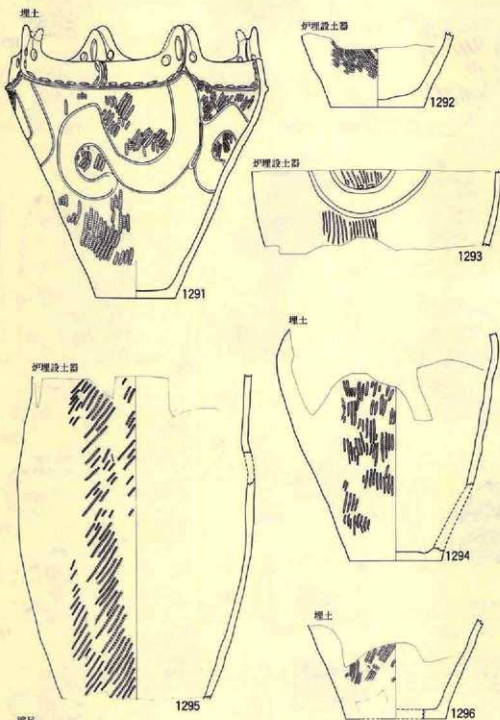


第145図 FⅡ-6・7住居址

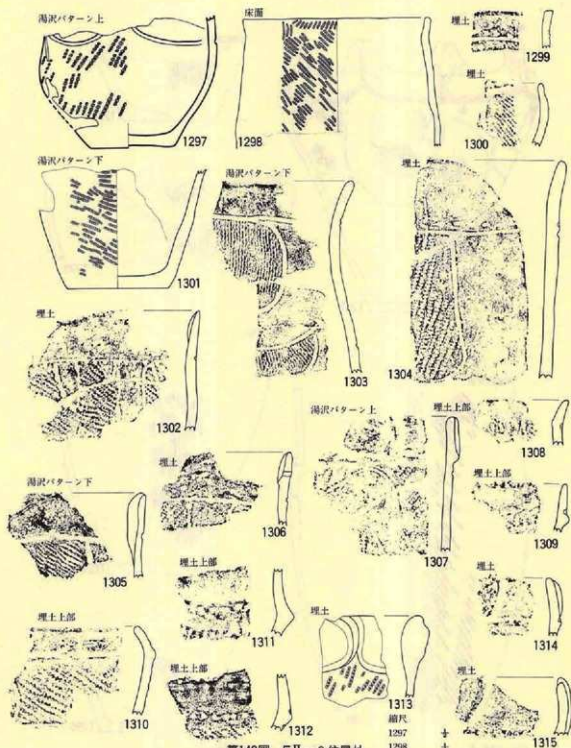
縮尺
1266~1281 1/2
1282・1283 1/3
1284・1285 1/4



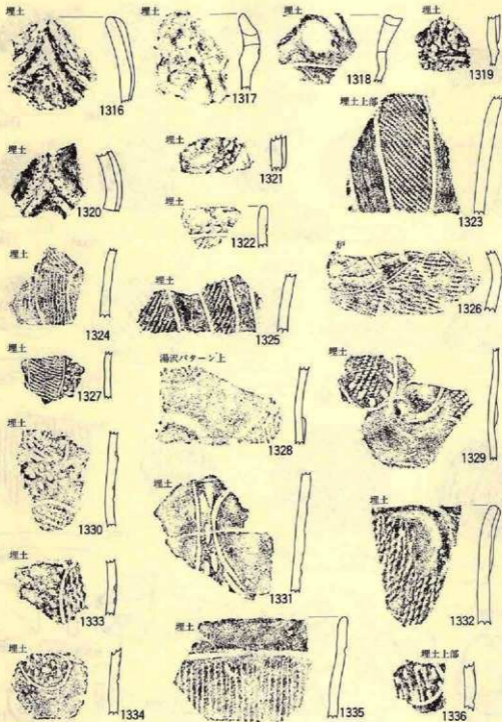
第146図 FII-1・6・8住居址



第147图 F II-8 住居址

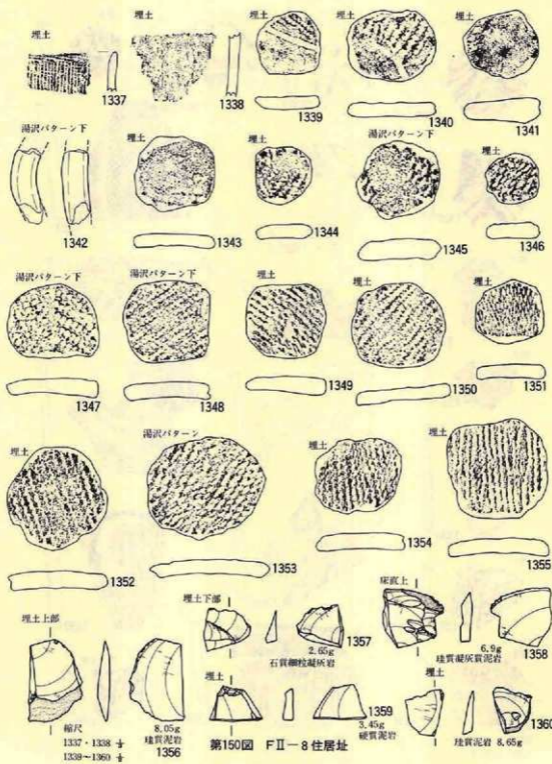


第148図 F II-8 住居址

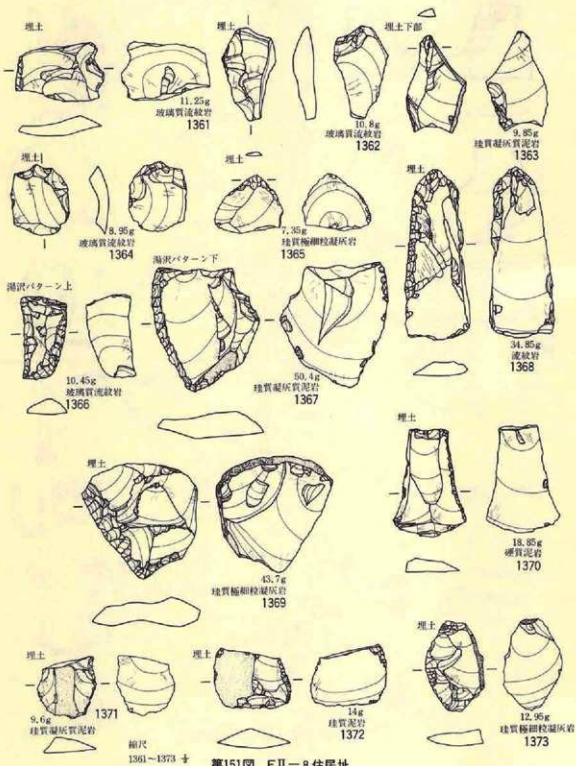


縮尺
1316~1336 4

第149図 FⅡ-8 住居址



第150図 FII-8住居址



第151圖 FII-8住居址

FII-8住居址

埋土



14g
埴質泥岩
1374



湯沢パターン下



1376
13.3g
埴質泥岩



湯沢パターン下



1375
37g
埴質泥岩



FII-9住居址

埋土



1377

埋土上部



1378



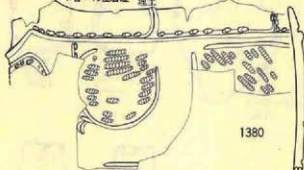
湯沢パターン下



10.75g
石質粗粒凝灰岩
1379

FII-10住居址

埋土



1380

埋土



1381

埋土



1384

埋土



1382

床面



1383

埋土



1385

埋土



1386

埋土



1387

縮尺

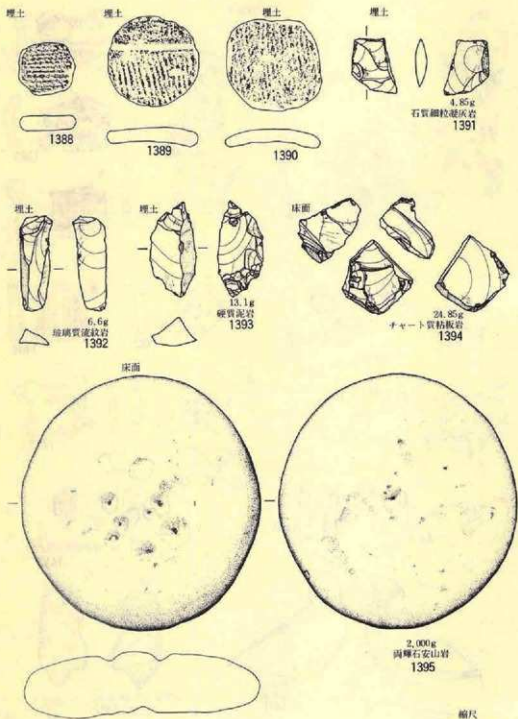
1374-1376 十

1377 十

1378-1379 十

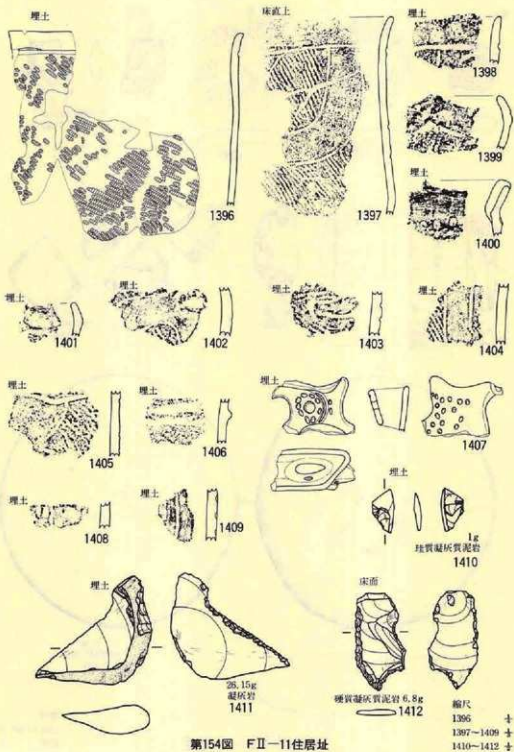
1380-1387 十

第152図 FII-8・9・10住居址



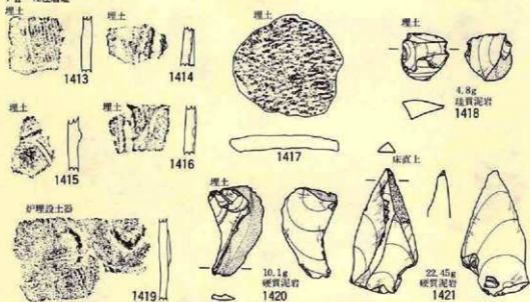
第153圖 FⅡ-10住居址

縮尺
1388-1394 十
1395 寸



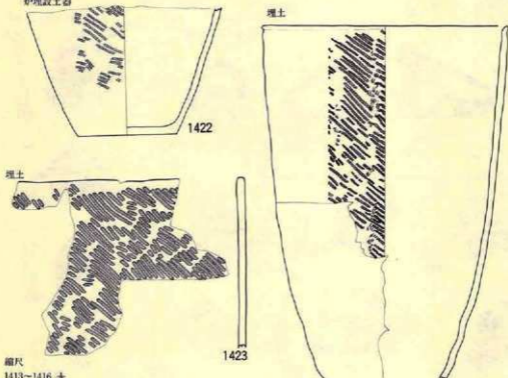
第154圖 F II-11住居址

F II-12住居址



F II-13住居址

伊羅設土器

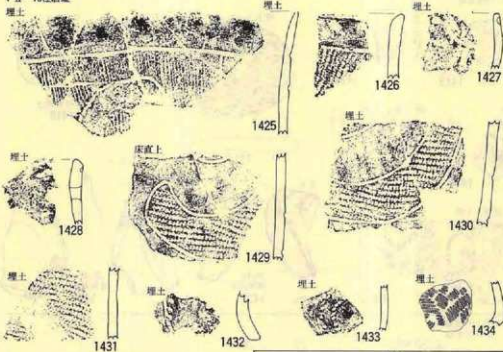


縮尺

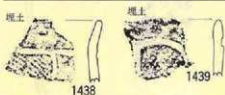
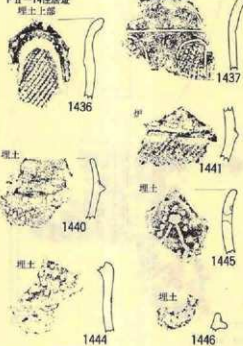
- 1413~1416 寸
- 1417・1418 寸
- 1419 寸
- 1420・1421 寸
- 1422~1424 寸

第155圖 F II-12・13住居址

F II-13住居址

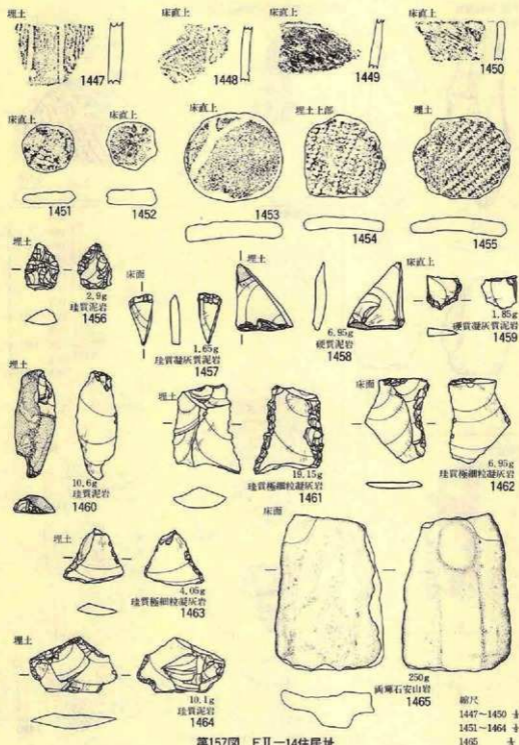


F II-14住居址



縮尺
1425~1434 ↓
1435 ↓
1436~1446 ↓

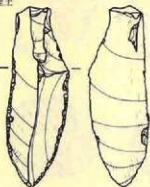
第156圖 F II-13・14住居址



第157图 F II-14住居址

F II-14住居址

埋土



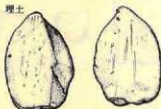
37.6g

地質極細粒凝灰岩

1466



埋土



120g

玻璃質流紋岩

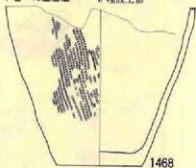
1467



F II-15住居址

炉埋設土器

埋土



1468



1469

埋土最下部

1470

F II-16住居址

床面

縮尺



1471

1466 寸
1467 寸
1468 寸
1469 寸
1470 寸
1471 寸
1472-1474 寸
1475 寸
1476-1477 寸
1478 寸
1479-1480 寸

埋土



1472

埋土



1473

埋土



1474

埋土



1477

埋土



1476

床面



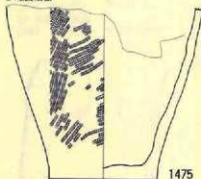
1479

埋土



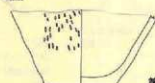
1480

炉埋設土器



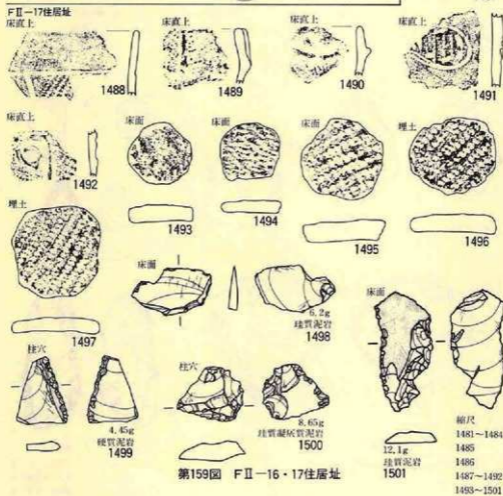
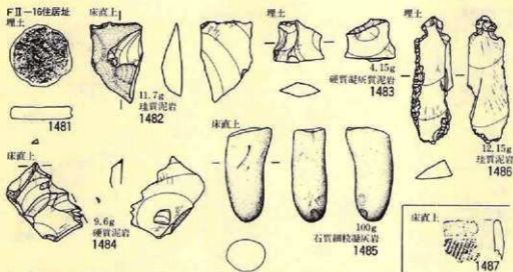
1475

埋土



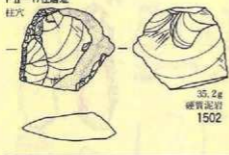
1478

第158图 F II-14・15・16住居址

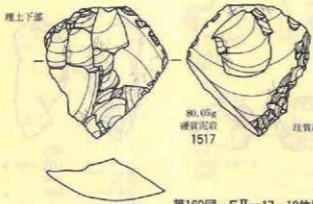
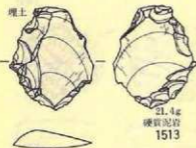
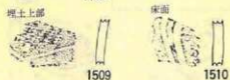


第159圖 F II-16・17住居址

F II-17住居址
柱穴



F II-18住居址



第160圖 F II-17・18住居址

縮尺
1502 1/4
1503-1512 1/8
1513-1518 1/2

FⅢ-1 住居址
床直上



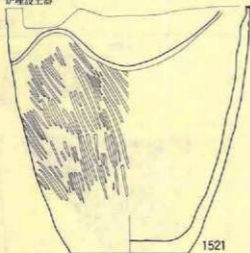
1519

床直上



1520

FⅢ-2 住居址
炉埋設土器



1521

FⅢ-3 住居址
埋土



1523

埋土



1524

FⅢ-5 住居址

埋土



1525

埋土



1522

埋土



1526

埋土



1527

埋土



1528

床面



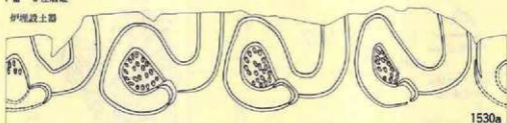
1529

第161图 FⅢ-1・2・3・5住居址

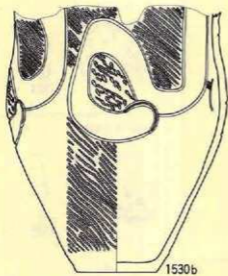
縮尺
1519-1529 土

FⅢ-5 住居址

伊州段土器

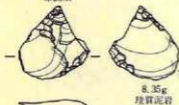


1530a



1530b

床直上



1531

8.35g
硬質泥岩

FⅢ-6 住居址 埋土



1532

埋土



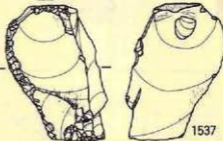
1533

埋土



1534

埋土



1537

60.05g
硬質凝灰質泥岩

FⅢ-8 住居址

埋土



1535

埋土

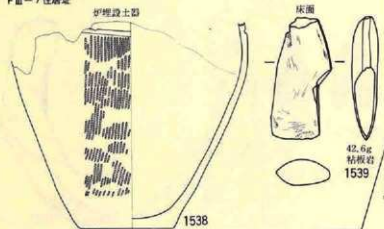


1536

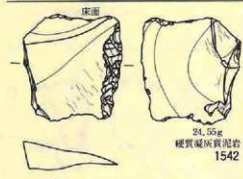
第162圖 FⅢ-5・6・8 住居址

縮尺
1530a 寸
1530b 寸
1531 寸
1532-1535 寸
1536-1537 寸

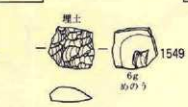
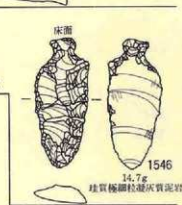
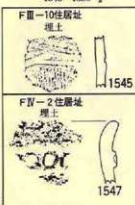
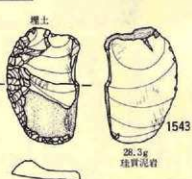
FⅢ-7住居址



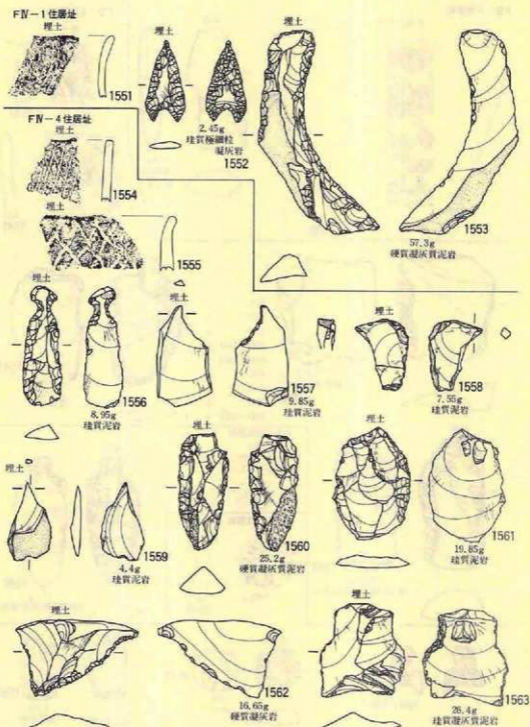
FⅢ-9住居址



縮尺
1538 寸
1539 寸
1540・1541 寸
1542~1544 寸
1545 寸
1546 寸
1547 寸
1548~1550 寸



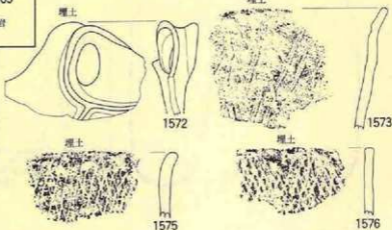
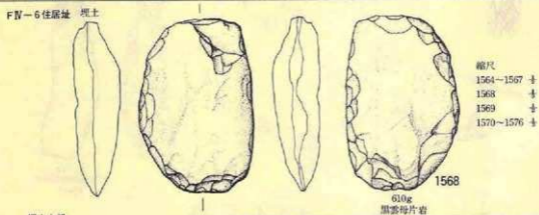
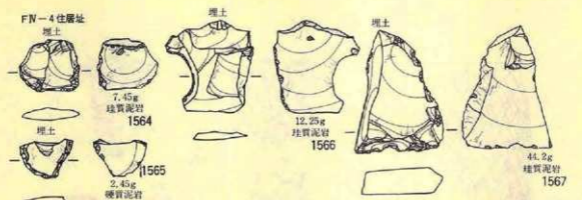
第163図 FⅢ-7・9・10、FⅣ-2住居址



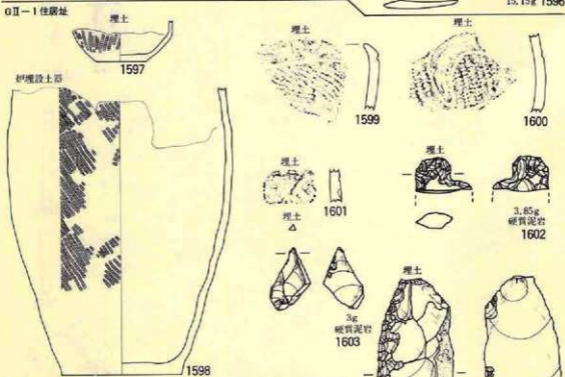
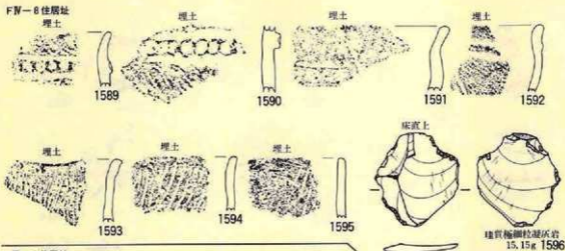
第164圖 FN-1・4住居址

縮尺

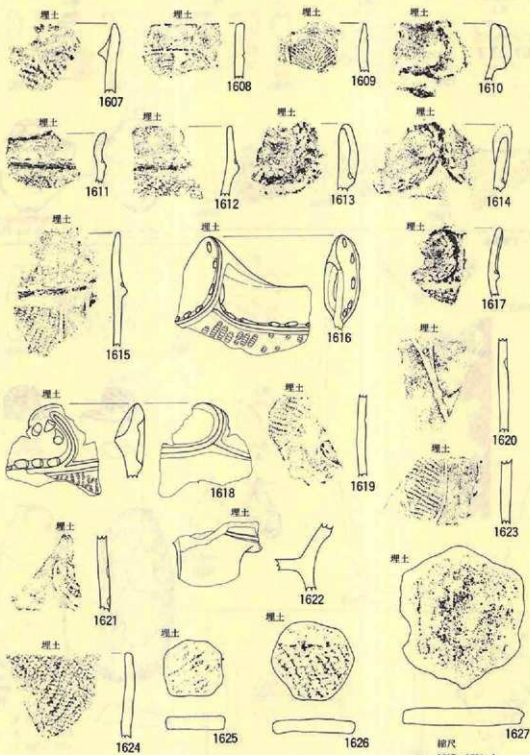
1551 + 1554・1555 +
1552・1553 + 1556~1563 +



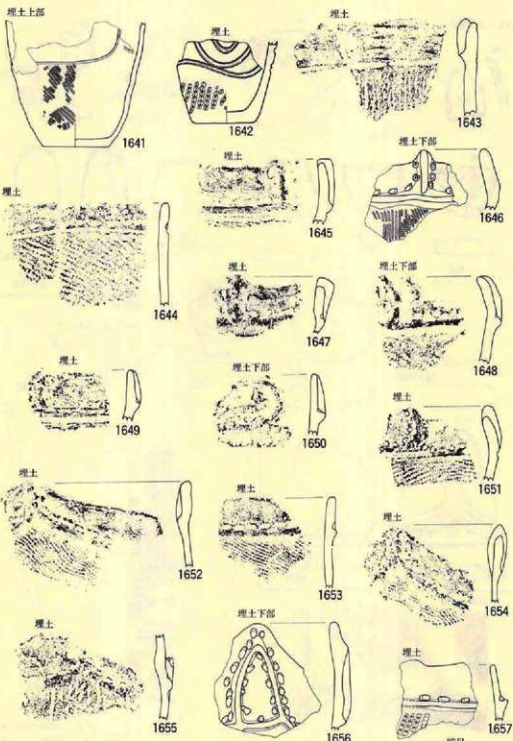
第165圖 FN-4・5・6・7住居址



第167圖 FN-8、GII-1・2住居址

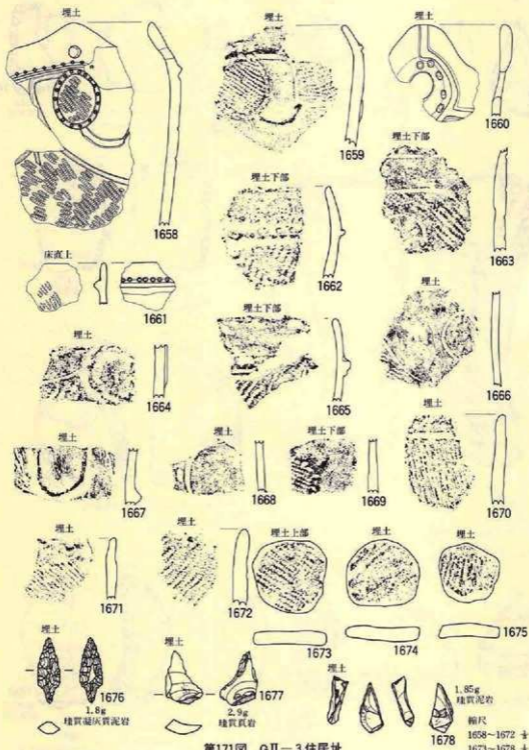


第168圖 G II-2 住居址

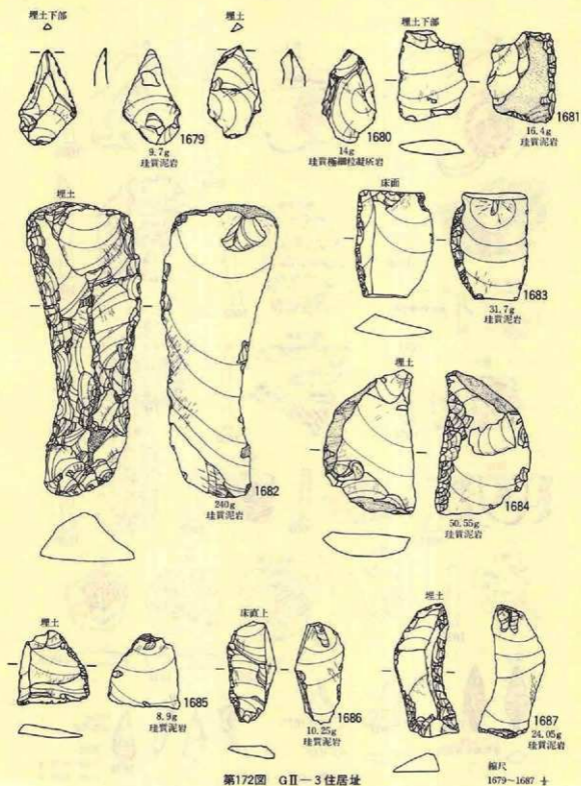


第170图 GII-3 住居址

縮尺
 1641 ±
 1642 ±
 1643-1657 ±



第171圖 GII-3 住居址



第172圖 GII-3 住居址

GII-3 住居址 埋土下部



1688
21.85g
硬質泥岩



42.9g
安山岩質凝灰岩



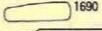
13.15g
砂質凝灰岩



25g
海縣石安山岩



1689



1690

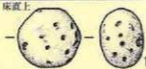


1691

GII-4 住居址



1692

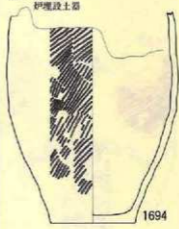


10.75g
流紋岩質粗粒凝灰岩

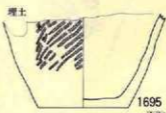


1693

GII-5 住居址 炉埋設土器



1694



1695
土器

GII-6 住居址



1698



1699



1696



5.15g
玻璃質流紋岩

1697



1700



1702



1701

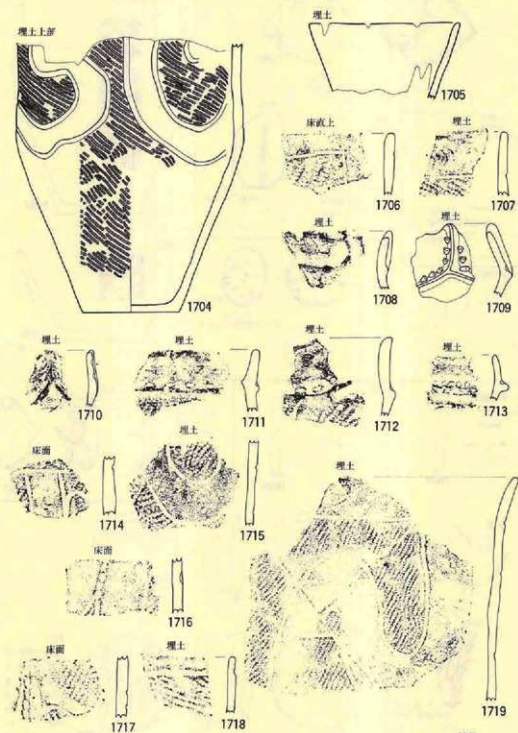


1703

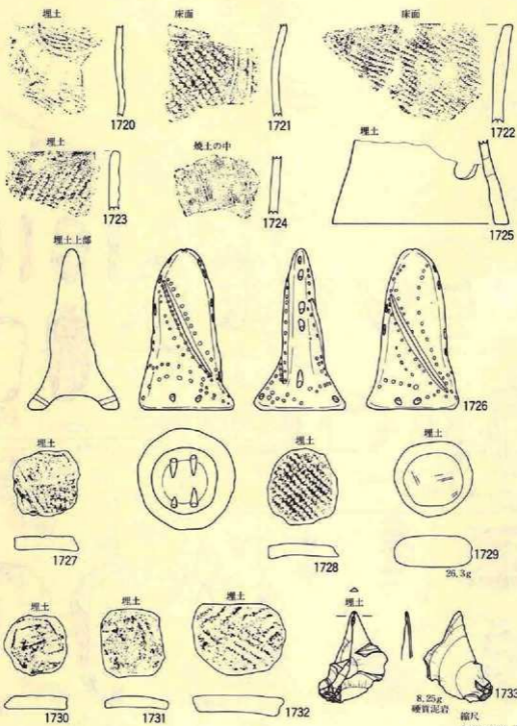
縮尺

- 1688-1690 1/2
- 1691-1692 1/2
- 1693 1/2
- 1694-1695 1/2
- 1696 1/2
- 1697 1/2
- 1698-1700 1/2
- 1701-1703 1/2

第173圖 GII-3・4・5・6 住居址



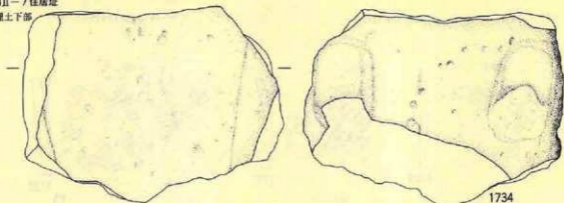
第174圖 GII-7住居址



第175図 GII-7住居址

GII-7 住居址

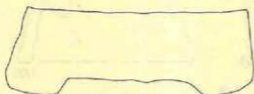
埋土下部



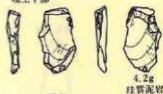
1734

縮尺
1734 ±
1735~1741 ±
1742~1750 ±
1751 ±

2,100g
安山岩

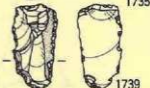


埋土下部



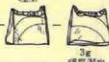
4.2g
珉質泥岩

埋土



6.45g
珉質泥岩

埋土



3g
硬質泥岩
1736

埋土



5.5g
硬質泥岩
1737

埋土



4.6g
珉質細粒凝灰岩
1738

埋土



14.75g
硬質泥岩
1740



埋土



5.9g
珉質凝灰質泥岩
1741

GII-9 住居址

埋土



埋土



1743

埋土



1744

埋土



1745

埋土



1746

埋土



1747



22.8g
珉質泥岩

1751

埋土



1748

埋土



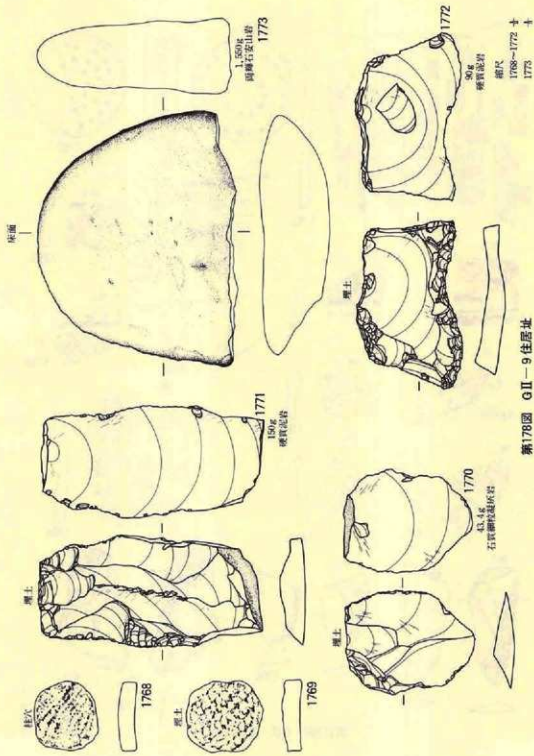
1749

埋土

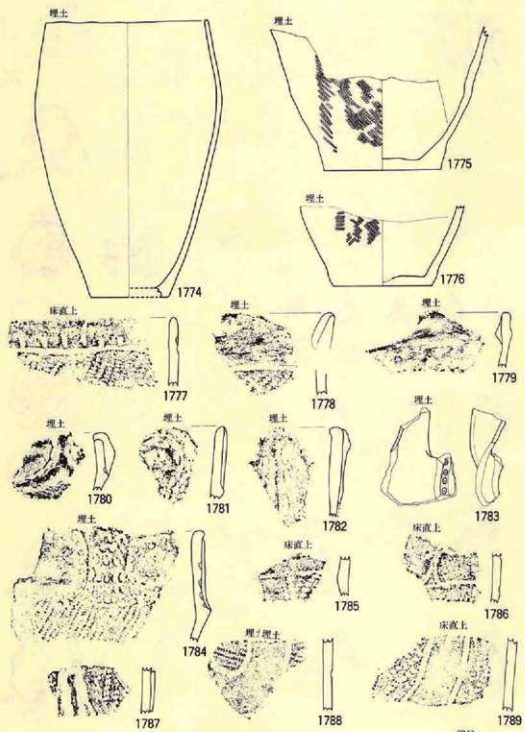


1750

第176图 GII-7・9 住居址

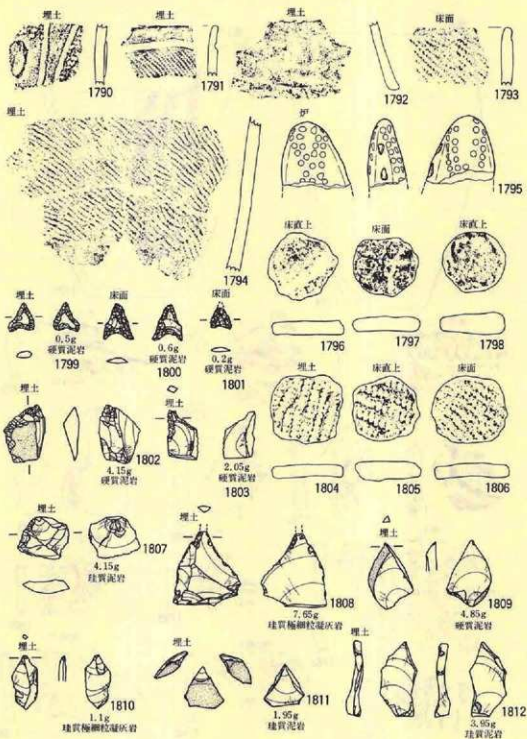


第178圖 QII-9住居址



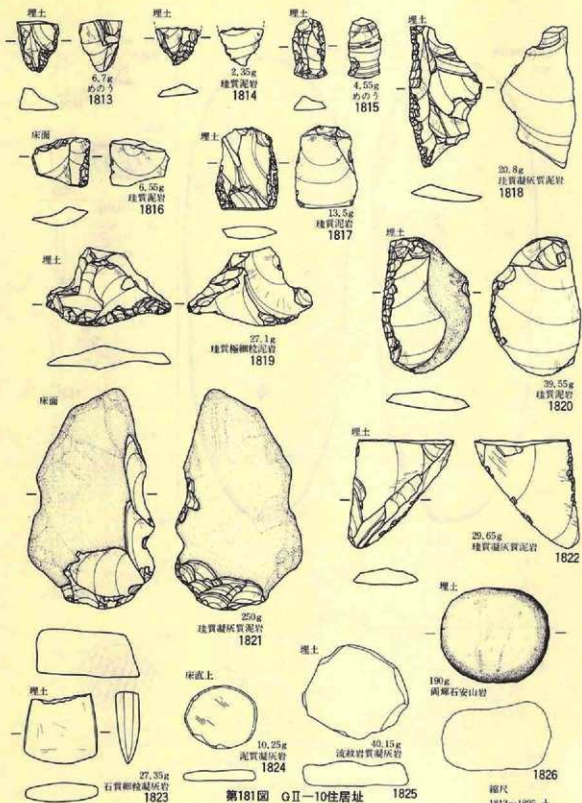
第179圖 GII-10住居址

縮尺
1774-1776 寸
1777-1789 寸



第180圖 G II-10住居址

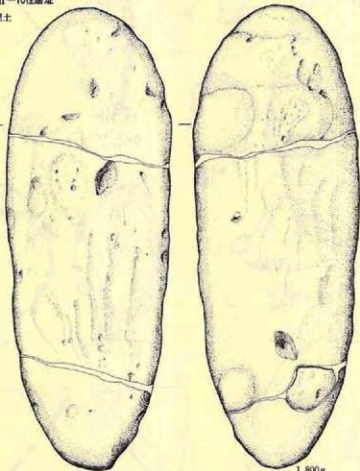
縮尺
1790~1794 ±
1795~1812 ±



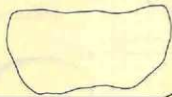
第181圖 G II-10住居址

縮尺
1813~1825 \pm
1826 \pm

GⅡ-10住居址
埋土



1,800g
岡輝石安山岩
1827



床面



縮尺

1827-1836 寸
1837 寸

1835

埋土



1834

埋土



1836

埋土



1837

GⅡ-11住居址

床直上



1828

床直上



1829

GⅡ-12住居址

埋土



1830

埋土



1831

埋土



1832

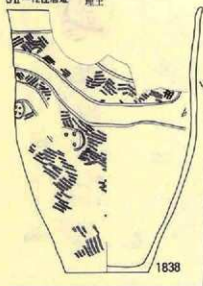
埋土



1833

第182圖 GⅡ-10・11・12住居址

GII-12住居址 埋土



1838



1839

GII-13住居址



1840

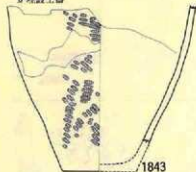


1841



1842

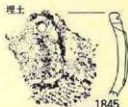
が理設土器



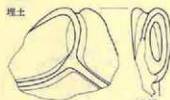
1843



1844



1845



1846



1847



1848

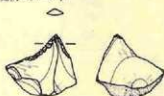


1849



1850

湯沢パターン下



3.15g
硬質泥岩
1851

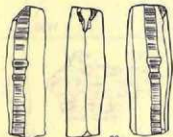
縮尺

1838	±	1843	±
1839	±	1844~1850	±
1840~1842	±	1851	±

第183図 GII-12・13住居址

GII-13住居址

埋土



39g
砂質凝灰岩
1852



濁沢パターン下



6g
硬質凝灰質泥岩
1853



床直上

埋土



1857



1858



1859

GII-14住居址

床直上



1854

埋土

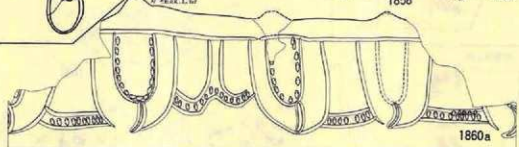


1856

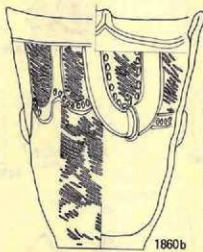


1859

が埋設土器



1860a



1860b

GII-15住居址

埋土



1861

埋土



1862

縮尺

1852・1853 十

1854 十

1855 十

1856～1859 十

1860ab 十

1861～1867 十

埋土



1863

埋土



1864

埋土



1865

埋土



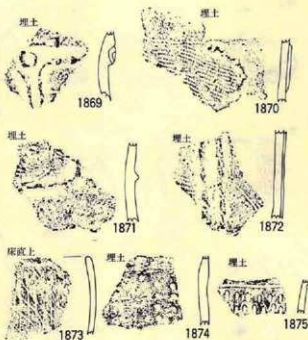
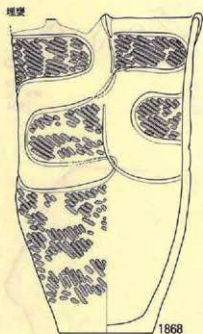
1866

埋土



1867

第184図 GII-13・14・15住居址



縮尺

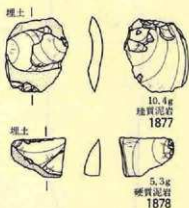
1868 寸

1869-1876 寸

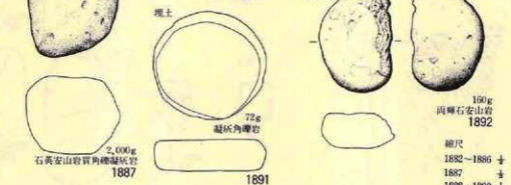
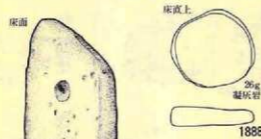
1877-1878 寸

1879 寸

1880-1881 寸



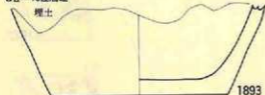
第185圖 GII-15住居址



縮尺
 1882-1886 ±
 1887 ±
 1888-1890 ±
 1891 ±
 1892 ±

第186圖 GⅡ-15住居址

GII-16住居址



1893



1894



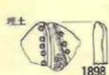
1895



1896



1897



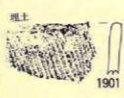
1898



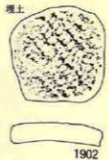
1899



1900



1901



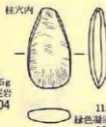
1902



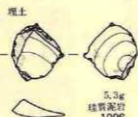
7g
埴質泥岩
1903



14.55g
埴質泥岩
1904



11.2g
綠色凝灰岩
1905



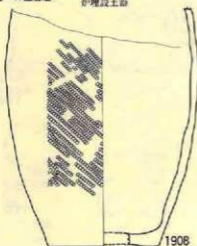
5.3g
埴質泥岩
1906



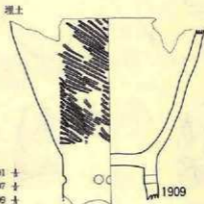
2.2g
埴質泥岩
1907

GII-17住居址

伊埋設土器



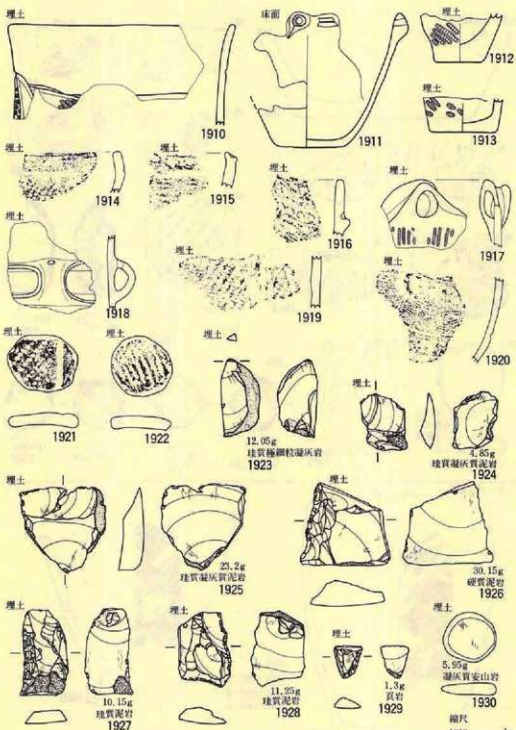
1908



1909

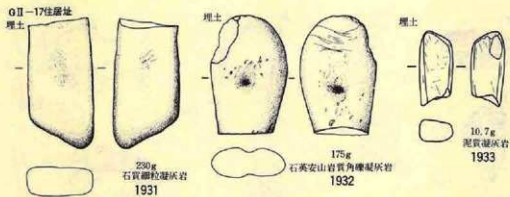
縮尺
1893~1901 1/4
1902~1907 1/2
1908・1909 1/2

第187圖 GII-16・17住居址

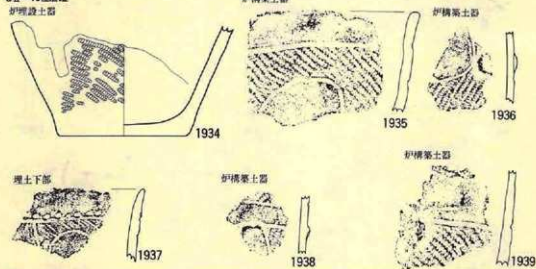


第188圖 GII-17住居址

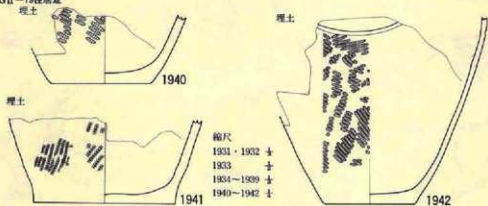
縮尺
1910 十
1911~1913 十
1914~1920 十
1921~1930 十



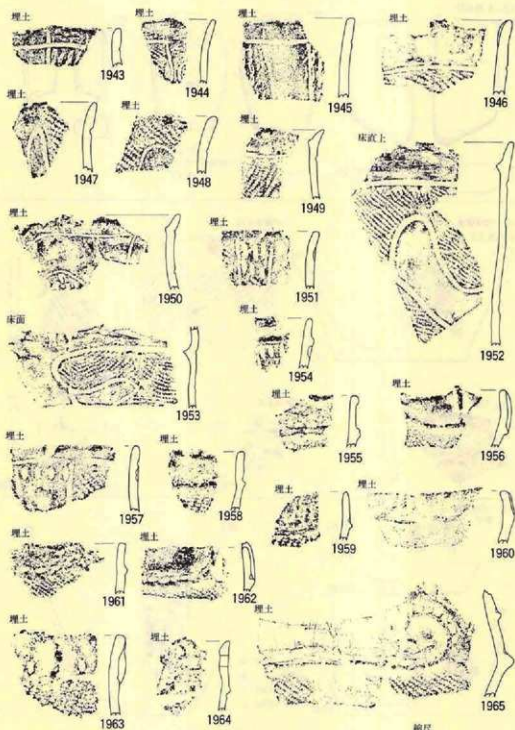
G II-18住居址



G II-19住居址

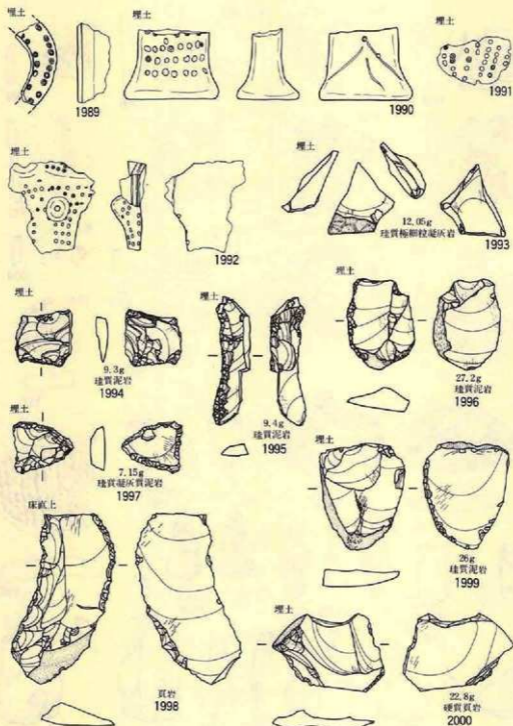


第189圖 G II-17・18・19住居址



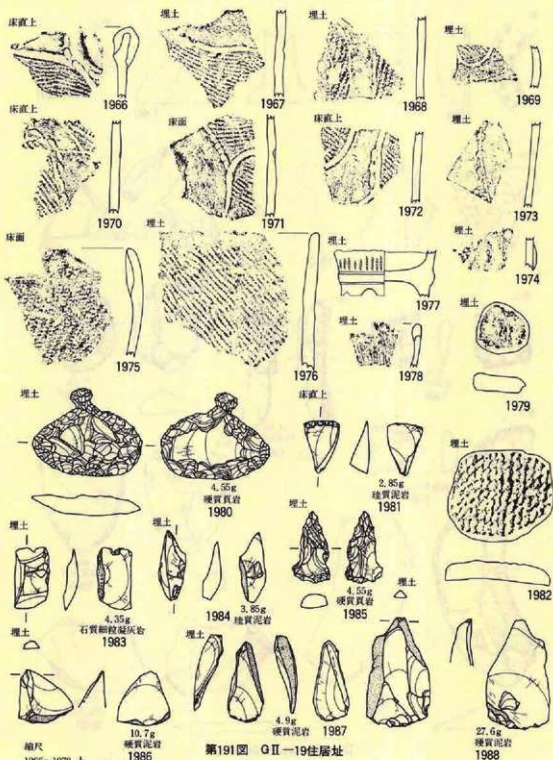
第190圖 GII-19住居址

縮尺
1943~1965 十

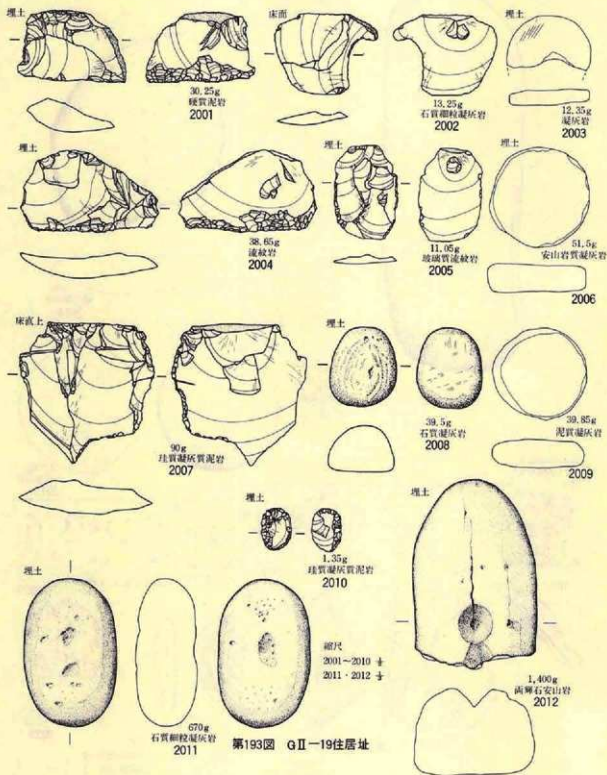


第192圖 GII-19住居址

縮尺
1989~2000 ±



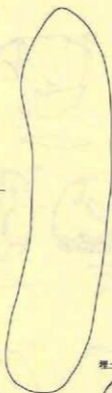
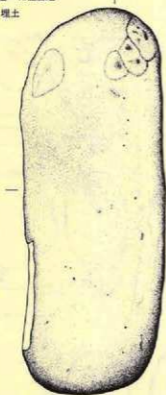
第191圖 QII—19住居址



第193圖 GII-19住居址

G II-19住居址

埋土



埋土



920g
綠色凝灰岩
2014

3,900g
粗粒玄武岩
2013

埋土



1,200g
石英安山岩
2015

G II-20住居址

埋土



2016



埋土



2017



埋土



2018



埋土



2019



埋土



2020

埋土



24.05g
硬質泥岩

2021



第194圖 G II-19・20住居址

埋土



2022

埋土



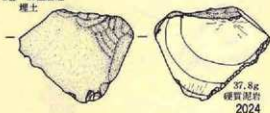
2023

縮尺

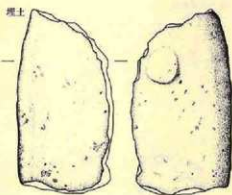
2013~2020 ↓

2021~2023 ↓

G II-20 住居址
埋土



37.8g
硬質泥岩
2024



480g
両輝石安山岩
2027



4.2g
珪質泥岩
2025

14.7g
松脂岩
2026



3.5g
チャート質粘板岩
2028

11.75g
松脂岩
2029

H II-1 住居址



2030

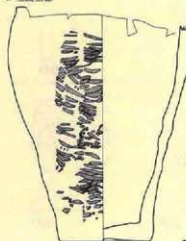
2031



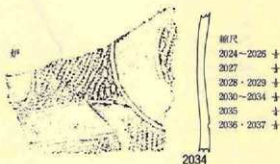
2032

2033

炉埋設土器



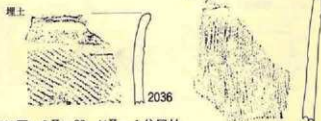
2035



2034

縮尺

- 2024-2025 ±
- 2027 ±
- 2028-2029 ±
- 2030-2034 ±
- 2035 ±
- 2036-2037 ±



2036

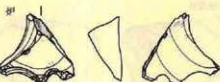
2037

第195圖 G II-20、H II-1 住居址

HⅡ-1 住居址
埋土上部

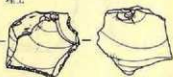


2038



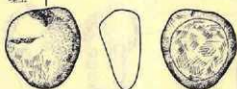
13.15g
硬質泥岩
2039

埋土



11.25g
珪質泥岩
2040

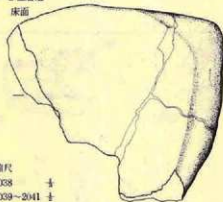
埋土



41.8g
粘板岩
2041

HⅡ-2 住居址

床面

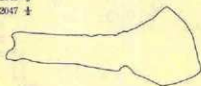


縮尺

2038 ±
2039~2041 ±
2042~2045 ±
2046・2047 ±



1,100g
流紋岩質凝灰岩
2042



埋土



2043

HⅡ-3 住居址

埋土



2044

埋土



2045

埋土



2046

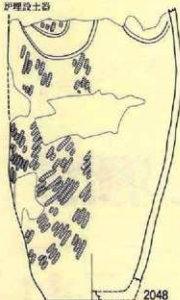
埋土



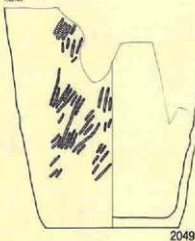
2047

第196図 HⅡ-1・2・3 住居址

伊理段土器



埋土



埋土



13. g
球質極細粒凝灰岩
2053

埋土



7.75 g
球質泥岩
2054

埋土



2055

埋土



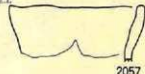
50.65 g
流紋岩質細粒凝灰岩
2058

埋土



8.95 g
球質極細粒凝灰岩
2056

埋土



2057

縮尺

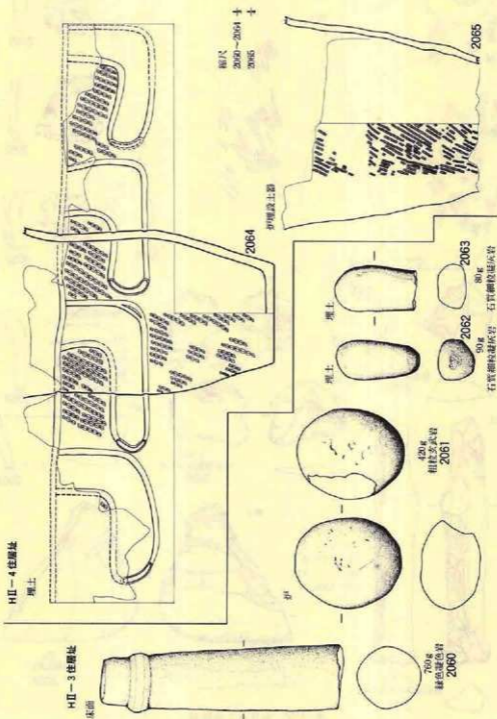
2048・2049 寸
2050~2052 寸
2053・2054 寸
2055 寸
2056~2059 寸

埋土



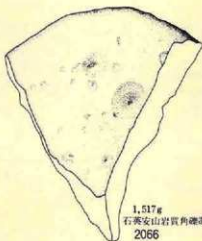
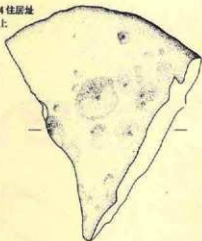
70 g
硬質泥岩
2059

第197圖 HII-3 住居址

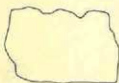


第198圖 HII-3・4 住居址

HII-4 住居址
床上



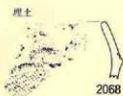
1.517g
石英安山岩質角礫凝灰岩
2066



床面



700g
兩層石英安山岩
2067



2068



2069



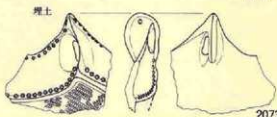
2071



2070



2072



2073

HII-5 住居址
床面上



2074



2075



2076



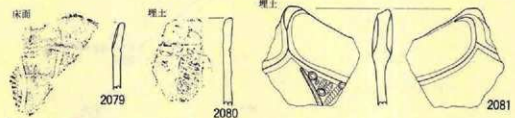
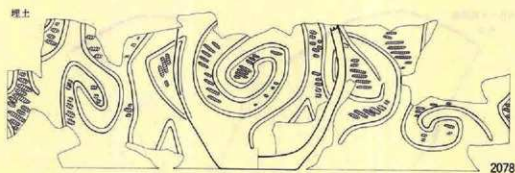
2077

縮尺

2066~2073 寸

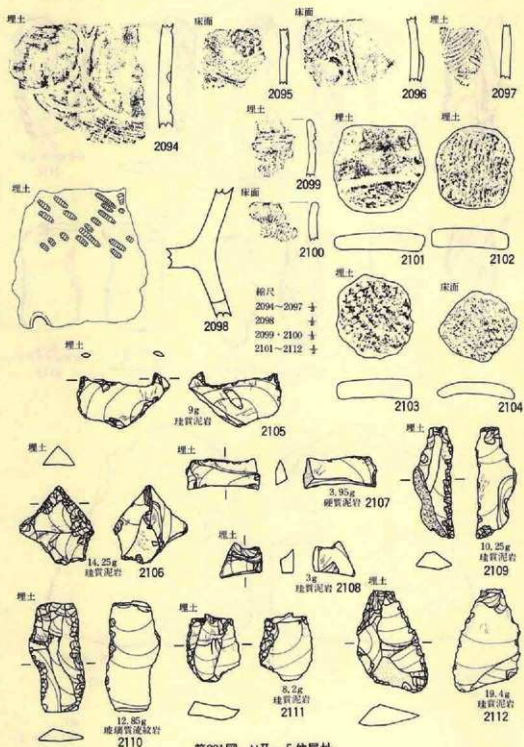
2074~2077 寸

第199圖 HII-4・5 住居址

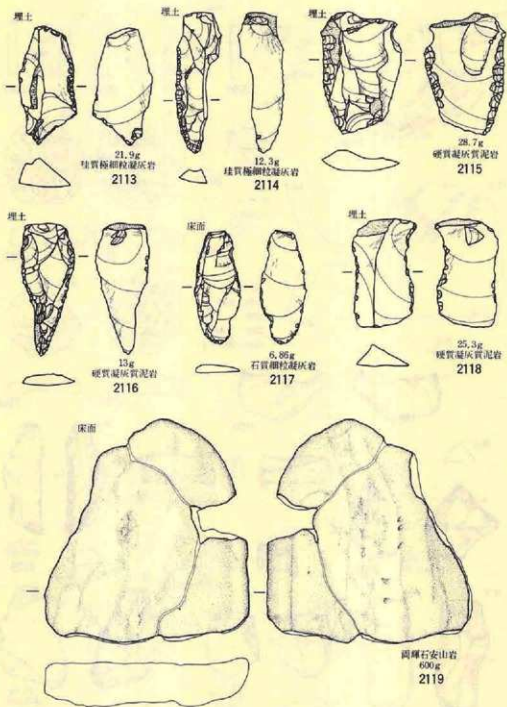


縮尺
 2078-2090 1/2
 2091 1/3
 2092-2093 1/4

第200圖 H II-5 住居址



第201圖 HII-5 住居址

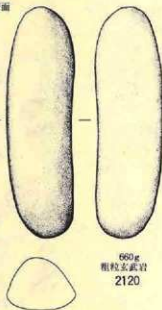


第202圖 HII-5 住居址

縮尺
2113~2118 +
2119 +

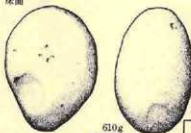
HII-5 住居址

床面



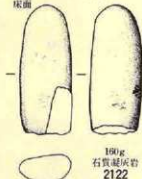
660g
粗粒玄武岩
2120

床面



610g
輝石安山岩
2121

床面



180g
石質凝灰岩
2122

床面



6.15g
凝灰岩
2123

HII-6 住居址

床面



2124

床面



2125

埋土



2126

床面



粗粒玄武岩
2130

床面



11.7g
珧質極細粒凝灰岩
2127

埋土



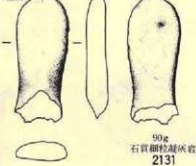
6.15g
珧質泥岩
2128

埋土



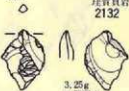
1.55g
珧質極細粒凝灰岩
2129

埋土



90g
石質細粒凝灰岩
2131

埋土

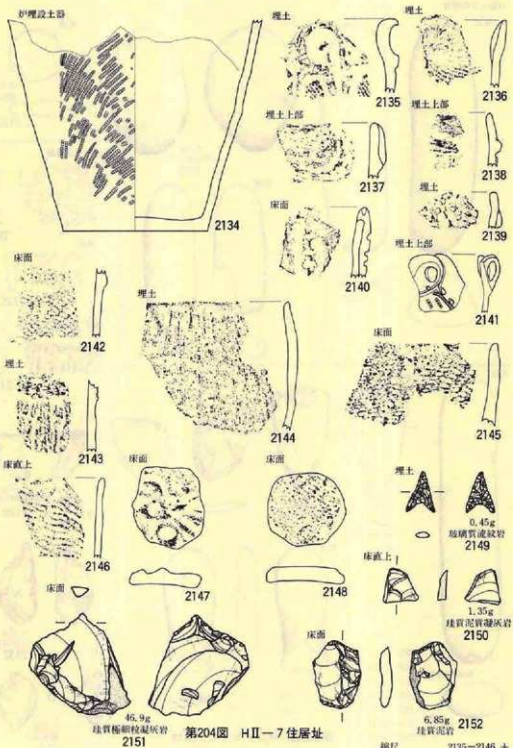


6.25g
珧質頁岩
2132

3.25g
珧質泥岩
2133

縮尺
2120~2122 ↓
2123 ↓
2124~2126 ↓
2127~2129 ↓
2130~2131 ↓
2132~2133 ↓

第203圖 HII-5・6 住居址



標尺 2135-2146 ±
2134 ± 2147-2152 ±

HII-7住居址
埋土



13.7g
硬質泥岩
2153



8.05g
硬質泥岩
2154

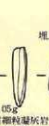


23.1g
硬質泥岩
2155

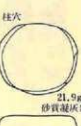
埋土



300g
粗粒玄武岩
2156



5.05g
石質細粒凝灰岩
2157



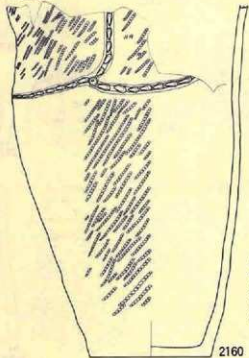
6g
石質凝灰岩
2158



21.9g
砂質凝灰岩
2159

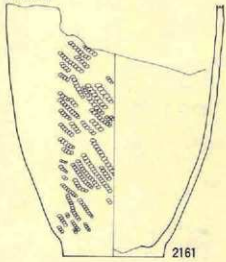
柱穴

埋土
HII-7住居址



2160

HII-8住居址
埋土



2161

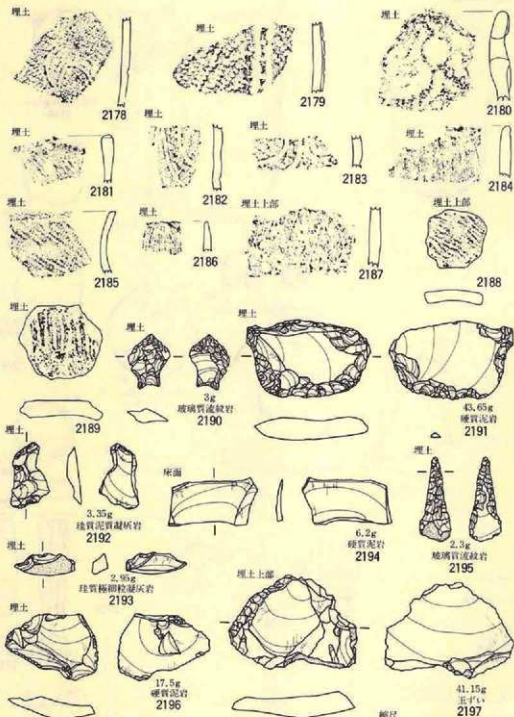
縮尺
2153~2155 1/4
2156 1/2
2157~2159 1/4
2160~2162 1/4

埋土



2162

第205圖 HII-7・8・住居址



第207圖 H II-8 住居址

HII-8 住居址

埋土



730g
粘板岩 2198

埋土



15.4g
粗質極細粒凝灰岩
2199

床直上



2201

埋土



6.8g
凝灰岩

2202

埋土



3.9g 2200

流紋岩質細粒凝灰岩

埋土



50g
石英安山岩質角礫凝灰岩

2204

埋土



12.95g
凝灰岩

2205

埋土



350g
高礫石安山岩
2203

埋土



11.65g
凝灰角礫岩

2206

HII-9 住居址



2207



2208



2209



2210



2211



4.45g
流紋岩質細粒凝灰岩
2212

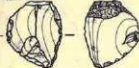
縮尺
2198 十
2199-2202 十
2203 十
2204-2206 十
2207 十
2208-2211 十
2212 十

第208圖 HII-8・9 住居址

HⅡ-9住居址
埋土上部



埋土



8.65g
珪質極細粒凝灰岩

埋土上部

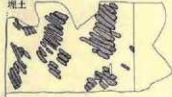


床面



70g
粗粒玄武岩

HⅡ-10住居址
埋土



縦尺
2213~2217 寸
2218 寸
2219・2220 寸
2221 寸
2222~2224 寸
2225・2226 寸

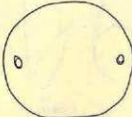
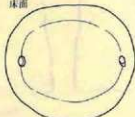
埋土



埋土



床面



2221

埋土



2222

埋土



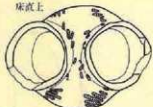
2223

床直上



2224

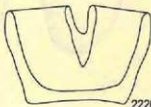
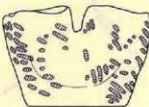
床直上



埋土

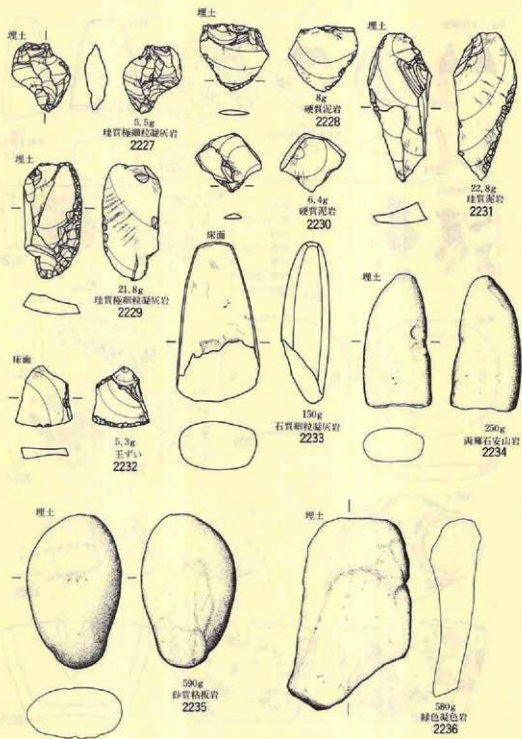


2225



2226

第209図 HⅡ-9・10住居址



第210圖 HII-10住居址

縮尺
2227~2233 ±
2234~2236 ±

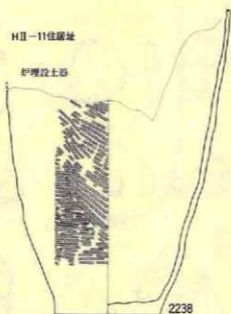
H II-10住居址
床面



2237
4,000g
高碑石炭山岩

H II-11住居址

炉埋設土器



2238

埋土



2242

埋土



2244

埋土



2245

埋土



2246

埋土



2247

埋土



2248

埋土



2249

埋土



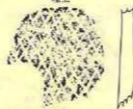
2250

埋土



2251

埋土



2252

埋土



2253



2239

埋土



2240

埋土



2241

埋土



2243

縮尺

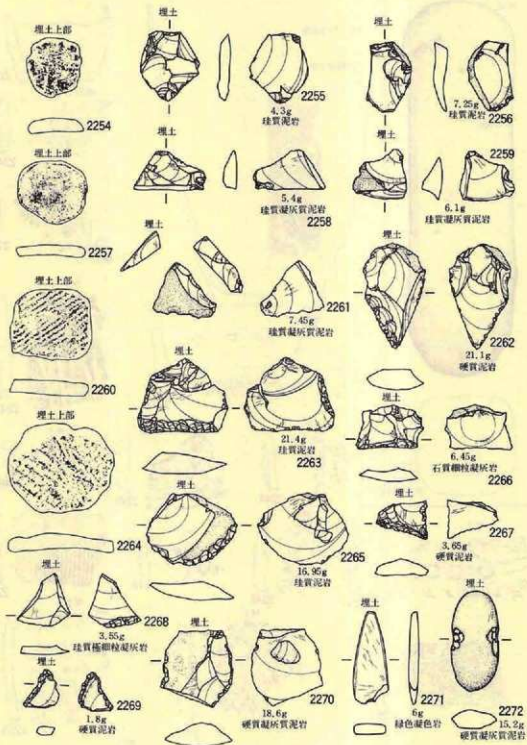
2237

± 2239 ±

2238

± 2240-2253 ±

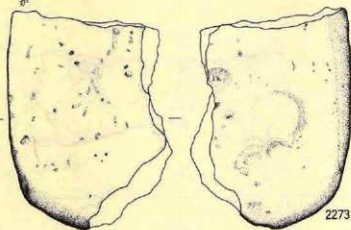
第211圖 H II-10・11住居址



第212圖 H II—11住居址

縮尺
2254~2272 十

H II-11住居址
切



2273

800g
両輝石安山岩

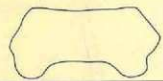


切



2274

660g
石英安山岩



埋土



2279

8.8g
燧質泥岩



埋土



2280

17g
燧質泥岩



H II-12住居址
埋土器



2275

床面



2276

29g
燧質泥岩

埋土



2277

5.65g
燧質凝灰質泥岩

柱穴



2278

23.8g
燧質極細粒凝灰岩



床面



2281

49.45g
燧質流紋岩

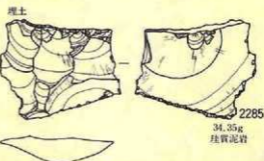
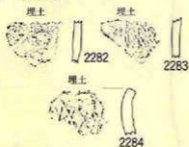


縮尺

2273~2275 寸
2276~2281 寸

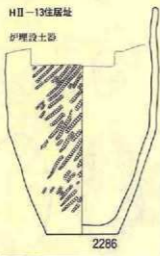
第213圖 H II-11・12住居址

H II-12 住居址



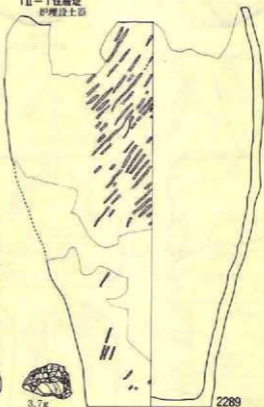
H II-13 住居址

炉壁設土器



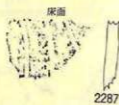
I II-1 住居址

炉壁設土器



縮尺

- 2282-2284 寸
- 2285 寸
- 2286 寸
- 2287 寸
- 2288 寸
- 2289 寸
- 2290-2291 寸
- 2292-2293 寸



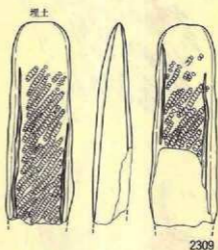
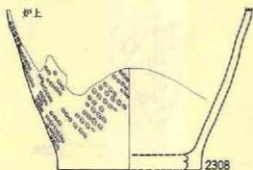
I II-2 住居址

床面



第214圖 H II-12・13、I II-1・2 住居址

I II-4 住居址



埋土設土器



I II-5 住居址



I II-6 住居址

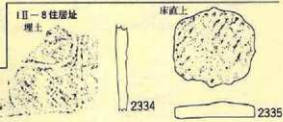
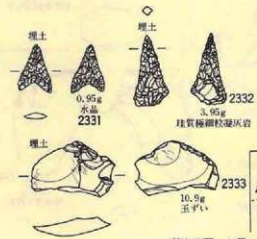
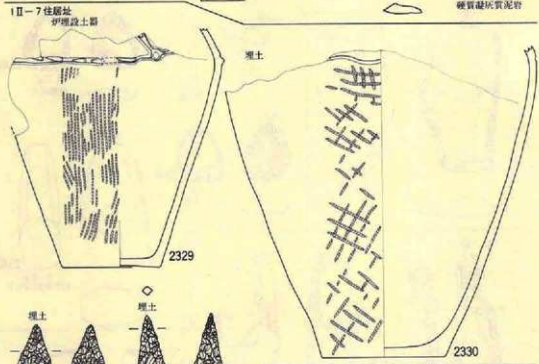
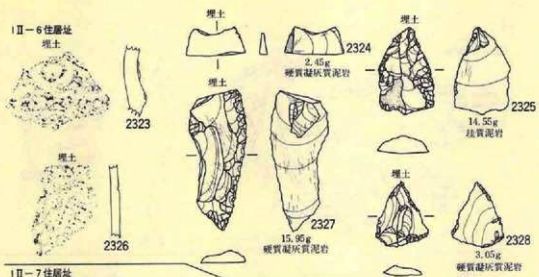


25.8g
石英安山岩



縮尺
2308 +
2309 +
2310-2317 +
2318-2321 +
2322 +

第216圖 I II-4・5・6住居址



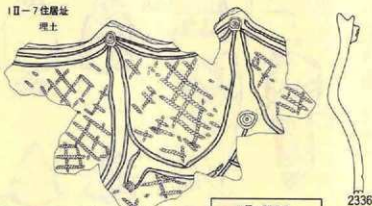
第217圖 I II-6・7・8 住層址

權尺

2323	+	2329・2330	+
2324・2325	+	2331~2333	+
2326	+	2334	+
2327・2328	+	2335	+

IⅡ-7住居址

埋土



床直上



2337

2336

CⅢ-54F.P.

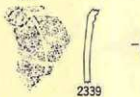
埋土



39.1g
玻璃質流紋岩
2338

CⅢ-57F.P.

埋土



2339

埋土



2340

5.25g
珪質泥岩

埋土



2341

5.25g
珪質泥岩

埋土



2342

70.05g
石質細粒凝灰岩

CⅢ-58F.P.

埋土



11.45g
珪質極細粒凝灰岩
2343

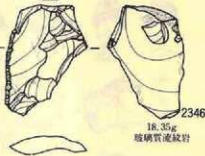
埋土



2344

21.6g
硬質凝灰質泥岩

埋土



2346

18.35g
玻璃質流紋岩

埋土



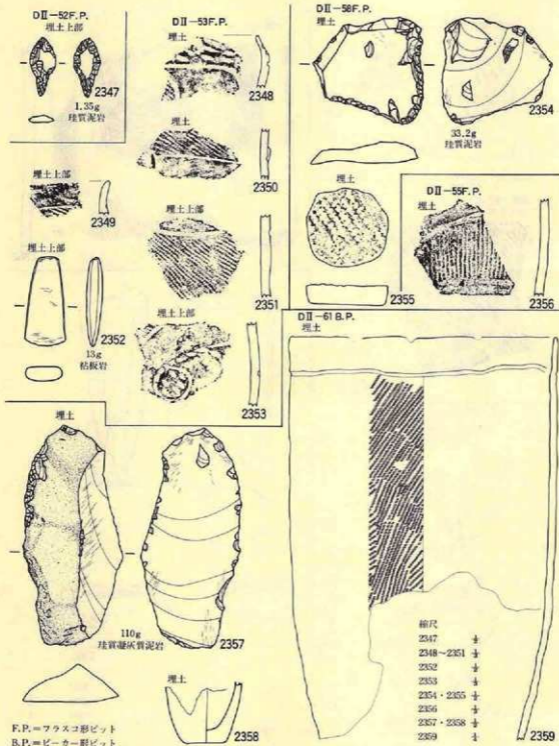
2345

縮尺

2336・2337 ±
2338 ±
2339 ±
2340-2346 ±

F.P.=フラスコ形ピット

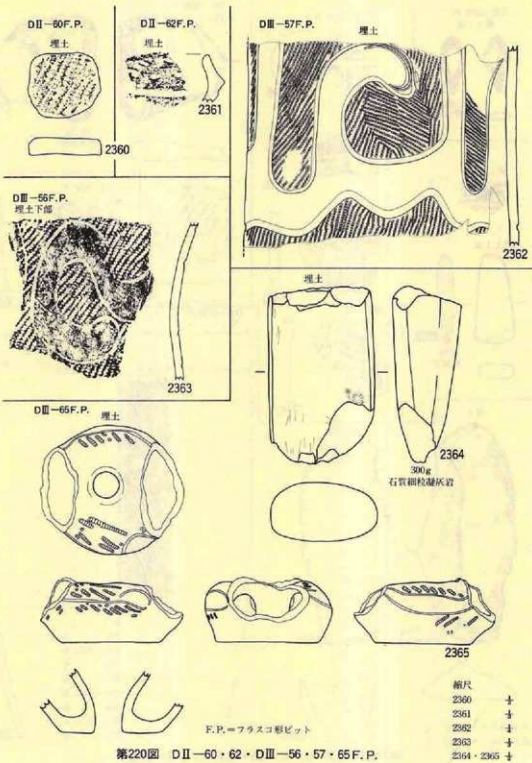
第218図 IⅡ-7住居址、CⅢ-54・57・58F.P.



縮尺

2347	±
2348 ~ 2351	±
2352	±
2353	±
2354 · 2355	±
2356	±
2357 · 2358	±
2359	±

第219図 D II-52 · 53 · 55 · 58 F. P.、D II-61 B. P.



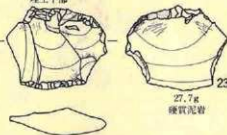
第220図 DII-60・62・DIII-56・57・65 F.P.

DⅢ-66B.P.
埋土上部



2366

DⅢ-67F.P.
埋土下部



2367

27.7g
燧石泥岩

DⅢ-79B.P.
底面



8.15g
珪質泥岩
2368

EⅡ-56F.P.
埋土



2369

埋土上部

EⅡ-57F.P.
埋土



2371

5.95g
珪質泥岩

埋土



2372

埋土



2373

EⅡ-60F.P.

埋土



2374

埋土



2375

埋土



2376

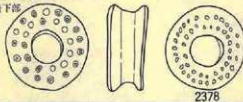
埋土



2377

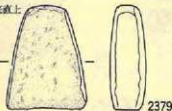
EⅡ-61F.P.

埋土最下部



2378

底直上

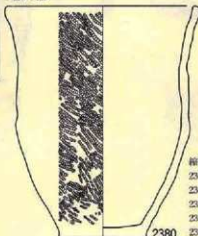


2379

75.6g
石質細粒凝灰岩

EⅡ-63F.P.

埋土上部



縮尺

2366

+

2366~2371

+

2372~2377

+

2378~2379

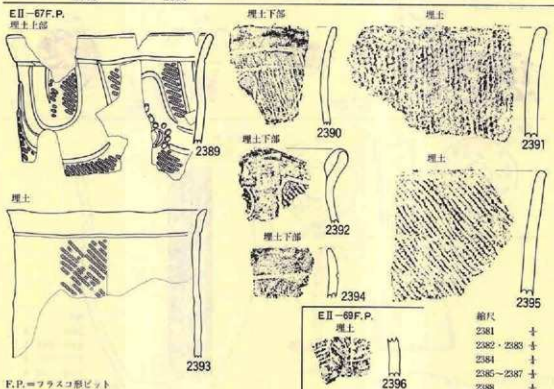
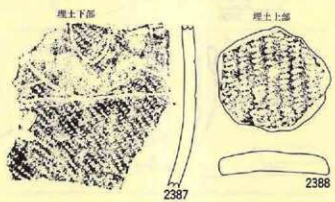
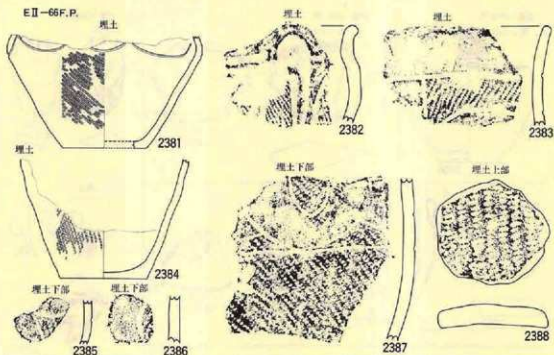
+

2380

+

B.P.=ビーカー形ビット
F.P.=フラスコ形ビット

第221図 DⅢ-66・79B.P.、DⅢ-67・EⅡ-56・57・60・61・63F.P.

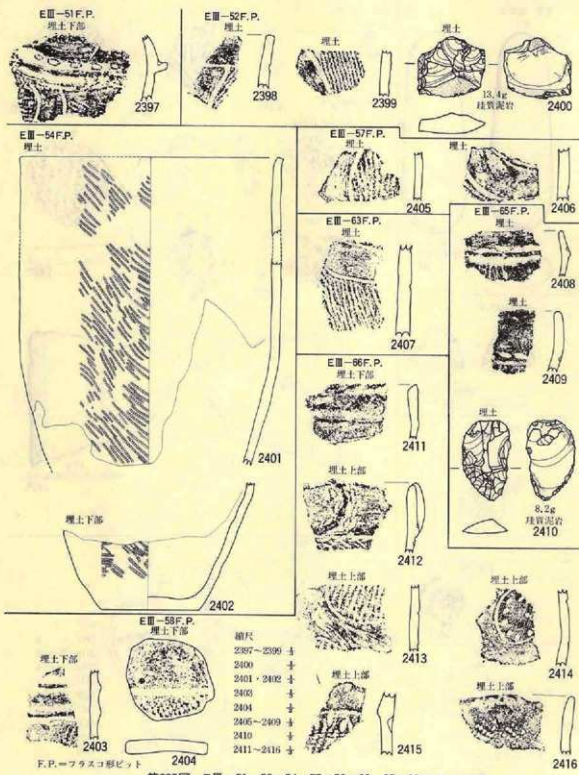


E II-69 F. P.

埋土

縮尺	
2381	+
2382・2383	+
2384	+
2385-2387	+
2388	+
2389-2392	+
2393	+
2394-2396	+

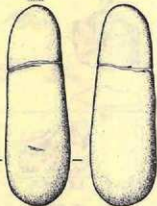
第222図 E II-66・67・69 F. P.



第223図 E III-51・52・54・57・58・63・65・66 F.P.

EⅢ-96F.P.

埋土



100g
岡輝石安山岩
2417

FⅡ-51F.P.

埋土



4.8g
玻璃質成紋岩
2426

FⅡ-52F.P.

埋土



2427

FⅡ-54F.P.

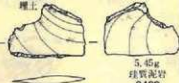
埋土



2428

EⅣ-52F.P.

埋土



5.45g
球質泥岩
2429

F.P.=フラスコ形ビット

FⅡ-53F.P.

埋土上部



2418

埋土上部



2419

埋土下部



2420

埋土下部



2421

埋土下部



2423

埋土下部



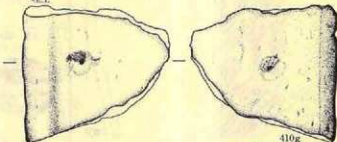
2424

埋土



2422

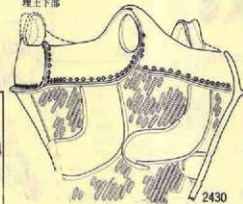
埋土



410g
石英安山岩質角礫凝灰岩
2425

FⅡ-55F.P.

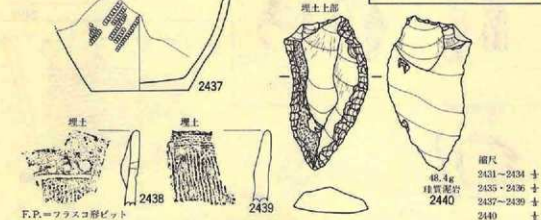
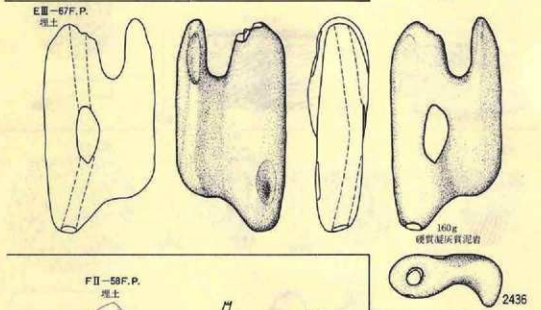
埋土下部



縮尺

2417 ±
2418・2419 ±
2420 ±
2421 ±
2422 ±
2423-2425 ±
2426 ±
2427・2428 ±
2429 ±
2430 ±

第224図 EⅢ-66・FⅡ-51・52・53・54・55・EⅣ-52F.P.



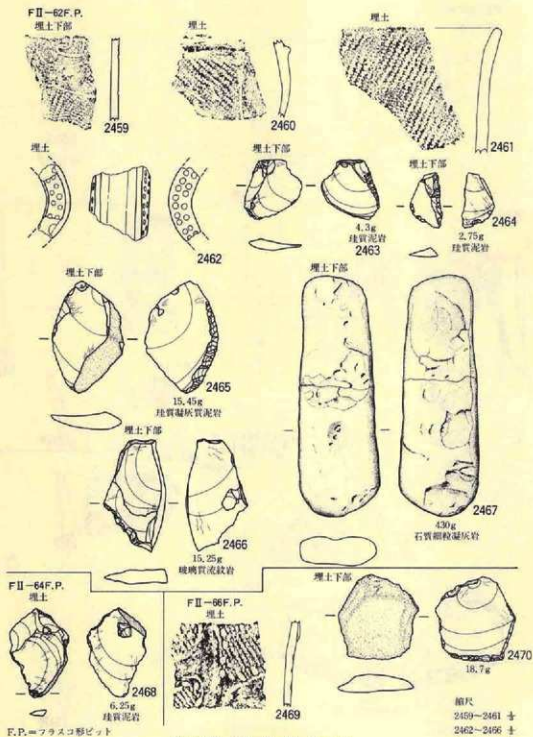
第225図 F II-55・58・E III-67 F. P.



F.P. = フラスコ形ピット

第226図 F II-59・60・61・62 F.P.

縮尺	2453	↓	
2441~2448	↓	2454	↓
2449	↓	2456	↓
2450~2452	↓	2458~2458	↓



第227図 F II - 62 · 64 · 66 F. P

縮尺
 2459-2461 寸
 2462-2466 寸
 2467 寸
 2468 寸
 2469 寸
 2470 寸

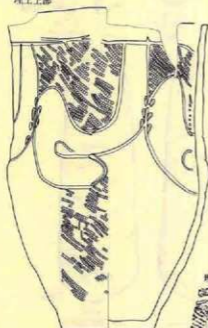
FII-68F.P.

埋土上部



2471 a

埋土上部

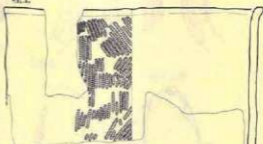


2471 b

縮尺

2471 a 十
 2471 b - 2472 十
 2473 十
 2474 十
 2475 十
 2476 十
 2477 十
 2478 十

埋土



2472

埋土上部



2474

埋土



2473

GII-51F.P.

埋土



2477

埋土



2475

埋土



2478

埋土



31.3g

珪質極細粒凝灰岩

2476

F.P.=フラスコ形ピット

第228図 FII-68・GII-51 F.P.

GII-51F.P.

埋土



2479

埋土下部



2480

埋土下部



2481

埋土下部



2482

埋土下部



2483

埋土下部



2484

埋土下部



2485

埋土下部



2486

GII-53F.P.

埋土



2491

埋土



2492

GII-52F.P.

埋土下部



2487

埋土下部



2488

埋土



2493

埋土



2494

埋土下部



2489

埋土下部



2490

埋土



2495

F.P.=フラスコ形ビット

第229図 GII-51・52・53F.P.

縮尺

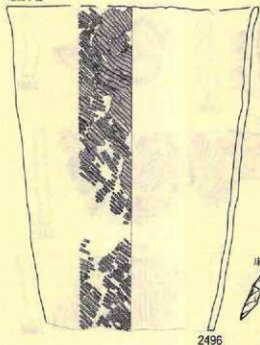
2479

2480~2485

±

±

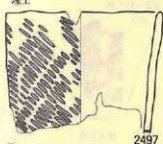
GII-53F.P.
埋土下部



2496

縮尺
2496 寸
2497 寸
2498~2500 寸
2501・2502 寸
2503 寸
2504~2506 寸

埋土



2497



床直上

9.2g

2498

硬質泥岩

床直上

床直上



2.9g

2499

3g

硬質泥岩

2500

埋土



2501

埋土下部

埋土



2502

埋土



6.85g

珸質凝灰質泥岩

2503



2504

埋土



2505

埋土



2506

GII-54F.P.

埋土



2508

埋土



2509

F.P.=フラスコ形ビット

第230図 GII-53・54F.P.

GII-55F.P.

埋土



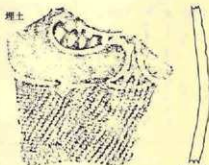
2510

埋土



2511

埋土



2513

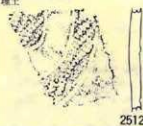
GII-56F.P.

埋土



2514

埋土



2512

埋土下部



2515

埋土



2516

埋土下部



2517



39.5g
硬質泥岩
2518

埋土下部



2519

GII-64F.P.

埋土



2520

埋土



2521

埋土



2522

輪尺

2510-2517 ±

2518 ±

2519 ±

2520 ±

2521・2522 ±

F.P.=フラスコ形ピット

第231図 GII-55・56・64F.P.

GII-64F.P.

埋土



埋土



埋土

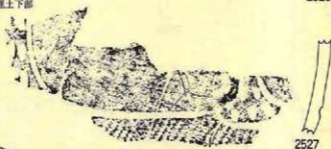


GII-57F.P.

埋土上部



埋土下部



埋土下部



埋土下部



埋土下部

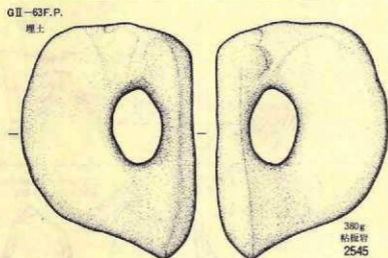
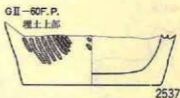
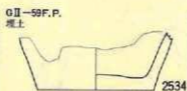


0 10cm

F.P.=フラスコ彩ビット

第232図 GII-57・64F.P.

縮尺
2523-2530 不定

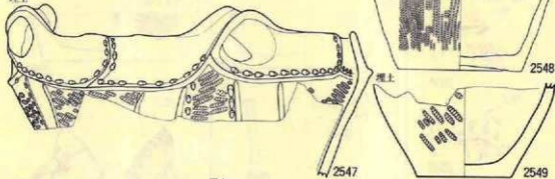


縮尺
2531~2533 † 2538 †
2534 † 2539~2542 †
2535~2537 † 2543~2546 †

F.P.=プラスチック印ピット 第233回 GII-58・59・60・61・63・65 F.P.

GII-66F.P.

埋土



埋土



2550

埋土



2551

埋土



2552

埋土



2553

埋土下部



2556

埋土下部



2557

埋土



2554

埋土下部



2555

埋土下部



2558

GII-67F.P.

埋土



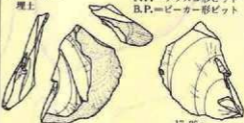
2559

2560

2561

GII-68B.P.

埋土



17.25g

硬質泥胎

2562

F.P.=フラスコ彩ビット
B.P.=ビーカー彩ビット

第234図 GII-66・67F.P.・GII-68B.P.

縮尺

2547

2548

2549

2550-2558

2559

2560・2561

2562

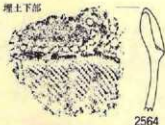
G II-69 B.P.

埋土下部



2563

埋土下部



2564

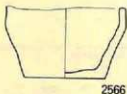
埋土



2565

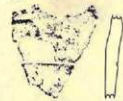
H II-51 F.P.

埋土



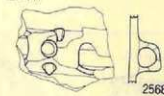
2566

埋土



2567

埋土下部



2568

埋土



2569

埋土



2570

埋土



2571

埋土



2572

埋土



2573

埋土



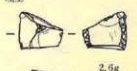
2574

埋土



2575

埋土

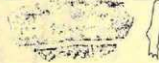


2.6g
硬質凝灰質泥岩

2576

H II-53 F.P.

埋土



2577

埋土



2578

F.P. = フラスコ形ビット
P.f. = 陥し穴状遺構

縮尺

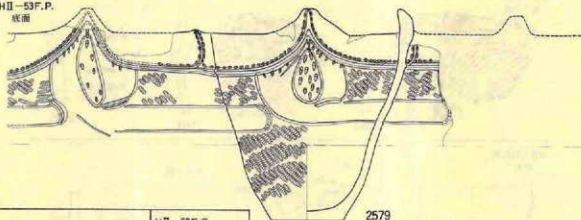
2563~2572 1/4

2573~2576 1/2

2577~2578 1/4

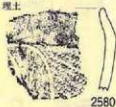
第235図 H II-69 B.P.・H II-51・53 F.P.

HII-53F.P.
底面



2579

HII-54F.P.
埋土



2580

埋土



2581

縮尺

2579 十
2580・2581 十
2582・2584 十
2585 十
2586・2588 十

埋土



2582

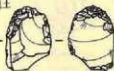
HII-58F.P.
埋土



120g
珪質凝灰質泥岩
2583



埋土



4.55g
珪質極細粒凝灰岩
2584



EII-108P.f.
埋土下部



13.65g 2587
硬質泥岩

HII-59F.P.
埋土



2585

埋土

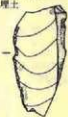


45.25g

石質細粒凝灰岩

2586

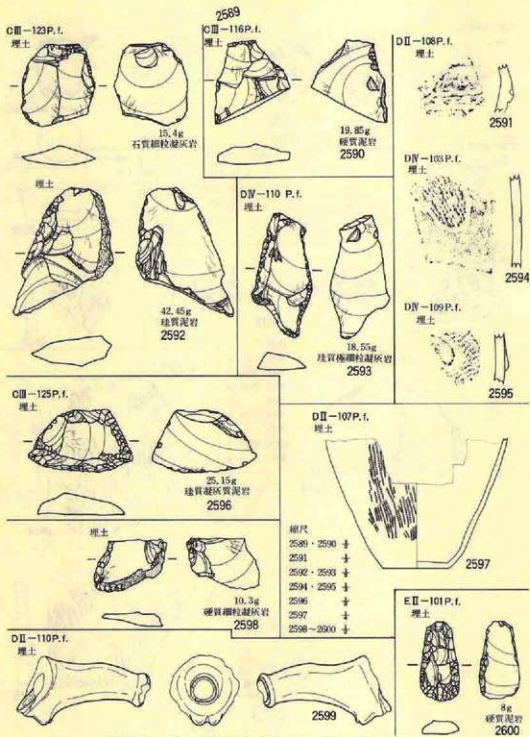
HII-60F.P.
埋土



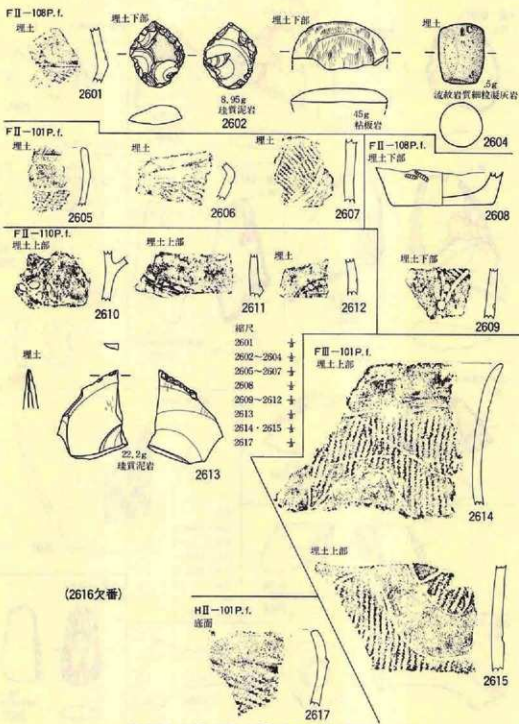
9.6g
硬質泥岩

2588

第236図 HII-53・54・58・59・60 F.P.、CIII-108P.f. F.P.=フラスコ形ビット
B.P.=ビーカー形ビット



第237圖 C III-116・123・125・D II-107・108
・110・D IV-103・109・110・E II-101 P. f.

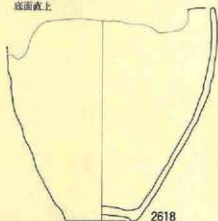


第238圖 E II-108・F II-101・108・110・
F III-101・H II-101 P. f.

P. f. = 陥し穴状造構

DⅢ-151不整形ビット

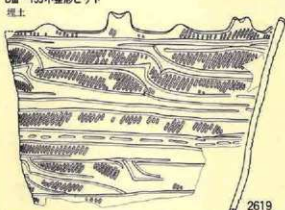
底面直上



2618

DⅢ-153不整形ビット

埋土

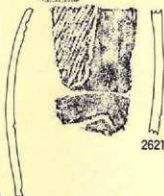


2619

DⅢ-156不整形ビット



埋土上部



2621

埋土



2.8g
珪質泥岩
2622

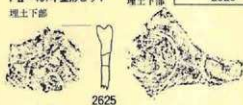
埋土



7.45g
珪質凝灰質泥岩
2623

FⅡ-151不整形ビット

埋土下部

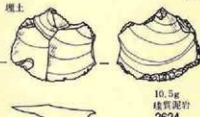


2625

2626

埋土下部

埋土



10.5g
珪質泥岩
2624

埋土



2627

埋土



13.06g
珪質泥岩
2628

IⅡ-151不整形ビット

埋土



9.9g
粗粒玄武岩
2629

IⅡ-155不整形ビット

埋土下部

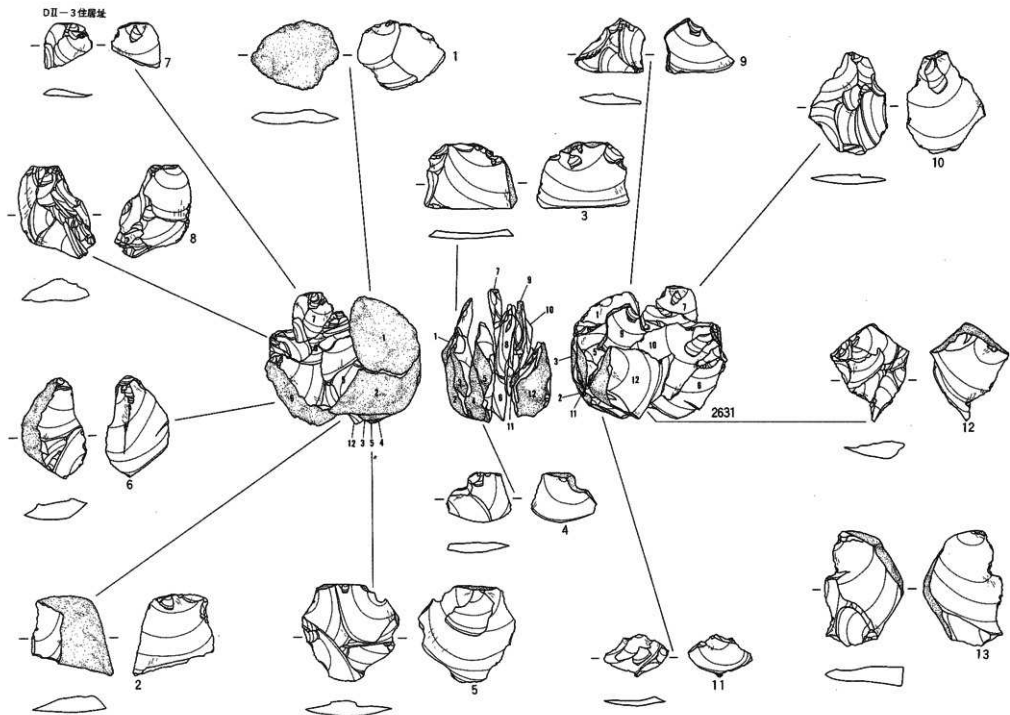


2630

縮尺

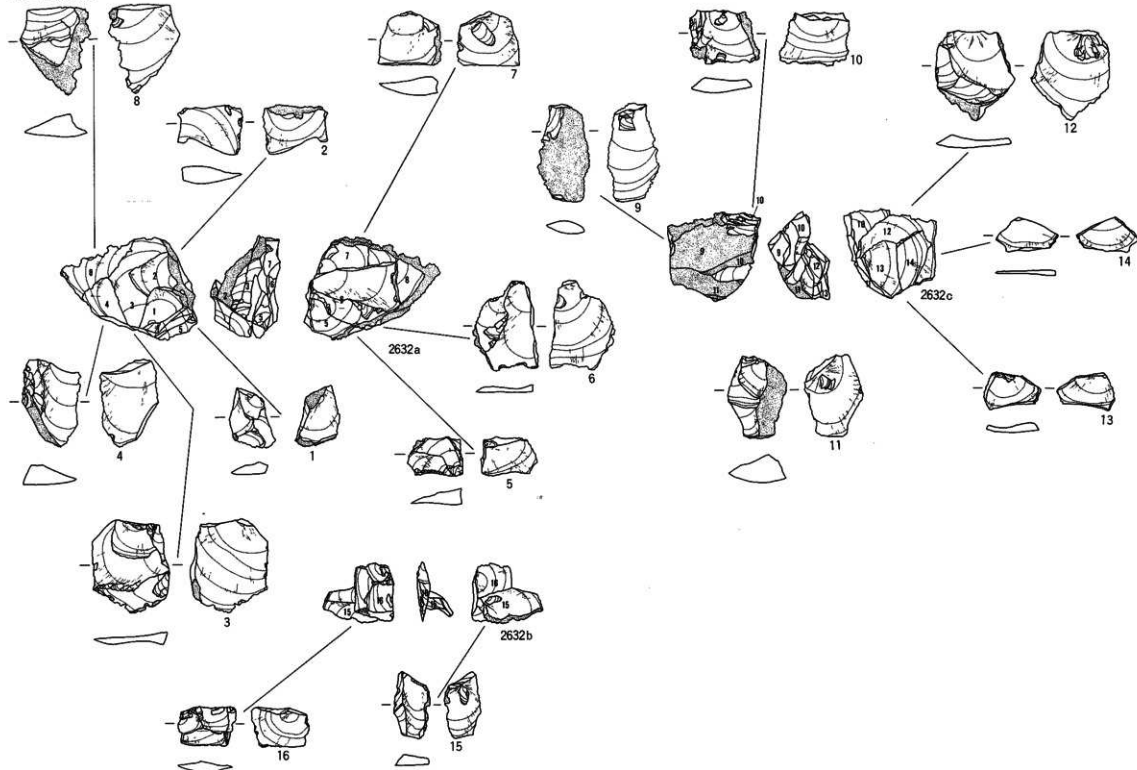
2618~2620 ±
2621 ±
2622~2624 ±
2625~2627 ±
2628~2630 ±

第239図 DⅢ-151・153・156不整形ビット、FⅡ-151不整形ビット、IⅡ-151・155不整形ビット



第240圖「剝片野藏」接合資料

1cm

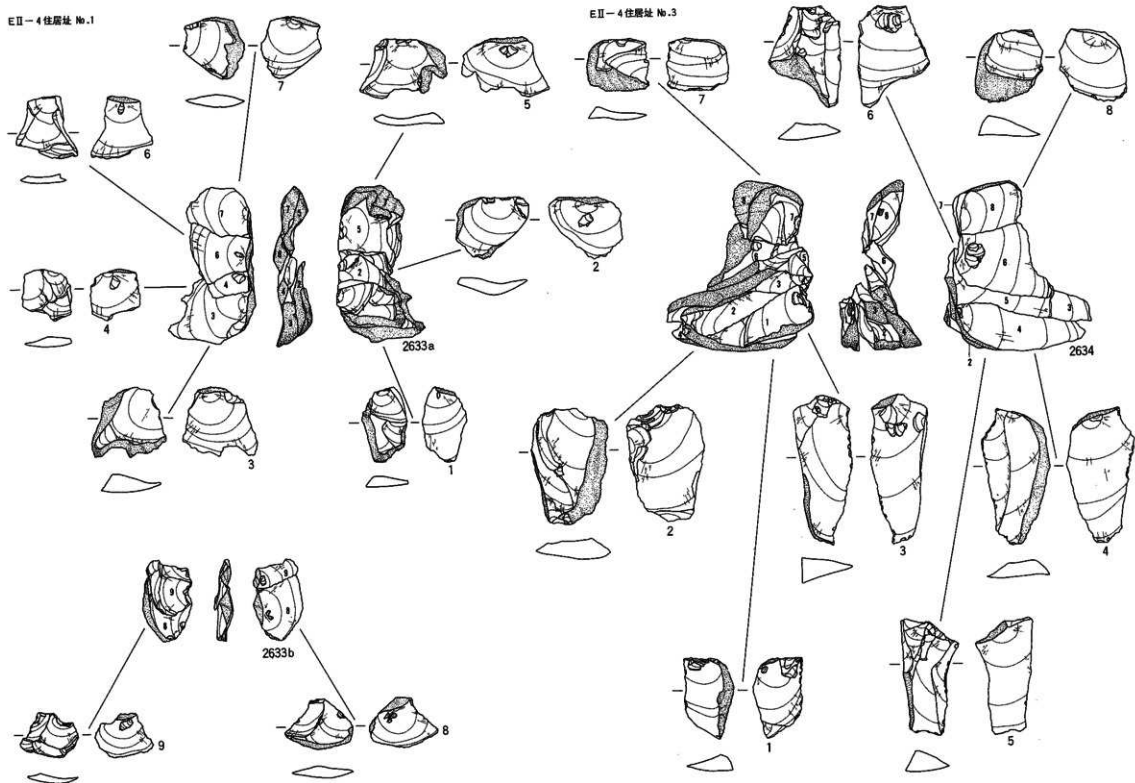


第241回 「剥片貯蔵」接合資料

縮尺 ±

EⅠ-4住層址 No.1

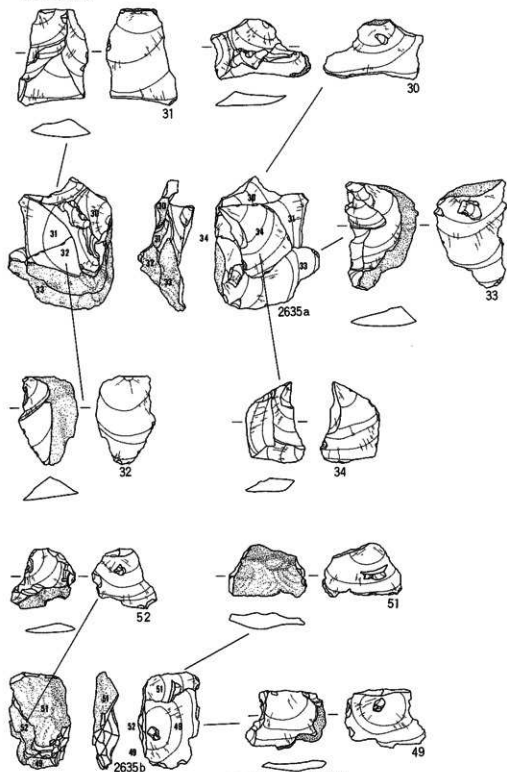
EⅡ-4住層址 No.3



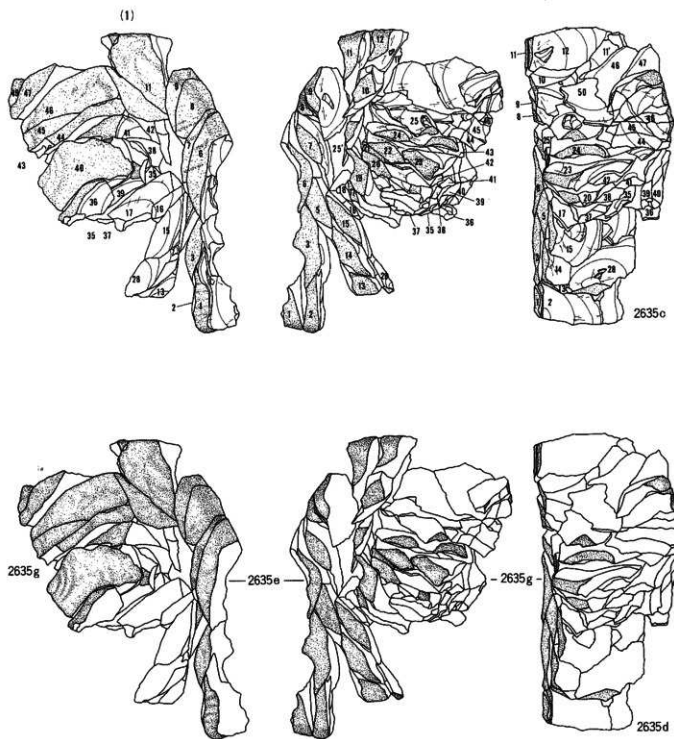
第242図 「剥片貯蔵」接合資料

縮尺 十

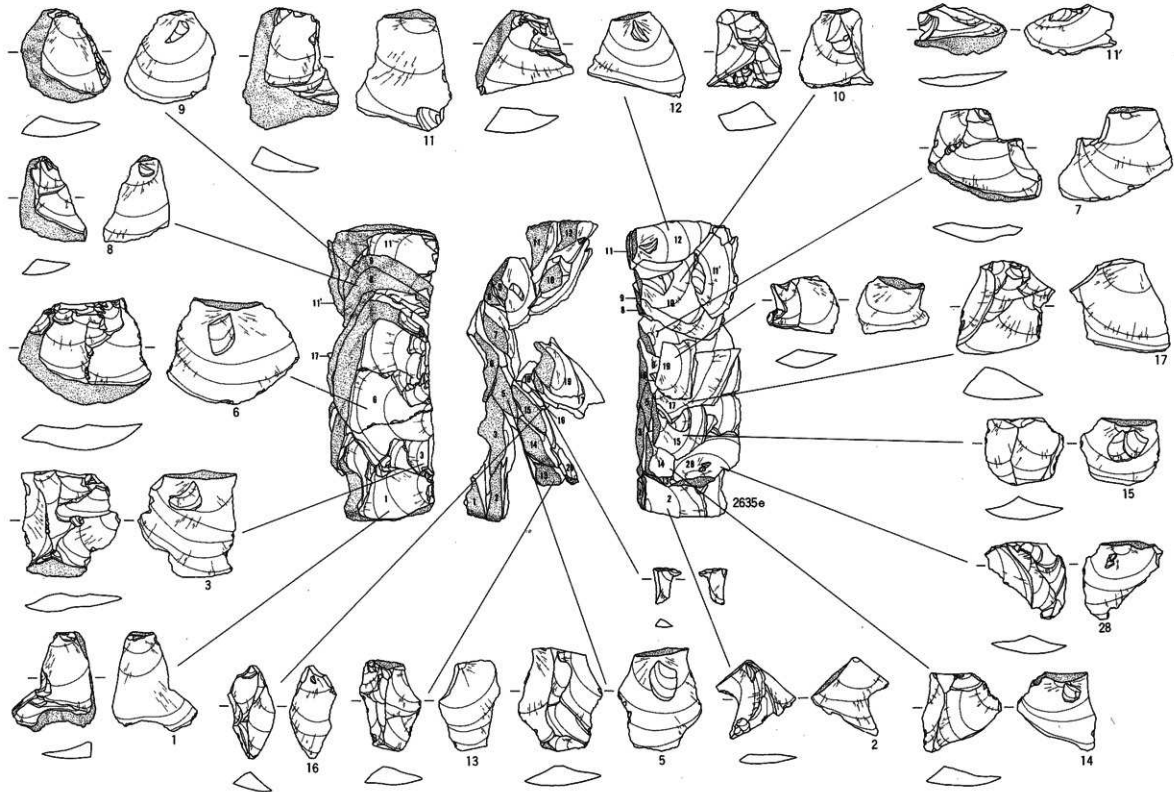
E田-8 住居址(1)



第243圖 「刺片貯藏」接合資料

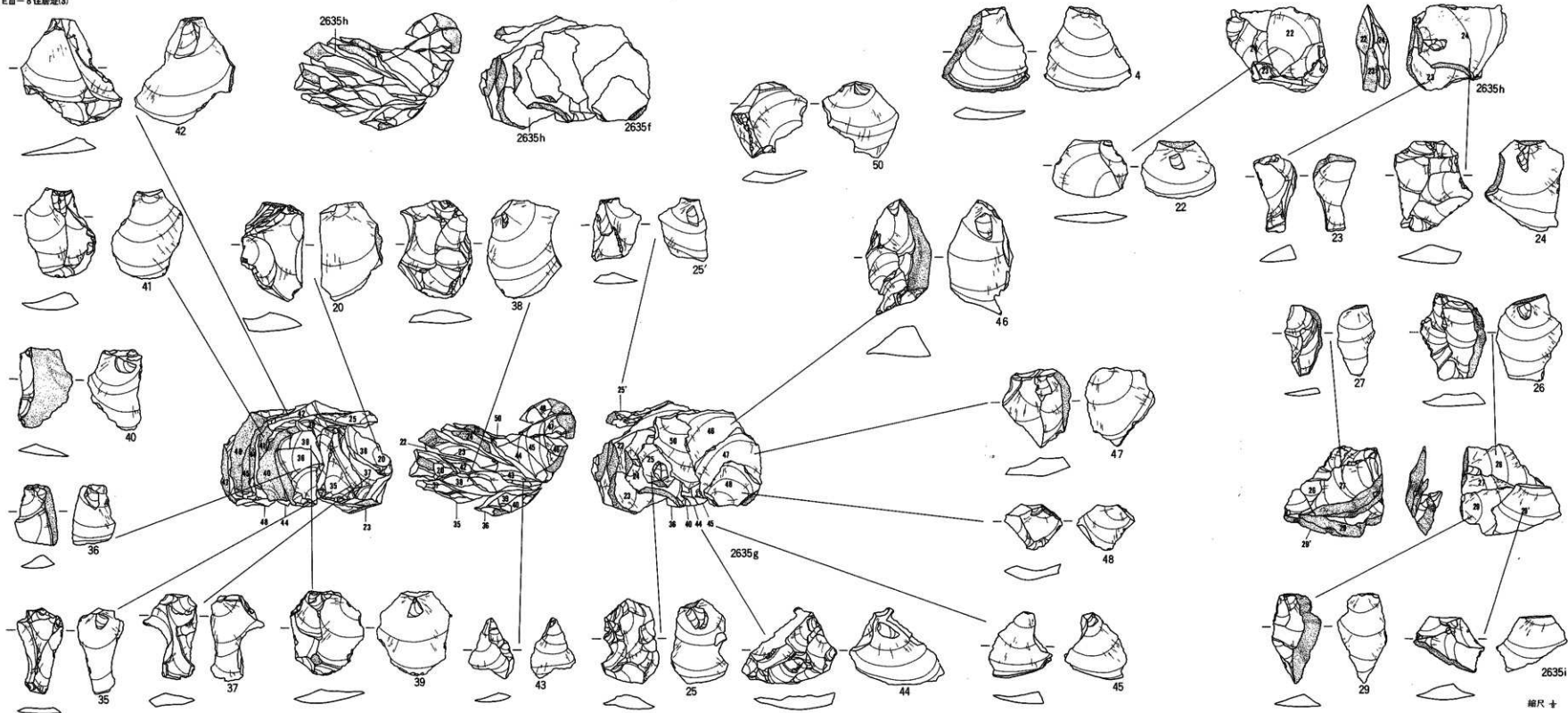


縮尺 十

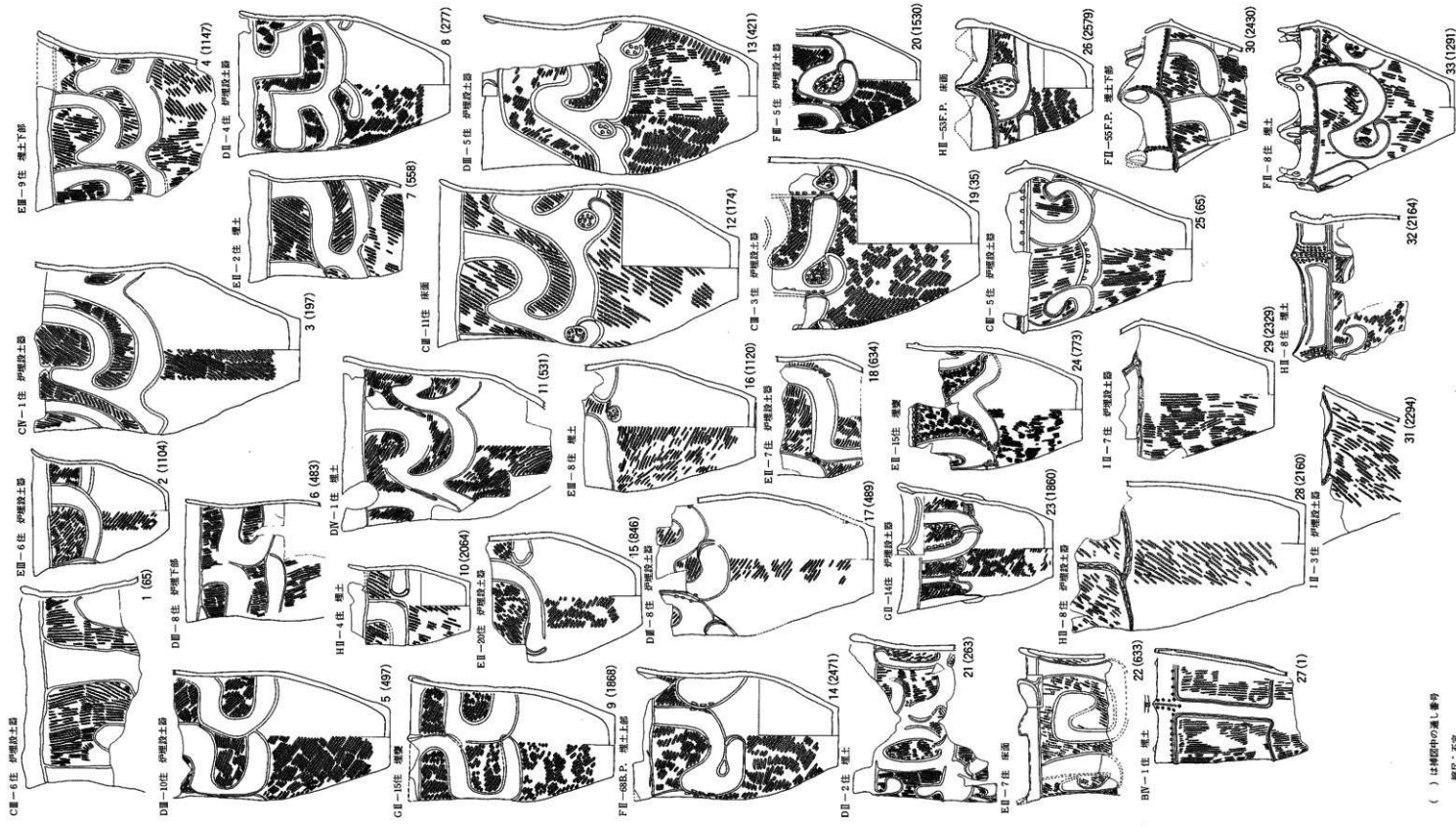


第244圖 「剝片貯藏」接合資料

縮尺 十



第245圖 「割片貯藏」接合資料



() は標記中の埋し番号
 単位：不定

第246図 遺構出土土器集成図

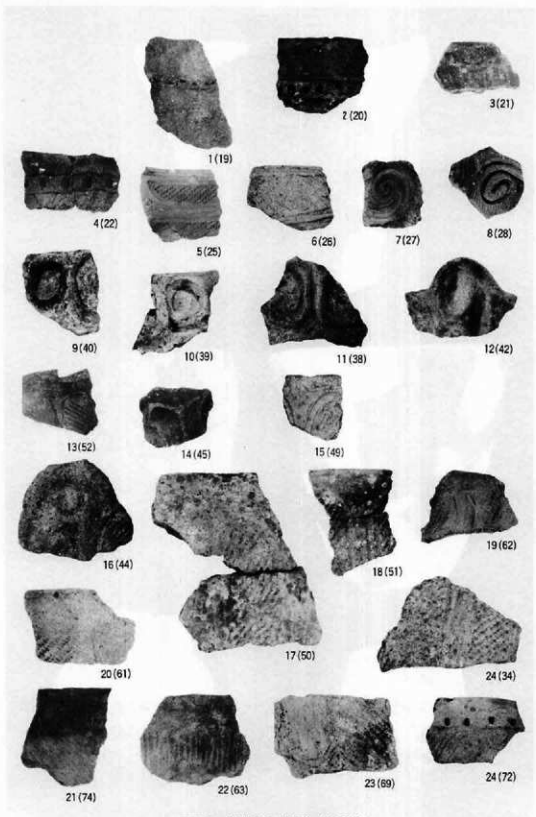
写 真 图 版



写真右下の()内番号は遺物図版に掲載した通し番号を表す以下の図版でも同じである。

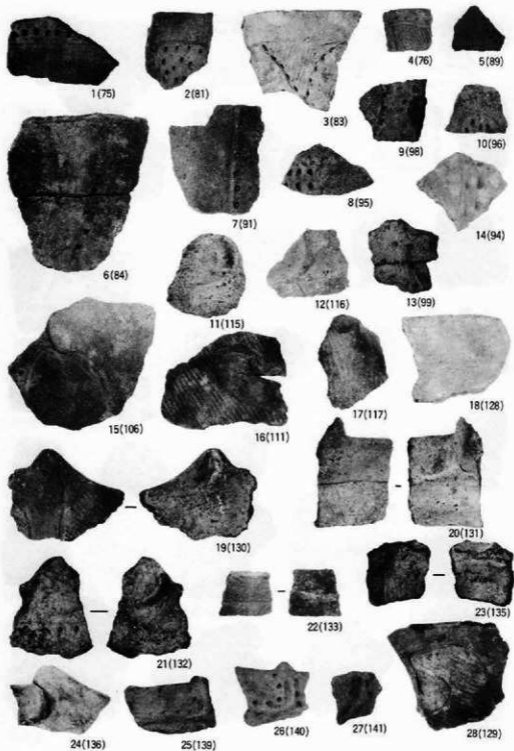
図版1 遺構外出土遺物(土器)

縮尺 1~3 $\frac{1}{2}$
4~5 $\frac{1}{3}$



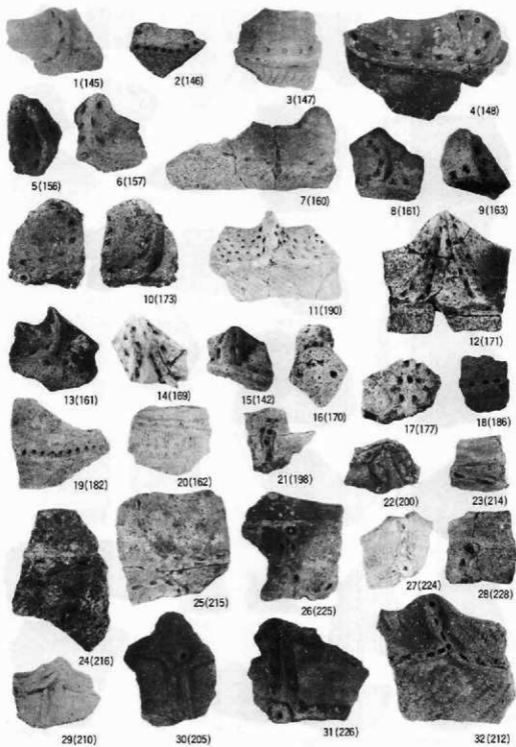
図版 2 遺構外出土遺物 (土器片)

縮尺寸



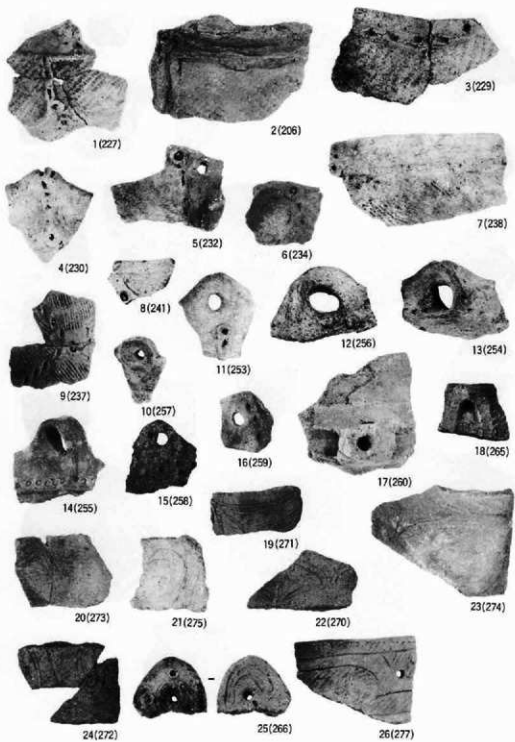
圖版3 遺構外出土遺物(土器片)

縮尺1/1



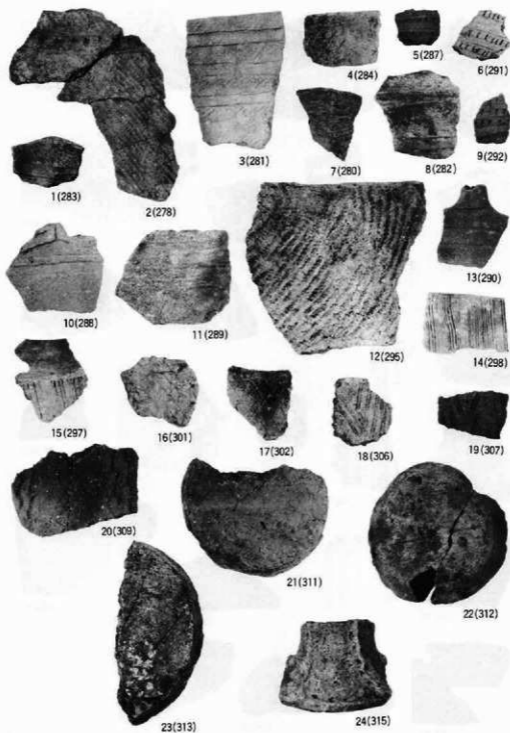
図版4 遺構外出土遺物（土器片）

縮尺 $\frac{1}{2}$



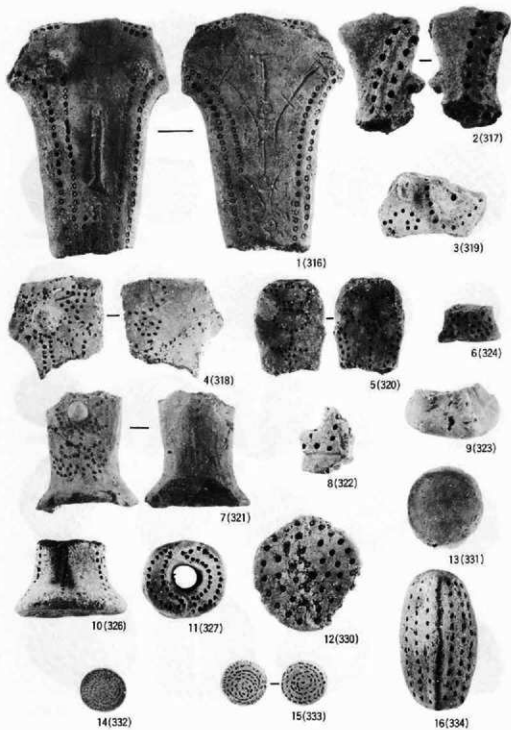
図版5 遺構外出土遺物(土器片)

縮尺 $\frac{1}{2}$



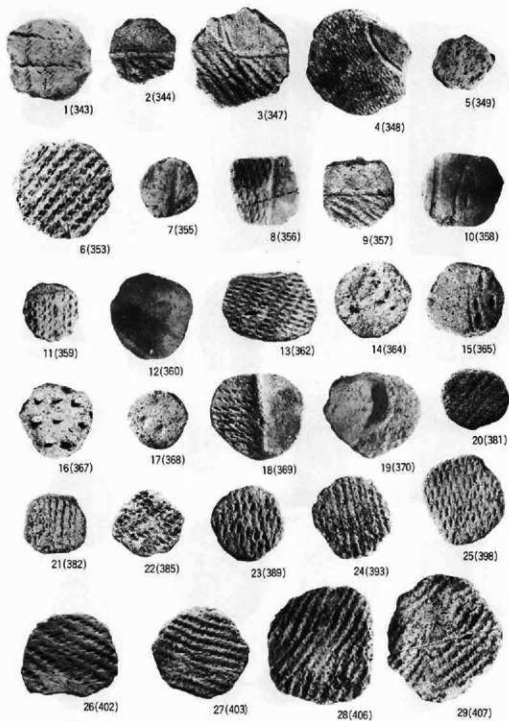
図版 6 濠溝外出土遺物 (土器片)

縮尺 1/3



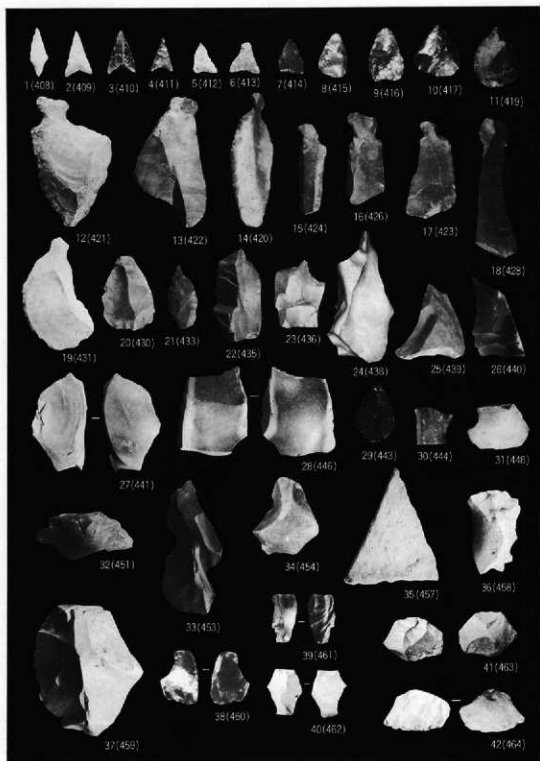
図版7 遺構外出土遺物（土製品）

縮尺寸



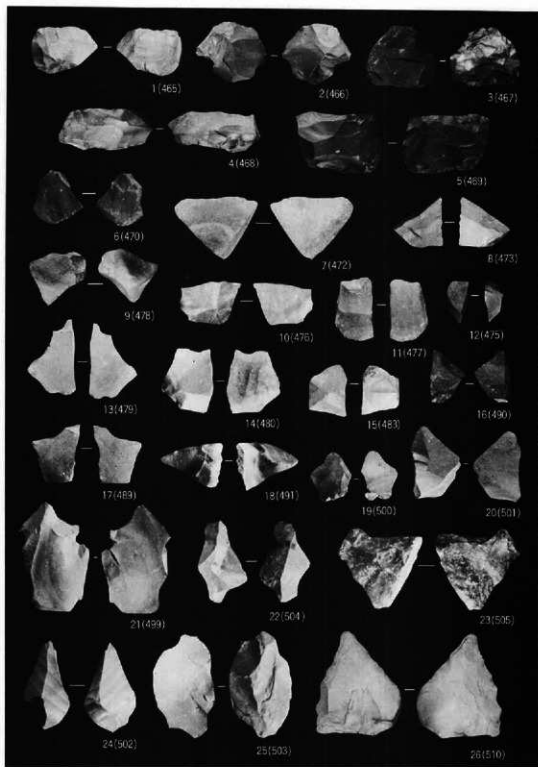
図版 8 遺構外出土遺物 (円盤状土製品)

縮尺 $\frac{1}{2}$



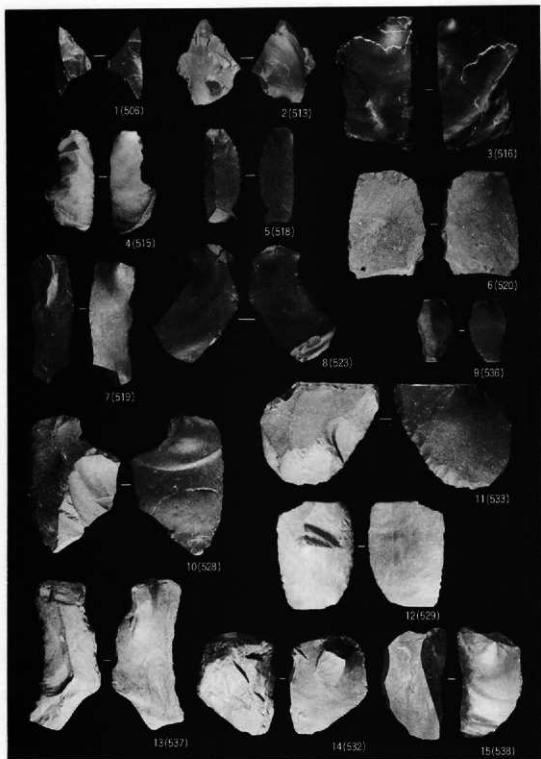
圖版9 遺構外出土遺物 (剝片石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



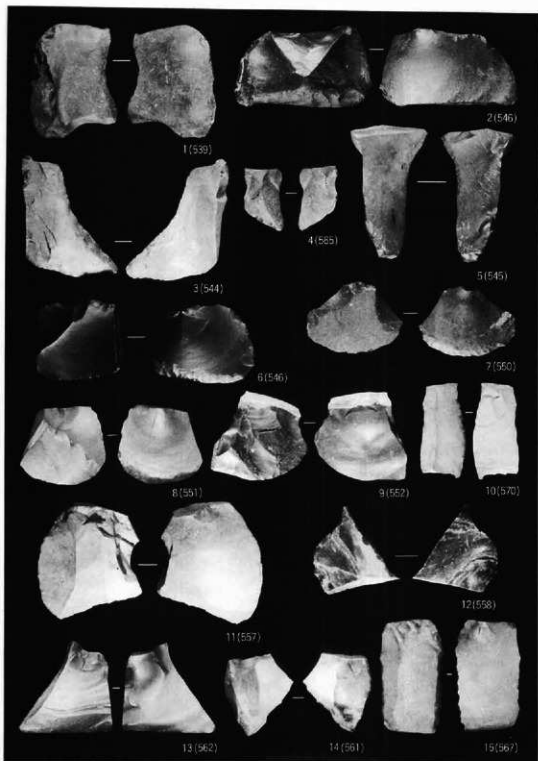
図版10 遺構外出土遺物 (剥片石器)

縮尺±



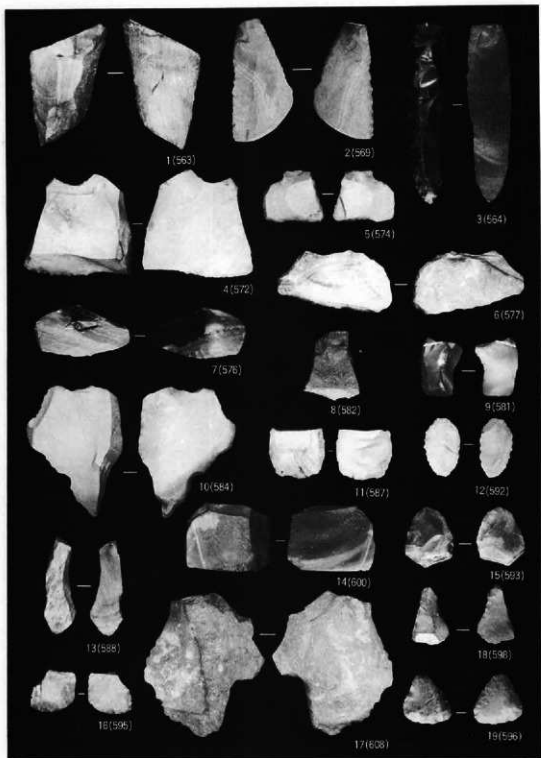
圖版11 濠溝外出土遺物 (剥片石器)

縮尺 1/2



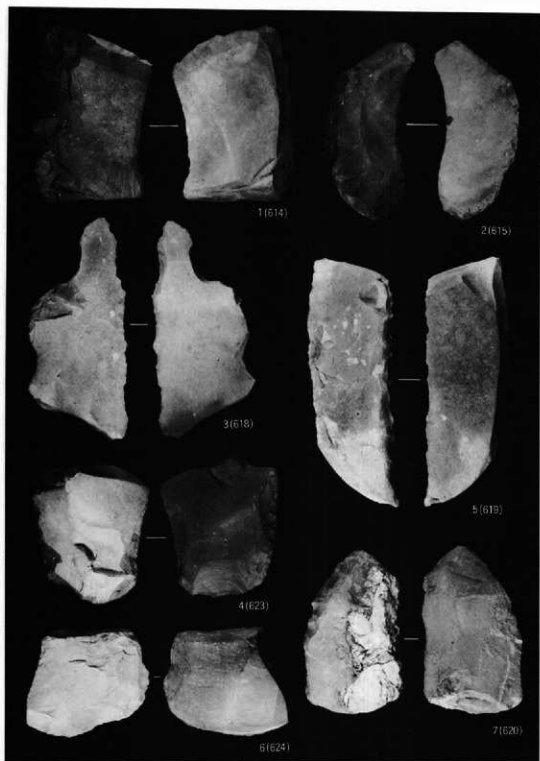
圖版12 遺構外出土遺物（刮片石器）

縮尺1/2



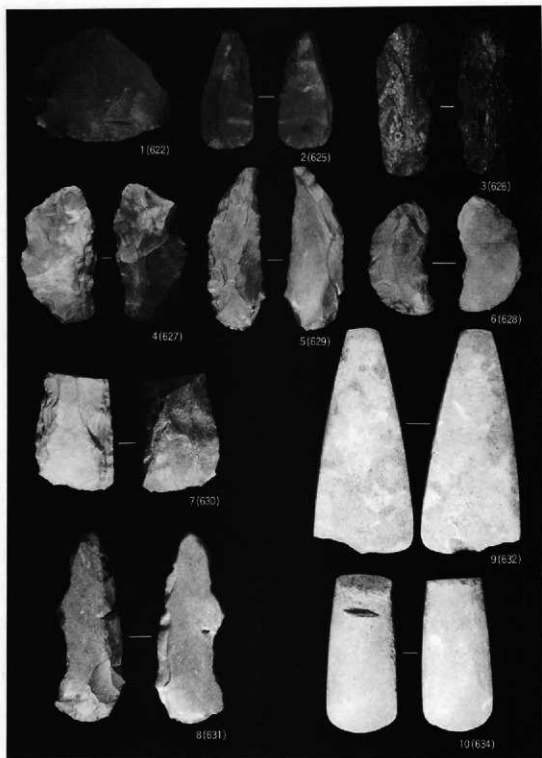
圖版13 遺構外出土遺物 (剥片石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



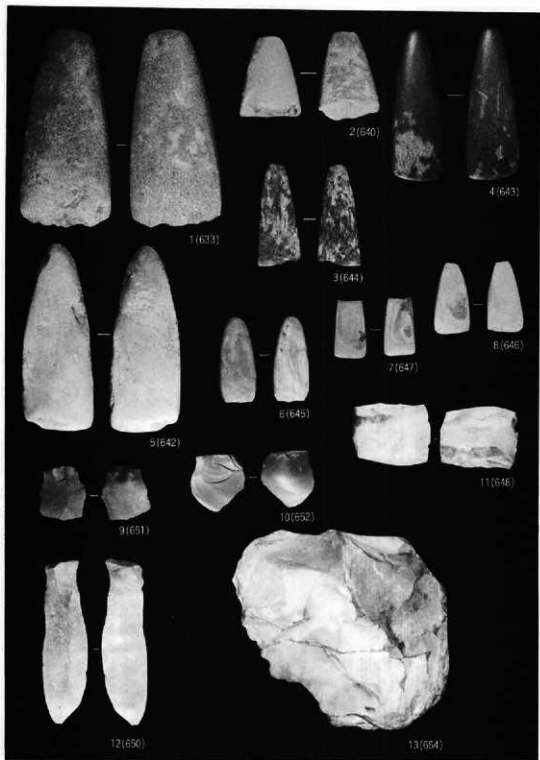
図版14 遺構外出土遺物（剥片石器）

縮尺 $\frac{1}{2}$



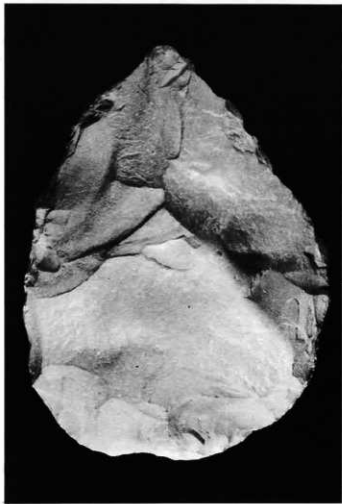
図版15 遺構外出土遺物 (剥片石器・壓製石斧・礫石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



図版16 遺構外出土遺物（磨製石斧・剥片石器・石核）

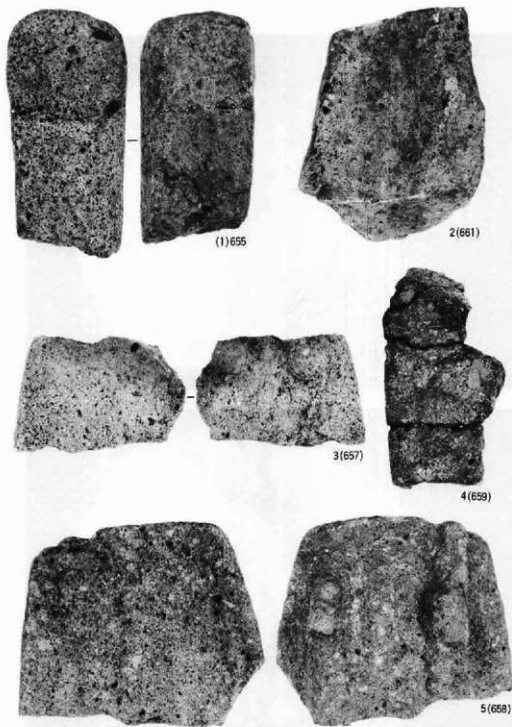
縮尺1/2



図版17 遺構外出土遺物 (礫石器)

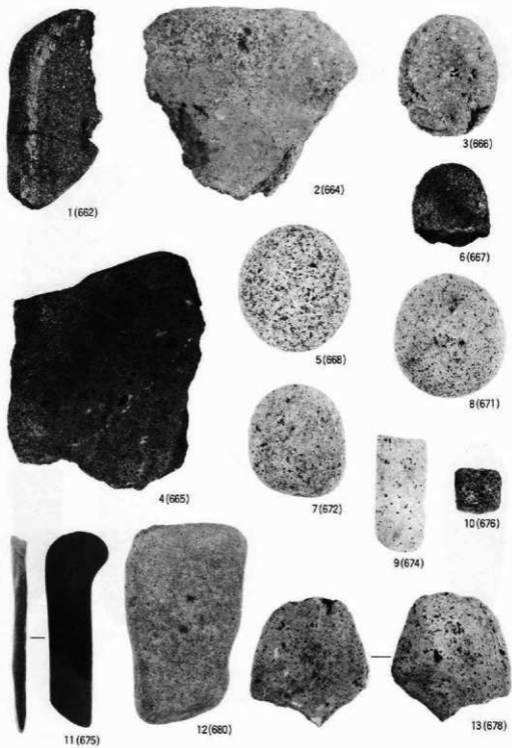
1 (653)

縮尺 1/10



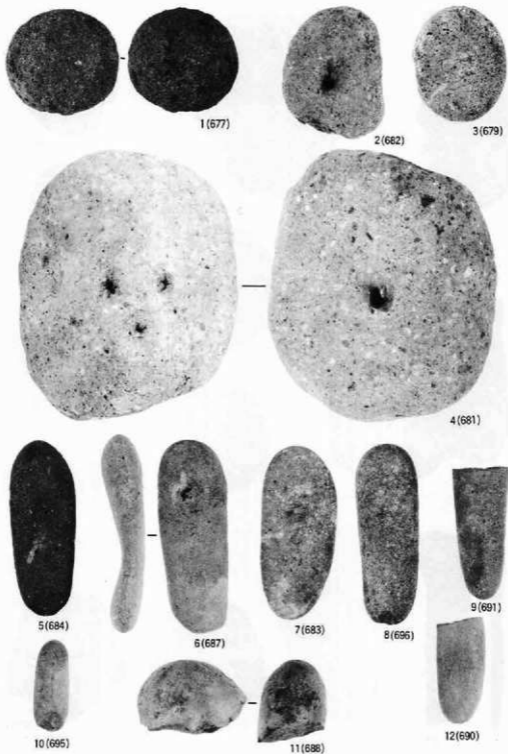
図版18 遺構外出土遺物 (礫石器)

縮尺 1/2



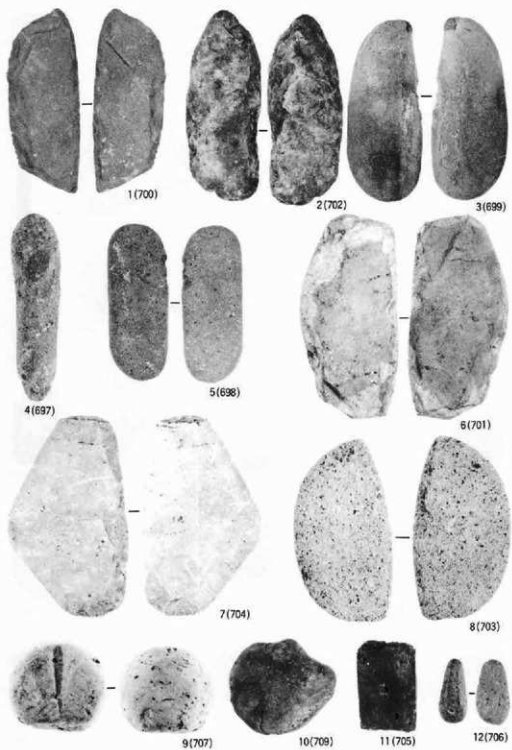
図版19 遺構外出土遺物 (礫石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



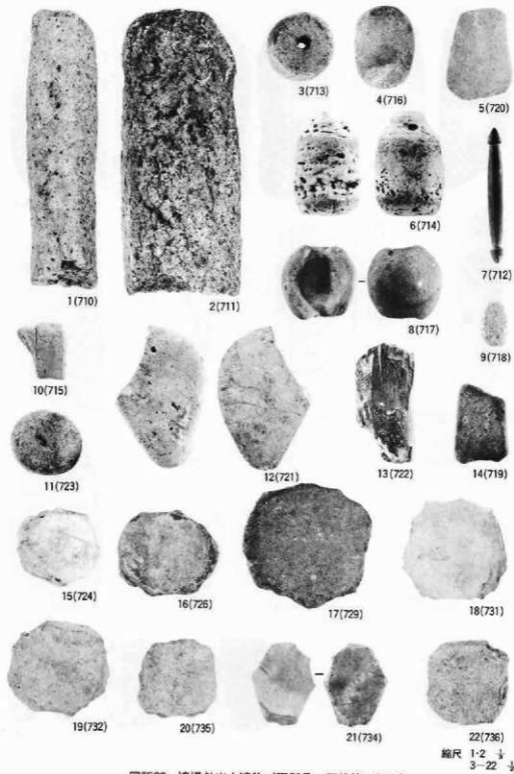
図版20 遺構外出土遺物 (礫石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$

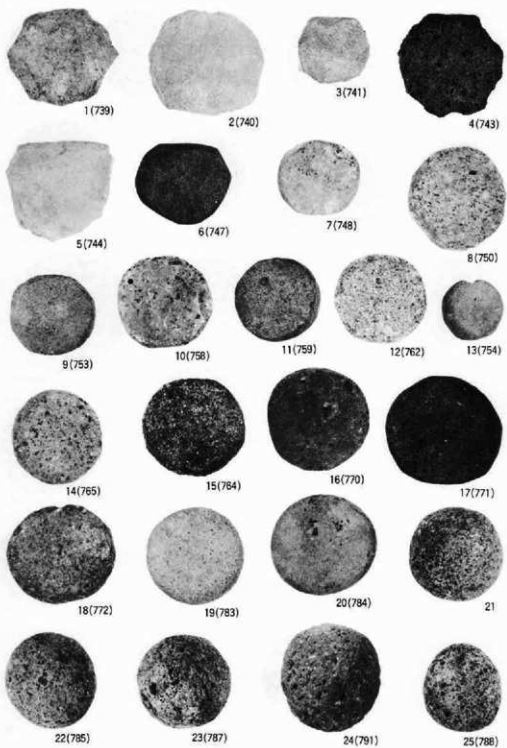


縮尺 1-8-10-12 $\frac{1}{2}$
9 $\frac{1}{3}$

图版21 濠洲外出土遺物（礫石器）

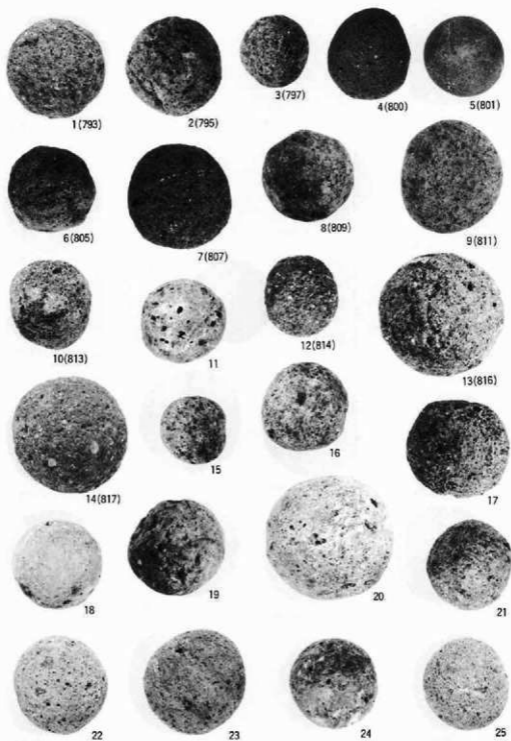


図版22 遺構外出土遺物（石製品・円盤状石製品）



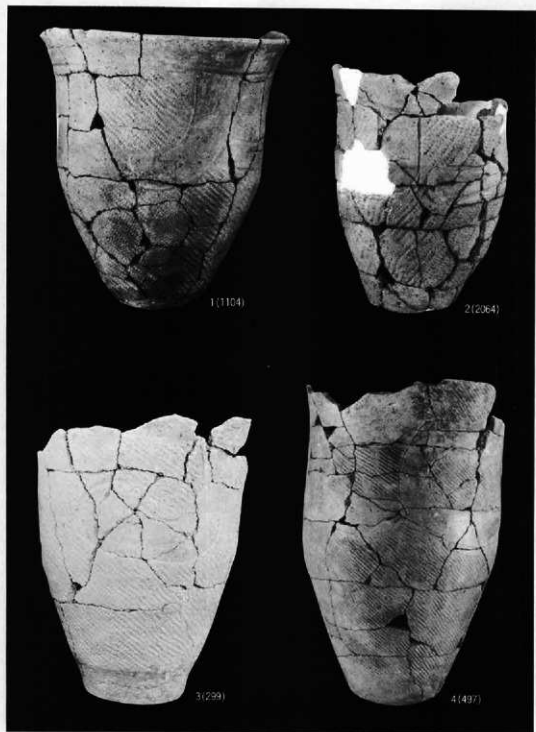
圖版23 遺構外出土遺物 (円盤状石製品・石弾)

縮尺 $\frac{1}{2}$



圖版24 遺構外出土遺物 (石彈)

縮尺 $\frac{1}{2}$



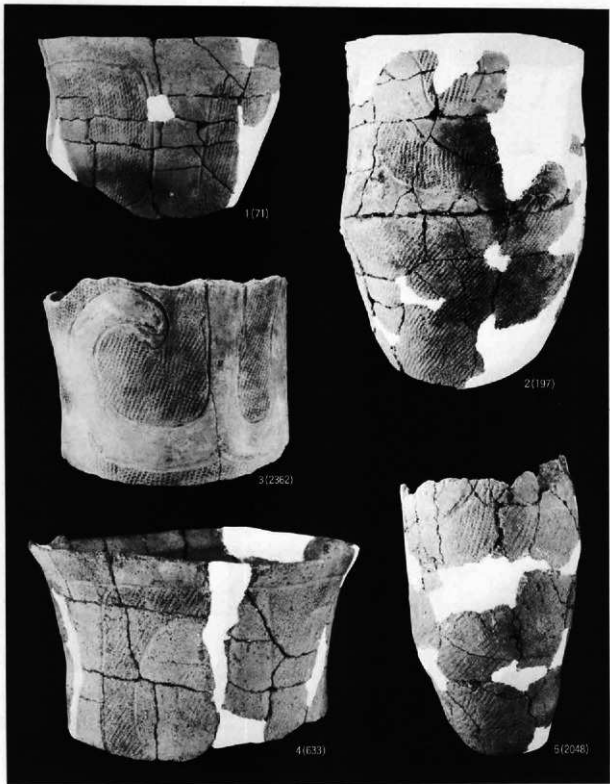
縮尺 1-2 $\frac{1}{2}$
 3-4 $\frac{1}{4}$

図版25 遺構出土遺物（土器）



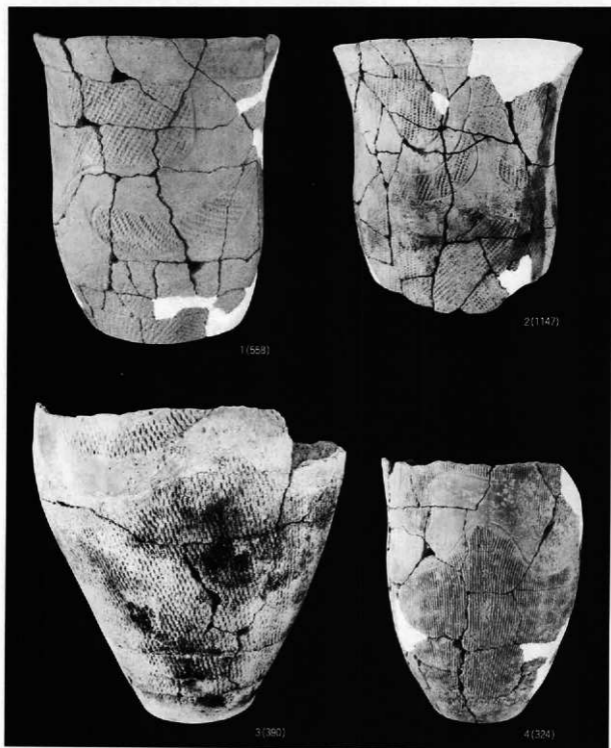
図版26 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1-3 $\frac{1}{2}$
 4 $\frac{1}{4}$
 5 $\frac{1}{5}$



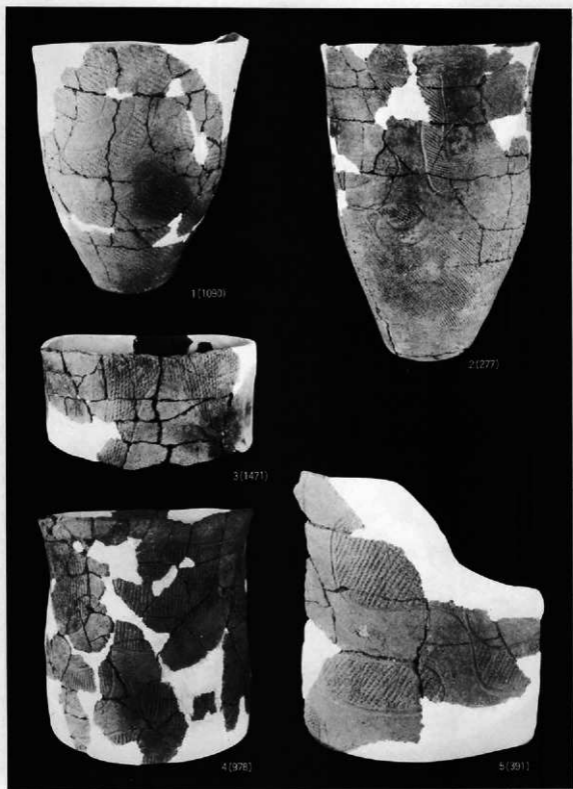
図版27 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1-3-5 $\frac{1}{4}$
4 $\frac{1}{2}$



縮尺 1:3 土
2:4 土

圖版28 遺構出土遺物 (土器)



1(1093)

2(277)

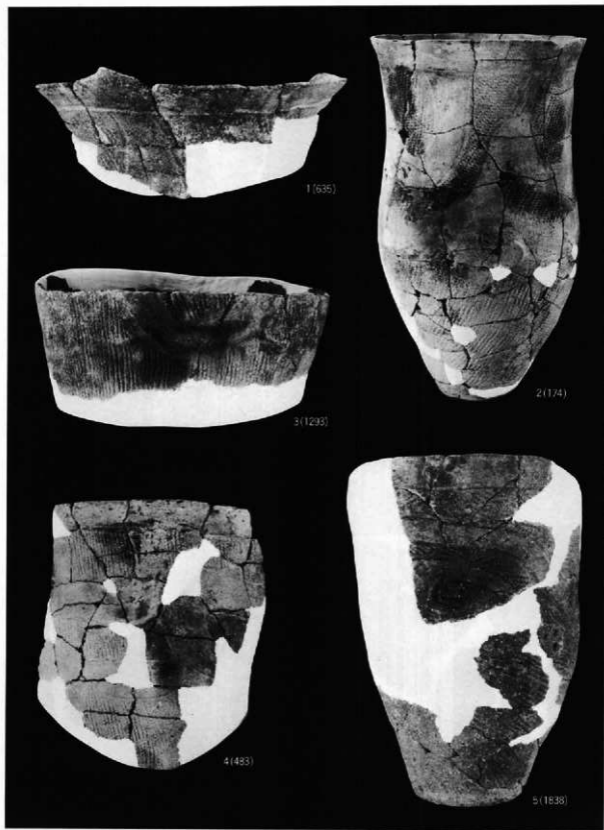
3(1471)

4(978)

5(391)

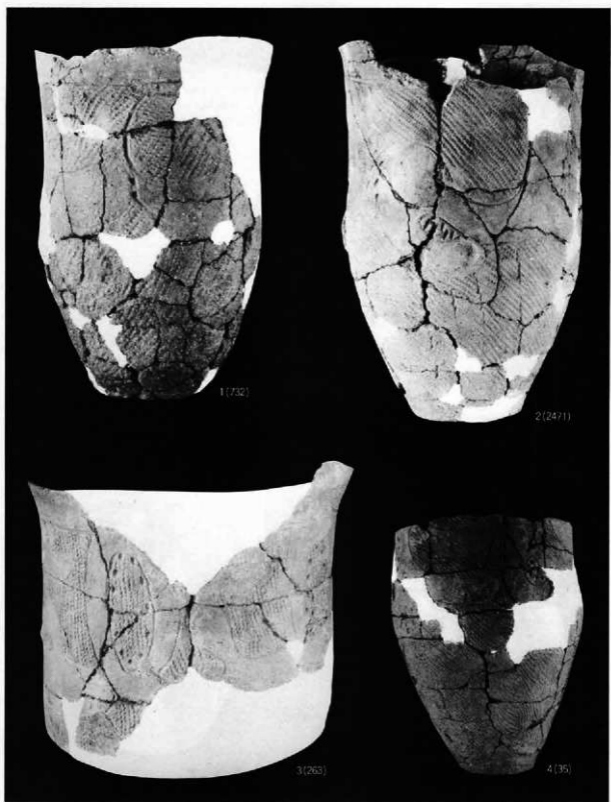
縮尺 1-4 $\frac{1}{2}$
5 $\frac{1}{3}$

図版29 遺構出土遺物(土器)



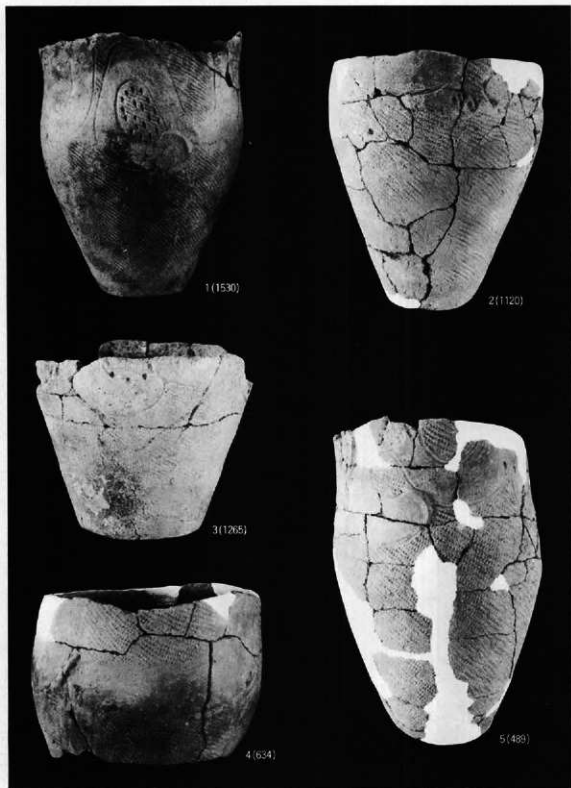
図版30 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1・3-5 $\frac{1}{2}$
2 $\frac{1}{3}$



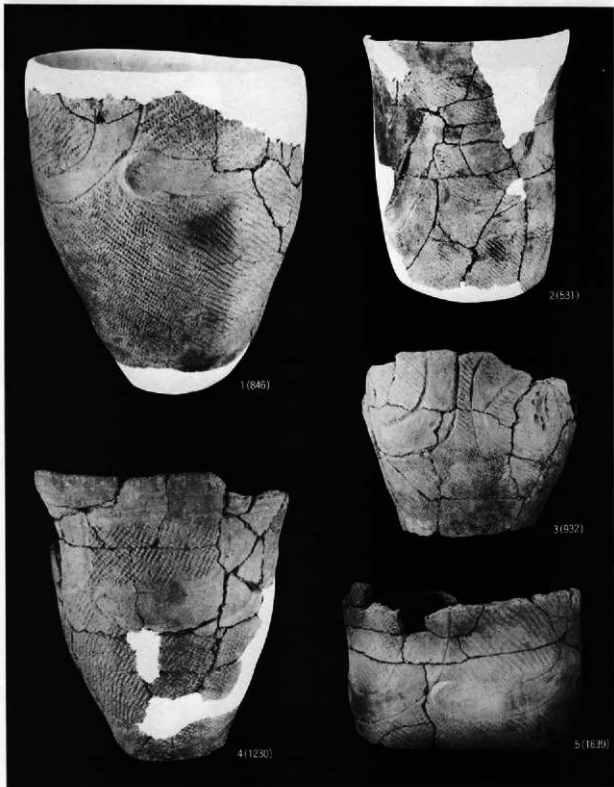
図版31 遺構出土遺物 (土器)

縮尺 1-3 $\frac{1}{2}$
4 $\frac{1}{3}$



図版32 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1・3・4 $\frac{1}{2}$
2・5 $\frac{1}{4}$



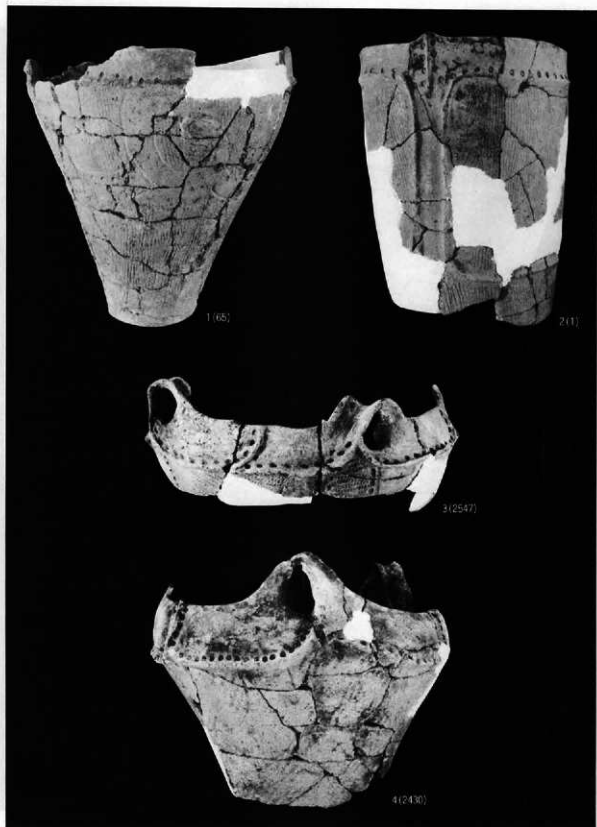
図版33 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1-3-5 $\frac{1}{2}$
2 $\frac{1}{4}$



図版34 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1-3 $\frac{1}{4}$
4 $\frac{1}{2}$



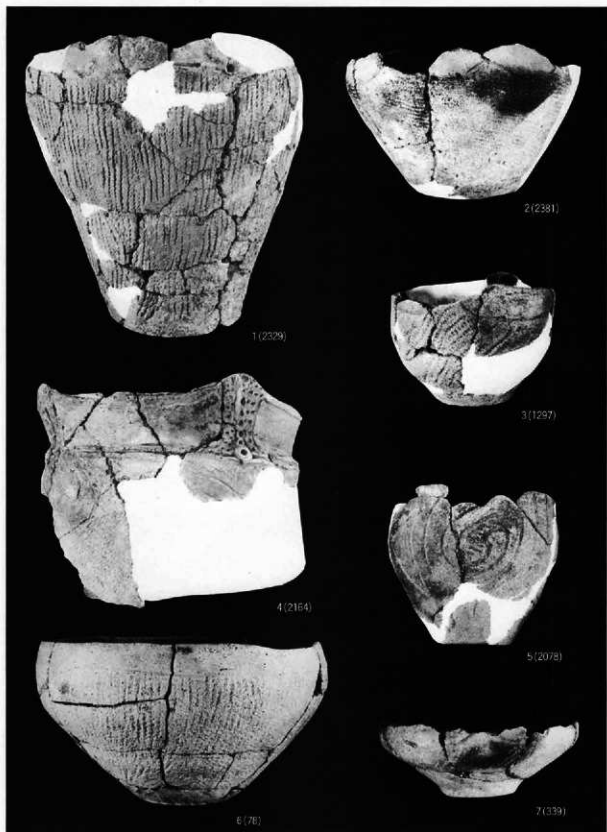
図版35 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1 $\frac{1}{3}$
2-4 $\frac{1}{3}$



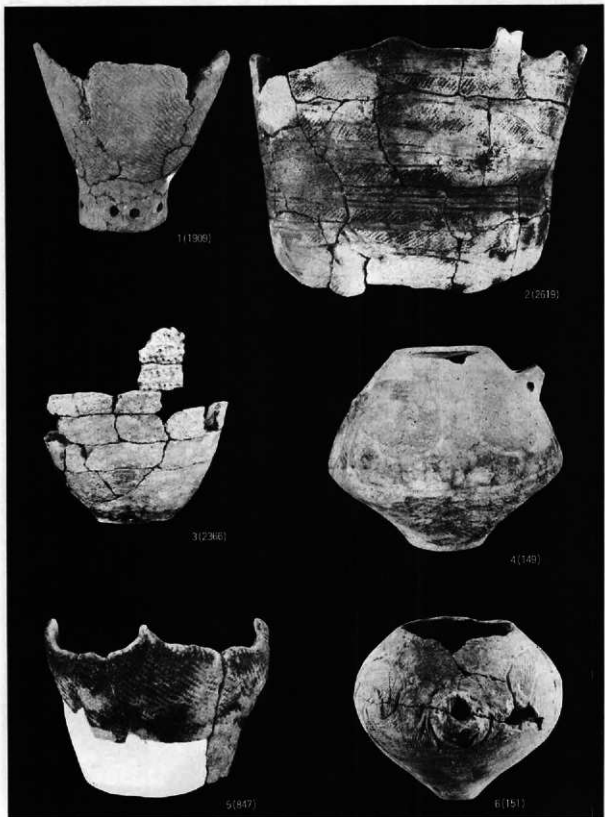
図版36 遺構出土遺物（土器）

縮尺 1・3-5 $\frac{1}{4}$
2 $\frac{1}{2}$



縮尺1・2・4-6 $\frac{1}{4}$
3-7 $\frac{1}{2}$

図版37 遺構出土遺物 (土器)



1(1306)

2(2618)

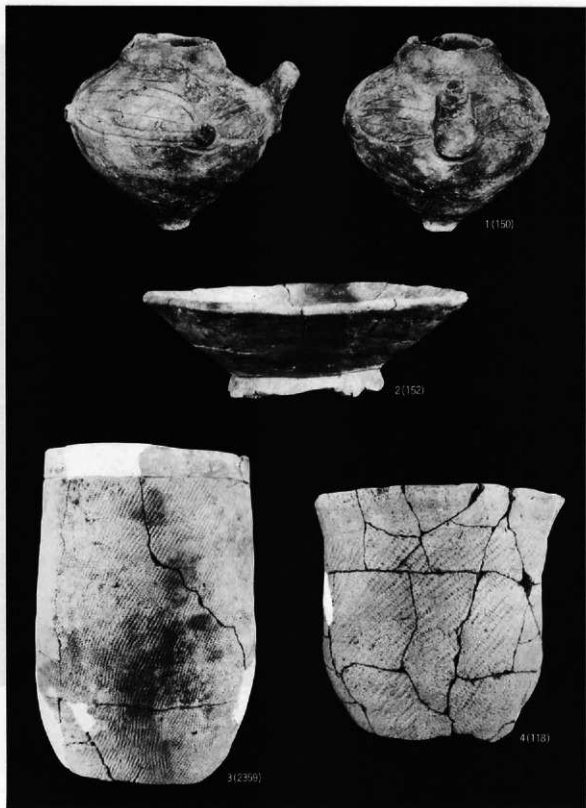
3(2366)

4(149)

5(847)

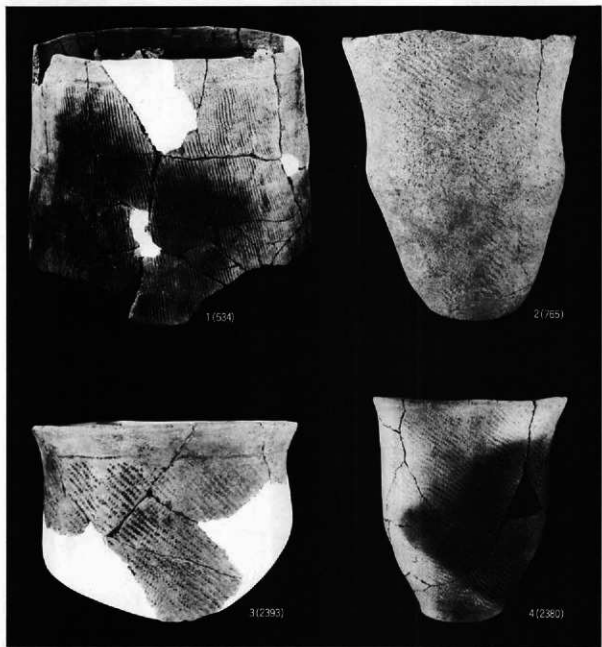
6(151)

縮尺 1·2·5 $\frac{1}{2}$
3·4·6 $\frac{1}{2}$



図版39 遺構出土遺物 (土器)

縮尺 1-2 $\frac{1}{4}$
 3 $\frac{1}{2}$
 4 $\frac{1}{4}$



1(534)

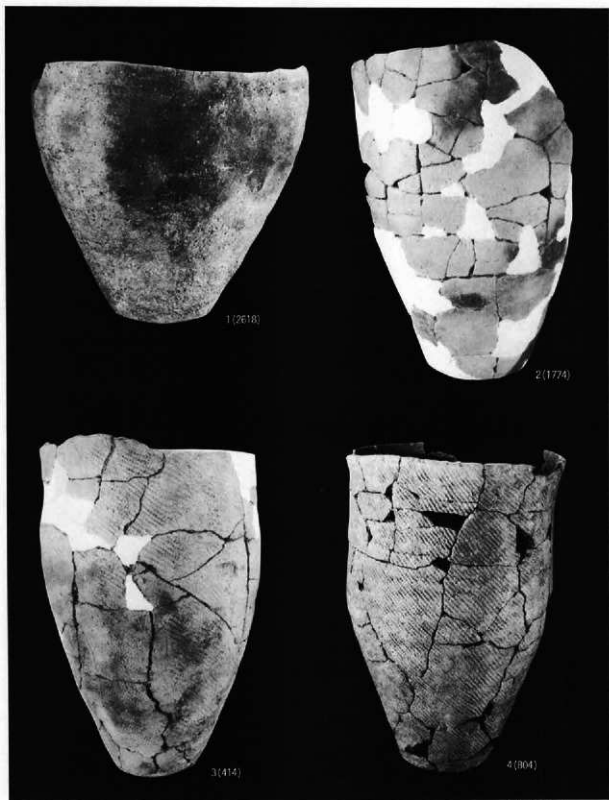
2(765)

3(2393)

4(2360)

図版40 遺構出土遺物（土器）

縮尺 十



1(2618)

2(1774)

3(414)

4(004)

図版41 遺構出土遺物（土器）

縮尺1-2 $\frac{1}{2}$
2-3 $\frac{1}{4}$



図版42 遺構出土遺物 (土器)

縮尺 1 $\frac{1}{4}$
 2 $\frac{1}{4}$
 3-4 $\frac{1}{4}$



1(656)



2(1424)



3(125)



4(1640)

縮尺 1-4 $\frac{1}{2}$
2 $\frac{1}{3}$
3 $\frac{1}{4}$

図版43 遺構出土遺物（土器）



1(191)



2(1201)



3(215)

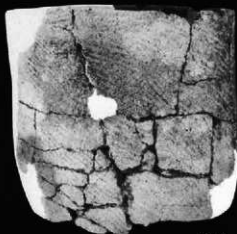


4(77)



5(1295)

縮尺 $\frac{1}{2}$



1(652)



2(638)



3(1843)



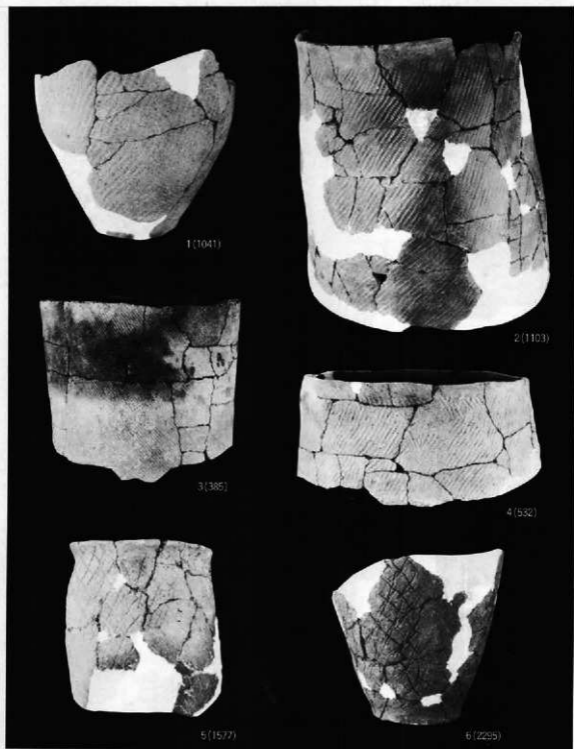
4(300)



5(1894)

縮尺 1-3-5 $\frac{1}{4}$

図版45 遺構出土遺物（土器）



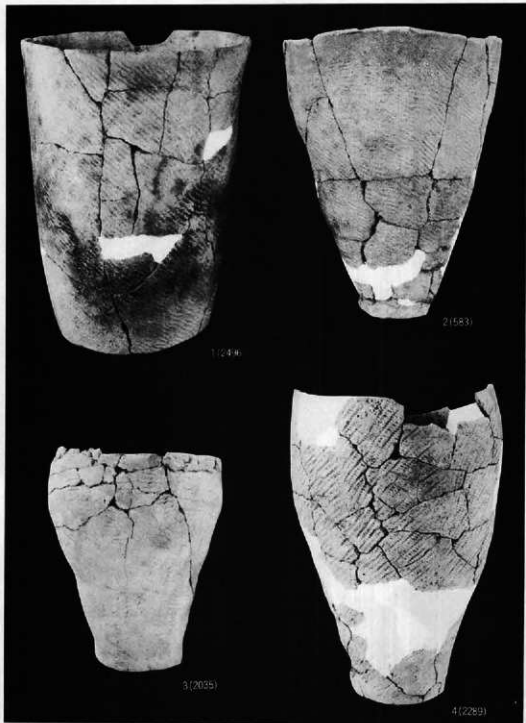
縮尺 1・2・5・6 $\frac{1}{2}$
 3・4 $\frac{1}{3}$

図版46 遺構出土遺物 (土器)



縮尺 1・3・5 $\frac{1}{4}$
2・4 $\frac{1}{2}$

図版47 濃橋出土遺物（土器）



1(246)

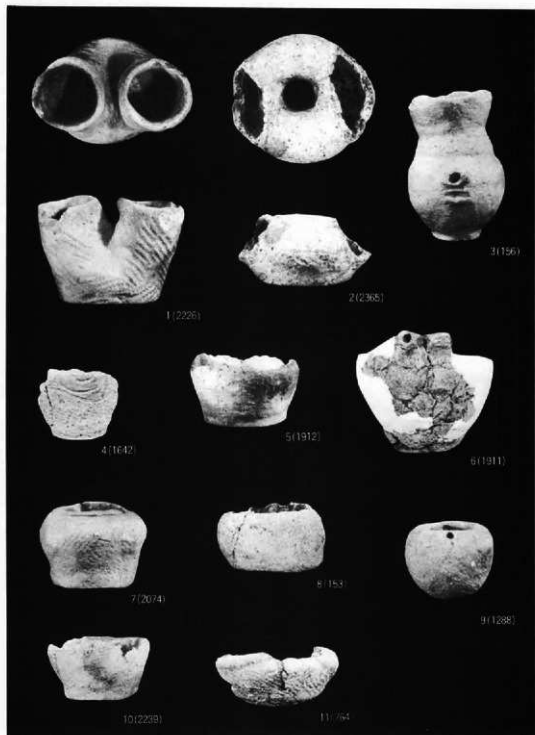
2(583)

3(2035)

4(2289)

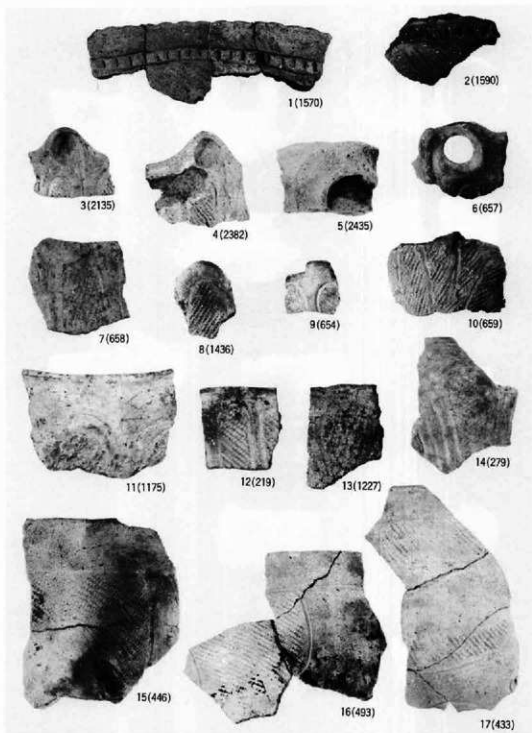
縮尺 1-4 $\frac{1}{2}$
 2 $\frac{1}{3}$
 3 $\frac{1}{4}$

図版48 遺構出土遺物(土器)



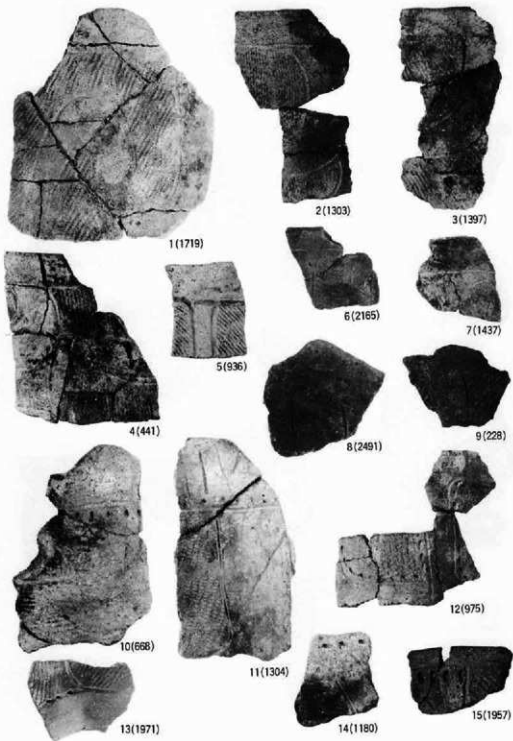
図版49 遺構出土遺物（土器）

縮尺1/1



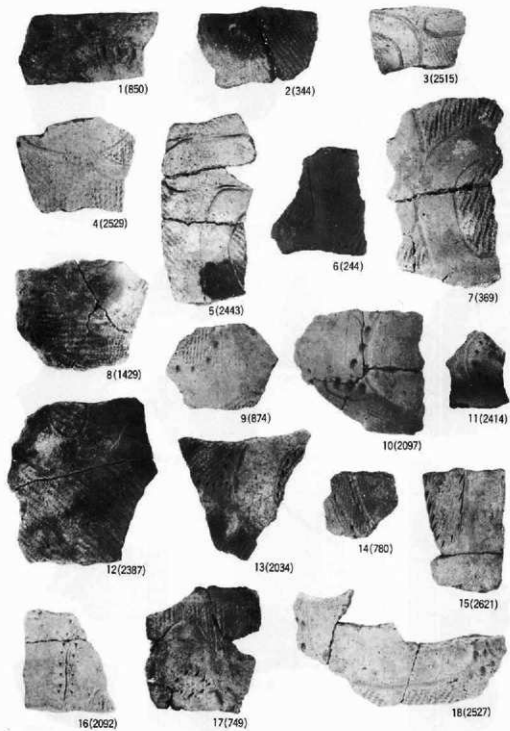
図版50 遺構出土遺物 (土器片)

縮尺 $\frac{1}{2}$



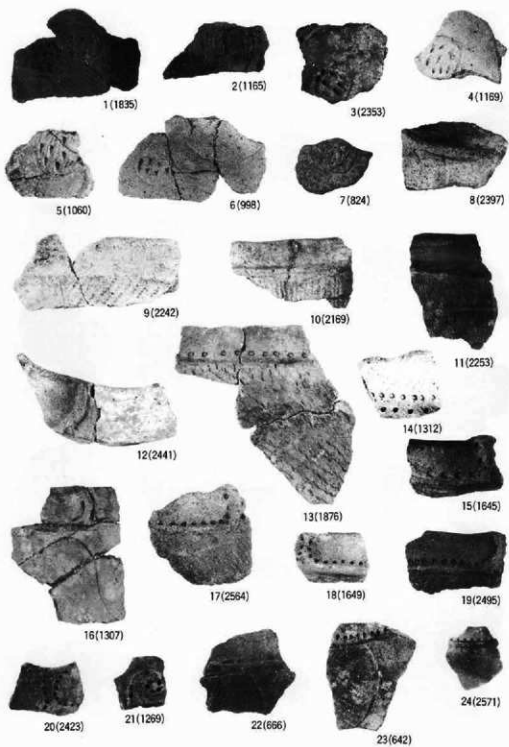
図版51 遺構出土遺物（土器片）

縮尺 $\frac{1}{2}$



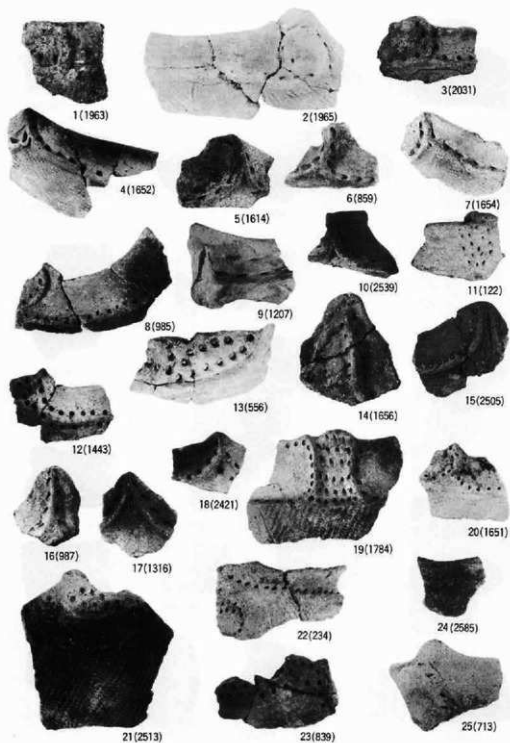
図版52 遺構出土遺物（土器片）

縮尺 $\frac{1}{2}$



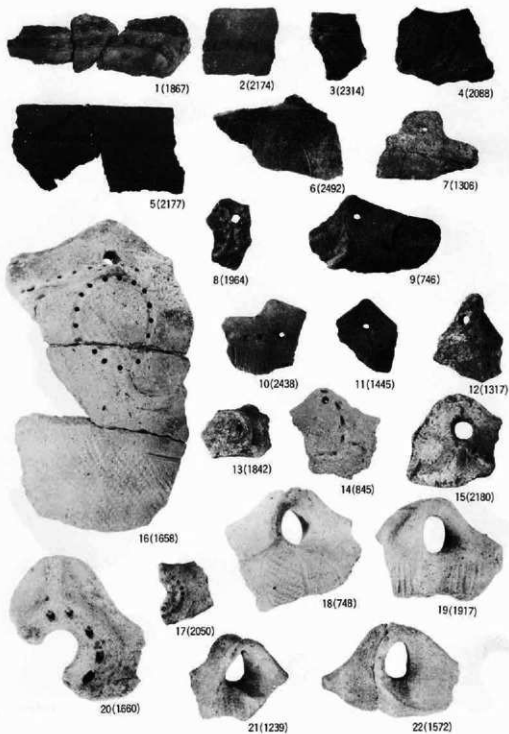
図版53 遺構出土遺物 (土器片)

縮尺 $\frac{1}{2}$



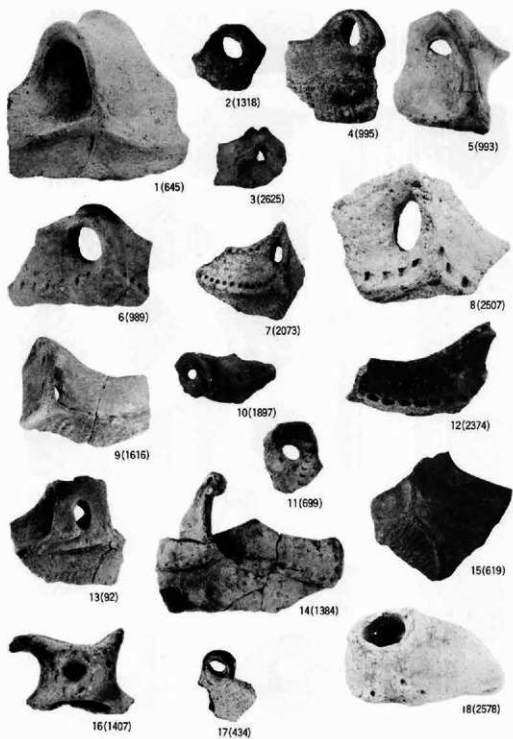
図版54 遺構出土遺物 (土器片)

縮尺 1/3



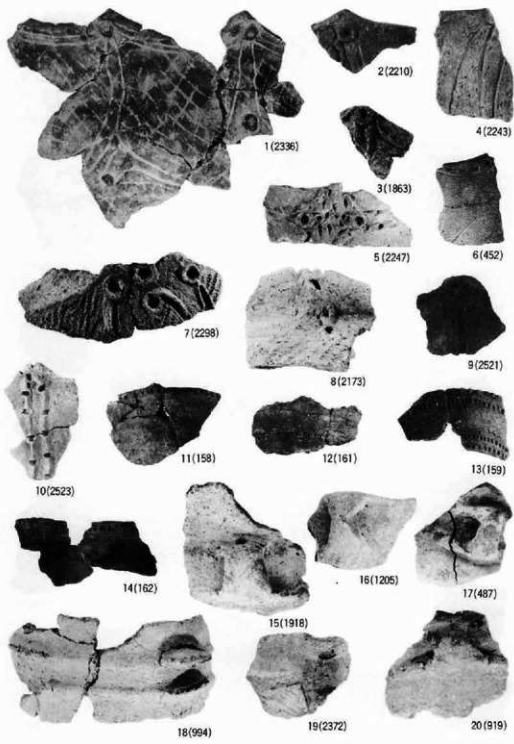
図版55 遺構出土遺物（土器片）

縮尺 1/3



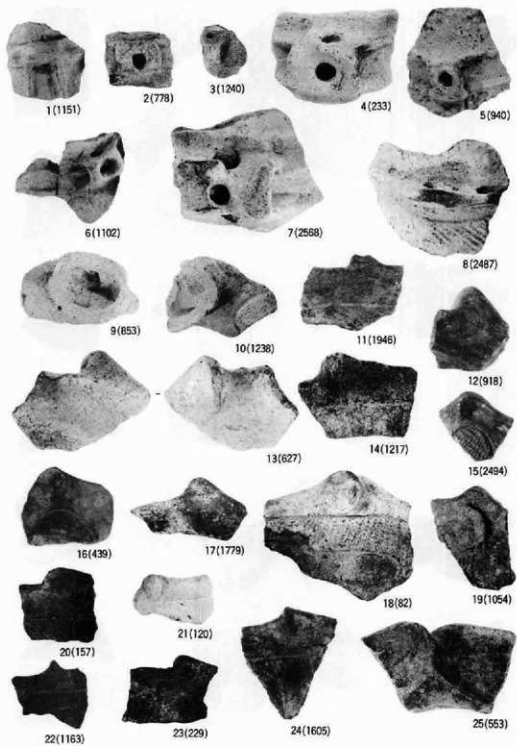
図版56 遺構出土遺物（土器片）

縮尺 1/2



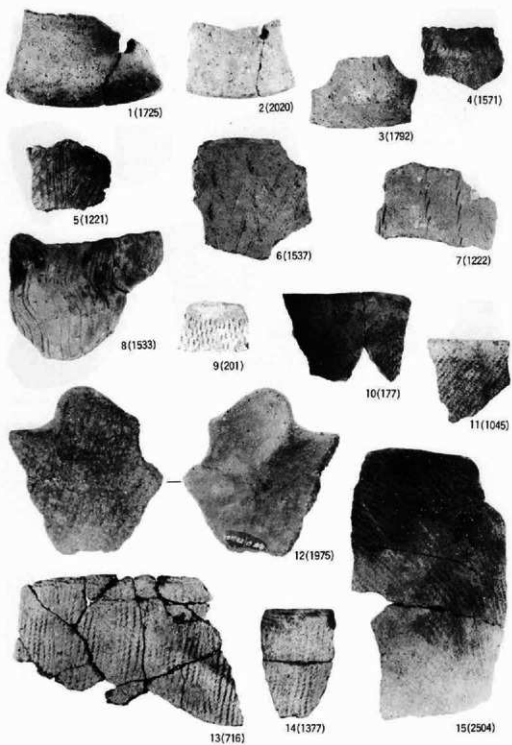
図版57 遺構出土遺物 (土器片)

縮尺 $\frac{1}{2}$



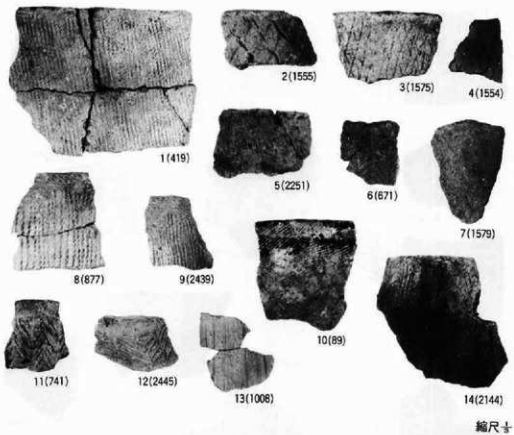
図版58 遺構出土遺物(土器片)

縮尺 $\frac{1}{2}$

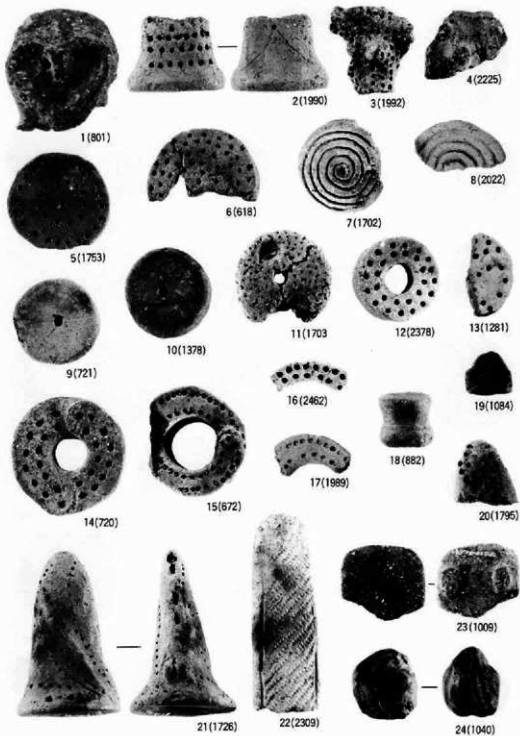


図版59 遺構出土遺物（土器片）

縮尺 $\frac{1}{2}$

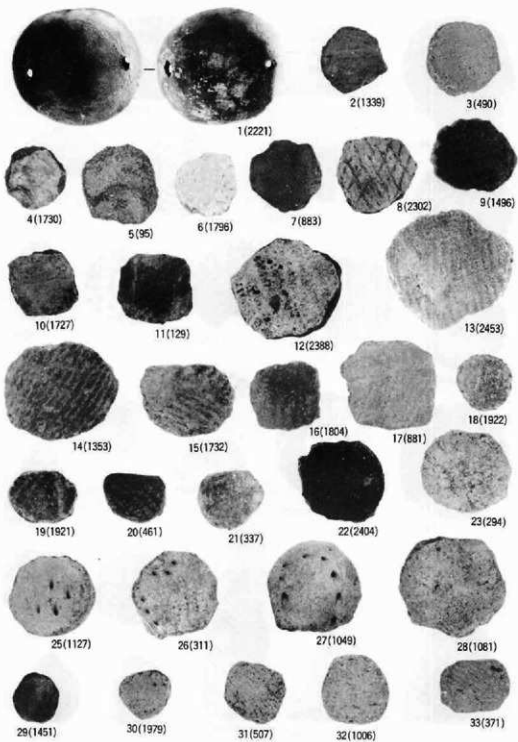


図版60 遺構出土遺物（土器片）



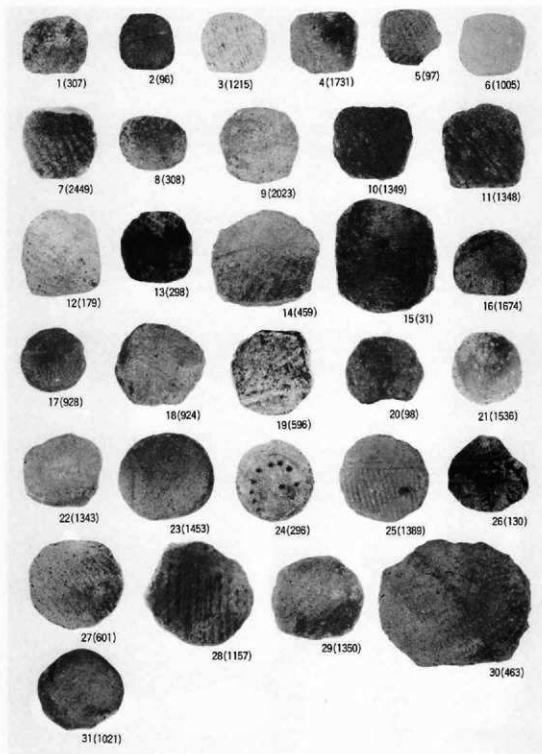
縮尺 1-24 +
2-23 †

図版61 遺構出土遺物（土製品）



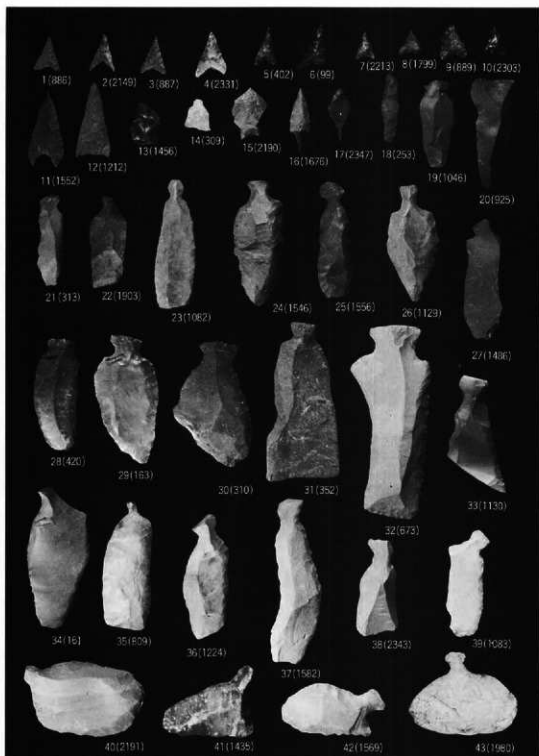
図版62 遺構出土遺物（土製品・円盤状土製品）

縮尺 1/1



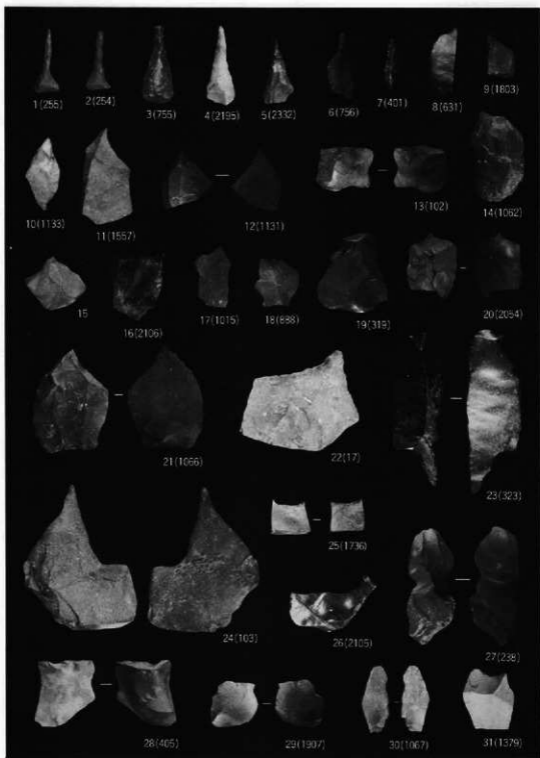
図版63 遺構出土遺物（円盤状土製品）

縮尺 $\frac{1}{2}$



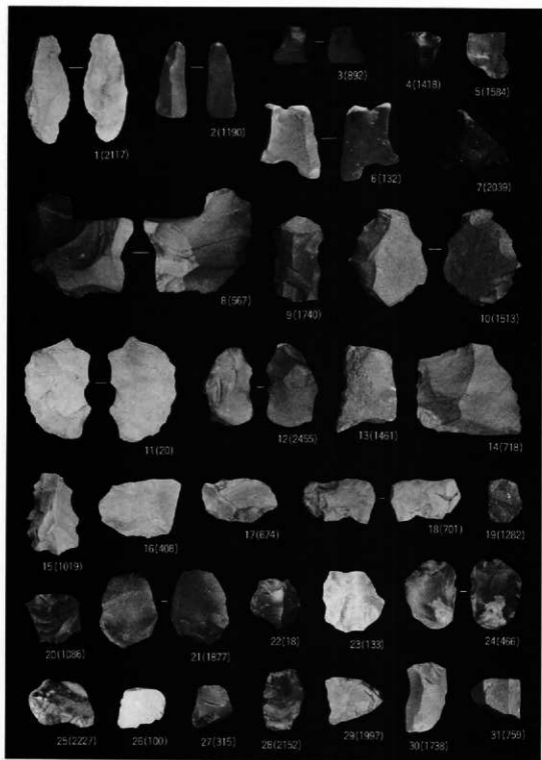
図版64 遺構出土遺物（剥片石器）

縮尺 $\frac{1}{2}$



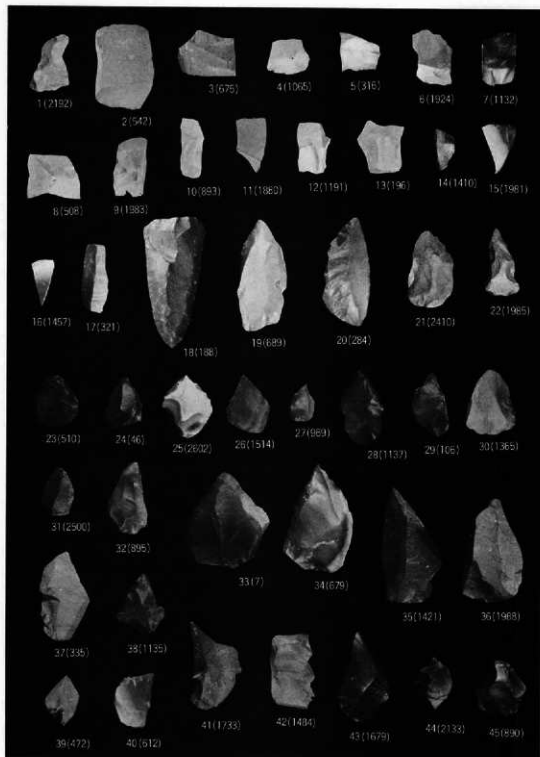
図版65 遺構出土遺物(剥片石器)

縮尺 1/1



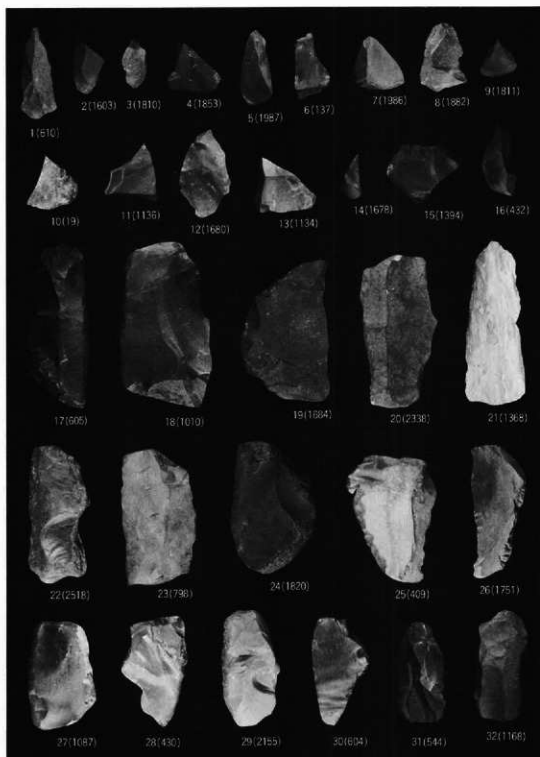
図版66 遺構出土遺物(剥片石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



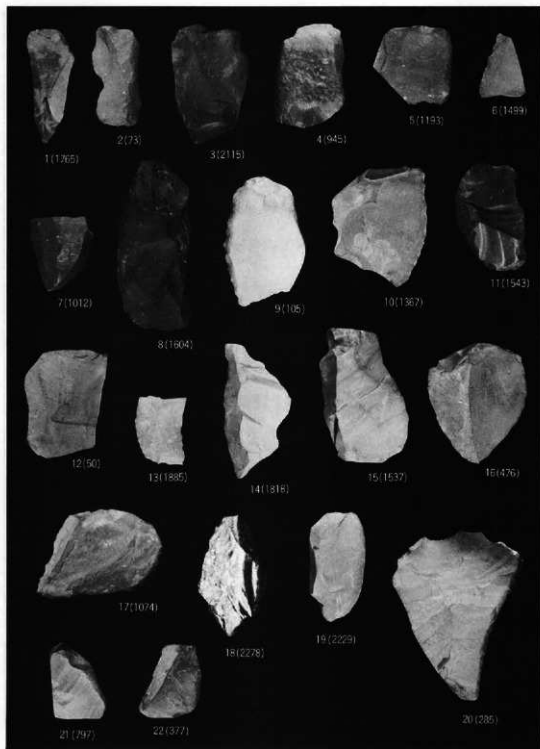
圖版67 遺構出土遺物(剝片石器)

縮尺寸



図版68 遺構出土遺物（剥片石器）

縮尺寸



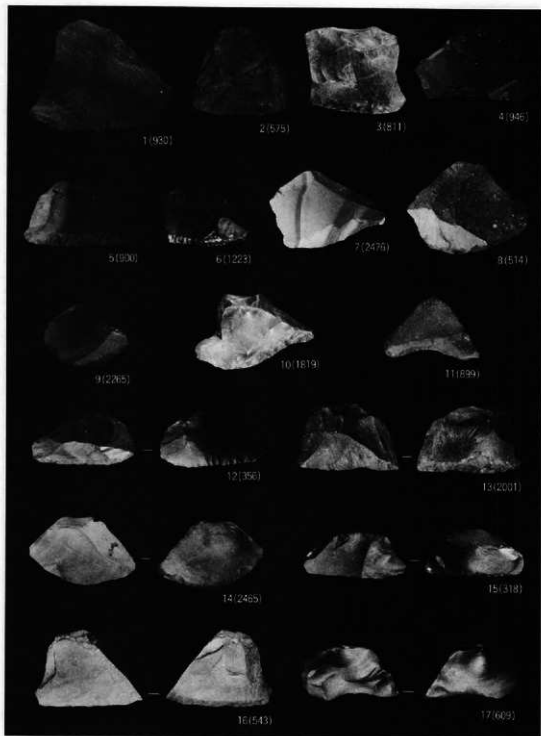
図版69 遺構出土遺物 (剥片石器)

縮尺 十



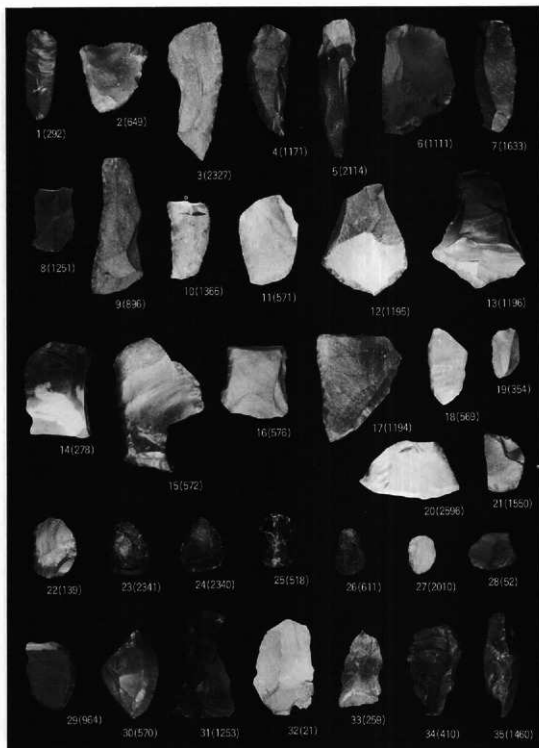
圖版70 遺構出土遺物 (剝片石器)

縮尺寸



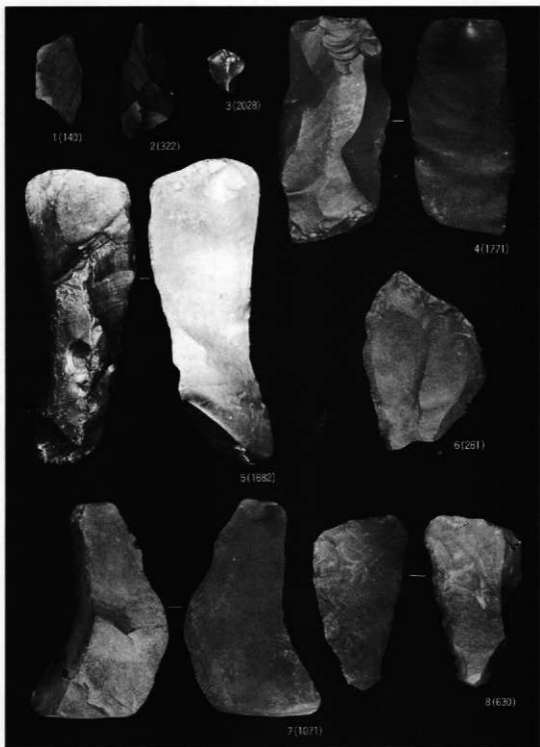
図版71 遺構出土遺物（剥片石器）

縮尺 $\frac{1}{2}$



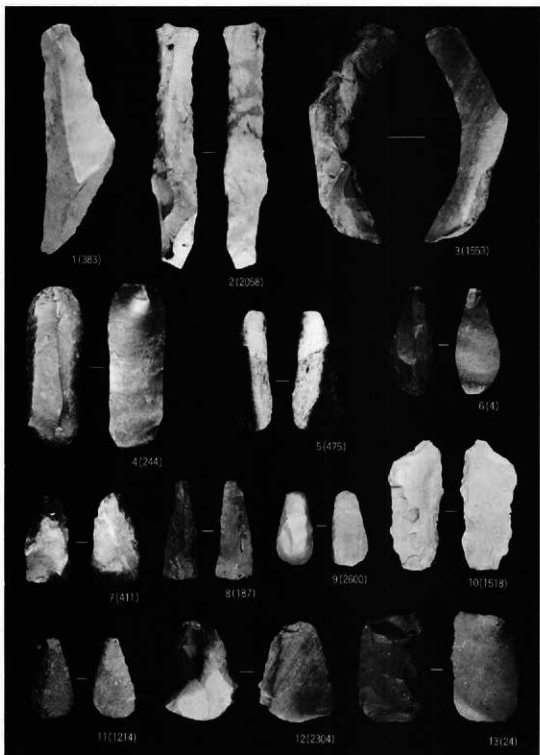
圖版72 遺構出土遺物 (剥片石器)

縮尺 1/2



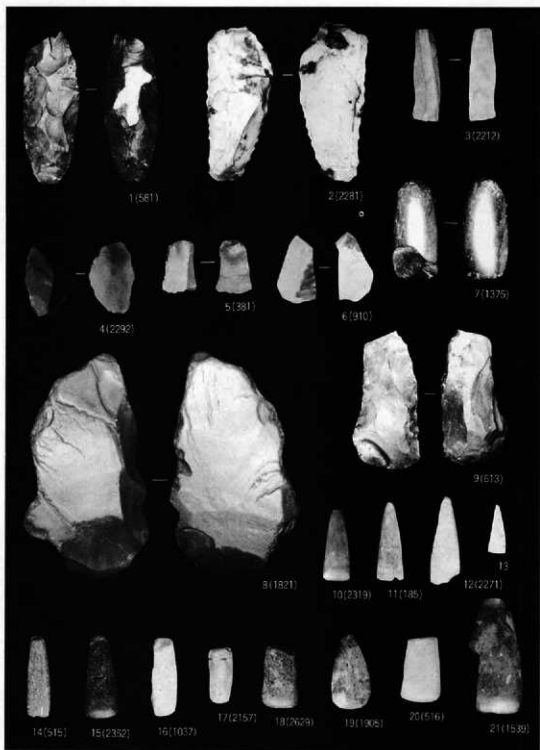
図版73 遺構出土遺物 (剥片石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



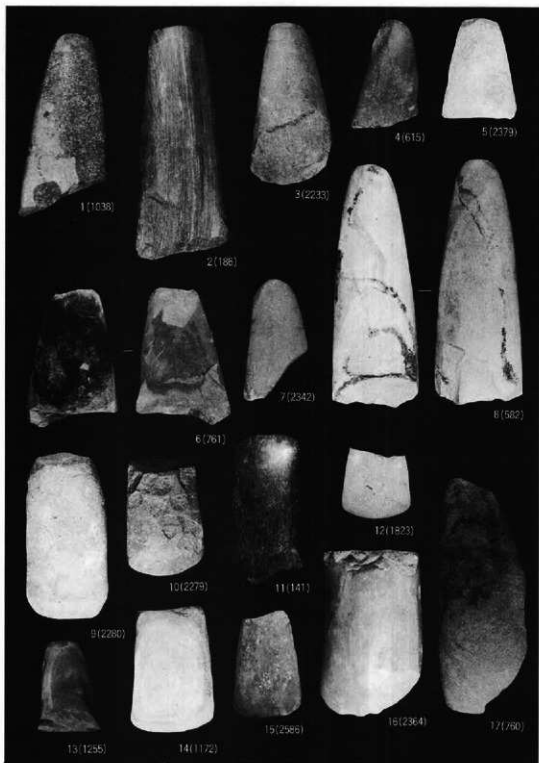
図版74 遺構出土遺物（剥片石器）

縮尺十



図版75 遺構出土遺物 (剥片石器)

縮尺 $\frac{1}{2}$



図版76 遺構出土遺物（剥片石器）

縮尺上



1(1827)



2(832)



3(1013)



4(1089)

縮尺 1:2 $\frac{1}{2}$
3:4 $\frac{1}{4}$

図版77 遺構出土遺物 (礫石器)



1(1257)



2(766)



3(1773)



4(1258)



5(1262)

縮尺 1・4・5 $\frac{1}{2}$
2・3 $\frac{1}{3}$

図版78 遺構出土遺物（礫石器）



1(109)



2(2237)



3(526)



4(1395)

縮尺 1-3 $\frac{1}{2}$
4 $\frac{1}{3}$

図版79 遺構出土遺物（礫石器）



1(2013)



2(1263)



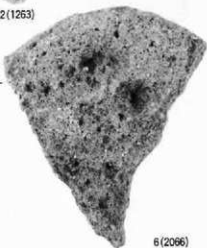
3(1932)



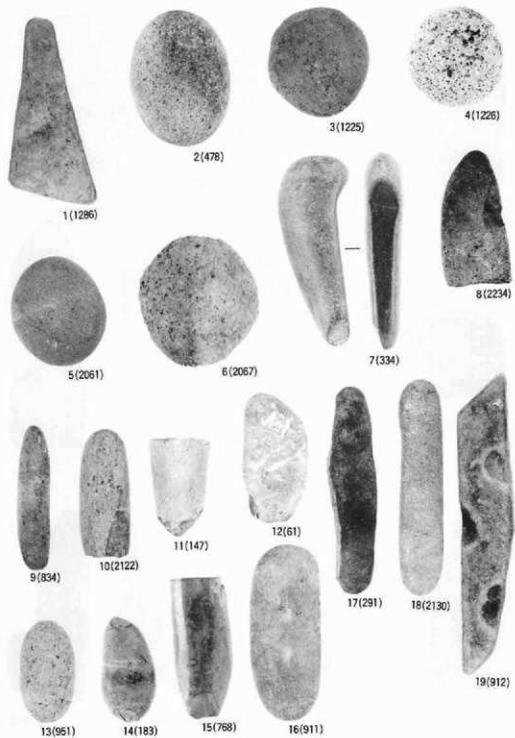
4(2012)



5(2198)

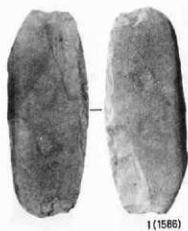


6(2066)



図版81 遺構出土遺物 (礫石器)

縮尺 1/5



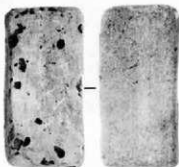
1(1586)



2(1568)



3(819)



4(1587)

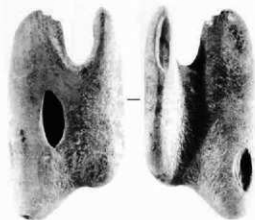


5(1467)



6(1691)

縮尺 1-6 $\frac{1}{2}$
7-8 $\frac{1}{3}$



7(2436)



8(1076)

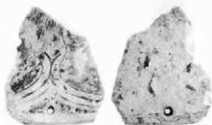
図版82 遺構出土遺物 (礫石器・石製品)



1(481)



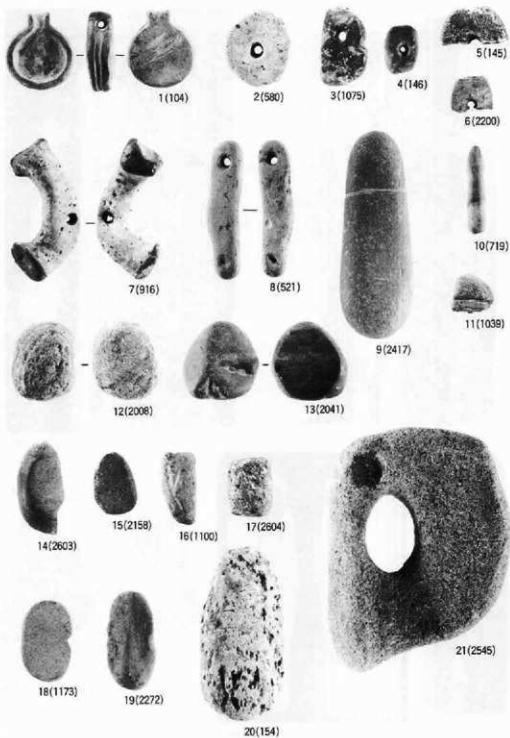
2(1852)



3(1637)

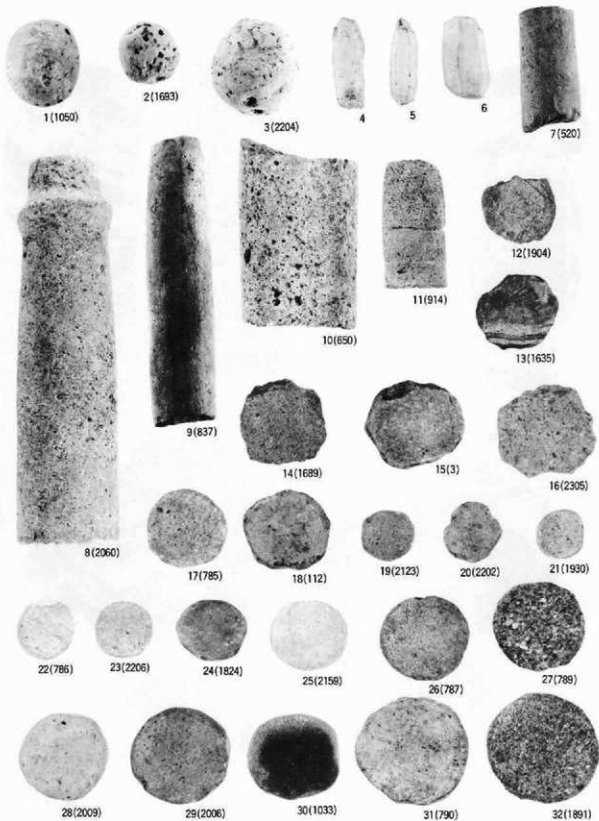
縮尺 1 十と不定
2 十
3 十

図版83 遺構出土遺物（石製品）



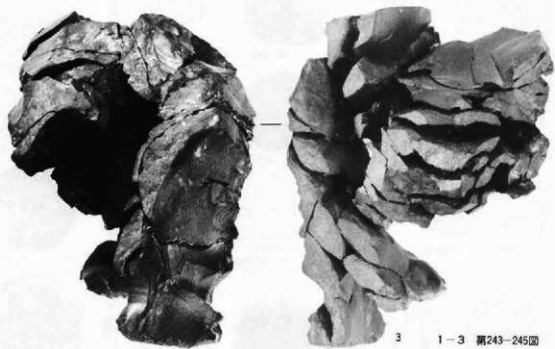
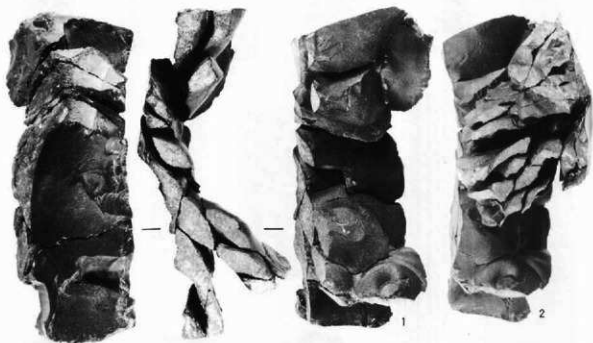
圖版84 遼構出土遺物（石製品）

縮尺 $\frac{1}{2}$



図版85 遺構出土遺物（石製品・円盤状石製品）

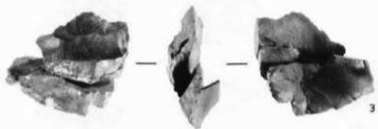
縮尺 $\frac{1}{2}$



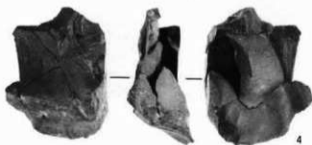
图版86 「剥片貯蔵」接合資料

1-3 第243-245回

縮尺不定

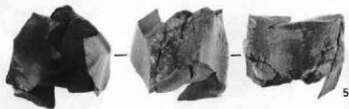
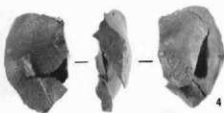
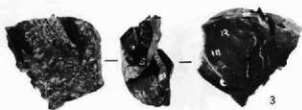
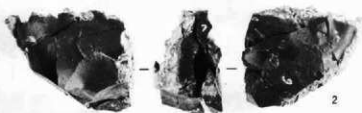


1-3 第245回
4 第243回
5 第242回



図版07 「剥片貯蔵」接合資料

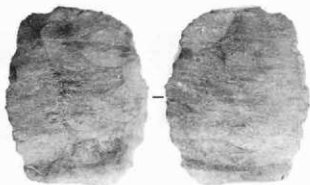
縮尺 1/2



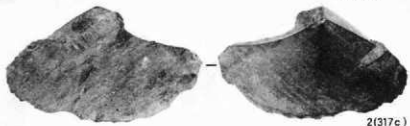
1 第240回
2-3 第241回
4-5 E II-4住居址

圖版88 「剥片貯蔵」接合資料

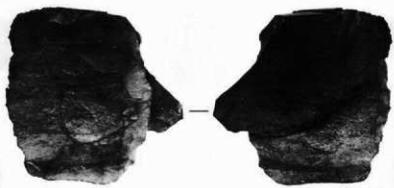
縮尺 $\frac{1}{2}$



1(317b)



2(317c)



3(317a)



4(48b)



5(48c)



6(48a)



1. クリ (EⅣ-4住居址 柱穴埋土)



2. オニグルミ (EⅡ-20住居址 埋土)



3. ドングリ (GⅡ-4住居址 床面)

岩手県埋蔵文化財センター調査報告第66集

湯沢遺跡発掘調査報告書

印刷 昭和58年3月25日

発行 昭和58年3月31日

発行 財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県釜波郡南村

大字下飯岡第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-5820, 9001, 9002

印刷 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋蔵文化センター 1983
